とある無敵の平和島静雄(池袋最強)

パトラッシュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある無敵の平和島静雄（池袋最強）

【Ｎコード】
Ｎ３８０５Ｐ

【作者名】
パトラッシュ

【あらすじ】
上条当麻の住む二百三十万人の人口を誇る学園都市……

その学園都市ではその人口の大半が学生で超能力者になるためのカリキュラムを毎日受けている

そして、そんな都市に池袋で噂のあの男がその学園都市にやってきた

その名を平和島静雄…

学生の平和島静雄はとある事からこの学園都市に連れて来られてしまった

静雄はこの学園都市最強になるのか！！

池袋最強と科学と魔術が交わる時、物語は始まる！！

デュラララ！！ととあるのクロスオーバー作品です

ご都合主義がめちゃくちゃあると思いますがそれでも良い方はどぞご覧になってください

プロローグ（前書き）

――静雄は学生という設定です

――見た目は金髪にサングラス

――では

プロローグ

「あー…、うぜぇ」

学園都市の中心部、平和島静雄はめんどくさそうにポケットに手を入れて呟いていた

（なんで俺がこんな面倒なとこに居なきゃなんねぇんだ？）

現在、静雄は物凄く機嫌が悪い

なんの因果か、

昨日の晩に何故か此所に連れてこさせられ、いきなりの転校宣言。

（クソッタレがァ…、またイザヤの野郎か）

静雄は心中かなり煮えたぎる怒りでいっぱいだが自分の拳を力一杯握りしめて抑えている

――学園都市

人口が二百三十万人のこの都市には沢山の学生が行き交っている
彼らはカルキュラムを受けて脳開発をし超能力者に成ろうとするものばかりだ
だが、静雄は学園都市の事情など全く興味はない

（今日から転校なんて悪ふざけもほどほどにしやがれってんだ）

静雄は頭をかきむしりながら今日から通うであろう高校の校門前までやってくる

――今日からまた新しい生活、

静雄はそんな不安な中で渋々、その校門を潜っていったのだった

学校（前書き）

——訂正しまーす

学校

「……チィース」

「あ、静雄ちゃん遅かったのですよ」

静雄が校門をくぐり抜け最初に訪れたのは職員室

ここには、今日から静雄の担任になるであろう学園都市の七不思議に数えられる月詠小萌が椅子に腰掛けていた

「今日からいきなりこの学園都市のこの学校に通う事になって不安なのはわかりますけど、

時間は守らなきゃ駄目なのですー」

職員室に入ってきた静雄に対して厳しく注意を促す身長が小さな女教師

「はァ……、あぁスイマセンっした……」

申し訳なさそうに頭を下げて椅子に腰かけ腕を組んでいる小萌に頭を下げる静雄

「いいんですよ反省していれば、」

頭を下げて謝る静雄に小萌は優しく微笑む

「それじゃクラスに案内しますね静雄ちゃん」

ひとまず職員室から出てゆく小萌の後ろから黙ってついて行く静雄、

だが、小萌の後からついていく静雄は何故か不安じみた表情を浮かべていた

「どうしたのですか？」

そんな静雄の姿が目につき首を傾げて訪ねる小萌

「先生…」

「…ん？何ですか静雄ちゃん？」

唐突に話し掛ける静雄に首を傾げて訪ねる小萌

静雄は頭部を掻いて恥ずかそうに目線を反らして話し出す

「俺はあまりこの街があまり好きになれそうじゃないです」

「？……、急にどうしたんですか静雄ちゃん？」

小萌は口ごもる静雄に首を傾げながら訊ねる

「なんつうか、やりにくいて言うか、逆に前までの環境が良かったのかもしれねぇ」

池袋から連れて来られた静雄にとってみればこの学園都市は分からないことだらけで、良く考えれば何から何まで不安な事ばかりだ

小萌はなんと無く今の不安な気持ちで一杯な静雄の言葉が理解出来た

「……、大丈夫ですよ」

小萌はそんな風に口ごもる静雄に対して明るい笑顔を振り撒き話す

「ここの学校の生徒達は皆いい子ばかりです、

スグに慣れますよ静雄ちゃん」

（いや……、そう言われてもな……）

静雄は純粋な笑顔を振り撒く小萌の言葉に思わず顔をひきつらせる

（どうも、くせぇんだよなぁこの街は……）

静雄は思わずあの忌々しい男の顔が頭を過る、

だが、確信もない上に今のところ色々と考え込んだ所でどうにもならない

（まぁ、アイツは見つけたらぶち殺せば済むか……）

相変わらずいつも通りの結論を出す静雄、

すると前に歩いていた小萌はピタッ教室の前に止まり後からついてきていた静雄の方へと振り返る

「それじゃ静雄ちゃんここが今日から貴方のクラスなのです」

そして、教室の扉を力強く開け教室の中へと入ってゆく小萌

静雄は教室の前でジッと立ったまま動かずとりあえず小萌から呼ばれるのを待つ事にした

「はーい皆さん席に着いてくださーい」

小萌が入ると同時に何やら騒がしくなるクラス

「さぁて……、皆も知っていると思いますが今日から転校生がやって来たのです」

小萌は嬉しそうに笑みを浮べてクラス全体に行き渡るように話す

「さぁ喜びなさい子猫ちゃん達ー、
絶望しろー野郎共ー」

小萌が目で合図し、同時に静雄はクラスの中へとゆっくりと足を踏み入れる

それと、同じくして沸き上がる黄色い女子生徒の声

（うぜぇ…、）

しかし、あまりの五月蝿さに逆に機嫌が悪くなる静雄はピクリとこめかみに青筋を立てる

しばらく時間が立ちクラスが落ち着いた所で自己紹介を始める静雄

「えぇと、俺の名前は平和島静雄ですヨロシクお願いします」

静雄が頭を下げ終えるとクラス全体から歓迎するような物凄い拍手が巻き起こる

「じゃあ、席は……」

静雄の自己紹介が終わった所で、辺りを見渡し、空いている席を探す小萌

すると、金髪にサングラスを掛けてアロハシャツを着ている青年が勢いよく手を挙げる

「にゃー、先生ー俺の隣が空いてるぜい」

小萌は微笑み静雄へと振り向くと手を挙げる土御門の隣の席を指差す

「それじゃー、静雄ちゃんは土御門ちゃんの隣ですねー」

「うぃす」

指差す小萌に静雄は一言頭を下げて言うと土御門の隣の席に腰を下ろす

すると、金髪にアロハシャツを着た青年は静雄の肩を叩いて嬉しそうに話始める

「よォはじめまして平和島！、俺は土御門元春、んでコイツは上条当麻でこっちは青髪ピアスってんだヨロシクだにゃー」

自身の周りの席に腰かけている二人を手っ取り早く静雄にへと紹介する土御門

「あぁヨロシクな」

自己紹介を済ます土御門に静雄は微笑み返答する

「なぁ…、なんていうか…金髪が二人揃って隣同士で座るとなんか

壮観だな」

「せやなー、平和島クンもサングラスで土御門とキャラが若干被っとるなぁ…」

クラスの中でただでさえ人目につく金髪、それが二つも並んでいれば確かに目立つのは当たり前だ

オマケに二人とも何故かサングラスを身につけており、

質の悪い借金の取り立て屋にしか見えない

まじまじと静雄と土御門を見比べて笑みを溢して話す上条と青髪

「まぁなんにせよ今日から同じクラスだヨロシクな静雄！！」

「わてもヨロシクな静雄クン」

「おう…、ヨロシクな」

こうして互いに静雄に自己紹介を終える三人

――こうして平和島静雄の新しい生活が始まるのだった

超電磁砲（前書き）

では更新ー

超電磁砲

静雄が学校にやって来てから二日が経ちその放課後

上条達と共に授業を全て受けた静雄は賑やかに四人でワイワイと会話をしながら下校していた

「うぃー……やっと補修終わったなカミやん」

「あぁそうだなぁ、正に放課後パラダイスだ！！」

訳の分からない事を口走る上条と土御門は帰路の途中で何やらハシャイでいる。

だが、そんな中、一人一枚のプリントをジッと見詰めて眉間にシワを寄せている静雄

「ぁー…クソ、授業全く訳わかんねぇ…イライラする」

静雄はそう言って手に持っていたプリントを引きちぎり道端にへとポイ捨てする

そんな、静雄の光景を見ていた青ピと上条は思わず笑みを溢し微笑みながら話し出す

「まぁ、此所にきて二日目やしね、シズやんは……」

「まぁ、気にすんなよ静雄！俺も訳わかんねーから」

「お前、それ説得力ねぇよ」

やけにテンションが高く話に割り込む上条の言葉に思わずため息を吐く静雄

すると、何かが閃いた青髪はポンと手を叩く

「せや！これから皆でゲーセン行かへん？」

「お！良いぜい！久しぶりに格ゲーをやりたかったところなんだにゃー」

「俺もー」

土御門達が賛同するなか静雄は何故か顔を曇らせてゆっくりと口を開く

「わりぃ…俺これから色々と手続きみてぇなもんがあっから無理だわ」

「なんやー…残念やなー」

謝る様に誘いを断る静雄に対して残念そうに呟く青髪、だがそんな青髪の肩を叩いて上条と隣にいた土御門は口を開く

「そんじゃ仕方ないだろ」

「そうだぜい、シズやんはここでお別れだ」

丁度、分かれ道に差し掛かり三人に言う土御門、静雄は微笑み別の道へと向かう

「じゃあなぁ！静雄」

「また学校でなー」

別れる静雄に手を振り声を上げる上条と青髪

静雄はそんな二人に右手を振り応える

「あぁ！またな！！」

そして、上条達に互い手を振り終えて別れを告げ、担いでいた鞄を担ぎ直す静雄

「さてと……」

静雄は一息入れて再び足を動かし帰路を急ぐ

（たく…、ダリィなこの街は無駄に広れぇ……）

日は次第に暮れてゆき、歩きながら至る所にある風力発電用のプロペラがクルクルと回っているこの街を眺めつつふと思う静雄

（……、ん？）

その時だった、

考え事をしていた静雄はピタリと足を止める

（ンだ、あれ……、）

静雄のピタリととまった目線の先には女子中学生を囲む不良集団

「ねぇねぇ君、一人なら俺等といっしょに遊ばねぇ？」

「そうそう良いとこ連れていってやるからさぁ」

いかにも典型的なベタなナンパの仕方でナンパする不良達

そんな中学生相手に意味の分からないナンパを仕掛ける不良達に静雄は無性にイライラした

（あー…なんか久々にムカつくわぁー…）

ひとまず静雄は女子中学生を囲みナンパをしている不良達にへと近

づき話し掛ける

「オイ、テメェら何やってんだ？」

ピタリと口を閉じてゆっくりと振り返る不良達

静雄を見た不良達は眉間にシワを寄せて声を掛けてきた静雄へとガンを飛ばす

「あん？誰だテメェ…」

「誰ってぇ訳じゃねぇが、テメェら…ナンパは女子中学生相手にするもんじゃねぇだろ？」

不良達に対して相変わらず平然としている静雄、

すると、囲まれている不良達の中から一人の少女がそんな静雄へと声を掛ける

「ちょっと…、誰よアンタ」

何故かナンパをされていた女子中学生は機嫌が悪い

だが、そんな女子中学生に対して口を開き答える静雄

「平和島静雄…」

「……はぁ？」

返ってきた訳の分からない返答に首を捻り口を開く短髪の少女

「何、俺ら無視して会話してんだテメェら！！」

すると、痺れを切らした不良の中の一人が怒鳴り声を上げて鉄パイプを振り上げる

「死ねコラァ」

不良の上げる怒鳴り声と共に短髪の少女と会話をしていた静雄にへと振り下ろされる鉄パイプ

「あん？」

後から迫る鉄パイプに反応出来なかった静雄の頭にガン！という鈍い音と同時に辺りに鮮血が飛び散る

「ちょっと……、アンタ達！！」

鉄パイプで殴った不良に声を掛ける短髪の少女

ボタリと静雄を殴った鉄パイプから滴り落ちる血、

だが、殴られた筈の静雄は倒れずに血が流れる頭を右手で抑えて平然と立っている

――たった今、この不良は静雄に絶対にやってはならない行為をした

不良に声を掛けた女子中学生は何故かは分からないが立っている静雄を見た途端ゾクリと背筋が凍りつく。

「あれ？なんで倒れねぇんだ、コイツ……」

血が滴り落ちる鉄パイプを見詰めて呟く不良の一人、

「痛ぇ……」

静雄はコキリコキリと首の骨を鳴らして血が出る頭を腕で擦る

勿論、擦った静雄の制服の袖には大量に血がついていた

ようやく自分自身がこの不良達に殴られた事を理解した静雄はドスの聞いた低い声で鉄パイプで殴った不良に向かいゆっくりと口を開き話し出す

「……なぁオイ、テメェ……」

血が頭から流れている静雄の顔はやけに不気味に感じられる

「な、なんだコイツ!!」

頭が血だらけのままゆっくりと後ろへ振り返る静雄に後退りする鉄パイプを持った不良

「……今、頭ァ狙ったな?

頭を狙ったてぇ事は下手したら死んでたって事だよなァ…」

血を流して不気味に微笑む静雄はそう言うとゴキリゴキリと指の骨を鳴らし殴った不良にへと近づいてゆく

「……じぁよォ」

シーンと張り詰める空気の中、血塗れのまま不良に近寄る平和島静雄

その姿はまさしく化物と言っても過言では無い程、凄まじい威圧感を放っている

そして、不気味に微笑む平和島静雄はギロリと鉄パイプを掴んでいる不良を睨んだ

「俺がぁ何したって文句はねぇよなァ！！あぁ！」

怒号と同時に鉄パイプを持っていた不良のビクリと固まり

次の瞬間、凄まじい勢いで鉄パイプを持っている不良の顔面にバキィ！と音を立ててめり込む静雄の右拳

静雄の拳がめり込み轟音を立て吹き飛ばされる鉄パイプを持っていた不良

「ぎゃあああああ」

吹き飛ばされた男の悲鳴は凄まじい破壊音に打ち消される……

そして、遥か遠くにある風力発電のプロペラに叩きつけられる鉄パイプを持っていた不良は倒れ、不良が叩きつけられた風力発電のプロペラも同時に倒壊する

「……」

「……」

その場にいた全員は突然の出来事に言葉が出ない

「…さぁて……」

すると静雄は次に近くにあった風力発電のプロペラを両手で引き抜いて片手で肩に乗せる

「……次はテメェらだ……」

「ぎ、ぎゃあああああ！！！」

――顔を青ざめて悲鳴を上げてその場から一目散に逃げ出す不良達…

だが、静雄はそんな逃げ惑う不良達構わず走って後から追いかける

「待てやゴラァァァァ！！」

静雄から引き抜かれて振り回される風力発電のプロペラに、バコーン！！と音を立てて次々に彼等は大きくのけ反って吹き飛ばされる

「ヒィィィィィィ！！！」

「オォラァァァァァ！！！」

悲鳴を上げてひたすら風力発電のプロペラを振り回す平和島静雄か

ら逃げる不良達、

静雄はそんな逃げる不良達の背後から自分が引き抜いた風力発電のプロペラを片手で構えて狙いを定める

「逃げんなコラァ！！」

静雄から投げ放たれた風力発電のプロペラは凄まじい音を立てて逃げる不良達へと向かう

――…そして、

「ぎゃアアアアア！！」

ドカーン！！という爆発音と共に逃げていた不良達は静雄から投げられた風力発電のプロペラが直撃し散りじりに吹き飛ばされてしまった……

「……ッチ、あぁうざってぇ、血ィ出ちまった……」

静雄は舌打ちをしてポケットからハンカチを取り出して頭に抑える

「ね、ねぇ！！…ちょっとアンタ！！！」

「あん…、なんだ女子中学生」

声を掛けてくる女子中学生に首を傾げる静雄、だが、静雄が助けた筈の彼女は何故かご立腹である

「違う！！私には御坂美琴ってちゃんとした名前があんの！！！」

短髪の少女、御坂美琴は犬歯をむき出しにしてハンカチで頭を抑える静雄に噛みつく様に言う

「それで？なんだ？」

「いやなんだじゃないでしょ！！…何よ！あのめちゃくちゃな力！！」

御坂は興奮する様に平然と頭を止血している静雄に訊ねるが彼は平

然とした態度で答え始める

「……知るかよ…ンな事、それよりテメェは大丈夫なのか？」

「あぁ…、うん無事だけど」

普通に心配そうに訪ねる静雄の質問に御坂はキョトンとした表情で答える

「ならいい、もう夜はなるべく出歩くな」

「な、何よ！！あんな奴等、私一人で十分だったての！」

咄嗟に御坂はそういうと自身の手からかなりの量の電流をハンカチで頭を抑えてる静雄の前でパチパチとさせる

「へぇー…テメェ、スゲーな」

電流を流す御坂美琴に関心したように驚く静雄

すると、御坂美琴は誇らしげに自身の胸に手を当てて静雄にへと語り始める

「でしょ？見直した？」

誇らしげに自慢する御坂美琴に「ふぅん」と適当に返答する静雄

「まぁな、それじゃ俺は用事あっから気をつけて帰れよ中坊」

「だから御坂美琴だっつてんだろうがぁ！！」

適当にあしらう静雄に腹を立てて怒号を上げて犬歯を剥き出しにする御坂美琴

これが池袋最強、平和島静雄と学園都市第三位の超電磁砲こと御坂美琴の初対面だった

能力査定（前書き）

――平和島静雄の本領発揮――

能力査定

静雄がこの学園都市にやって来てはや一週間…

ようやく上条達のクラスにも溶け込み始め、あの圧倒的な馬鹿力は使わなく成っているなか、

――その日はやってきた

「オイ上条、次は何の授業やんだ？」

「ええと…、なんだったけ土御門？」

「何を言ってるんだカミやーん、能力査定じゃないかにゃー」

昼休みが終わった頃静雄は食事を取っていた上条達に訊ね、その質

問に土御門が淡々と答える

「能力査定ってなんだ？」

「まぁ簡単に説明すれば、能力者の力を測るためのテストみたいなもんやね」

満面の笑みを浮べて首を傾げて訊ねる静雄に答える青髪

青髪の返答に静雄は納得したように頷く

「成る程なぁ」

「まぁ、うちの学校は能力者なんてあまりいないんだけどにゃー…」

「実際やる意味ないよなアレ…」

土御門の言葉を肯定するように腕を組んで頷く上条

それで丁度、その四人が話終えた直後だった

いきなり教室の扉が開き、話していた四人の前に担任の小萌が姿を現し教卓の前に立って嬉しそうに話し出す

「それじゃ移動ですよー皆さん」

機嫌良さそうに微笑み教室の生徒達に言い渡す小萌、

その、優しい純粋な笑顔は先程までまるで屍の様にやる気の無かった上条達を一気にやる気にさせた

「いくぜい青髪、カミやんにシズやん！！」

「「おう」」

声を上げて無駄にやたら気合いが入っている三人

だが、相変わらず静雄は冷静に頭を抑え頭を抑える

そして、彼は一つの真実に辿り着いた

（コイツ等馬鹿だな）

自分も馬鹿だから言えた義理ではないにしろ、この三人は間違いなく馬鹿に違いない、

そんな馬鹿三人に静雄呆れたようにため息を溢す

「何をしとるんやシズやん行くで！」

「お、オイ！！」

やる気になった青髪に引っ張られて連れて行かれる静雄

上条達と無理矢理青髪から連れていかれた静雄はこうして教室を後にした

―――――――

それから、しばらくして、教室から場所が変わり学校にあるプールサイド

「それで？具体的何すればいいんだ？」

「うーん、普通は色々と検査してレベルをはかるんだが

静雄は今回特別に能力を使った破壊力のテストらしいにゃー」

静雄は此所に来る途中の保健室の前で一旦上条達と別れ、

土御門からこのプールサイドに連れて来られていた

（小萌先生に頼み込んどいて正解だったにゃー）

静雄を見ながら笑みを溢す土御門、

プールサイドの回りには静雄を一目見ようと多くの女性徒が囲んでいる

「それじゃ、シズやんこのプールの先まで力を使うんだ」

「あー…、なんかイライラしてきた何かプールサイドの向こう側に貼られてるあのチラシ……」

そう静雄の目線の先には忌々しいあの男の顔写真がでかでかと貼ってあった

（アレイスターの奴はあの男の顔写真を平和島静雄に見せるだけで

能力を最大限に引き出せると言っていたが……どうやら効果はあったみたいだな）

段々と青筋を立てて怒りを露にしている静雄を横目に心の中で呟く土御門

「あ〝ーもう無理だ！！ぶっ殺す！！！！」

すると、静雄はいきなり力任せにプールサイドの地面に向かい勢いよく自分の拳を振り下ろし

ドコーン！！という凄まじい轟音と共に地響きが起こると辺りにいた女子生徒達も悲鳴を上げてプールサイドから一気に離れていく

そしてその後、波動のようなものがプールサイドを一気に引き裂き、地面が真っ二つに割れ

静雄の目線の先にあったあの男の顔写真は塵じりに吹き飛んでいった

「……」

目の前に起こった出来事に言葉が出ない土御門

（う、噂には聞いていたがまさかこれ程とは……）

驚きを隠せない土御門はただただ顔を真っ青にして静雄が叩き割ったプールを見る

「あァすっきりしたァ……、んで俺の力は図れたのか？」

静雄は殴り終わった拳をブラブラとさせながら隣で呆然としていた土御門に訊ねる

「あ！あぁ！待ってろ今…」

土御門は自身の用意したノートパソコンの画面を見て固まる

土御門は平和島静雄が何者かをアレイスターに聞かさせれていた為、上条達とは違う測定方法を静雄にとった訳でその為のハイテク器機をここに手配のだが……

「……な、なんだコレは」

この場に置けるあり得ない測定値に土御門は唖然とするしかなかった

『判定結果……、

レベル5

序列――――』

――……『第一位』

判定結果に驚きが隠せない土御門は咄嗟にノートパソコンをから目線を静雄へと向ける

（この男はあの一方通行と同じ序列だというのか！！）

まさか、こんな事態になるとは思いもよらなかった土御門、

そもそも、静雄は脳開発を受けていない筈であるためこんな馬鹿げた結果が出ること自体おかしい

「なんだ、どうした……、俺の力は？」

顔を真っ青にしたノートパソコンを持ったまま動かない土御門に首を傾げて訪ねる静雄

すると、土御門はゆっくり口を開き静雄へと話し出す

「シズやん……、シズやんはいったい」

「なぁに言ってやがんだホラ見せろ」

静雄は土御門が手に持っていたノートパソコンを奪い取り、
測定して出た判定結果を読み始める

「何なに？レベル5…の第一位？なんだァこのしょうもねぇ判定は
？」

読み上げた静雄はそう言うと取り上げたノートパソコンを土御門に
返す

学園都市に来たばかりの静雄は当然この馬鹿げた結果がどれ程とん
でもない事を意味するのかを理解していない

「よぉく、落ち着いて聞いてくれシズやん」

すると、いつものふざけた口調とは裏腹に真剣な表情で静雄にへと
話し出す土御門

そんな土御門の様子に相変わらず状況が飲み込めない静雄は首を傾げる

「いまこの場をもって、学園都市最強は二人になった」

語る土御門から出た言葉にピタッと固まる静雄

「あん？なんだそりゃ」

土御門は真剣な表情でそう言うと首を傾げている静雄の肩に手を乗せる

「学園都市第一位、平和島静雄、お前ともう一人は一方通行だ」

「へぇーつまり最強が二人っつう事か？」

静雄はようやく理解したように土御門に向かい笑う、

だが、これが一体何を意味するかを静雄は全く理解していない

「そうだ……、そして、もうお前はこの学園都市に知れ渡った」

土御門がそう言うと大音量でいきなりあちらこちらで放送の音が聞こえる

「学園都市第一位、最強…いや最狂と言うべきか……、

今現在進行形で学園都市のあらゆるメディアがお前が第一位なのを知らせていることだろう」

「へぇ…、そうかソイツはスゲェな」

――それは、つまり第一位の平和島静雄を倒して成り代わろうとする輩が命を狙ってくるということを意味する

「気をつけろよ静雄…！……あらゆる奴がお前の首を取りに来るぜよ」

そして、土御門は静雄をジッと見据えて一言忠告する

だが、静雄は相変わらず平然とした態度でそんな土御門に微笑み口を開き話し出す

「心配要らねぇよ……」

自身の拳を強く握りしめ土御門の前につき出す静雄は全く揺るぎない瞳で真っ直ぐに見詰めこう言った

「……目障りなやつはこれで消す」

そして、自身の学生服のポケットに握った拳を突っ込み静雄はプールサイドから立ち去っていった

―――――――――――

それからしばらくして、能力測定をしたプールサイドから校舎に戻った静雄はきブラブラと教室へと戻っていた

「あーあ、面倒な事になっちまった」

愚痴を溢す静雄は頭部をポリポリと掻いてため息を吐く

すると、教室の向こう側から手を振り駆け寄るツンツン頭をした一人の青年

「静雄ー！！」

上条当麻は慌てたように声を張り上げこちらへと走って駆けてくる

「聞いたぜ静雄！！お前第一位だって！」

そして、上条当麻は静雄のシャツを握りやたらと興奮している

「あ！あぁ、そうらしいな」

興奮する上条に頬を掻いて目線を反らし答える静雄

正直、静雄にとって第一位なんてどうでも良かった。

前にいた高校でも最強と言うだけで絡んできた奴は沢山いた

逆に言えば静雄にとって第一位という肩書きは厄介なものでしかなかったのだ

「スゲェよお前！！小萌先生喜ぶぜ！きっと！」

だが、この前にいる上条は静雄が学園都市の第一位になった事をと

ても喜んでいる、
それが静雄にとって少しだけ嬉しかった

「まァ確かにあの人が喜ぶ顔は見てみてぇなァ」

上条と静雄はそう言うと互いに笑い声を上げる

「それじゃ教室に戻ろうぜ静雄」

「あぁ、そうだな」

小萌の待つ教室へと共に色々と会話をしながら足を進める上条と静雄の二人

――こうして平和島静雄は学園都市第一位の座についた

暗部組織（前書き）

――訂正がめちゃめちゃ厄介でした

あの凄まじい能力査定から数時間が経ち放課後、

（あー…面倒くせぇ）

静雄はため息を吐き夜の公園に辺り一面に倒れているスキルアウトの一人を踏みつける

（話には聞いてたが早速襲いに来るとは予想外だったぜ…）

第一位になった為に狙われるのは一応承知はしていた静雄。

勿論、このような事態に遭うことを前提に考えていた静雄は上条達と別々に下校していた訳だが、これ程、襲ってくる奴等の数が多いのは流石に予想外だった。

「おやおや…、やっぱり凄いですにゃー…、シズやん」

「あん？土御門か？」

目の前に現れて拍手を送る土御門を見た静雄はひとまず山積みになったスキルアウトの屍の山から飛び降りる

「たくうぜぇ…、お前の言った通りだ」

「…やっぱりな」

静雄の言葉に辺りを見渡して苦笑いを浮かべる土御門

「……それで？わざわざさっき別れた土御門クンがこっちに来たのには理由があんだろ」

静雄はサングラスに付着したスキルアウトの血をハンカチで拭き取り掛け直しながら訊ねる

「…とりあえずついて来てくれ」

―――――――――

それからしばらくして、静雄は土御門に連れられてとある大きな研究所の前まで連れて来させられた

土御門は研究所の扉に掛かったセキュリティーを外して開く

「ここだ…入るぞ」

「……ん？ああ」

セキュリティーを外して扉を開いた土御門の声と共に怪しげな研究所の中に足を踏み入れる静雄

研究所の中は清潔さを感じさせる白衣を纏った研究者達が、何やらガラス越しの向こう側で様々な研究をしているのが幾つも目に入ってくる

そして、研究所内を数分歩いた後に静雄の前を歩いていた土御門は一番奥の部屋の前で足を止めた

「入るぞ……」

「オウ、入れ！」

土御門の言葉に返答する声と共に扉が開き椅子に腰掛けている一人の男が静雄の視界に入る

白衣を身に纏い顔にタトゥーの入っている悪人染みたその顔の男は静雄を見るなりニヤリと笑った

「へぇー…コイツが新しく現れたレベル５のしかも序列が一位の餓鬼か」

「あん？誰だオッサン？」

まじまじと自分の身体を見回すタトゥーの男に訪ねる静雄はピクリと青筋を立て訪ねる

「…おっと紹介が遅れたな、この人は今日からお前の能力開発をサポートする木原数多だ」

土御門は機嫌悪そうに青筋を立てる静雄に目の前の椅子に座っている木原数多を紹介する

「てな訳だ、ヨロシクなァ餓鬼」

「へぇー…なんかいい面構えしてんじゃねぇか、気に入ったぜオッサン」

木原が差し出した右手を握り軽く握手を交わして笑う静雄

すると、土御門は一息入れて木原と握手を交わした静雄へと話し出す

「急で済まないがシズやん、今日からここで数日間、お前の身体能力を研究また向上さしてもらう」

そう言うと土御門はポケットから一枚の紙を取り出して静雄に渡す

土御門から渡された紙を受け取り内容を一通り読む静雄

「成る程なぁ……、この街で一番のお偉いさんからの命令か…下らねぇ」

静雄はそう言うと土御門から渡された紙破り適当にそこらへんに投げ捨てる

「だけどよォさっそくでわりィんだが、俺は脳味噌弄くられたりさ

れるのは無理だぜオッサン」

「大丈夫だ安心しろシズやん、今回はこの木原数多に協力してもらうのはあくまでもシズやンの能力の強化、もしくは研究だ、恐らくシズやんの脳味噌を弄くる必要はない…」

顔を曇らせて訊ねる静雄に肩に手を置き微笑む土御門

「て言う訳だよろしくなァ…」

「あぁ…なら大丈夫だヨロシクな木原先生」

こうして、静雄は木原と力の上昇させる研究に協力することにした

そして、それから数日間に及ぶ木原数多による静雄の能力向上の為の特訓が始まった

土御門に連れて来られた静雄は何日も木原の所で格闘技や様々な力を教わる

元々、破壊力があった静雄は無駄のない拳による殴打や蹴り技

そして、投げ技や関節技に加えて様々な技能を木原から指導させられ一通りの戦闘技術、それと研究所にあるあらゆる技術を使い脳を弄らずに静雄の中に眠る本能的直感をことごとく鍛え上げた

そして、それから一週間の時間が過ぎて研究所を訪れる土御門

「感謝するぜい木原、まさか奴があれほどになるなんて予想外だったにゃー」

「当たり前だテメェ元々、あの第一位の一方通行のクソ餓鬼を育て上げたのも俺だぜオイ」

自慢気に話す木原にお礼を述べる土御門

木原は研究所に内にあるトレーニングルームでサンドバッグに凄ま

じい剛打を打ち込み研究所の壁ごと破壊している静雄を眺める

「間違いなくやつは今、学園都市最強だろうな」

「…最強か…、あいつは正直最強なんて興味無さそうだがな…」

大量に破壊されたサンドバッグの山を見上げて呟く土御門はそう言うと掛けていたサングラスを人差し指で上げる

すると、上半身裸のまま大量に汗をかいている静雄はタオルを首に巻いてボロボロになったサンドバッグを担いだままトレーニングルームから出てくる

「ふう……木原サン、今日までありがとうございました」

「あぁ気にすんな静雄、テメェはもう最強だ俺より強くなりやがって、…ったくムカつくぜ」

担いでいたボロボロになったサンドバッグを下ろし頭を下げる静雄に笑みを溢す木原

「それじゃ、後はシズやんの研究結果をアレイスターへ報告してくれ頼んだぞ木原」

「わかってるよンな事、とっと失せやがれ……」

そして、静雄は木原に再び頭を下げてシャワーを浴びた後土御門と共に研究所を後にした

――――――――――

研究所から久々に外に出た静雄は深呼吸して両手を大きく伸ばしゴキリと首を鳴らす

「あー…、なんか久々の空気だなオイ」

「まぁ、一週間も研究所にいたんだ無理もない…」

土御門はそう言うと何かを思い出した様に「あ！」と声を上げて道の途中で急に足を止める

「あ！、悪いシズやん！これから妹の舞夏と用事があるのをわすれてたにゃー！」

両手を合わせて頭を下げ、申し訳なさそうに謝る土御門

すると、静雄は頭を下げる土御門に微笑み話し出す

「あぁわかった、俺はこの後帰るだけだからよ、別に構わねぇぜ」

「面目ない！」

土御門は静雄に一言頭を下げると急いで何処かへ走って行ってしまった

それから、静雄は一人自宅にへと帰りながら自身の拳をジッと見詰める

（木原神拳ねぇ……）

そして、静雄は見詰めていた自身の拳を強く握りしめる

「これでまた俺は強くなってっつう事か…なんか実感ねぇよ」

そして、握りしめた拳を緩めてゆっくりと下げる静雄

すると、拳を緩めたと同時にお腹が鳴り頭を掻く

「久々にファミレスでも寄って飯済ませるか……」

それから静雄は夜の食事を手っ取り早く終わらすべくファミレスへと足を運んだ

「お客様人数は…？」

「あぁ一人で……」

ファミレスに足を踏み入れ、微笑み訪ねる店員に答える静雄

「かしこまりました」

そして静雄は頭を下げた店員に案内されて席に座り、

店員は静雄のテーブルの上にメニューを置く

「メニューがお決まりになりましたらお呼び下さい」

「あぁ、はい」

静雄はテーブルの上に置かれたメニューの本を開きとりあえず目を通す

（適当に肉でも頼むかな）

静雄はひとまず開いていたメニューを閉じて先程の店員を呼ぶことにした

それからしばらくして、先程の店員がやって来て静雄は自分が選んだメニュー指差して注文する

「これください」

「かしこまりました」

そして、静雄が呼んだ店員は頭を下げて店の奥へと戻って行く

（めんどくせぇなぁ……たく）

ため息を吐きテーブルに頬杖をついて外を眺める静雄

ファミレスで一人寂しく注文を頼むというのがあまりに好きでない静雄は、なんと無くだが、あの時に自分を置き去りにした土御門に無性に腹が立った

「だから私は超面白いと思うんですよあの映画！！」

すると、静雄の後から元気な少女の声が耳に入ってくる

「いや……どこが？何が面白いか全くわからなかった訳よ」

後ろの席から少女達のどうでもいい会話

研究所で特訓をして疲れていた静雄は思わずこう思った

（うぜぇ……）

不満そうに顔を曇らせる静雄は気を紛らわそうと外を行き交う学生をひたすら眺める

「絹旗、正直あれはあんまり面白く無かったわよ」

「え？何ですか！麦野までぇ！」

「…大丈夫、私は映画を皆から認められないそんな絹旗を応援してる……」

少女達の会話が嫌でも耳障りになるこの席に大概イライラしながらも平常心を保ち続ける静雄はあまり落ち着かない

（トイレに行くかな）

「あ、私飲み物注いで来ます」

立ち上がりトイレにへと向かおうとしたその時だった、
隣の席だった少女がコップを持ったまま立ち上がりドン！とトイレへ行こうとした静雄と衝突した

「……痛ッ」

コップを持ったまま後ろに倒れそうになる少女

すると、バシッと誰かから手を掴まれて倒れそうになった身体を引き寄せられる

「…大丈夫か？」

そう静雄は思わずぶつかって倒れそうになった少女の手を無意識に掴み引き寄せていた

「…えッ！あっはい！超平気です（うわ超イケメンです！）」

顔を真っ赤にして頭を下げる引き寄せられた少女

「そうか、なら良かった」

静雄はそう言うと引き寄せて握った手をゆっくりと離す

「すいません、うちの連れがぶつかってしまって」

「……いやぶつかったのは俺も悪いし頭下げないでくれや」

静雄はそう言うとコップを持ってぶつかってきた少女の頭を撫でる

「そうですか、でも服が……」

「……ん？」

静雄は自分が着ていた衣服を見ると少量のジュースが付着して汚れていた

「あー…クソ…」

静雄はポケットからハンカチを取り出して服についたジュースを拭き取る

「ごめんなさい……出来れば服を汚したお詫びをさせてくださいませんか？」

「いやでも……」

静雄は何やら涙目でこちらを見ている先程ぶつかった少女が視界に入ってくる

すると、土御門のとある言葉が脳裏に蘇ってきた

『シズやーんバイトとかやってみたらどうだにゃー？』

『バイトだぁ？』

『そうだにゃー、最近はカミやん達もバイトやり始めたってきいたぜよ』

『…バイト、ねぇ』

静雄は何かを決心したように席に座る少女達に向かい話し出す

「じぁ…バイト…」

「「「え？」」」

静雄から返ってきた言葉に思わず目を丸くする少女達

服を汚したお詫びがまさかのバイトの紹介とは流石に予想してなかった

「バイトを何か紹介してくれねぇか？」

静雄は微笑み頭を下げて少女達に向かい頼む込む

「バイト……」

「ハイハイ！ねぇ麦野ならうちの雑用で雇えば良くない？」

「……え！（超ナイスですフレンダ）」

首を傾げる悩む様に呟く大人びた少女に金髪の幼い雰囲気の少女が手を挙げて提案する

「……でもうちの雑用なんて……」

「俺は別に構わねぇよ…」

随分と悩んでいる大人びた少女に平然と答える静雄

「だってさ麦野」

「はぁ…仕方ないわねぇ」

大人びた少女に諦めたようにため息を吐き頼み込んでくる静雄の方を向き微笑む

「自己紹介がまだだったわね私の名前は麦野沈利」

「…私は滝壺理后…」

「フレンダって訳よ」

「私は絹旗最愛です、最も愛するで最愛ですよ」

次々に静雄に名乗る五人の少女はそれぞれの自己紹介を手っ取り早く終わらせる

「それで?貴方の名前は?」

優しく微笑み静雄へと訪ねる麦野沈利、
静雄はゆっくりと口を開き麦野達へと答え始める

「俺は――」

とその時、咄嗟に本名を名乗ろうとした静雄の頭に土御門の言葉が瞬時に過る

（いいかシズやん本名はなるべく名乗るな隠せ、じゃないと狙われるリスクが大きくなるぜよ）

「…平和島…幽…」

「「「「幽？」」」」

四人は咄嗟に口に出した静雄の言葉を復唱し互いに顔を見合わせる

「へぇー変わった名前ですねぇ」

「確かに珍しい名前よね平和島…幽…」

「…でもなんかカッコイイ…」

静雄の珍しい名前を聞いて口々に話し感想を述べる三人

（やべぇ…、咄嗟にアイツの名前をつかっちまった）

話した当の本人である静雄は若干、自分が使った名前を心の中で一人後悔していた

すると、麦野はそんな静雄に唐突な質問を投げ掛ける

「それで、貴方は車とか運転出来んの幽？」

「まぁ出来るっちゃできるな」

一応、これでも池袋にいたときにあの忌まわしい男を車で追い回した経験がある静雄は車の運転はそれなりにできる

「そう……、なら問題ないわ…」

麦野は静雄から返ってきた言葉にそう言うと一息入れてゆっくりと口を開き笑みを溢す

「ようこそアイテムへ」

この瞬間をもって池袋最強、いや学園都市最強の平和島静雄はアイテムに入ることとなった

――そして、学園都市はこの男によって大きく変わっていく事となる

仕事（アイテム）（前書き）

――暗部に入った静雄はいかに――

仕事（アイテム）

辺りはすっかり暗くなるが、相変わらずファミレスの中で話をしている5人組

「という事で幽は今日から私達アイテムの雑用って訳よ」

金髪の少女、フレンダは絹旗の隣で座っている静雄に笑みを浮かべて話す

「それで？聞くけどテメェらアイテムってぇのは具体的に何をしてるんだ？」

実際、そのアイテムという組織の雑用と言ってもあまりイメージが思いつかない静雄

「ん～…、学園都市上層部からの依頼や情報処理とか色々かな」

麦野は訊ねる静雄に対して大々の事を大まかに説明する

「成る程なァ…て言うとなかなか危ない橋を渡ってる組織って訳か」

「まぁ、そうなりますね」

そう言いながら隣に座っている静雄の腕に抱きついている絹旗

それを隣でジッと眺める滝壺は何やらまじまじと静雄の身体を見回していた

（……金髪にサングラス……）

パッと見て金髪にサングラスが印象強く一番に目につく静雄

「……奇抜だね、かすかは……」

麦野の隣にいた滝壺は微笑みながら静雄の金髪をジッと見詰めていた

「あ？まぁな…、確かに金髪は街中じゃ良く目立な」

「でもカッコイイからいいと私は超思いますけど」

金髪の毛を弄る静雄の髪に手を伸ばし弄り出す静雄の隣に座る絹旗

すると、丁度その時何処からか携帯電話の着信音がファミレスに鳴り響く

「あれ？、麦野携帯鳴ってるよ」

「…え？ホントだ」

フレンダに指摘されてポケットから携帯電話を取り出す麦野

そしてその、取り出した携帯を持ったまま一旦、ファミレスから出て行く

「まぁた、超仕事ですかぁ？」

あからさまに嫌そうな表情を浮かべてファミレスのテーブルに伏す絹旗

「そうみたいね」

ファミレスの外で携帯で電話をしている麦野を見てフレンダは確信したように頷く

「……あ、麦野戻ってきた」

「みてぇだな」

ファミレスの扉が開き座っている静雄達に早足で近づいてくる麦野

「仕事よ、車は向こうがワゴン車を手配してくれてるみたいだから静雄、早速だけど運転お願いできる？」

「あぁ任せろ…」

すると、静雄達は立ち上がり麦野がファミレスの会計を済ませて全員外に出る

それから、人気の少ない駐車場に足を運ぶアイテムと静雄

「お…、どうやらアレみたいね」

先頭を歩いていた麦野が指差す方には黒いワゴン車と側に立っている黒いスーツ姿の男性

スーツ姿の男性に近づいた麦野は何かを手渡されていた

「これが鍵だ……」

「ありがと」

麦野は黒いスーツの男から手渡された鍵をそのまま後ろにいた静雄に渡す

「それじゃ頼んだわね」

「はいはい……」

静雄は車の運転席に乗り込み続いて麦野が助手席、後部席には絹旗達が乗り込む

「それじゃ行くぞ」

そして、エンジンが入った静雄の運転する車は学園都市の闇へと消えて行った

――――――――――――

それから、車を運転して数分後、薄暗い学園都市の夜の道を走っていた黒いワゴンはとある研究所前に停まる

「着いたぜ」

後部座席に座る絹旗達の方を振り返ると研究所を指差し言う静雄

「思ったより早く着きましたね」

「さてと、行くわよ絹旗、フレンダ」

麦野は乗っていたワゴン車の扉を開き後部座席に乗っていた絹旗達に言う

「オイ…俺達はどうすんだ？」

「…幽は車の中に残っててその娘を守ってて頂戴、私達ならこんな仕事なら手っ取り早く終わるから」

「そう言う事だからよろしくって訳よ」

「頑張って下さいね幽」

そう言って静雄に微笑みワゴン車から出て行く麦野達

「…お、オイ!!」

すかさず声を上げる静雄だが、麦野達の姿は既に闇の中へと消えた後だった

そんな中、後部座席にいた滝壺の方をゆっくりと振り返る静雄

「……よろしくね幽……」

「…マジかよ」

静雄はまるで天使の様に微笑む滝壺に思わず苦笑いを浮かべいた

―――――――――――

それから所変わって、研究所の中を駆ける三人の少女

「でも良かったんですかね麦野あの二人を車に置いてきて」

「なに絹旗、あんたもしかして焼きもち？」

フレンダは不安そうに呟く険しい表情を浮かべた絹旗に悪戯な笑みを浮かべ訊ねる

「な！……ち、違いますよ！」

「まぁ確かに幽は顔はカッコイイからねー…、しかもワゴン車には滝壺と二人っきり」

フレンダの言葉に麦野も便乗し始めて、まるで林檎の様に顔を真っ赤する絹旗

「も、もう！麦野まで何なんですか！そんなんじゃありませんよ！！」

「おっと話してたら敵さんこちらに来るみたいね」

フレンダは前方からこちらへ向かってくる黒服を着た男達を見て身

構える

そして、戦闘体制に入る絹旗、

「さぁて……それじゃあ……」

麦野は自身の手から何かを構えてそれを黒服を着た男達に向かい投げる

まさに、一閃、投げられたそれは凄まじい音を立て目の前の黒服の男達を吹き飛ばし男達がいた辺りの壁には血がベットリとついていた

「ブ・チ・コ・ロシ・か・く・て・い・ね」

不気味に微笑み身体からレーザーの様な光を辺りに放つ麦野沈利

こうして凄まじい轟音と共に麦野達の戦闘が始まった

――――――――――

ワゴン車中から外にある研究所を眺める静雄

「おーう…、こりゃまぁ派手にやってんなぁ……」

研究所から聞こえてくる爆発と轟音、それに加えて研究所から煙が上がり驚いたように呟く静雄

「……大丈夫、麦野達なら心配いらない……」

「ならいいんだけどよ」

微笑む滝壺にそう言われる静雄は自身の金髪の頭をガシガシと掻き何やら悲しげな表情を浮かべて静雄は隣に座る滝壺に話し出す

「…この街、実際イカれてるよな、お前等みてぇな女の子にこんな事させるなんてよォ……」

「……うん…確かにね……」

悲しげな表情で呟く静雄の言葉に頷く滝壺、

黙って話を聞いている滝壺に静雄は更に話を続ける

「俺の前にいた街なら、そんなめんどくせぇ事無かったんだけどなァ」

「……え？」

呟く静雄の言葉に思わず声を上げて首を傾げる滝壷。

「……かすかはもしかしてこの街に来たばかりなの？……」

「あぁ…、そうだな二週間位前にきたばかりだ」

訪ねる滝壷に答える静雄

滝壷は嬉しそうに微笑む静雄に口を開き訪ねる

「……へぇ…どんな街？……」

「そうだなァ……まぁ機会があればその内連れてってやるよ……」

静雄がそう言うと、何かを感知したように滝壺にピタリと話すのを止めてワゴン車の窓を見始める

「敵か？」

「うん…そうみたい」

滝壺がそう言うと懐から一丁の拳銃を取り出し

右手で取り出したそれを静雄の手のひらにちょこんと乗せる

「……これ麦野から……なにかあったらかすかに渡せって……」

「チャカじゃねぇか要らねぇよンなもんは……」

そう言うと滝壺が差し出す拳銃を押し戻して返す静雄

だが、このままではいずれにしろワゴン車は調べられて滝壷達が居ることがバレる

「……で、でも……」

不安げに拳銃を押し返す静雄に顔を曇らせる滝壷

すると、静雄は窓の外を指差して滝壷に微笑み言う

「心配ねぇよ、ホレあれ見てみ」

「……？」

指差す方へ首を傾げて振り返った滝壷

静雄はすかさず振り返った滝壷の首筋に手刀を入れ、手刀が首に入った滝壷は力無くワゴン車の座席に横になるように倒れる

「……悪ィな、ちいとばっかし眠っててくれや」

静雄は意識を遠退かせる滝壺に囁くとワゴン車のドアを開いて外へと出る

車の外では数名の黒いスーツの男が拳銃を構えて取り囲んでいる

「えー…不審車を発見只今、数名で包囲している」

男は拳銃を構えたまま身を低くして携帯電話で連絡を取り合っている

「いやまて今車の中から人が……」

次の瞬間、ワゴン車の扉が開くと同時に携帯を持って話していた男の顔面に拳がバキッと音を立てめり込んで遥か後方へと吹き飛んでいく

「ぎぁァァァァァァ！！」

そして吹き飛ばされた後に聞こえてくる凄まじい破壊音と悲鳴

そして、ワゴン車の中から現れる一人の金髪の男

「…たくうぜぇうぜぇと思ったらテメェ等か…ハエ共」

「……う！撃てェ！！」

突然の出来事に驚いた黒服の男達は静雄に向けて一斉に拳銃の引き金を引いて弾を撃ち込み出す

パァン！！という凄まじい銃声と火薬の臭いがワゴン車の辺りを包む

だがしかし、静雄に肝心の拳銃の弾は一発も当たらない

「あー…遅ぇ遅ぇ…、まだ木原サンの蹴りの方が百倍はぇなコイツは…」

拳銃を撃ち終わった男達に向かい平然とした態度で言う相変わらず無傷の静雄

「なんだコイツは！！」

「あぁうるせぇな！！チキショー！」

静雄は喋りかけの黒服の男を問答無用に拳を振り下ろし
振り下ろされた拳は鈍い音を立ててその男の顔面を捉える

そして、拳が顔面にめり込んだ男はのけ反ってコンクリートに衝突、
そして出来上がるドでかいクレーター、

「うぜぇからテメェ等消えろ、じゃねぇと3秒後に俺が消す!!」

「ヒ、ヒィィィィィィ!!」

静雄の圧倒的な強さに思わずその場にいた腰を抜かす全員

だが、静雄はそんな事はお構い無しに拳を鳴らし、青筋を立て腰を抜かしている男達に近づいてゆく

「……オイコラ!!もうタイムアウトだァ」

「ぎ!ぎゃあああああ」

そして、黒服達の悲鳴は夜の学園都市に響き渡り殴られた身体は宙を舞った

――――――――――

「ねぇ麦野、あれは流石に可哀想じゃないですか？あの黒服の仲間に幽と滝壺を襲わせるなんて」

「何言ってんのよ、あぁでもしないとあの雑用の実力が分かんないじゃない」

麦野達は任務を終えて車に戻る最中静雄について色々と話をしていた

「まぁでも一応死なない程度にしとけばいいって言ってた訳だから大丈夫じゃない？」

「そうですけど」

話をしているうちに静雄が運転するワゴン車が三人に見えてくる

「オウ…、遅かったな」

静雄は相変わらず傷ひとつ無く、ワゴン車に寄り掛かり煙草を口にくわえ、戻ってきた麦野達を出迎える

「…あれ？幽平気なの」

「……何の事だ？早く車に乗れよ」

「あ、うん」

平然としている静雄に言われるがまま車の扉を開き中へと乗り込む麦野達

すると、同時に後部席で寝ていた滝壺がドアの音でゆっくりと目を覚まし、上体をゆっくりと後部座席から起こす

「……あれ？」

「お？気がついたか？」

眠そうに目を擦り辺りをキョロキョロと見渡す滝壺、

すると、首を傾げて運転席にいる静雄に訊ね出す

「…あれ、黒服の男達は……」

滝壺のその言葉に麦野達三人はピクッと反応するが静雄は相変わらず平然としている

「何寝ぼけてやがんだ…車出すぞ」

そう言って鍵を回し車のエンジンを点けて車を運転し始める静雄

（あっれー？あいつらしくじったのかしら……？）

麦野はあまりに平然としている静雄の態度に考え込む様に首を傾げる

そして、エンジンがついた車を道路へと出す静雄

――すると、その道中、絹旗は目に入ってきた信じられない光景に固まった

「……む、麦野」

一瞬だけ目に入ってきた光景に顔を真っ青にして震えた声で麦野に話し掛ける絹旗

「何よ……絹旗」

「さ、さっき研究所の壁に人がめり込んでクレーターが出来てました……」

その、絹旗の言葉を聞いた途端に呆然とする麦野とフレンダ

「……」

「……」

開いた口が塞がらないとはまさに今の状態の事だろう、その言葉を聞いた二人は口を開いたまま思考が停止する

そして、二人は苦笑いを浮かべて絹旗から目線を反らして話始める

「……絹旗多分気のせいよ」

「そうだよ絹旗、つかれてるだけだって……」

フレンダと麦野はそう言って何も聞かなかった事にする

とりあえず、無事に任務を終えた麦野達はワゴン車で研究所を後にした

新しい生活（前書き）

――アイテムに入った静雄はいかに――

新しい生活

とある何処かの駐車場

仕事を終えた三人にワゴン車を下りた静雄は自身の頭を掻いて話し出す

「じぁ俺はこれで帰っから……」

ワゴン車にいる麦野達に一言そう言ってさりげなくその場から立ち去ろうとする静雄

……が右腕を掴まれて進めていた足が止まってしまった

「オイ…なんだよ」

静雄が振り返ると小さい身体をした絹旗がすがり付くように静雄の右腕を握っている

「ま、待ってください！何を言ってるんですか今日から私達のアジトで一緒に幽は超生活するんです！」

「…なんだよ、超生活って」

手を握る絹旗の言葉に首を傾げる静雄

だが、それにワゴン車に寄りかかっている麦野が言葉を紡いで静雄に話し出す

「そうよ幽、今日から貴方は私達の雑用でお金を払ってんだから私達の生活もサポートしてもらわないと」

麦野は顔をひきつらせる静雄に対してまるで新しい玩具を見つけた子供のように笑っていた

（うぜぇ……）

「それにホラ寝床もあるからいいでしょ？幽、」

静雄の腕には目を輝かせている絹旗、そして麦野の隣にいる滝壺がまるで頼み込むような眼差しを向けてくる

「あぁ分かった！やりゃいいんだろうが！」

だが静雄は結局、麦野に上手く言いくるめられて折れてしまう

諦めた静雄はため息を吐き笑みを溢している麦野達に話し出す

「待ってろ自宅から荷物まとめて来る……」

静雄はそう言うと一旦麦野達と別れて自宅の寮の方へと駆けて行き、

――それから数時間の後

静雄は自宅から持ってきた荷物を駐車場にあるワゴン車に乗せた

「これで全部？」

「あぁ悪ィな、待たせちまって」

荷物をワゴン車に積んだ静雄は麦野達に一言詫びると、運転席の扉を開けてシートベルトをして座る

「じぁ…出すぜ」

――――――――――――

「たっだいまーにゃーん」

「ふぃー今日は色々あったから疲れましたー」

アジトらしき所に帰ってきた麦野達はそう呟くと中央にあるソファーへと倒れ込むように座る

「オイオイ……、だらしねぇなぁテメェら」

アジトに着くと同時にくつろぐ二人に呆れたように言う静雄
すると、フレンダはそんな静雄の肩をポンと叩き微笑む

「まぁ、今回は結構暴れまわったからかなり疲れるのも無理ないわ」

「晩飯はどうすんだよ」

静雄は隣に立っている二人に対して客観的なフレンダに訊ねる

「今日は出前ね」

「……あ…私トンカツが食べたい……」

静雄の問いに麦野が答え、それに便乗して願望を述べる滝壺。

だが、そんな二人のやり取りに静雄は思わず顔を曇らせる

「……、テメェら飯ぐらい作らねぇと身体持たねぇだろ」

このアイテムの光景に流石に見かねた静雄はそう言うとアジトにあるキッチンへと足を運ぶ

「……え？幽ご飯作れるんですか！！」

「まぁそれなりにはな」

そう言うとキッチンに掛けてあったエプロンを付ける静雄、
その光景は実にシュールで麦野達はプッ！！と思わず吹いてしまった

（エプロン姿の幽って…、なんというか可愛い…）

（……主夫？……）

（妙な光景な訳よ）

そして、エプロン姿で黙々と料理をし始める静雄に思わず目を丸くするアイテムの三人

「それじゃ適当に作っから待ってろ」

すると、椅子から滝壷は立ち上がり調理をする台所で静雄と共に調理を手伝い始める

「……幽、私も手伝う……」

「あー、ズルいですよ滝壷！私も超手伝いますから幽！」

滝壷の行動に便乗して立ち上がり、静雄の手伝いに入る絹旗

――それから数時間後、

二人の手伝いの甲斐あって、手っ取り早く食事を作り終えた静雄は、作った手料理を全員で囲み美味しそうに食べていた

「美味しー、この焼き鮭!!…良く味がついてるじゃない幽」

「このみそ汁もなかなかな訳よ」

「超美味いです幽!!」

「……お料理上手だね幽……」

食事を食べる静雄の作った料理に思わず頬が緩む麦野達

そんな麦野達の様子を見て静雄は嬉しそうに微笑む

「……まぁな、だてに一人暮らししてた訳じゃねぇよ」

共に食事を取りながら嬉しそうに答える静雄

ここ最近、忌々しいあの男が目につかないせいか静雄はとても機嫌が良い日が続いていた

こうゆう面では池袋をはなれて学園都市に来たのも案外正解だったかもしれない

（…あの街じゃこんな風に他の奴等と晩飯なんて食わなかっただろうなァ……）

思わず池袋の街にいた頃を思い出し、心の中で呟き笑みを溢す静雄

「……、？幽どうしたんですか？ご飯冷めちゃいますよ」

「…ん？あぁ悪ィ、ちょっと考え事してたんでな」

絹旗に声を掛けられた静雄は我に返り目の前の食事に手を口へと運ぶ

―――――――

それからしばらくして、

賑やかな食事を済ませた静雄は食器を片付け
アイテム一同と一息入れて雑談をしていた

「ふぃー…、良く食べました」

「……美味しかったよ、ご馳走さま幽……」

「……オウありがとよ…」

笑みを浮べている滝壺に静雄は素っ気なくお礼を述べる

「……なんか意外だったわね幽が料理出来るなんて」

「人は見かけによらないって訳よ」

フレンダは足を組みつつ、静雄の意外な一面に関心する麦野に話す

「確かにそれは超言えてるかも」

「ンだよ、悪ィかよ俺が料理なんかしたら……」

「ち、違いますよ…、こんな家庭的な技術があって超関心してるんですよ私！」

絹旗は不満そうな静雄に対して両手を左右に振り否定する

「そうなのか？そりゃありがとな……」

すると、静雄は絹旗の頭に手を乗せてガシガシと撫で回す

「……ちょっ！！」

突然静雄に頭を撫でられて顔を真っ赤にさせる絹旗、

すると、それを見ていた麦野は顔を真っ赤にしている絹旗を見てニヤニヤと笑み浮かべている

「あら、良かったわね絹旗、また一歩前進かにゃーん？」

「……むゥー…」

「む、麦野！！そんなんじゃないですよもう……！！」

静雄に撫でられて否定する絹旗を羨ましそうに見つめる滝壺

こうして静雄とアイテムとの新しい生活は始まった

――――――――――――

窓のないビルの内部に一人の金髪でサングラスを掛けた男、

土御門元春は制服のズボンのポケットに手を突っ込み、とある人物と対峙していた

――逆さに培養液のような物の中で浮いているその人物は土御門に

対してゆっくりと口を開く

「やぁ、どうしたんだいこんな夜遅くに…」

「何を言ってる、貴様ならもう既にわかっているだろう」

土御門がそう言うとその人物は頬を緩ませる

「平和島静雄……か…彼は実に興味深い」

「貴様だろう静雄を暗部組織へ接触させたのは」

「さてなんの事かな」

その人物は相変わらず平然とした態度で会話をする土御門に訪ねる

「……いい加減にしろ！奴は脳開発されていない無能力者の筈だ！何故そんな奴が第一位なんだ！答えろ！」

「……君は彼の力をまだわかっていないようだね」

土御門の言葉にその人物は呆れたように返す

「！！……、どういう事だ？」

「彼は実に面白い、下手をすれば私のプランがひっくり返ってしまう程にねぇ……」

その人物は対峙する土御門に対して話をし始める

「……良いだろう土御門元春、彼の力を少しだけ教えよう」

そして、培養液で逆さになっているその人物は土御門に不気味に笑いかける

「――幻想崩壊（イリュージョンディケイダー）…、とでも言うべきだろうかね……」

「幻想崩壊……だと！！…」

土御門はその人物の信じられない言葉に驚きが隠せない

「……まぁ呼び方はそれぞれだろうがね、簡単に言えば彼自体がそれだ……」

土御門の目の前で対峙しているその人物はそう言って目蓋を閉じ話を紡ぐ

「……信じられない事だが、彼には超能力そのものが通用しない…超能力者達の持つ『自分だけの現実』が否定されるそう言う体質なのだ土御門元春……」

「……なん……だと……」

平和島静雄の力を聞かされて呆然と立ち尽くす土御門

あの馬鹿力の上に秘める更なる能力が備わっている驚愕の事実。

（『自分だけの現実』の無効化だと！！）

土御門は開いた口が塞がらないでいた、今の話が本当であるなら現在、とんでもない生物兵器を所持している事となる

「コレも貴様の招いた仕業かアレイスター…」

自身の掛けているサングラスを中からアレイスターを睨む土御門

だが、そんなアレイスターから土御門に対して返ってきた言葉は全く違った事実だった

「残念ながら今回は違うのだよ土御門……」

そして、アレイスターの培養液の横から人影が現れて姿を露にする

黒い髪の毛にジャケット……そして手にはバタフライナイフ

「こぉんにちわぁー…、話は聞いてるよー土御門元春君、シズちゃ

んは元気にしてるかなぁ？」

「な、何故貴様が……」

……そう、土御門の目の前には全ての悪の根元といわれている人物

土御門は一息ついてゆっくりと唾を飲み込みゆっくりと口を開く

「折原臨也……」

「あらあら、僕って有名人なんだねぇ」

「何故貴様が此処に」

土御門は思わず疑問を目の前に現れた臨也にぶつける

だが、臨也は相変わらずふざけた様な陽気な態度でそんな土御門に答え始める

「……何故かって？だってシズちゃん此処に入れたの僕だもーん」

「……なんだと？」

土御門は信じられない臨也の言葉に耳を疑い聞き返す

「その言葉の通りだよ土御門君、

いやもうめんどくさいからツッチーでいいか、

彼はそこのクロちゃんから頼まれてこの学園都市に僕のあらゆる情報網を駆使して無理矢理編入させたんだよ？」

悪戯な笑みを浮かべ呆然とする土御門に何気なく話す臨也

「ちなみに君達の暗部組織の行動情報もバッチリ、暗部とも接触させたのも僕だね」

「貴様が主犯だったのか……」

臨也はそう言うと近くにあったアレイスターの培養液に寄りかかる

「……お前は何が目的だ？」

「……目的？そんなの決まってるじゃないか」

土御門の言葉に折原臨也は一息入れ、悪戯な笑みを浮かべる

折原臨也のその不気味な笑みを見た途端、背筋が一瞬で凍りつく土御門

「……シズちゃんの愉快な姿を観るためさ」

こうして混沌の蠢く学園都市にまた一つ台風の目が現れた

超電磁砲２（前書き）

――うむ再び超電磁砲再来です

超電磁砲2

アイテムでの雑用初仕事を終えた翌朝

「たく今朝は寝違えちまったなクソ……」

静雄はいつも通り首の骨をボキボキと鳴らし学校へと向かっていた

「あいつら、なんで俺の隣で寝てやがったんだ全く謎だ」

静雄はそう言いながら今朝の出来事を振り返る……

今朝、静雄は麦野から与えられた部屋で寝ていたわけだが、朝目覚めてみると右腕には絹旗、左腕には滝壺といった具合に自分の両腕を枕にされていて様子を見に来た麦野達が来るまで動けずそのまま寝違えていたと言うわけだ

（うぜぇ……、つーか首がいてぇ）

静雄は寝違えて痛めた首回りを右手で擦り骨をゴキリと鳴らしながが

ら足を動かす

「あ……見つけた！！ちょっと待ちなさいそこの金髪！！」

丁度その時、首の骨を鳴らし登校する静雄の後方から迫り来る女子中学生……

静雄は痛めた首を右手で抑えて声がする後ろへとゆっくりと振り返る

「ンだよテメェか中坊……」

「だからその呼び方止めろっつてんだろうがァ！！！」

超電磁砲、御坂美琴の顔を見た途端に残念な表情を浮かべる静雄

そんな、静雄の反応と自分の呼び名に対して美琴は怒鳴り声を上げて激怒する

「今日こそ勝負してもらうわよ第一位！！」

「やめとけよ、俺も中坊ぶっ飛ばすのは流石に気が引けるぜ」

静雄はそう言いながら怒鳴り声を上げて駆け寄ってきた美琴の頭にポンと手を乗せて軽くあしらう

「ナメないでよね！なんでアンタなんかが私より上か納得出来ないの私は！」

だが、相変わらず自分の話に耳を傾ける気配が無い静雄に青筋を立てる御坂美琴

「知らねぇし興味ねぇ……俺が持ってンならテメェにやるよそんなもん」

「な、ふざけんなー！！！！」

美琴はそう言うと凄まじい雷音と共に全開の電撃を静雄に直撃させる

「あーいてー痺れるー」

あからさまにわざと電撃を食らい棒読みの如くそれに対して適当なリアクションを取る静雄、

そして適当に倒れて、電撃が終わった途端何事も無かったように起き上がった

「……って事だ今日からテメェが一位だ良かったな、頑張れよ」

「……へ？（コイツ……私の電撃が全く効いてない？）」

美琴の電撃を食らってもなお何事も無かったようにぴんぴんしている静雄に唖然とする

だが、自分のこんな扱いに未だに納得がいかない御坂美琴

「ふ、ふざけるなァ！！！」

美琴は声高に叫ぶと同時に凄まじい電撃を辺り一面に放つ

すると、それと同じくして御坂美琴の後頭部にゴツンという鈍い音が辺りに響き渡る

「うるっ…せぇぞコラァ！！テメェはいい加減にしやがれ！！」

美琴の目の前には耳を塞ぎ大声を張り上げる自分に向かい軽く拳骨を振り下ろした静雄の姿。

その瞬間、なんとも言えない激痛が見事に御坂美琴の頭に走り

「〜……っつぅ〜」

思わず涙目になり頭を抑えて軽く殴られた所を擦る御坂美琴

「ここら辺の近所の迷惑を考えろ馬鹿野郎！」

静雄はそう言って電撃を一方的に放つ美琴に説教をして殴った自分の拳をポケットへとしまう

「……だってこうやらないとアンタ構ってくれないし……」

そして、殴られた美琴は何故か口を尖らせ、静雄に向かい頭を抑えて一人でボソリと呟く

その言葉に訳が分からず首を傾げる静雄

「……なんだァ？構って欲しいのかテメェは？…なら最初からそう言えよ」

静雄は美琴が怒りを露にしていた理由のあまりの馬鹿らしさにに思わずため息を吐く

「……え？」

「ほら行くぞ、何座り込んでやがんだ」

静雄はそう言って座り込んでいる美琴の手を力強く掴み立ち上がらせる

（な、なんか意外にコイツ優しい……）

差し出された静雄の手を掴み握る美琴は彼の意外な一面に戸惑うい

つつも立ち上がる

そして、ひとまずそこから移動する御坂美琴と平和島静雄の二人、

そんな二人はしばらく歩き回った後に人が行き交う街中へと場所を移す

「そ、それで？一体これからどうすんのよ」

学園都市の街中に移動した二人は何やら行く場所も決まらぬまま適当に街中をさ迷っていた

御坂美琴から訪ねられた静雄はうぅん、と首を捻り考え込む

「あー…、正直あんま考えて無かったな、……というより俺はあんまりこの街の事知らねぇし行くあてなんて思いつかねぇ」

考えた後に結局何にも思いつかず適当返す静雄

そんな静雄の態度に思わずため息を吐き呆れたように美琴は口を開き話し出す

「……アンタそれでよく私を誘ったわね」

「何言ってんだ……絡んで来たのはテメェだろうが」

呆れたように呟く美琴の態度にため息を吐き頭を抑えて呟く静雄

「な、何よ！…大体あんたが！」

「またそれかよ」

毎度毎度、変わらずに同じ反応をする美琴の態度

そんな中、静雄は下らない言い合いのやり取りを終わらすべく、とりあえずパッと思いついた事をとりあえず口に出してみることにしたら

「……じゃあアレだアレ……あー何だったけな……」

「な、何よ突然」

急に訳の分からない事を言い出す静雄に首を傾げる美琴、
すると、静雄は思い出した様に首を傾げる美琴に話し出す

「あー…、ホラ…、そう！！街案内だ！！」

「……街案内？」

美琴がそう復唱すると肯定するように静雄は縦に首を振る

「あぁ、俺はこの街の事をあまり知らねぇからな、お前が色々と案内してくれねぇか」

御坂美琴にお願いするように頼み込む静雄

正直、池袋の街に比べてあまり学園都市に関しては知らない所ばかりの静雄はこの際、この街に詳しそうな御坂美琴に案内してもらおうと考えたのだ

その言葉を聞いて何やら自信ありと言わんばかりに美琴は偉そうに

腕を組み合わせる

「そう、なら仕方ないわね！！……」

満更ではない表情を浮かべて静雄に向かい嬉しそうに答える美琴

「……安心しなさい私にかかればこんな街なんてすぐに隅々まで分かる様になるわよ」

「……あぁ（何笑ってんだコイツ？）」

あまりに奇妙な美琴に首を傾げつつも静雄は適当な返事を返す

「じぁホラ行くわよ！！」

美琴はがっしりと静雄の右腕を掴んで元気よく駆け出す

「あ！オイ！！…」

手を掴まれた静雄は御坂美琴に張られるまま街中へと連れていかれる

こうして静雄は強引に美琴に学園都市の街を案内して貰う事となった

続超電磁砲２（前書き）

――ハイハイ訂正しときましたでは

――セブンスミスト

御坂美琴から無理矢理引っ張られた静雄はひとまずショッピングモールが立ち並ぶこの場所に連れて来られていた

「ほらこっち！！…何ボケッとしてんのアンタ」

「はしゃぐな、はしゃぐな……、今行く」

テンションが高い彼女に振り回されて若干、疲れた表情を見せる静雄

（結局学校サボっちまったが、まぁいいかたまには……）

時計を見つめるが既に登校時刻を過ぎており、仕方ないと開き直る静雄

そんな彼は美琴に連れられるがまま近くのアクセサリーショップへ足を踏み入れる

「ねぇ！！これ可愛くない！！」

「あん？」

美琴が店から静雄に持って来たのは変わったカエルのキーホルダー、

「……なんだコレ」

カエルのキーホルダーを受け取り首を傾げる静雄、美琴はそんな静雄に迫るように手渡したカエルについて話し出す

「ゲコ太よ、ゲコ太！！それより可愛いでしょコレ！」

キーホルダーを持ち首を傾げる静雄にどうだと言わんばかりに見せびらかす美琴

カエルのキーホルダーをまじまじと見詰める静雄はとりあえず自身の財布を取り出す

「……なかなか良いな、何円だ？」

「……、へ？あんた買うの」

キーホルダーについての静雄の反応に思わずキョトンと声を漏らす美琴

「あん？当たり前だろなかなか面白いセンスしてんなお前」

静雄はそう言うと美琴が持ってきたカエルのキーホルダーを取りレジに持って行く

（……アイツ顔に似合わず……できる！！！！）

思い切った静雄の行動に関心する美琴

しばらくして、先程のキーホルダーを購入した静雄はレジからビニール袋を持って美琴の所に戻って来る

そして、ビニール袋から包装してある一つの袋を美琴へと手渡す

「……ホレコレはテメェのだ」

「……え？」

静雄から唐突に手渡される包装された袋に目を丸くする美琴
美琴は中を見てみると中にはゲコ太のキーホルダー

「あんたコレ……」

美琴は思わずキーホルダーを手渡してきた静雄の方に顔を向ける

「……今日の礼だ、勿論、俺の分もある」

静雄はそう言うと先程買った自身のキーホルダーを美琴に見せる

思わずこの状況に何かに気付いたかの様にハッ　とする御坂美琴

（こここここ、これってペアって奴じゃない！……こいつ）

勿論、静雄はそんな事はこれっぽっちも考えていない、ただただ単純なお礼のつもりだったねだが、

手渡された美琴はみるみるうちに顔を真っ赤にさせて静雄からもらったキーホルダーを抱き抱えていた

「？……、顔を赤いけど大丈夫か、どうした？」

あまりにも真っ赤な顔をして湯気が頭の上から吹き出ている美琴を心配する静雄

すると、何を思ったのか、真っ赤にしている美琴のデコに自身のおでこを当てる

（な、なななな！！！！…）

静雄の顔が目と鼻の先にある状況に更に顔が真っ赤になる御坂美琴

「あん？熱じゃねぇのか」

顔を真っ赤にさせている美琴の目の前には一センチ程で口元に接触しそうな静雄の顔が目の前にある

「……き、」

「……ん？」

おでこをつけて顔を真っ赤にしている御坂美琴に首を傾げる静雄

「きゅうぅぅぅ」

そして、次の瞬間静雄の目の前でドタン！！　という音を立てて御坂美琴はその場に倒れた

「……オ、オイ！！……」

静雄は突然の出来事に思わず声を上げる

そして、辺りにいた周囲の人々は突然倒れた美琴に驚き、野次馬の様に次々に集まってきだした

この厄介な状況に顔をひきつらせる静雄

「……、オイオイ冗談じゃねぇよ」

顔を真っ赤にして、倒れている御坂美琴の顔を見た静雄は呆れたようにため息を吐く

「……、たくしょうがねぇなァ」

一言そうぼやく静雄はひとまず気絶した美琴を抱き抱える

「……、ヨッと、よっしゃ行くか」

そして、その場から駆け逃げる様にその場から去った

――――――――――

しばらくして、静雄は近くにあった公園にあるベンチに美琴を横にして起き上がるのを待つことにした

「……うぅん」

「おう起きたか」

顔を真っ赤にして気絶した美琴は目を擦りゆっくりとベンチから上体を起こす。
その隣でのんびりと缶コーヒーを手にくつろぐ静雄

意識がハッキリとした美琴は慌てて辺りを左右にへと見渡し口を開く

「あれ?私、」

「……、たく急にぶっ倒れやがって焦らせんなよ」

静雄は辺りを見渡している美琴のオデコに買ってきた冷たい缶コーヒーを付ける

「冷たッ!」

「……、ホラこれ飲んで目ェ覚ませ」

美琴はデコを擦り差し出された静雄の缶コーヒーを受け取る

「あ、有り難う」

「……、オウ気にすんな」

お礼を述べる美琴に右手を挙げて応える静雄

そして、そんなやり取りをしていた二人の間にしばしの沈黙が流れる

美琴はチミチミと受け取ったコーヒーを飲みチラと静雄の方に目を向けていた

「……、んだよ」

「……、いやさ、さっきはなんかゴメン」

美琴はそう言うと申し訳なさそうに静雄に頭を下げて謝る

「……何言ってんだ気にすんな」

「……でも突然倒れるなんて」

静雄の言葉に対して美琴はそう言うと何故か落ち込んでいる
確かに、いきなり目の前で顔を真っ赤にして倒れて迷惑をかけた上に心配もかけてしまったのだから申し訳無いのも当然だ

だが、静雄はそんな美琴に左右に首を振りポンと頭に手を乗せて公園のベンチから立ち上がる

「……だぁからぁ気にすんなっつてんだろ…良いんだよ別に俺は楽しかったんだから」

「え？」

静雄の言葉に耳を疑い聞き返す美琴

「……だから、楽しかったつってんだろそれによ、面白いれぇキーホルダー買えたしな」

そう言って美琴に先ほど買ってきたゲコ太のキーホルダーを見せ微笑む静雄

（面白い……ねぇ）

美琴はそんな静雄の言葉に思わずクスっと笑いベンチから立ち上がる

「……んじゃ私も起きた事だし、街の案内また再開しますか」

「……切り替えはえぇな」

そして、再び静雄を連れて移動し始める御坂美琴

そして二人は公園を後にした

――――――――――

それから様々な街を二人で歩き回って数時間……

「あら、もうこんな時間か」

「ああ、けっこう色んな所に行ったな」

街中を歩き回っていた時にはいつの間にか辺りはすっかりと暗くなって

美琴は慌てて自分が手につけていた時計を見て時間を確認していた

「……映画館に遊園地、それにショッピングモールとあとは……」

「……ホント、こんだけ見て回るんじゃ時間なんて足りないわよねぇ」

腕時計を見て時間を確認していた美琴も行った場所の例を挙げる静雄に頷き言う

そうして、適当に話ながら夜の学園都市を歩いて帰る二人

「金出せやコラ！」

だが、歩いていた二人の耳にしばらくして遠くの路地裏から男の罵声が聞こえてくる

「なにかしら？」

「……、行ってみるか」

罵声が聞こえる方に駆ける静雄の後についてゆく美琴

すると、なにやら不良達に絡まれている一人のツンツン頭をした少年が目に入ってきた

「ふ、不幸だ……」

「なにそのガキ庇ってンだテメェ、大人しく金出せっつってんだろ」

そう、静雄達の目線の先には少年を庇う様に前に両手を広げて不良達の前に立ち塞がる上条当麻の姿

「あ、アイツ……」

「……」

すかさず静雄は上条達に絡んでいる不良達の元に足を進める

「な、なんだよテメェら、こんなつまんねぇ事して恥ずかしくねぇのか」

両手を広げて少年を庇い不良達を睨み付けている上条、

だが、不良達は全く聞く耳を持たず上条の胸ぐらを掴み上げる

「知るかよ退けテメ！！…退かねぇなら！！…」

不良の中の一人が横から鉄パイプを上げて上条に殴りかかろうとしたその時、

パシッ、という音と共に振り下された鉄パイプが何処から伸びた手によって止められた

「……」

上条の前に突如現れたその男は横から振り下ろした鉄パイプを握り締めたまま無言でそれを持っている不良に立ち塞がる

「だ、誰だよテメェ」

凄まじい威圧感に圧倒される不良達は顔を真っ青にしてジリジリと後ろへと後退る

そして、片手で静雄は目につけていたサングラスをゆっくりと外してギロリと不良達を睨み付け話し出す

「……なァオイ……」

張り詰める空気の中ドスの利いた低い声で不良達に迫る静雄……

「……テメェら俺のダチをコレで今、殴ろうとしたよなァ……」

その静雄の様子を見ていた美琴は、あ、ヤバい　と直感的に感じ思わず口に出し

そして何故か後ろにいた上条も冷や汗を掻いている

「……、えぇと静雄さん？」

思わず静雄に声を掛ける上条だが、今の静雄にその言葉は全く届か

ない

「クソ！！……びくともしねぇ」

不良の一人は慌てて鉄パイプを自身の手元に戻そうとするが静雄から握られたそれは全く動かない

「……コレで殴ろうとしたって事はよォ、テメェら下手したらコイツを殺す気だったて事だよなァオイ」

殺気の籠った声で一言一言話す静雄、そのどれもが後ろにいた上条に嫌な予感を感じさせた

「……ならよォ」

顔を段々と上げる静雄はもの凄い剣幕で不良達にゆっくりと口を開く

「テメェらがどうなったて構わねぇよなァ……あァ！！」

次の瞬間、バキィ！！という鈍い音と共に拳が顔面を捉えて殴り飛ばされる鉄パイプを持っていた不良

二回三回と回転するその身体は遥か彼方にあるビルの四階らへんまで吹き飛ばされる

そして、グショリ！！とグロテスクな音を立てて地面にへと叩き付けられた

「ひ、ヒィイイイイ！！」

その場で尻餅をついて悲鳴を上げる仲間の不良達

静雄はそんな不良達に対して殺気の籠った不気味な笑みを浮かべて崩さない

「……さぁてェ…」

続けて近くのガードレールを引き抜きだす静雄は殺気を込めた眼差しを真っ直ぐに残りの不良達に向ける

「死ねやコラ…」

「ぎゃあああああ」

引き抜いたガードレールを縦横無尽に振り回し不良達の顔面を次々と強打してゆく平和島静雄

そのガードレールを振り回す光景は凄まじいの一言に尽き、振り回されたガードレールで殴られて血塗れの顔面が変形してゆく不良達

真っ青にしてその光景に気づけば両手を合わせて黙祷している上条と御坂美琴

こうして、本日の静雄と御坂美琴の学園都市の街案内は何事もなく終わった

スキルアウト（浜面仕上）（前書き）

――更新したいと思います

スキルアウト（浜面仕上）

――辺りはすっかり暗くなり夜、

先程、静雄は不良達に絡まれていた上条達を助けて暴れた後、

静雄は学園都市の街を案内してくれた美琴と別れて無事にアイテムのアジトへ戻って来た訳だが……

「仕事だぁ？」

「そうよ、仕事よ、し・ご・と」

アジトに帰って来た途端に麦野からいきなりワゴン車の鍵を押しつけられる静雄

帰って間もなく、アイテムの仕事に駆り出されることとなった鍵を押しつける麦野の言葉に静雄は目を丸くしてその場で立ち尽くす

「超大変だけどがんばって下さい幽」

「頼むわねー」

「……ふぁいと」

明らかに疲れた表情を見せる静雄に偉そうにワゴン車に乗り込むフレンダと励ましの言葉を送る滝壺と絹旗

（……こうも人使いが荒ぇとはな……）

「早くしてよー時間ないんだから」

急かす様に手渡した鍵をジッと見詰める静雄に声を掛ける麦野

色々と不満が言いたい静雄だが、仮にもバイトで雇ってもらっている身である為麦野達にそんな文句は言えない

（……たくしょうがねーなぁ……）

諦めて素早くワゴン車に駆け寄り運転席の扉を開き中に乗り込む静雄

「……、んじゃ出すぞ……」

静雄は鍵を回してエンジンを点け、ワゴン車のハンドルを握り車を発進させる

――――――――

それからしばらくして、古びた感じのする廃工場の前で停まる静雄が運転する黒いワゴン車

目的地に辿り着いた麦野達は早速ワゴン車から降りて廃工場を見渡し、深いため息を吐く

「……たく冗談じゃ無いわよスキルアウトへの抗争の介入なんて面

倒たらありゃしないわ」

「まったくですねぇ、天下の暗部も超堕ちたもんです」

夜の月明かりに照らされている廃工場を見詰めて不満げな麦野の言葉に肯定的に頷く絹旗

「……んだと？たかが喧嘩の介入だぁ？どういう事だそりぁ？」

麦野達の会話に聞き耳を立てていた静雄は思わず青筋を立て二人に訊ねる

「……そうよたかが喧嘩の介入、情けないわよねぇ」

話を聞いていた静雄は段々と機嫌が悪くなり眉間にシワを寄せているわざわざ帰って来たのにも関わらずいきなり仕事に駆り出され、自分の疲労がピークな時にたかだか喧嘩の仲裁というふざけた仕事。

「麦野が言った通りよ、

あそこでスキルアウト同士の抗争があってて、それに介入するのがうちらの今回の仕事って訳よ」

機嫌が悪くなる一方の静雄に丁寧に説明を施すフレンダ、

――しかし、この時下らない事で駆り出された静雄のボルテージは最大限近くまで上っていた

「……それでよォ、そいつ等は何処に居るって……？」

「……ん、あそこ？」

怒りを露にして訊ねる静雄に麦野が指差す方は目の前の廃工場、

「……そうかよ、」

ゴキリ、ゴキリと首を鳴らして静雄は麦野達を差し置いて一人だけで廃工場へ向かい歩き出す

「……え？ちょっと幽！！……あんた何処に…」

「……あー無理だもう無理、
コロス、コロス、コロス、コロス、コロス、コロス、コロス、コロス、コロス、コロス、コロス、コロス、コロス、コロス、コロス、コロス、コロス、コロス」

麦野の言葉等には耳を傾けず、呪文の様にひたすら〝殺す〟という言葉を連呼し廃工場へと向かう静雄

「……え？ちょっと幽？何してるんですか？」

「ちょっと！！……待ちなさい何処行くのアンタ！？」

呼び止める絹旗に声を掛けて静雄制止しようとする麦野…、
しかしながら、静雄は一向に足を止めずにそのまま廃工場へと向かう

「……アレは幽？……」

「……な、なにか知らないけどガチギレモードって訳よ……」

この豹変した静雄の姿に驚きを隠せないアイテム一同はその背中を見つめる事しか出来なかった

そして、怒り狂う静雄は一人薄暗い廃工場へと足を踏み入れる

―――――――――――――

廃工場内部、そこでは拳を振るいスキルアウトを殴り飛ばしている二人の男

「……クソッタレ！！俺達二人だけかよ半蔵！！、……残りの奴等は！？」

「……どうやら、全員やられたみたいだぜ浜面……」

疲れきった身体を背中合わせで支えて辺りで自分達を囲む数多いスキルアウト達を睨み付ける二人、

服部半蔵と浜面仕上は至るところに傷を負いながらも拳を構えて肩

で息をしていた

「……クソ、あんだけの人数じゃやっぱり足りなかったつうことかよ…」

「……、今更何いってんだやるしかねェだろう」

息を切らして辺りを見渡し唇から出ている血を拭う浜面の言葉を遮り半蔵は拳を構えてスキルアウト達を見据える

「残りはどうやら、テメェらだけみてぇだなぁ、オイ」

「……とっとと殺っちまうか」

浜面と半蔵を完全に取り囲んでいるスキルアウト達はそれぞれの手持ちの鉄パイプを構える

辺りのスキルアウト達を見渡しふと、もう打開する手段がなく駄目だと浜面と半蔵が諦めかけたその時だった、

ドカーン!!　という凄まじい音と共に廃工場の壁がぶち壊され、そして、崩れる壁の向こう側から道路標識をもって現れる人影がひ

とつ……

「……な、なんだ!!テメェは!!」

突然の出来事に辺りは騒然として、破壊された壁へと目を向けるスキルアウト達が次々と声を上げる

「……い、一体なんだよ、誰だ?」

そして、声を上げる浜面に対して、その見覚えのある顔を見た半蔵は唖然としていた

「……な、なんでアイツが……」

半蔵はあまりの非現実的な光景を目の当たりにして声が上手く出ない

「……な、なんだアイツ知ってんのか半蔵!!」

「……知ってるも何も……」

半蔵は今の信じられない状況に浜面の質問に上手く答える事が出来ない

そう彼等の目の前に現れた男は池袋…、いや学園都市最狂の男――

そして、落ち着きを取り戻した半蔵はゆっくりとその男の名前を口に出す……

「へ、平和島…静…雄」

一言名前を口に出し自身の唾を呑み込み尻餅をつく半蔵

「……へ、平和島静雄だと……！！！！」

すると、その場にいたスキルアウト達は半蔵が呟いた名前を聞いた途端に一斉に悲鳴を上げて標識を持って現れた静雄から離れていく

「へ、平和島静雄？誰だよそれ」

すると、首を傾げている浜面の胸ぐらを掴み半蔵は慌てたように引き寄せる

「馬鹿かテメェ！！
…平和島静雄…って言ったらこの学園都市最狂の男って呼ばれてる奴だろうがぁ！！」

「は、はぁ？、学園都市！！…最狂…！！」

すると、半蔵の話を聞いていた浜面はハッ！と何かを思い出し段々と表情を真っ青にしていく

「…た、確かこの間、無能力者の筈なのにレベル５の第一位にいきなり君臨した男って…！」

「……そ、そうだ、しかもそれだけじゃねぇ…！！」

半蔵は現れた道路標識を片手に持つ静雄を見ながら浜面に話を続ける

「……お、俺は一回だけ池袋って狂った街に行った事があるってテメェに話したことあるよな」

「あ、あぁ……確かこの間、聞いたな」

池袋の街と言えばカラーギャングや暴走族、暴力団に首なしライダーなんてものが存在する、とんでもなくぶっ飛んでいる街だと前にそこへ行った事のある半蔵に浜面は聞かされた事があった

なのでカラーギャングや暴走族、暴力団が闊歩する池袋は学園都市のスキルアウト達から楽園と呼ばれよく知られている

「……その街の最強の男がそこに現れた平和島静雄だ……」

「……へ？」

浜面は説明する半蔵のまさかの言葉に唖然として言葉が出ない

すると、現れた平和島静雄はスキルアウト達に道路標識を片手に担いだままゆっくりと口を開き話始める

「……なぁオイ、
俺はな、暴力はキライなんだよ、嘘じゃねぇ」

静雄は担いだ道路標識を軽く振り回しながらスキルアウト達が後退りする廃工場へと足を踏み入れる

「……なぁだけどよォテメェら、たった二人になった奴等を袋叩きにしようなんてのはァ駄目だよなァオイ……」

そう言うと静雄は手持ちの道路標識でトントンと自身の肩を叩きつつ話を続ける

「……それに加えて、俺はいま最高に機嫌が悪ィンだよなァ、テメェらがこんな下らねぇことしやがるからよォ……俺はなァー」

標識を構える平和島静雄はビキビキと血管がはち切れんばかりの青筋を立てスキルアウト達を睨みそして……

「……、無駄な仕事が増えんだろうがコラぁぁぁぁぁ！！…」

ブォン！！という標識を振り回す素晴らしい破壊音と共に静雄の前方にいたスキルアウト達が一気にブッ飛んでいく

「「ぎゃあああああ！！」」

「待てやコラァ！！！」

道路標識を投げ捨てて逃げ惑うスキルアウト達に鉄拳を振るう静雄

ゴキィ！！と拳がめり込む音に伴い更に二人が上空に舞う

そう、それはもう人間や超能力というレベルを遥かに凌駕する圧倒的な力――

――完全なる暴力

スキルアウト達はそんな常人離れした静雄に恐怖し一目散に次々と廃工場から消えてゆく

だがしかし、逃げるスキルアウト達を怒り狂った静雄が逃がす訳が無い

「オラァ！！！…」

ガシャーン！！と音を立て近くにあった巨大なコンテナを持ち上げ構える平和島静雄

「死ねやァコラァ！！！！…」

「うぎゃあああああ！！！！…」

投げつけられたコンテナは見事にスキルアウト達を直撃、辺りに弾け飛ぶスキルアウト達の屍はボトリ、ボトリと力無く落下し地面に叩きつけられる

そして浜面と半蔵を残して、数分も経たない内に静雄によって殴り、蹴られ、吹き飛ばされて始末されてゆくスキルアウト達

この光景を目の当たりにしていた半蔵と浜面は背筋に電撃が走るような衝撃を感じた

「……つ、強ぇー……なんだよアレ喧嘩なんて生ぬるいもんじゃねぇよ、カッコ良すぎだろオイ……」

「……圧倒的だ勝てる気がしねぇ……」

すると、辺りのスキルアウト達を全滅させた静雄はゆっくりと浜面達に近づいてくる

「お、オイこっちに来るぞ半蔵！！……」

「……マジかよ」

二人はその場から逃げたいのは山々だがボロボロで体が上手く動かない

しかし、近づいてきた静雄からは予想外の言葉が二人に発せられる

「……おう大丈夫かよテメェら……」

流石に静雄の予想外な言葉に二人は目を丸くして驚きを隠せない

「……は、はい大丈夫ッス！！…」

浜面は近づいてきた静雄に思わず背筋を張って素早く頭を下げて言う

「……そ、そうかなら良かった」

静雄は浜面の反応に驚きつつも懐からタバコを取り出して話を続ける

「……アイツらテメェらこの人数だけで闘うなんて良い根性してるじゃねぇか……なんつーかカッコ良かったぜ……」

静雄の話を聞いていた浜面と半蔵は一気に顔を明るくして互いに笑い合う

「オイ！！…聞いたかよ！！…半蔵！！」

「馬鹿分かってるての！！」

浜面と半蔵はとても嬉しかった、

普段から能力者から見下されている二人にとって同じ無能力者でも最強の肩書きを持つこの男からの言葉は何故かは分からないが、ひたすら嬉しかった

「あの！！…平和島さん自分の事、覚えてますか？」

すると、興奮したようにタバコの煙を吐く静雄に詰め寄る半蔵

静雄は首を傾げ、詰め寄ってくる半蔵の顔を険しい表情を浮かべて考え込み思い出す

「……ってお前、あん時、門田達と一緒にいた――」

顔をジッと見詰め、しばらく考え込んだ後に鮮明に思い出した驚いた表情を浮かべて半蔵を指差す静雄

「はい！…服部半蔵です…」

「…思い出した思い出した、喧嘩とはまた随分と元気そうじゃねぇか」

「ハイ、でもまぁこの様なんですけどね」

静雄に照れ臭そうに後頭部を掻き、苦笑いを浮かべて答える半蔵、

すると、静雄は自身の左腕に着けている腕時計を見て慌てたように話し出す

「……おっと、そろそろ行かねぇとあいつ等が待ってるからな」

そう言うと踵を返してその場から立ち去ろうとする静雄

だが、半蔵の隣にいた傷だらけの浜面はそんな静雄に肩に手を掛けて呼び止める

「ま、待ってください静雄さん」

「あん？」

すかさず、静雄は肩に手を置いてその場に留める浜面の方へ素早く体を向ける

「……なんだよ」

「……俺達のリーダーになってくれませんか？」

「お、おい浜面！！…」

唐突な浜面の言葉に声を上げる半蔵、呼び止められた静雄も突然の言葉に目を丸くしている

だが、浜面から静雄にへと返ってきた返事は……

「……無理だな」

――断りの返事だった

浜面は静雄に詰め寄り激しく自分の頭を地面に叩きつけて再度お願いし出す

「頼む!!…静雄さん!…俺達スキルアウトは力が無いから超能力者たちから見下されて、しかも上からの汚ない仕事を押し付けられるどうしようも出来ないんだ、

でもアンタなら…、無能力者で第一位のアンタなら俺達の救世主になってくれる!!、

頼む静雄さん!!俺達はもうあんな事は……」

「……、お前ぇ」

浜面は涙目になりつつも必死になって静雄に頭を下げて頼み込み

その光景を見て唖然とする静雄

静雄は今まで自分の持っているこの力が嫌いだった……、だがこの街に来てからは少しづつだが、それもかわりつつはあった

「お願いだ!!静雄さん!!俺達に力を貸してくれ!」

けど、目の前の男、浜面は静雄の持っているその力を必要とし仲間

達の為に必死になって頭を下げている

これには静雄も断り浜面を突き放す事は出来なかった

「浜面もういい加減やめろ……平和島さんを巻き込むなんて……」

半蔵が静雄へと頭を必死に下げている浜面を起こすその時だった

目を閉じて何かを決心したように静雄はゆっくりと二人に話し出す

「……わかった」

「「……え」」

予想外な静雄の返答に思わず目を丸くして驚く二人

浜面は慌てて答える静雄に迫るように再度問い詰める

「……い、良いんですか静雄さん」

「あぁ…、だが条件がある」

静雄はそう言うと嬉しさのあまり表情を明るくしている浜面達に近づいて話を続ける

「……まずは俺の許可なく喧嘩はしない事、次に俺の言葉は絶対に守れ、そして最後は……」

一言一言ハッキリと忠告し静雄は一息ついてそして浜面達に最後に言い告げる

「漢として恥ずかしいことは決してすんな……以上だ」

真剣な眼差しで話を聞いていた浜面と半蔵は黙って頷き

静雄はそんな真剣な表情で頷く二人に微笑み目を瞑り踵を返す

「そう言う訳だ……、俺はひとまず帰るからじゃぁな」

そして、片手を挙げて静かにその場から立ち去る静雄

その大きな後ろ姿に浜面達二人は頭を下げて見送った

アイテム2（前書き）

――廃工場から戻った静雄は……、

アイテム2

ひとまずスキルアウトとの一悶着が終え廃工場から姿を現した静雄

「……どうしたの幽、随分遅かったみたいじゃない」

廃工場前のワゴン車で待っていた麦野は不機嫌そうに戻ってきた静雄に詰め寄り言う

「あぁ、悪ィちっとばかり話し合いがながびいちまってな……」

そう言って軽く頭を下げて麦野達に謝る静雄、

だが、待たされていた麦野達はどうやらそこまで怒っている様子は見られない、

どうやら自分達が下らない仕事をやらなくて済んだ事でむしろ喜んでいたようだった

「ふーん…、まぁいいわ、じぁ行きましょ」

（（あれだけ怒ってたのに話し合いだったんだ……））

そして、何事も無かった様にワゴン車に乗り込む麦野と事の不自然さに首を傾げている滝壺達

「よし行くか」

そして、ワゴン車の扉を開いて静雄は運転席に乗り込む

「それじゃお願いね」

しかし、どうも静雄に違和感を感じる滝壺達、

だがどちらにしろ無事に仕事も済み、あまり詮索しなくても問題無いと思ったのか静雄には誰一人として訊ねることはしなかった

「んじゃ行くぜ」

車のエンジンを点けてアクセルを踏み入れ車を丁寧に運転する静雄

麦野達の乗ったワゴン車はこうして再び学園都市の闇の中へと消えて行った

―――――――――

廃工場から立ち去りあれから数時間後、静雄達は無事にアジトへと辿り着き次々にワゴン車から降りる

「たく……しんどいたらありゃしねぇぜ」

疲れきった表情で愚痴を溢しワゴン車の鍵を抜いて扉から出る静雄

「ありがとねぇー幽ー」

「幽がいてくれて本当に超助かりましたよ」

（いやむしろ私達、今回何にもやって無いんだけどね）

お礼を述べ、ワゴン車から降りる絹旗の隣で苦笑いを浮かべ心の中

で呟くフレンダ

「……幽、有り難う……」

すると、深々と静雄の目の前で頭を下げてお礼を述べる滝壺

ワゴン車に寄り掛かる静雄は驚いた様子で頭を下げる滝壺に口を開き話し出す

「あ?…あぁ、どういたしまして」

(あ!!…また滝壺が幽に絡んでます!!)

お礼を述べる滝壺に微笑み答える静雄のやり取りにムスッとした表情を浮かべる絹旗

それからしばらくして、アジトのマンションへと戻り歩き出す一同、

ふと、静雄は今朝見た冷蔵庫の中身の事が頭の中を過る

(……そう言えば今朝冷蔵庫見たら、そろそろ食材がきれてくる頃だな)

瞬時に思い出した静雄はアジトへ進めていた足をピタリと止める

「テメェら悪ィ、そういやそろそろ食材買い込み行かねぇと駄目みてぇだわ」

軽く頭を下げてアイテムに謝りすかさず踵を返そうとする静雄

「あらそうなの？　なら私もついて行こうかしら」

その瞬間、その場にいた全員はエッ！と声を上げて目を丸くする

まさか、リーダーであるあのプライド高い麦野が買い出しに付き合うなんて珍しいその場にいた全員は全く予想もしていなかった

「な、なによ、なんか文句あんの？」

「「いやだって麦野が……」」

思いもよらない麦野の言葉に顔をひきつらせて話す絹旗とフレンダ

「私が何かにゃーん？」

麦野の出す凄まじい威圧感にいえ何も、と思わず視線を反らして答える絹旗と口笛を吹いて誤魔化すフレンダ

だが、そんな中静雄は珍しく買い出しに付き合うと宣言した麦野の顔をまじまじと見詰めていた

「な、何よ幽、アンタもなんかあるわけ？」

顔をまじまじと見詰めてくる静雄に眉間にシワを寄せて顔をしかめる麦野

「……いや……、珍しいな、テメェが買い出しについて来たがるなんてと思ってな」

険しい表情で睨んでくる麦野に嬉しそうに笑みを浮かべる静雄

「別に良いでしょー、気分転換にたまにはスーパーにでも行こうかと思っただけよ」

「そうかよ、……まぁでもその方が助かるぜ、ありがとな沈利」

不機嫌そうに話す麦野にお礼を述べる静雄、

すると、麦野は急に顔を真っ赤にしてその場にいた全員は驚いた様に次々と口を開く

「いや……、いきなり下の名前でいきなり呼ぶなんて思って無かったから…」

「……そ、そうですよ幽！！何麦野だけ超下の名前で呼んでるんですか！！」

「……ズルい……」

キーキー喚く絹旗にムクッと頬を膨らませ拗ねる滝壺

しかし、何故この二人が怒っているのか理解できない静雄は首を傾げてこう答える

「…いや、別にただ単に下の名前が呼びやすかっただけなんだけどな」

（鈍感って訳よ……）

静雄の無神経さに驚きつつも思わず顔をひきつらせ呆れたように自身の頭を掻くフレンダ

だが、絹旗と滝壺はやはり納得がいかないのか二人は静雄へと迫り次々に自身の要求を述べ始める

「なら、幽！！私も最愛って超呼んでください」

「…うん…私も理后がいい……」

迫り来る絹旗と滝壺二人に後退りキョトンとする静雄、

「っていいのか？」

「何言ってるんですか超当たり前ですよ！！むしろそう呼ばないと怒ります！！」

後退り訊ねる静雄の服を掴んでジッと睨みつける絹旗

そんな絹旗を見て麦野はふと笑みを溢す

（あら……、なんか絹旗が段々と大胆になってきたわね、最近）

そして、本格的に静雄に対し抱き着き強制的に呼ばせようとする絹旗

仕方無く静雄はこの二人の前に折れる

「あぁーわかったわかった……たく、じぁ最愛、いまから沈利と買い出しいくから離れろ、あと理后もだ」

静雄は抱きついて無理矢理要求を述べる二人を振りほどき麦野の手を引っ張る

「ち、ちょっと幽！！」

「……ンだよ早く買い出し行かなきゃ、飯が早く作れねぇだろうが」

ピタリと足を止める麦野に急かす様に話す静雄

「分かってるわよそう急かさないでって事よ」

そして、その後二人はワゴン車へ乗り込みスーパーへ向かった

―――――――

それからしばらくして、ワゴン車に乗り込んでアジトの近くにあるスーパーにやって来た二人

二人はとりあえず買い物かごに次々と食材を入れていく

「この鮭美味そう、これ追加ね、幽」

「お前これで鮭４つだぞ、いくらなんでも多いだろ」

塩鮭を嬉しそうに持って来て買い物かごに入れる麦野に呆れたように言う静雄

大量に色んな食材を買い込みに来た筈なのに静雄が持っている買い物かごにはまだ塩鮭しか入っていない

「良いじゃない堅いこと言わないの」

麦野はそう言うと買い物かごに入っている自身が入れた塩鮭を見て嬉しそうに笑う

（コイツ鮭を見るとめちゃくちゃ機嫌が良くなんだよなァ…）

買い物かごを見て上機嫌な麦野の反応にハァと頭を抑えてため息を吐く静雄、

それから、二人はいろいろと食品売り場を回り野菜や肉等を購入する、

今日は卵が偶然特売だったりしたせいかなかなか充実した買い出しができ、静雄が持っていた買い物かごは数分もしない内に一杯になっていた

そして、食品を一通り回った所で二人は買い物かごを確認する

「……さてとこれだけ買い込めばいいかな、行きましょう幽」

「おう、そうだな」

互いにそう言うと一杯になった買い物かごをレジへと持って行く二人

そして会計の順番が回り、お金を払い済ませるために財布を取り出す麦野

「……、あれ？」

だが、レジ前で自身のバックのポケットを探り慌てた様子の麦野

どうやら財布を忘れたらしく自身の持っているバックを開いて中身を確認している

「…あぁ良いって俺が出すから」

すると、その様子を見ていた静雄は自分の財布を出して麦野の肩を叩く

「……え？」

「これ位なら大した事ねぇよ」

麦野にそう言って財布を取り出し会計お金を払う静雄

「じぁ、お言葉に甘えて……」

「…オウ気にすんな」

静雄はそう言うと麦野に微笑み、持っていた財布からお金を取り出し会計をすませる

そして、会計を済ませた後にレジ袋に食材を詰めて大量に入った食材を易々と両手に持つ静雄

「今日も焼き鮭か」

「頼むわね幽」

嬉しそうに笑う麦野に静雄はハイハイと適当に返し食材をワゴン車に入れ運転席へと乗り込む

（……何やってんだろうな俺）

こうして無事に買い出しを終えた静雄達はワゴン車を運転してアジトへと戻った

親友（上条当麻）（前書き）

――禁書目録編始まります

親友（上条当麻）

御坂美琴の街案内、そしてアイテムの仕事から数日が経ち、ようやく学園都市にも馴染み始めた静雄

そんな静雄の耳に登校中の親友、上条当麻から信じられない言葉が飛び出した

「…あん？空から女が降って来ただぁ？……なんだよソレ」

「知らねぇよ！！俺だって、なんか魔術師とかなんとか言ってたような気がするけど」

それは学校へと登校中の話だった

訳の分からない奇妙な出来事を静雄へと報告する上条は、今朝の出来事を思い出し話す

「…なんつーか災難だなァテメェも」

「…そうなんだよ！！携帯は踏んづけて壊れるし、もう不幸だー！！！！」

隣で高々と「不幸」だと叫ぶ上条を見ていた静雄も今朝をふと思い返す……

いつも通りに朝目覚めた静雄の隣には必ずや絹旗と滝壺が腕に巻き付いていて動く事が出来ずそのまま朝飯を作る暇が無かったため、朝飯抜きの状態で飛び出してきた静雄……、

（…あークソ、アジトに帰ったらぜってぇ麦野と金髪に文句言われんぜ…）

叫ぶ上条と共に、アイテムの雑用である彼もある意味不幸だった

「なぁ静雄、人生ってなんだろうな……」

「…さぁな、お前にとっては不幸と混沌で出来たもんなんじゃねぇの？」

「…違いない」

静雄の返答に納得して頷く上条は深いため息をついている、今の彼を一言で表現するならただの生きる屍だ

「お二人さーん♪どうしたんだ？そんな深刻な顔してぇ」

「…土御門か」

「おう！おはよう土御門！」

登校中の覇気がない二人に声を掛けて駆けくる土御門、
そして挨拶を交わす二人の隣に加わり共に歩き出す

「…全くここ最近はろくなことが無かったな」

「まぁ、シズやんは第一位だからよく絡まれるのも仕方が無いこと

だ、諦めろ」

愚痴を溢す静雄にそう言うと肩にポンと手を置いて微笑む土御門

上条は愚痴を溢す静雄に左右に首を振り呆れたように呟き出す

「いやいや…、良いじゃねぇか静雄はさぁー、俺なんて追いかけ回されてばっかだぜチクショー！！」

うがー！！と声を張り上げる上条は叫び終えた後、ガクンと肩を落とす

すると、何かに気付いた静雄はしきりに辺りを見渡して土御門に訊ねる

「それにしても青ピはどうしたんだ？土御門」

普段から土御門といる欠けた残りの一人である青髪、珍しく今日は彼の姿が見えない

土御門は静雄に微笑み青髪について話し出す

「あー、アイツは、今日店の手伝いで学校を休むみたいだにゃー」

説明する土御門に「へぇ」と適当に返す上条に静雄

土御門は自身の持っていた腕時計を確認して何やら慌てたように二人に話し出す

「おっと、それより早くしないと遅刻だにゃー！急ぐぜ二人とも！」

土御門から言われ共に自身の持っていた腕時計を確認する上条と静雄の二人、

そして、二人は着けている時計を見た途端に「げっ」と声を上げ、顔を見合わせて全力で駆け出した

――――――――――

それから、全力疾走の甲斐あって何分かで学校に辿り着いた上条達は幼稚体型の小萌先生が現れる寸前ギリギリの所で自分達の席にそれぞれ着く

「はーい席に着くのですよー」

――夏休みの補習、

もともと既に夏休みに入り、普通なら学校には通わなくても良かった筈の静雄だが、
彼はアイテムの仕事やスキルアウトの浜面達とつるんでいたために学園都市第一位にも関わらず出席日数が足りないということで、上条達と共に補習を受けるハメになってしまっていた

（……大して楽じゃねぇな第一位なんて）

土御門助言のバイトのせいでまさかの本末転倒、嫌気が差した静雄は思わずため息を吐く外を眺める

「先生ーすいませーん！静雄君が外にいる女子テニス部を眺めていまーす」

「あん？」

手を挙げて大声を張り上げる土御門の言葉に素早く教室へと振り返る静雄、

しかし、振り返った目の先には涙目をした小萌先生

だが、静雄は極めて冷静にため息を吐き自分の机にあるプリントをヒラヒラと小萌に見せびらかす

「ったく……心配しなくても先生の授業なら聞いてるぜホラ……」

「「なんだと！！」」

「……ンだその驚き方は！コラ！！」

目を丸くする土御門と隣で驚いた表情を浮かべて声を上げる上条に青筋を立て怒鳴り席から立ち上がる静雄

そして、三人の間で乱闘が始まり上条と土御門が静雄に一方的に投げ飛ばされる

「ちょっと上条ちゃん達！！先生の補習中に暴れないでくださーい！！」

こうして小萌先生の声高な声と共に上条と静雄達の補習は賑やかに終わった

―――――――

あの三人の乱闘で小萌の授業が崩壊し終了したその放課後、

「静雄！たまには俺の家に来てみないか？」

「…あん？ンだよ急に気色わりィ……」

土御門と別れた帰り道で共に帰っていた上条から急に家に誘われる静雄

静雄は流石に突然、自分の家に誘う上条の言葉に違和感を感じ思わず顔をひきつらせる

「気色悪いはないだろ！！…上条さん的には友人と友情を深めようとだな！！」

「あー、分かった分かった…」

大声を出し反論する上条に手をヒラヒラさせて適当に返す静雄

「……それじゃお邪魔するかな」

「流石は第一位！！…そうこなきゃな！！……つっても出せる食べ物とかねぇんだよなぁ」

自宅にある冷蔵庫の中身を思い出してがっくりと肩を落とす上条

すると静雄はそんな上条の肩を叩き励ます様に口を開き話し出す

「心配すんな、特別に俺が作ってやるよ」

「え！！…まさか静雄に家庭的スキル搭載とは上条さんも流石に予想外だ……」

「……テメェまたぶっ飛ばされたいのか？」

自分が料理をする事に驚いている上条にカチンと青筋を立てる静雄

青筋を立てる静雄の様子を見て慌てて弁解し出す上条

「冗談ですよー冗談～！静雄の作った料理と言うのを是非とも食べて見たいですハイ」

「……いやあんま期待されっと、なんか逆にプレッシャーかかんな」

静雄と上条はそんなたわいの無い会話をしつつ嬉しそうに互いに笑い合う、

静雄にとって、学園都市に来て以来、始めて出来た唯一無二の親友、毎日の土御門と青髪との馬鹿騒ぎや能力査定の時には一緒に喜んでくれた上条

「いやぁ今日の晩飯が楽しみだー」

「……馬鹿、だから期待しすぎだってのお前」

静雄は隣で鼻歌を歌い出す上条をみてふと、初めて会った事を思い返す

「……1ヶ月か」

「……ん？」

夕焼けで赤く染まった空を見て呟く静雄の言葉に首を傾げる上条、

静雄はそんな首を傾げる上条に話を続ける

「いや、俺がここに来てもう1ヶ月たったんだなって…、思ってよ」

そう言うと隣にいる上条にへと話し微笑み目を閉じる静雄

最初は馴染めないと思っていたこの街、

そんな街で静雄には共に笑い合い、殴り合う親友が三人も出来た

そんな、今の環境をくれた上条達に静雄は心の底からこう思った

「……テメェらに会えて良かったぜ上条」

「何言ってんだ、俺達だって静雄に会えてとても毎日がまた楽しいぜ」

そう言って互いに臭いセリフを言った二人は互いに腹を抱えて高々に笑い合う

「ハハハ！！……駄目だ！柄にもねぇ事言うもんじゃねぇな、自分で言ってて気色悪ィ」

「…プフフ！！全くだ、あー腹いてぇ！！」

そして、笑い合いながら上条の家のある寮の前に辿り着く二人

「お、着いたみてぇだな」

「……いやー笑った笑った」

笑いすぎで出た涙を拭い辿り着いた寮へと足を踏み入れる上条

そして、寮の中へと先導する上条の後ろから静雄はついていく

（……やっぱりコイツは俺にとって最高の親友だな……）

エレベーターへと乗り込む上条の背中を見てふと笑みを溢す静雄

―…刻一刻と運命の少女との出来事が彼等の前に迫りつつあった

禁書目録（前書き）

――では更新したいと思います

――それは上条当麻の家の前での出来事だった

笑い合いながら会話をしていた静雄と上条は開いた扉から一本道の通路へと足を踏み出しエレベーターから降りる

「ハハハ…、ん？」

話をして笑っていた上条は通路の先に見える清掃ロボ達の群れに首を傾げピタリと笑うのを止める

「……オイ、なんだよありゃ」

「さぁ知らねぇよ」

遠くにいて何故、自分の家の前に清掃ロボがあんなにウヨウヨといるのか訳がわからない上条当麻

だが彼は、次第に自身の家の近くに近付くにつれて顔を真っ青にしてゆく

「…！これって」

大量に何かに群がる清掃ロボに向かい慌てて駆け出す上条

「お、おい…、どうしたんだ？」

血相を変えて清掃ロボの群れに向かい駆ける上条に訊ねる静雄

後ろからゆっくりと来た静雄は駆けた上条が必死で引き剥がしている清掃ロボを軽々しくはね除ける

大量にはね除けられた清掃ロボの中から姿を現したのは――

「…！何だよこりぁ！！」

背中から物凄い大量の血を流して倒れている銀髪の少女の姿…

目の前にある悲惨な光景に自分の拳を握りしめる上条

「……誰が一体こんな、」

「うん、僕達魔術師だけど？」

いつの間にか二人の背後から現れる、赤い髪の毛に神父のような服を身に纏う青年……

「……あん？誰だテメェ」

「おっと失礼、名乗るのを忘れてたよ僕の名はステイル、君達の傍で血だらけで倒れている禁書目録と同じ魔術師さ」

赤い髪の青年は口にくわえているタバコを吹かして、目の前にいる上条達に名前を名乗る

「おい…、静雄、血が……」

必死で少女の傷口を抑えて出血を止めて眉間にシワを寄せいる静雄に声を掛ける上条

これ以上、無駄な時間を掛ければ間違いない目の前にいるこの少女の命が消えてしまう

「悪いなエセ神父、こっちはテメェ馬鹿みたいな話を長々と聞くつもりはねぇ、そこを退きやがれ、……おい上条、その娘病院へ運ぶぞ」

静雄はそう言うと出血を抑えてる上条に禁書目録を運ぶように促す

「そいつは困るねぇ、僕はソレの回収に来たんだよ邪魔しないでくれるかな?」

「…ソレ?だと?」

ステイルの聞き捨てならない言葉に青筋を立てて聞き返す静雄…

「そうだよ、十万三千冊の魔道書を保有するソレさ」

ステイルはそう言うと大量に血を流して倒れている禁書目録を指差して静雄に言う

「……テメェらがこんな酷い……」

「オイオイ、勘違いしてもらっちゃ困るね、神裂もまさかこんな風になるなんて思って無かったんだよ、なんらかの拍子でソレにかかっていた防御魔術が破壊されてたんだから」

口にくわえたタバコの煙を吐き出しつつ、血塗れで横たわっている銀髪の少女を指差し上条達に話すステイル

だが、そんなステイルに対して静雄は怒りのあまり自身の拳を握り締め、静雄は自身が掛けていたサングラスをゆっくりと外す

「……何が違う？」

「……？なんだい急に？」

急に青筋を立て目の前に立ち塞がるサングラスを外す静雄にステイルは首を傾げて訊ねる

「……勘違いもクソもねぇだろ、テメェらはコイツを追い詰めて結果的に傷つけてこんな風にしたんだろうが……」

「……静雄、」

ステイルの目の前に立ち塞がる金髪の男は更に自身の拳を強く握りしめる

「だから十万三千冊の……」

「関係ねぇな、そんなこと……俺等の傍で倒れているコイツはただの女の子だ十万三千冊の魔道書だろうがなんだろうが生きてる事には代わりねぇ、それを脅かす権利なんてテメェらにはねぇんだよどんな理由を並べてもなぁ……」

静雄のその言葉を聞いていた上条も立ち上がり静雄の言葉に強く自分の拳を握りしめて立ち上がりゆっくりと口を開き話始める

「……そうだ、テメェらが幾ら理由を並べてもこんな女の子を傷つけて追い詰める権利なんて無い……、もし、そんな下らない権利なんてものがあるんなら……」

「……そんなくだねぇ理由を並べるような輩はなぁ、この俺が……」

二人は互いに強く握りしめた拳を保ったまま立ち上がり、

一息入れて目の前にいる神父を睨み付けに同時に口を開き叫ぶ

「「ぶち殺す！！」」

言葉を発し、拳をつき出す上条に自分の拳で軽く小突き互いに同時に頷く静雄

「……さぁて今からは一方的にテメェをブチのめしてしまいだ、どけクソ野郎」

「これはこれは、君達は愚かだね本当に」

余裕の表情を浮かべているステイルはそう言うと手の平に炎を集めて吸っていたタバコを吐き捨てる

「……巨人に苦痛の贈り物ー！！！」

紅蓮の様にステイルの右手から炎が舞い上がり、手のひらで収縮され上条達に向かい放たれる

凄まじい音を立てて目の前で銀髪の少女を守る静雄と上条に襲いかかるステイルから放たれた紅蓮の炎

「……させるか！！」

だが、咄嗟に静雄と銀髪の少女の前に立ち塞がった上条がなぎ払うように難なくその炎を打ち消し消滅させる

「……何だと！！」

一瞬にして自分の魔術が立ち塞がった上条に消し飛ばされた事に驚きを隠せないステイル

上条はひとまず炎を打ち消した右手を見詰めて胸を撫で下ろす

「良かった…魔術にも一応作用すんだな」

「やるじゃねぇかテメェ」

胸を撫で下ろす上条を右手を見て何かを確信したように笑みを溢すステイル

「……成る程ねぇ、君がソレの防御魔術を破壊したんだね、今確信したよ」

すると、静雄達の前にいるステイルは懐からカードの様な物を取り出し呪文のような物を唱え出す

急に場の空気が一気に変わり、笑みを溢すステイル

そして、一体の巨大な炎を纏う巨人が上条達の前に姿を現した

「魔女狩りの王イノケンティウス、『その意味は必ず殺す』」

紅蓮の炎に包まれたその巨人の光景に思わず身構える上条、

巨人の周りからも何やら燃え散る様な音と焦げ臭い匂いが辺りを漂う、

この魔術師を名乗る男が本格的に自分の力を出し始めた事を上条に

感じさせた

だが、そんな中、静雄は平然とした様子で制服のポケットに手を突っ込んだまま燃え盛るその巨人へと何事もなく近付いてゆく

静雄の信じられない行動に思わず声を掛け始めるステイル

「ちょっと何をしようとしているんだい？焼け死ぬよ君？」

炎の巨人に何事もなく近付く静雄はステイルの忠告を全く聞おらずその足を止めようとはしない

そして、その炎の巨人にある程度近付いた静雄はふぅ、と一息入れて首の骨をゴキリ鳴らす

次の瞬間、凄まじい勢いで振り上げられる静雄の右足

「…邪魔だぁコラァァ！！」

響き渡るような怒号と共に振り下ろされ豪快に放たれた静雄の蹴りがバチィ！！と音を立てて炎の巨人の顔面に直撃する

この信じられない光景に目を丸くする魔術師ステイル

それと同時に上条達の前に立ちはだかった炎の巨人はドカーン！！という凄まじい音を立てた跡形もなく吹き飛ばされた

「何ィ！！馬鹿な！」

目の前で起こった炎の巨人が生身の人間の蹴り一つで吹き飛ばされた出来事に驚きを隠せないステイル、

しかし、驚いたのもつかの間、

既にステイルの胸ぐらを先程、炎の巨人を何事もなく蹴り飛ばした静雄はしっかりと両手で握っていた

「さぁて…テメェをひとまずぶっ飛ばすか」

「……は、な、なん……グボォ！！」

胸ぐらを掴まれたステイルの右頬にバキィ！！と凄まじい音を立てて静雄が振り下ろした拳が突き刺さる

顔面を捉えた拳はそのままステイルの身体を吹き飛ばし、竹トンボの様に回転

身体を壁に叩きつけられたステイルは巨大なクレーターを作り上げ力無くその場に倒れた

ステイルを殴り飛ばした拳を緩めて横に下ろし、上条へと振り返る静雄

「……行くぞ」

「あ、あぁ」

一瞬の出来事に頭が働かない上条は静雄から放たれた言葉にひたすら頷き答え、

倒れている血塗れの銀髪の少女を背負い静雄と共に自分の家を後にした

――――――――――

自宅からしばらく走って数分後、

身元がわからない少女を病院に直接運ぶのはあまり良くないと話し合った上条と静雄の二人

その結果、上条は傷ついた銀髪の少女を担いだまま小萌先生の自宅

にお邪魔する事になり、

とりあえずなんだかんだで、小萌先生のお陰により禁書目録と呼ばれる傷ついた少女は彼女のお陰でひとまず一命をとり止めた

そして、一段落ついて小萌の家の前で話し合っている上条と静雄の二人

「悪いな上条、うちの奴等が心配しやがるから俺はそろそろ帰るわ…」

「いやこっちこそ、色々と巻き込んじまってごめんな静雄」

申し訳なさそうに話す上条の言葉に左右に首を振る静雄、

「…何言ってんだ親友を助けるのに理由なんてねぇだろ」

「……有り難うな」

微笑み何事もないように話す静雄にお礼を述べる上条、

すると、静雄は電気が点いている小萌の家を見詰めて上条に話を続

ける

「上条、あの娘……」

「心配しなくても大丈夫だ、俺が必ず助けきってみせる」

上条の自信に満ち溢れた返答を聞き「そうかよ」と呟き安心した様に笑みを溢す静雄

「それじゃ、助けがいるときは呼んでくれじゃあな…」

「あぁじゃあな静雄!!」

上条は笑い勢いよく手を振り合いながら軽く右手を挙げてそれに応える静雄とこうして別れる

これが、禁書目録と上条、静雄との出会いだった

聖人（前書き）

——聖人対平和島静雄

聖人

――昨日の魔術師が襲撃してきた出来事から1日がたった朝、

「あー…クソ、……ンだよコレは」

自分のベッドを見渡して頭を抑え立ち尽くしている静雄

……目の前にある自分のベッドが滝壺と絹旗に完全に制圧されてしまっている

「新手の嫌がらせか…コレは……」

仕方なく起き上がり早速、静雄は台所で何となく麦野達の朝食を作り出す

（……慣れきて、もう朝飯作んのが日課になってきやがったな）

台所にいる静雄はそんなことを思いつつも、ため息を吐き黙々と朝食を作る

一生懸命作った味噌汁や塩鮭に白米が出来上がったものラップにくるんでリビングのテーブルに並べる静雄

（まぁ、こんなもんだろ、あとは……）

静雄は筆記で書いたメモ帳の置き書きをリビングの朝食が囲んでいる机の上にそっと置く

（……、晩飯までには帰れっかな）

そして、静雄は玄関の扉を開けて何処かへと出掛けて行った……

―――――――――

アイテムのアジトから出てそれから数分後、

「おい上条？いんのか？」

小萌の家を訪れる静雄は玄関を叩き大声を上げてその中にいるであ

ろう上条に声を掛ける

すると、それからしばらくしてガチャと玄関がゆっくりと開いて中からツンツン頭の上条当麻が顔を出した

「おー…！静雄じゃねぇか、どうしたんだ？」

「いや、心配で立ち寄っただけだ、あの娘はどうしてんだ？」

訪ねてくる静雄の質問に急にがっくりと肩を落とし出す上条

「元気過ぎて困りますよ、全く……」

「……そうかよ、」

不満そうに呟き疲れきった表情を浮かべる上条に思わず静雄は笑みを溢す

「そういや上条、これ、あの娘に見舞品だ、勿論、テメェの分もな」

そう言うと小萌の家に来る途中で購入した袋に入れた果物を上条に手渡す静雄

「お！！さんきゅーな静雄、助かるぜ」

袋を見て中身を確認した上条は大喜びし静雄に笑顔でお礼を述べる

――すると静雄のポケットから鳴り響く携帯電話の着信音

「……ちょい悪い」

「あぁ気にすんな」

上条の言葉に頷いて静雄は携帯電話を手にとり、

しばらくして、電話をしていた相手と話しを終えた静雄は携帯電話を切る

「悪ィ上条、今から研究所に呼び出し食らっちまったからもう行くわ」

静雄から自分の力の詳しい測定か何かだろうと話を聞き納得したように頷く上条

「…あぁ、なんか悪いな色々と」

「…気にすんなよじゃあな、しっかりあの娘守れよ上条」

二人は互いにそう言うと、話を終えた静雄は踵を返しその場から立ち去った

――――――――――

研究所から呼び出しがあったその日の夜の帰り道、

研究所から面倒そうに帰る静雄は、今日のアイテムに出す晩飯のメニューを考えていた

「鮭ねぇ…、魚っつたら刺身か塩焼、煮付けが当たり前だけどなァ……」

ふと、麦野達に出す夕飯のメニューを真剣に考え歩きながら呟く静雄、

「……ん？」

すると、何かを直感的に感じた、静雄は急にピタッと足を止める

「……ンだぁ？」

気付けば静雄の周りに人は一人もおらず、それどころか気配すらない

「……ステイルが人払いのルーンを刻んでいるだけですよ」

その瞬間、静雄の背後から聞こえてくる女性の声、

振り返ると黒髪を束ねて、格好はTシャツに片脚だけ大胆に切ったジーンズという、まぁ普通の範囲の服装ではあったもののかなり大胆な格好の女性の姿がそこにはあった

「神裂火織と申します」

――…神裂、

名前を聞いた途端ふと感じた、聞いた事のあるその名前、

確か、あの小さな銀髪の少女を傷つけたのはこの女だとステイルと

いう魔術師が言っていた事を静雄は思い出す

「それでェ？その神裂が俺に何のようだ？」

名前を聞いた途端にサングラスを外し、ピクッと青筋を立てて神裂に言う静雄

「……貴方があの池袋最強を誇る平和島静雄ですか、成る程、流石にステイルが一瞬でやられたのも頷けます」

「……」

黙って神裂を睨み付ける静雄、

しかしながら、その顔は神裂に対する怒りで満ち溢れていた

「……それで？用件はなんだ？」

静雄は怒りの込った低い声でギロリと神裂を睨み付け訊ねる

だが、臆する事なく静雄に対して冷静な口調で話し出す神裂

「率直に言いますと禁書目録を我々に――」

「――断る」

即答で冷静に話す神裂に返す静雄は睨み付けたまま話をし始める

「……テメェがあの娘を斬ったんだな？」

トーンが低いドスの聞いた声で神裂に話す静雄

その場の空気は張りつめて、シーンと静まり返っている

「……テメェらクソ野郎共は、いちいち保護とやらをすんのに刀やらで女の子を斬りつけンのか？
別にやり方があったんじゃねぇのかよオイ……」

相変わらず静雄は睨みを利かせたまま、前方で禁書目録を要求してくる神裂に言い放つ

「防御術式とやらが発生してろうがしていまいが関係ねぇんだよ、女の子一人を追い回して何が楽しいんだテメェらは」

神裂を真っ直ぐに見据えて話す静雄、

「――っせぇんだよど素人が！！」

話す静雄に対し、それを遮断し急に溜め込んでいた怒り露にする神裂。

冷静だった神裂の豹変振りに少しだけ驚く静雄は怒りを露にする神裂の話に黙って耳を傾ける

「貴方に何がわかるんですか？ステイルが私がどんな思いだったか？あの娘の友達だった私達の思いが貴方にわかりますか！！」

その場を切り裂く様な神裂のその怒号を黙って聞く静雄、

「――あの娘は、記憶が無いんですよ……――」

「……何？なんだよそりゃ…」

神裂発せられた一言を聞いて目を見開き驚きが隠せない静雄

「……そうしないとあの娘の頭がパンクして死んでしまうんです、だから私達が一年周期で記憶を消していたんですよ……」

前に立っている静雄から目線を反らして説明をし始める神裂、
しかし、それを聞いていた静雄の反応は神裂が思っていたのとは違っていた

「――なら尚更駄目じゃねぇのか？」

静雄は説明をしてくる神裂に淡々と話を続ける

「大事な親友ならなァテメェらにとってかけがえのないものじゃねぇのか？
なんで傷つけてまで記憶を奪う必要がある、ダチだってならテメェの身体張ってでも守るのが筋じゃねぇのか？」

静雄の言葉に沈黙して耳を傾ける神裂は俯いて拳を握り締める

「――やってることが全部逆だろうが、
そいつは親友とは呼ばねぇんだよ」

その瞬間、静雄はゴキリと首の骨を鳴らして拳を握りしめる神裂を睨む

「やはり相容れませんか……せめて魔法名だけは…」

「生憎、俺は女を殴り飛ばす趣味はねぇ…」

静雄はそう言うとゆっくりと拳を握り締める

こうして、聖人と池袋最強との決戦の火蓋が切って落とされるのだった

咆哮搏撃（前書き）

――神裂火織対平和島静雄、決着

咆哮搏撃

――薄暗い夜の学園都市で対峙する二つの人影……

静雄の前で立ち塞がる神裂火織は自分の持っている刀にへと手を掛ける

「……ではいかせてもらいます」

刀を手に取る神裂はピタリと動きを止め何かを唱える様に呟く

――七閃

瞬間、凄まじい勢いで何かが静雄の横を通り過ぎる。

そして、後方にあったであろう風力発電のプロペラは切断され、ガシャーン！！と物凄い音を立てて落下する

「……」

しかしながら、通過した攻撃に全く動じない静雄、

それどころか自身の懐からタバコを取り出し、口にくわえライターで火を付ける

そして、煙を吐き出し、一服した後にゆっくりと神裂に話し出す静雄

「大道芸人かなんかかよ、つまんねぇなァ……」

「驚きですね……、あの七閃を見て動揺しないなんて……」

静雄はタバコを地面へ吐き捨て刀に手を掛けている神裂の刀を黙って見詰める

「ならば次は当てます！！」

そして、神裂から再び放たれ一直線に静雄へと凄まじい風圧と音を立てて向かってゆく七閃

亀裂が走り地面を引き剥がしていくその一撃

「だぁかぁらぁ…」

すると、何故か向かってくる七閃に対して逆に走り突撃し始める静雄

「つまんねぇつってんだろぉがコラァァァ！！」

自分の両腕を素早く突き出し、静雄は何かを素手で捉える様に鷲掴みにする

「何……！！」

信じられない前方にいる静雄の行動に目を見開き驚く神裂

よく見ると目の前で両手を握りしめている静雄は目に見えない様な何か細い物を掴んでいる

――…ワイヤー

そう静雄は神裂から放たれた七閃の攻撃を起こしていた原因
自分に向かい飛んできたワイヤーを素手で掴んでいた

「ざけてんじゃねェぞ！！」

ビキィと音を立てて素手で掴んだそのワイヤーを易々と引きちぎる
静雄

目の前で静雄からワイヤーを引きちぎられた神裂は唖然と立ち尽くす

「……え？」

このワイヤーは人間が素手で引きちぎれるような代物ではない

その前に自分に向かい飛んでくるワイヤーを素手で掴む事自体そもそもできる筈が無い

（こ、この男は――）

一瞬、自分自身の背筋が凍りつくのを感じる神裂、

だが、ここまできて後に退くわけにはいかない、

神裂は自分の持っていた刀を鞘に入れたまま構える

「どうやら肉弾戦ですね」

「……あ？」

次の瞬間、神裂は静雄との間合いを一瞬で詰め、身体を反転し信じられないスピードで顔面に向かい凄まじい蹴りを放つ

しかしながら、そんないきなりの攻撃にも関わらず易々と片手で止める静雄

「……な！！」

攻撃を防がれた神裂は驚きつつも蹴りから次の攻撃体制に既に移る

「これなら！！……」

次は拳を握り締めてそれを放ち、更に連携して再び蹴り技を繰り出す神裂、

だが、どれも目の前にいる静雄には当たらず虚しく空を切る

（攻撃が……、当たらない！！）

神裂は戸惑いが隠せず攻撃を避け、上体を反らしている静雄に視点を合わせる

だが、しかし視点を合わせていた筈のその姿は神裂の前から消える

（……なに！！）

突然、目の前から姿が消えた静雄に驚きが隠せない神裂

静雄の姿を見失った神裂は慌てて、左右に首を振り辺りを見渡す
だが、探していた静雄の声は左右を見渡すそんな神裂の真下から聞こえてきた

「悪い……」

そう言うと辺りを見渡して油断していた神裂との間合いを更に詰める静雄

「オラァァ!!」

次の瞬間、バキバキ!!　と凄まじい音を立てて神裂の鳩尾に静雄の拳が入り神裂の身体は宙に浮き上がる

「……グハァ!!」

信じられない衝撃が体を伝い、神裂の意識を一瞬で寸断するその一撃

しばらくして、音を立てて倒れた神裂はケホケホと咳き込み息苦しい表情を浮かべて両手を地面につけて伏す

（一体何が……）

自分自身が地面に伏している状況に理解が出来ない神裂

すると、静雄はそんな苦しそうに地面に伏す神裂を見て目線を反らし呟き出す

「……やっぱ駄目だ、女を殴んのは力が入んねェ」

神裂はその言葉を聞いた途端に頭の中が真っ白になった

（……手加減！！あ…、あれで……？）

神裂は頭を掻いて自分から目線を反らしている静雄を見上げる

「ホラよ…立てって」

静雄は頭を掻き視線を反らしたまま倒れている神裂に手を差し伸べる

「……テメェらの話を聞かせろ」

差し伸べられた手を握って立ち上がる腹部を抑えて立ち上がる神裂

「……変わってますね敵に手を差し伸べるなんて」

咳き込み立ち上がる神裂は静雄に背中を擦られる

（あー…、やっちまった）

正直、この女性と戦った静雄の心境的にはとりあえず女性に手を挙げてしまった自分への罪悪感で一杯だった

ある程度、呼吸が戻って来た神裂はゆっくりと自分の背中を擦っている静雄へと話し出す

「……あの娘には」

「あん？」

腹部を抑えてポツリポツリと話し出す神裂に耳を傾ける静雄

「……あの娘には笑っていて欲しいんです……だけど、幾らがんばっても助け出す方法が見付からなかったんですよ」

静雄に銀髪の少女の事を話す神裂は悲しげな表情を浮かべていた、静雄はその神裂の今の心情が少しだけ理解できたのか分からないが、話の中で彼女達がいままで、どれぐらい辛い思いをしてきたかはなんと無く察する事は出来た

「……、そうかよ」

すると静雄は悲しげな表情を浮かべていた神裂の頭にポンと頭に一回だけ手を置いて立ち上がり話し出す

「……テメェらにもテメェらなりの事情があったんだな」

自分から視線を外す神裂に自分の背を向ける静雄

「……ならよォ、そんなに辛いんならテメェらが他人に助けを求めても良いと思うぜ俺は……、テメェらだけで解決出来ねぇなら他人に頼って力を貸して貰え」

「……ッしかし！！」

反論しようと勢いよく立ち上がる神裂、

だが、そんな神裂の視点の先には自分の拳を握りしめ、突き出す静雄の姿

「……俺達がいんだろうが」

静雄の自信に満ち溢れた表情と言葉に唖然とする神裂、

しかし、何故かは分からないが神裂は拳を突き出すこの自信に満ちた男の言葉に微かな希望を感じる事が出来た

そして、神裂はその言葉に微かな笑みを溢し、真剣な表情で目の前にいる静雄に話し出す

「……後3日です」

真っ直ぐに自分を見詰め話す神裂の言葉に首を傾げる静雄

「……3日後に記憶を奪わなければ彼女は死んでしまいます」

「……タイムリミットまでか」

確認する静雄の言葉に神裂は真剣な表情で黙って頷く

そして、緩めていた拳を再び強く握りしめて微笑む静雄

「……面白れェ」

「私も出来るだけ力になりますだからあの娘を……」

「あぁ、わかってる心配すんじゃねぇ」

頼み見込み頭を下げる神裂に当然の如く答える静雄

「テメェらのダチを必ず助けきってやるよ絶対になァ……」

心に決めた言葉、静雄は銀髪の少女の為、彼女を思う親友の為を助けるためこうして立ち上がる

静雄と聖人、神裂は銀髪の少女、禁書目録を助けるべく手を組んだ

勇往邁進（前書き）

——更新と訂正（笑）

神裂火織の襲撃から1日が立った後、

アイテムの雑用である静雄はエプロンを着用し食器の皿洗いをしながら様々な事を推理、整頓し、
とりあえず今ある状況を確認していた

（……あと2日で記憶の詰め込みで脳がパンクする、か）

神裂の言葉とあの銀髪の少女事が頭を過る静雄

あれだけ昨日堂々と宣言したものの、その突破口がイマイチ見当たらない

「幽ー…、手伝おうか？」

すると、険しい表情を浮かべて食器を洗っていた静雄に隣から微笑み台所に現れる滝壺

「…あ、あぁ悪いな」

静雄は急に横から現れた驚きつつも手伝う滝壺にお礼を述べて微笑み、洗剤がついているスポンジとまだ洗っていない食器を手渡す

「…？、幽元気ないよ？なにか考え事」

「あぁ、ちょっとな、知り合いが脳の病気でよ」

考え込む静雄は深刻な顔つきで皿を洗い流し訊ねる滝壺に答える

「…それでどんな病気なの？」

隣で皿を拭いている滝壺は首を傾げて深刻な表情を浮かべる静雄に更に詮索する様に訊ねる

「あぁ、なんでも完全記憶能力ってやつのせいで記憶の詰め込みで脳が破裂する病気らしいんだ」

「……？？」

静雄の言葉に首を傾げる滝壺は左右に首を振りゆっくりと口を開き話し出す

「……幽、そんなあり得ない病気はないよ」

洗い終わった皿を置いて何気なく答える滝壺に思わず目を見開く静雄

「？…、どういう事だ？」

滝壺の言っている事に訳が分からず首を傾げて訊ねる静雄

すると、滝壺はそんな静雄に対して優しく微笑み丁寧に説明し始める

「……脳は幾ら記憶してもパンクなんてしないんだよ、

この間さ、テレビでやってたんだけど人の記憶って別々の頭にある容れ物があって百四十年分の記憶が可能らしいって……

…私も一応、能力者だから脳医学についてもちょっとだけかじった事があるから多分それは――」

この瞬間、静雄の頭に何かが過り

言葉を区切る滝壺の双肩をバシ！！　と音を立てて思いっきり両手で掴み迫る静雄

「――脳医学上あり得ねぇつう事か！！」

急に双肩を掴まれた滝壺は目を見開き驚きつつも迫る静雄に頷く

この言葉により微かに静雄の目の前に広がる突破口

（と言う事はァ！！脳がパンクする病気じゃねぇ……これはまた別の…）

確信を得た静雄は咄嗟に携帯電話を取り出して上条へと慌てて電話を掛ける

『静雄か？』

しばらくして、電話に出た上条は何故か疲れきった声で静雄の携帯に出る

「上条か！今何処だ！！」

『まだ小萌先生の家だけど、今、禁書目録の容体が……』

元気のない上条が出した名前を聞いた静雄は瞬時にあの銀髪の少女の事だと理解し、電話越しに上条と話す

「上条、テメェも話を聞いたのか？」

『……あ、あぁ昨日の晩にこの間襲撃してきた神父の格好した赤髪に聞いた』

話を聞いた静雄はとりあえず一息入れて、自分の頭を冷静にした所で電話先の上条に話を続ける

「いいか？よく聞け上条、この情報はデマだ、恐らくあいつ等は上司とやらから嘘をつかれてやがる」

『なんだと！！』

確信のある情報がある静雄は驚きの声を上げている上条に事情を丁寧に説明し始める

「……まず、幾ら記憶しようが脳がパンクするなんてことは脳医学上あり得ねぇらしい、知り合いから聞いた
今、小萌の家にいるんだよな？
後で小萌から説明してもらえばわかるだろ」

ひとまず説明し終えた静雄は一旦、言葉を区切り息を整え、話を聞いた電話越しの上条の言葉を待つ

『確かに、そう考えれば不自然だな脳がパンクする病気なんて』

「多分別の…何かだ」

静雄から電話越しに発せられた言葉に沈黙する上条、

恐らく何が原因なのかを考え込んでいるのだろう

静雄はとりあえず一旦、自分の携帯電話を切り上条達のいる小萌の家で合流しようと考えた

「今から、そっちに向かう」

静雄はそう言うと自分自身掴んでいた携帯電話を切り、ポケットへしまう

「……幽？」

何やら自分の話を聞いてドタバタとしている静雄の様子を見て首を傾げる滝壺

すると、携帯を切った静雄は急に皿洗いをしていた滝壺にへと抱きつく

「有り難うなァ理后！！助かった！！」

「！！！！！！！！／／／／」

静雄からいきなり抱きつかれてお礼を言われる滝壺、

その顔は正しく林檎の様に真っ赤になり　ボンッと頭から湯気が出ていた

それからしばらくして、支度を終えた静雄は急いでアジトの玄関に向かい飛び出る様に外へと出て行く

「とりあえずダチの所へいってくるわァ！！」

飛び出る静雄の声と共に閉じるアジトの玄関の扉

階段を手すりを上手く使い素早く降りて上条の所へと向かう静雄は

猛ダッシュで学園都市を駆ける

タバコのせいか息が思わず詰まりそうになるが構わず走る静雄

（だぁークソ！！タバコ止めれば良かったな）

今頃になって後悔するが、そんな事にいちいち構ってはいられない

静雄は全力で駆けながら再びポケットから携帯電話を取り出してまたもや電話を掛け始める

しばらくして、静雄が掛けた携帯電話に出るその人物

「神裂か？」

『どうしたんですか静雄？』

繋がった電話先の神裂は驚いた様に電話してきた静雄に訊ねる

実はあの一件後で、二人は情報交換や互いに協力し合うために自分達の携帯番号を互いに教えていたという訳だ

ひとまず神裂に電話が繋がった静雄は慌てて彼女に指示を出す

「今からあの娘の所へ向かえ！」

『え？どういう？』

神裂は禁書目録の所へ向かう理由を訊ねようとするがそれを遮るように静雄が言葉を発する

「悪いが説明は後だ！！とりあえず今すぐあの娘の所へ行け！！」

電話越しの神裂から「わかりました」と一言了承の返事を聞くと静雄は電話をすかさず切ってポケットへ戻す

（……脳はパンクしねぇ、だとすると別の何か）

静雄は全力で走りつつ、小萌の家に向かう途中で今まで聞いた事を自身の頭の中を整理する

『うん、僕達魔術師だけど？』

『人払いのルーンを刻んだだけです』

あの二人の人物の顔が思い浮かび禁書目録の話を更に頭を回転させ思い出す静雄

『一年周期で記憶をけさなければ……』

（……ん？まてよ一年周期で記憶を……）

妙に引っかかる神裂火織の一言がふと静雄の頭を過る

一年周期に記憶を消すなんてあまりにも都合が良すぎる……

静雄は険しい表情で自分の思考を更に回転させる

（一年周期……魔術師……記憶）

段々と全てのパズルが当てはまり静雄の頭に一つの結論が導き出される

（……そうか！！そう言う事か！！）

確信した静雄は微笑み辿り着いた小萌のアパートの前に立つ

（脳医学でもない！！、一年周期で記憶を消す魔術師！！）

そう、それはとても分かりやすく単純な答えだった

――魔術

あの銀髪の少女は何者かによって一年周期で記憶を消さないといけない呪いのような魔術を掛けられている

解決を目の前にして静雄の中で溢れる希望、

彼は拳を強く握りしめて嬉しさのあまり笑みを浮かべる

「――ハ！お姫様を救う王子様と仲間達か！！随分メルヘンチックじゃねぇか！！」

そして静雄は向かう一人の少女と自分自身の大切な物の為に……

禁書目録、自動書記の発動まであと数分――

獅子奮迅（前書き）

――禁書目録編も大詰めです――

早速、辿り着いた小萌の家へと駆け上がり扉を開けて中にいる上条の前に姿を現す静雄

「――上条！！」

「静雄か！」

扉を勢いよく開けた静雄の目線の先には布団に横たわる少女と慌てた様子の上条がいた

「急に容体が悪くなって、どうしようか考えてたとこなんだ」

慌てた様子の上条は布団に横たわり苦しそうに寝ている銀髪の少女を見詰めて静雄に言う

その横たわっている銀髪の少女にすかさず近づいて額に手を当てる静雄

「…コイツはどうやら魔術とやらが掛けられていやがる」

「…え？」

少女の額を抑えてる静雄の言葉に目を丸くして驚きの声を思わず溢す上条

「そんな…それじゃ、あの魔術師達は…」

黙って上条の言葉に深刻な顔つきで頷く静雄、

すると、上条は自分自身の右手の拳を畳に叩きつける

「ふざ！…けんな！こんなふざけた話！！」

「あぁ…、分かってるこんな下らねぇ事しやがった奴等は許せねぇ」

怒りを露にし、俯いて畳に叩きつけた拳を強く握り締め震えている上条を見て静雄も頷き肩を叩く

「だが、今はこの娘を助ける事を考えろ、

テメェに聞く、その右手で触れてない部分は何処だ？」

静雄は上条から右腕の事を前回の戦闘で知らされている為、その効力も把握している

それは唯一この少女に掛かっている魔術を破壊する手段であり、

それを理解している静雄は上条の右腕の力に賭けている部分が多かった

（触っていない…）

上条は思い悩みながらもパッと視界に入った銀髪の少女の唇をジッと見詰める

しばしの沈黙の後、静雄にゆっくりと口を開き話し出す上条

「…ある1つだけ触れてない所、」

「何!?」

上条の言葉に目を見開いて驚き声を上げる静雄　、

そして、上条は布団に横たわり寝ている銀髪の少女に近付いて唇に

人差し指で軽く触れる

「ここだ…、」

上条の人差し指は銀髪の少女の口にゆっくりと入り込んでゆく、

人差し指を少女の口に突っ込むその光景を黙って眺めている静雄

――と次の瞬間…、バチィと火花が散るような音が部屋の中に響き、

先程まで横たわって寝ていた筈の銀髪の少女は何かに引っ張られた様にその身体を起こし宙へと浮き上がる

「ぐぁ！！」

「…上条！！」

咄嗟に少女の身体から右腕を引いて声を上げる上条に近付く静雄

「警告、第三章第二節、禁書目録の『首輪』、第一から第三まで全結界の貫通を確認。

書庫の保護の為に侵入者の迎撃を優先します」

布団から起き上がるその少女の両目に宿る魔方陣が前方にいる上条と静雄を射抜く

起き上がり上条と静雄を見詰めるその眼は機械の様に冷徹で人のする様な目ではない、

「ははは……、冗談きついぜこりゃ」

そのあまりの出来事に唖然とする静雄とゴクリと唾を飲み込む上条

静寂した空気が銀髪の少女と対峙する二人の青年の間に静かに漂う

――そして、次の瞬間、

二人に対し光の柱のような物が一直線に襲い掛かってくる

「……！！！どけ上条！！」

すかさず慌ててその攻撃射程から上条を弾き飛ばす静雄

しかし、その光の柱は真っ直ぐ上条を弾き飛ばした静雄に向かってゆく

だが静雄は動こうとはしない……

「……」

ゆっくりと拳を握り締め、静雄は眼光を光らせて構えを取る

――そして…

「……ざけてんじゃねェぞコラァァ！！！！」

光の柱目掛けて思いっきり右拳を振るい殴る

バチィ！！！と凄まじい音を立てて衝突する静雄の右拳と光の柱

「あァあああァ！！！」

怒号を上げて拳を勢いよく振るい自分の全力を込める静雄

衝突した光の柱はその静雄の全力で振るわれた拳に段々と圧されている

「静雄！！どうしたんですか！！」

丁度その時、小萌のアパートの扉が勢いよく開き、

慌てた様子で扉を開ける神裂と赤髪の神父がタイミング良く姿を現す

そして…、その凄まじい光景を目に当たりにした二人絶句した

「ど、『竜王の殺息』って、そんなあの娘が…」

目の当たりにした光景に信じられないと言わんばかりの神裂の反応、

しかし、それ以上に信じられないのが…

「そ、それより…彼は化物かい…片腕であの『竜王の殺息』を圧倒している……」

――そう自身に向かい来る『竜王の殺息』を圧倒している池袋最強の姿であった

「オラァァァァァァ！！！」

振り降ろされた右拳は少女から繰り出された『竜王の殺息』と激しくぶつかり合い辺りには火花が飛び散る

――…そして、振るわれた静雄の拳はその『竜王の殺息』をジリジリと押し込める

「……ッらァァ！！！！」

掛け声と共に静雄から次に繰り出され、突き上げれた左拳が『竜王の殺息』に直撃し、弾道が変化、

小萌のアパートの天井を突き抜け完全に神裂とステイル目の前から消滅してしまった

「……」

「……」

この光景を目にした二人は驚きのあまりに声が出ない

凄まじい煙が覆う様に身体を振り切った静雄の拳を包み込む

「…あー畜生うぜェ…」

「――非常事態発生、あらゆる術式を調べた結果、この侵入者にはどの術式も通用しない事が判明、」

更に唖然とする魔術師二人に対し、自動書記を発動した禁書目録からの一言、

二人の魔術師はその場に立ち尽し目の前で仁王立ちのまま拳を握りしめている静雄の背中を見詰める

（じ、十万三千冊の魔導書の魔術が何も通用しないだと！！）

（…な、なんて、でたらめな！！！！）

池袋最強、平和島静雄のあまりの強さに愕然とする二人の魔術師、

すると、静雄は先程自分がはね飛ばした座り込んでいる上条に話し出す

「…上条、テメェの出番だ行け！」

「……分かった！任せろ」

静雄の合図と共に全力で禁書目録に向かい駆け出した上条、
だが、自動書記を発動している禁書目録は目の前にいた静雄から、
自身に向かい駆けてくる上条へと視点を移す

「警告、第六章第十三節。新たな敵兵を確認。戦闘思考を変更、危険性がある敵兵、『上条当麻』の破壊を最優先にします」

冷酷な言葉を発し、自分に向かい来る上条へと攻撃を移行し始める銀髪の少女

――そして次の瞬間、再び銀髪の少女から上条へと放たれた『竜王の殺息』

不意に放たれたその攻撃には静雄も流石に反応出来ない

（やべェ！！）

「――Ｆｏｒｔｉｓ９３１！！」

咄嗟に動こうとした静雄を遮り、赤髪の神父が身に纏った漆黒の服の内側から飛び出した何万というカードが小萌の部屋中に飛び散る

「魔女狩りの王（イノケンティウス）！！」

突如、現れ上条へと向かう『竜王の殺息』を阻む炎の巨人

「よくやった黒神父！！」

駆ける上条を援護した黒服の神父に思わず声を上げる静雄、

だが、安心もつかの間、静雄達に全てを引き裂くような神裂の声が辺りに響き渡る

「駄目です――上！！」

銀髪の少女の周りに上空から現れて漂う幾つもの光の羽根、

それは少女に接触しようとする上条の後頭部に降りかかろうとしている

しかし、一直線に銀髪の少女へと向かう上条当麻はその足を決して止めようとはしない

（神様、この世界がアンタの作った奇跡通りに動いてるってならー―）

上条は力強く握っていた自分の拳の五本指を思いっきり開く

「止めろ！一旦戻れ上条！！」

部屋に響き渡る制止する静雄の声、だが全力で銀髪の少女に駆ける
彼の耳には届いてはいない

（――まずはその幻想をぶち殺す！！）

銀髪の少女に向かい全力で振り下ろされる上条の五本の指

少女が放つ力を全力で振り下ろした上条の右手が全てを打ち消して
無に変える

しかし、彼の頭上には何十枚と舞う光の羽、

静雄が反応するより先にその羽は完全に少女に触れた上条を完全に
包囲している

その時、彼の頭の上に一枚の光の羽が舞い降りた

「上条ォォォォォォ！！」

上条はその瞬間、誰かの叫び声が聞こえたような気がした。

――あの欠かせない自分の友人の声……

上条は未だに床の上に倒れている銀髪の少女に覆い被さる様に倒れ込んだ

――まるで彼女を庇う様に……

そして、笑いながら上条の指先は静雄の目の前で二度と動かなかった。

――この日…

「上条ォォォォォォ！！」

平和島静雄は大切な親友を失った……――

忘我渾沌（前書き）

——禁書目録編完結です

忘我渾沌

薄暗い学園都市にそびえ立つ窓の無いビル、

そのそびえ立つ窓の無いビルの内部では学園都市の統括理事長アレイスタークロウリーと腕を組み眉間にシワを寄せている土御門元春が対峙していた

沈黙した空気の中、険しい表情をしている土御門は口を開き対峙しているアレイスターに話し出す

「……あの力は一体なんだアレイスター」

手元にある一つのビデオテープを握り締めてアレイスターに突き出す土御門

――それは数時間前折原臨也から宅配便送られてきたビデオテープだ

すると、その突き出されたビデオテープを見たアレイスターは冷静な口調で土御門に話をし出す

「……やっと理解したかい？彼の力を」

ビデオテープを突き出す土御門に微笑むアレイスター

だが土御門は持っていたビデオテープを握り締めたまま冷静なアレイスターに対して声を張り上げる

「ふざけるな！！あの『竜王の殺息』を素手で殴り弾道を変えた上に、消滅させるなど馬鹿げている！」

――そう、土御門に送られてきたビデオテープは静雄と上条による自動書記を発動した禁書目録との戦闘記録である

この内容を見た土御門は静雄の力に激しく動揺していた

「だいたいなんだ！！十万三千冊の魔導書にあるあらゆる術式が通用しないなんて非常識な……」

「それが証明してるんだから認めなよツッチー、

大体、シズちゃんに今更常識なんてもの通用するとでも思ってるわけ？」

声を張り上げる土御門の言葉を遮り、アレイスターの培養液の横から腕を組み現れる臨也

「だいたいさぁ、今更だよねホント、最初にクロちゃんが説明したじゃない幻想崩しだって」

ため息を吐いて左右に首を振り呆れた表情を見せる臨也

流石に返す言葉がない土御門は冷静に一息着いて、自分を落ち着かせゆっくりと口を開き話し出す

「……で？必要悪の教会にはなんて説明する気だ？

まさか、平和島静雄の存在がばれていないことはあるまい」

土御門は鋭い眼光をアレイスターとその隣で腕を組んでいる臨也に向け問う

だが、土御門の問いに対して二人は表情を全く変えず実に冷静な口調で淡々と話し出す

「心配は要らない、彼等には彼を刺激しないように忠告をしておいたよ」

「彼女も流石に顔を真っ青にしてたねー、なんたって魔術が一切効かない人間でそれも聖人も倒す程の力の持ち主って言ったらねぇ」

土御門に答えるアレイスターの言葉に頭を片手で抑えて愉快に笑い声をあげ、答える臨也、

「必要悪の教会は彼一人の力を用いれば全て破壊できると言っておいた、…これでしばらくの間、
あらゆる魔術結社はこれだけの忠告を無視して上条当麻や禁書目録に手を出すことはしないだろうね」

ふと笑みを溢し、目の前にいる土御門に告げるアレイスター

土御門はこの時、学園都市とアレイスターにとって平和島静雄の力がいかに強大でどれだけの影響力を持つのかを知った

（……平和島静雄……）

平和島静雄という男の得体の知れない力
学園都市にはその力に対抗する者などもしかすると誰もいないのかも知れない

―――――――――

上条当麻の病室前、

銀髪の少女との一件で倒れた上条当麻はこの病院に運ばれ奇跡的に一命をとりとめていた

途中で買った見舞いの花束を持ってその病室の前で立ち尽くしている静雄

花束を持っていた静雄はふと病院の医者から告げられた言葉を思い出す

『記憶…破壊？』

『……うん、そうだね……、彼は脳細胞ごと（破壊）されてる』

カエル顔の医者の口による衝撃的な一言に呆然とする静雄

そして、しばらくしてカエル医者の双肩を勢いよく掴みゆっくりと口を開く

『……お、おい、嘘だよな、…って事は俺の事も』

『恐らく覚えていないだろうね……』

未だに信じられないその医者の言葉が頭に響き渡り、
受け入れられず一人病室の前で深刻な表情を浮かべる静雄

「なんだよそりゃ…」

親友であった事なんてついこの間までで今から会う上条当麻は全くの他人同士なんて静雄には信じられ無かった

（……大丈夫だ）

自分自身にそう言い聞かせて病室の扉へと手を掛ける静雄

――扉を開こうと力を入れたその時だった、

「――――――」

……病室の中からあの銀髪の少女の声と上条の声が静雄の耳へと入ってくる

途端に病室の扉から手を引いて花束を持ったまま黙って銀髪の少女の言葉に耳を傾ける静雄

「インデックスはねとうまの事が大好きだったんだよ……」

病室の前で静雄は固まった、

一番ショックだったのは悲しげな声の銀髪の少女に違いない

自分自身の為に我が身を顧みず助けてくれた英雄（ヒーロー）

しかし、彼は自分自身のせいで大切な思い出を全て失ったのだ……

……静雄は自分の力の無さにあまりにも悔しく自身の拳をギュッと力強く握り締める

（俺は……なんであの時……）

何故助けに入るのが遅れたのか……、とその事だけをひたすら後悔した

「なんつってな、引ーっかかったぁ！　あっははっはーのはーっ！！」

ピクッと扉の向こうにいる上条の高々に上げている笑い声に反応する静雄

「あれ？とうま記憶が無くなったんじゃ……」

「異能の力ならこの『幻想殺し』で破壊できるんだよ、あの羽の『ダメージ』ってのも魔術の力なんだろ？なら、自分自身の頭にこうやって『幻想殺し』を当てれば――」

扉の反対側で銀髪の少女に話している上条の会話を聴いていた静雄にはわかった

1ヶ月の親友でしかなかったが

この上条が銀髪の少女に話している事は嘘であると何故かは知らないが静雄には何となくわかったのだ

（あいつ……）

恐らくは銀髪のあの少女を傷つけまいと嘘をついているのだろう

彼の本質は全く変わっていない……

しばらくして、上条当麻の凄まじい悲鳴が病院中に響き渡る

そして、腹を立てた銀髪の少女が病室から飛び出て何処かへと消え、

それを確認した静雄はゆっくりと上条の病室に足を踏み入れた

「……上条」

静雄の姿を見た若干、驚きの表情を見せる上条、

目の前に見知らぬ男が現れて声を掛けてくるなら当然の反応だろう

花束を確認した上条は、慌てて声を掛けて来た静雄に話をし出す

「あ、あー…、おう!!、どうしたんだ?もしかして俺の…」

「…いいんだぜ、嘘なんざつかなくてもよ」

いきなり病室に現れた静雄の言葉に固まった表情をする上条

そして、その真っ直ぐに見詰めている眼差しに全て見抜かれていたのを察したのか上条は静かに押し黙り、

そして、目の前に現れた静雄に申し訳なさそうに俯いてゆっくりと口を開く

「…ごめん俺、何も覚えて無いんだ」

「……、わかってる」

静雄は一言そう言うと花束を病室にある机の上に置いていきなり上条の胸ぐらを掴んだ

「……、ならなんであの娘になんであんな嘘をついた」

静雄はベッドに横になっている上条を問いただすように胸ぐらを掴み迫る

「テメェはあの娘に傷つけまいとしたんだろうが、あの娘が事実を知ったときになんて顔をするか考えなかったのかテメェは!!」

静雄にはわかっていた上条当麻はこうゆう人間だということは知っていた、

だからこそ親友として彼に伝えたかった

――…そう彼を救う事のでき無かった無力で不甲斐ない親友として……、

友人の一人すら助けられないこの自分の力が思いが彼の力になれると信じて……、

静雄は彼に自分の思いをあの銀髪の少女の気持ちを伝えたかった

「……テメェが例え全て忘れたとしても絆は消えねぇんだよ！！
どんなになったってテメェは俺のダチ公だ！それも変わんねぇ！
だから悲しい顔をされるからなんて理由であの娘に嘘をつくんじゃねぇよ！テメェだけが辛いなら俺もあの娘もそいつを背負ってやる！！

だからテメェはひとりじゃねぇんだ上条当麻！！」

強い眼差しを向けて胸ぐらを掴み自分の思いをぶつける静雄

そして、話を終えた静雄は上条当麻の胸ぐらからゆっくりと手を離す

上条は俯いたまま静雄に返事をしようとはしない

そんな中、冷静になって自分の思いを一方的に叫んだ静雄は俯き口を開いてゆっくりと話し出す

「悪い……邪魔した、んないきなり言われても困るよな…」

すると、静雄の言葉に上条は俯いたまま左右に首を振りゆっくりと口を開く

「……確かにな…良く考えれば俺は酷い事をしたのかも知れない……でも」

顔を上げていつもと変わらない笑みを溢しゆっくりと口を開く上条

静雄のその目には確かに自分の親友である上条当麻が写っていた

「――でも彼女には笑ってて欲しいから」

そう上条当麻は変わってはいなかった、

吹き込む風と共に無色だった静雄の頭の中に鮮やかな色が広がってゆく

相変わらず何にも変わっていない上条のその言葉に思わず笑みを溢す静雄

「……そうかよ」

そして、病室の端にある窓を見詰めて彼は青空を見上げた

この日の窓の外に広がる青空はとても澄んで綺麗だった

一致団結（前書き）

――今回は浜面達の話です

――では

一致団結

禁書目録と上条当麻との出来事から数日が経ち、

静雄はとある学区にある廃工場内にて浜面達を集めて話をしていた

「――俺はただの不良集団の頭になるつもりはねぇ」

いきなり、静雄の口から発せられたこの一言

その場にいた浜面とその他の仲間のスキルアウト達は状況を飲み込めないでいた

「……は？どうゆうことッスか？」

よく状況が読めないスキルアウト達を代表して冷静に静雄に訊ねる浜面

そんな浜面達の前に服部が現れて静雄の代わりにスキルアウト達に具体的な説明をし始める

「あー…、話の通りだ、俺と平和島さんが昨日の晩に話し合った結果、学園都市最強の平和島静雄さんがリーダーだとしてもただのスキルアウトの集まりでは、全く今までの状態とは変わらないという結論に至った」

服部は静雄に確認を取り合って頷き、話を続ける

「――よって俺達はここにスキルアウトだけによる治安維持の為の武闘集団を作ることにした」

仲間のスキルアウト達へと淡々と説明する服部に浜面が質問を投げ掛ける

「そりゃ具体的に言うと…」

「そうだ、風紀委員と目的は一緒だが、俺達の場合はスキルアウト達同士による武力抗争への介入や　犯罪者集団の撲滅を主に掲げて活動する」

服部はそう言うと右手の指をパチン！と鳴らし、

仲間のスキルアウトに廃工場扉を開かせて一台のワゴン車を中へと招き入れる

そして、ワゴン車の荷台を開いた服部はある物を取り出し始めた

「俺達はこれからはただのスキルアウトの集団では無くて組織として活動する
先程、平和島さんは直接交渉権を使って組織の成立を学園都市に認めてもらった」
服部は話を続ける服部はワゴン車から取り出したそれをスキルアウト達の前に大きく広げる
「――よってこれが俺達の新しい制服だ」
服部が広げるある物がスキルアウト達の視線を一斉に釘付けにする
背中に紅龍のマークにローマ字でＫＭＳと刻んである漆黒のライダースジャケット
「俺達のチームは今から『国士無双』と名乗る、
本場のアンチスキルの指導が入る上にかなりしんどいが、
この龍のマークを背中に背負って学園都市最強のチームを名乗れる事が許される」
服部の宣言に唖然とする浜面とその他のスキルアウト達
（…やっぱしなァ）
予想通りの展開になり思わずため息を吐く静雄

大体、この様に面倒な事に成るのはわかりきった事だったのだ

――――――――――

――元々の事の発端が数日前の公園での出来事だ

「なんだよ土御門、こんなとこに呼び出しやがって」

不満げに呟く静雄は公園のブランコに座り込んでサングラスを掛けている土御門に言う

「あー突然呼び出して悪いなシズやん、実は頼みがあって呼んだんだが」

そう言って腰を下ろしていたブランコから立ち上がる土御門

呼び出された静雄は相変わらず状況が見えず首を傾げている

「それで？その頼み事ってのは？」

「……率直に言う、学園都市に新しい組織を作ってもらいたい」

土御門の唐突な言葉に目を丸くして唖然とする静雄

「……、は？」

すると、土御門はそんな静雄に対して微笑んだまま着けているサングラスを人差し指で上げ話を続ける

「だから、学園都市に新しい組織を立ち上げてもらいたいんだ、お前の力は強大過ぎる故に目的もなく振る舞われては困ると言う上からの指示があってな……」

話の内容を全て話して静雄に用件を伝える土御門

だが、静雄はようやく学園都市に馴れてきたばかりで、まさかそんな自分が組織を立ち上げるなんて大それた考えは思いもつかなかった、

静雄はしばらく考え込んだ後に、目の前にいる土御門に話し出す

「それで？具体的に俺ァどうすりゃいいんだ？」

「まぁ、できればこの学園都市にある風紀委員の様に治安維持に当たってもらう様な組織を立ち上げてもらいたいんだが…

どうも上はお前の組織を学園都市の裏に当てたいらしい」

深刻な表情を浮かべて考え込む様に静雄に話す土御門

「だからお前には、学園都市の裏を抑制する為の治安維持組織を作

ってもらいたい」

「……、学園都市の裏を抑制する治安維持？」

土御門が話している内容がイマイチ頭にピンと来ない静雄は首を傾げる

「そうだ、具体的な内容としてはスキルアウト同士の抗争への武力介入や能力者による犯罪組織の撲滅、学園都市に侵入した魔術師の監視役、統括理事のボディガード
まぁ、実際まだまだあるが、具体的にはこのような仕事をお前の組織にやってもらうことになるな」

土御門の丁寧な説明のお陰で大体の事を把握した静雄、

しかしながら、その組織を立ち上げるにしてもどこから人員を呼び出す宛が無い

その不安要素を静雄は土御門に話したのだが、彼は至って静雄へと冷静に答える

「人材なら問題ないだろう？調べた所、静雄は既にスキルアウトの集団の頭だそうじゃないか？なら、そいつらをその組織に加えれば問題ない」

すると、土御門は資料を懐から取り出して静雄に渡す

手渡された紙を見て目を通す静雄は表情を険しくしている

「これがお前の組織に提供される物資の資料だ、それじゃ俺は用が済んだからこれで失礼するぜい」

「お、おい土御門！！」

前からそそくさと立ち去る土御門、静雄が声を掛けて引き留めようとした時には既に彼の姿は目の前から消えていた

――――――――

こうして静雄は現在の状況に至る

沈黙が続き一向に話が進まない今の状況、

そんな中、静雄は黙ったままでいるスキルアウト達に向かい訊ね出す

「それでどうすんだ？」

静雄の言葉にスキルアウト達からは返事が返って来ない

そんな中、仲間のスキルアウト達の前に踏み出て険しい表情を浮かべている浜面は静雄へとゆっくりと話し出す

「……何ッスかコレ、結局俺達学園都市の犬って事ッスか？」

何故か悔しそうに歯を食い縛り拳を強く握り締め目の前にいる静雄に問いかける浜面

だが、そんな浜面の言葉に対して静雄は左右に首を振りゆっくりと口を開き答え始める

「……ちげぇよそんなんじゃねぇ、

俺はテメェらだけでこれを作りたいと思ってんだ

能力者じゃ無くてもこの街で胸張ってられるような無能力者今までみたいに悪さして煙たがれるのはもう嫌じゃねぇか？」

静雄の言葉にハッとするスキルアウト達に浜面

本来、能力が持てずに学園都市から煙たがられていた存在

だが、この男ならそんな自分達の立場を何か大きく変えてくれるかも知れない

「……どうだテメェら？」

静雄の言葉に浜面達の中でとてつもない期待が感じられた

すると、静雄の前に足を踏み出しゆっくりと口を開く浜面

「……、わかりました静雄さん……、

俺はアンタに着いてく……」

静雄の問いに頷き答える浜面、

それに加えて次々とスキルアウト達が声を上げる

「俺もやります！！」

「……俺も！！」

次々に辺りに広がるスキルアウト達からの声、

それは気付けばいつの間にかその場にいた全員が静雄に賛同していた

「……テメェら」

その光景を目にした浜面と服部は互いに頷いて静雄に手を差し伸べる

「これからよろしくお願いします静雄さん」

笑みを溢す静雄はその二人から差し出された手を力強く握りしめる

こうしてこれが、平和島静雄による学園都市最大の武闘集団、

『国士無双』の結成の瞬間だった

絹旗最愛（前書き）

――今回はまさかの絹旗です

――では

絹旗最愛

日曜日の休日、

池袋最強こと武闘集団『国士無双』のリーダー平和島静雄は一人の少女に現在振り回されていた

「ほら幽！！早くしてください超置いていきますよ！」

――絹旗最愛、

暗部組織アイテムの構成員の一人、

そんな彼女は無類の映画好きという一面を持ち合わせている主にＢ級、Ｃ級の映画ばかりだが……

そんな、彼女は今現在、静雄を連れて映画館へと来ていた

（なぁんであんな約束しちまったんだろう俺……）

思わず数日前の出来事を思い出してため息を吐く静雄

実は数日前、

静雄は絹旗から借りたＤＶＤを思わず踏みつけて壊してしまい、

『あー！！？コレ私のお気に入りの映画だったんですよ！！』

という風なやり取りがあり、絹旗に涙目に迫られそのお詫びに映画館に連れて行く事に成ったという訳だ

すると、絹旗は考え事をしていた静雄の袖を引っ張り一つの看板を指差す

「……幽！！これ超みましょう！」

「……あー？、愛と禁断の関係？テメェ、コレ規制入ってんじゃねぇか！もうちょい普通の映画にしろ！」

絹旗の指差す方の看板に視線をやり、眉間にシワを寄せて声を張り上げる静雄

だが既に絹旗の手にはチケットが二枚

「……実はもう色々根回しして超予約済みだったんですよー、

残念でしたね幽」

「……マジかよ」

絹旗は早速、唖然とする静雄の手を引いて映画館へと向かって行った

―――――――――

静雄と絹旗が映画館の中に入ると案の定人が少なく、

ほとんど席は空いていて自由席になっている

（……だと思ったぜ）

ハァと深いため息を吐く静雄、

しかし隣にいる絹旗は映画を見るのをとても楽しみにしているのか

どこか落ち着きがない

（ワクワク）

その期待感に溢れる表情はなんだろうと思わず苦笑いを浮かべる静雄

「……ほらほら落ち着け、」

「……ひゃい／／／」

いきなり静雄から頭を撫でられて絹旗は驚きのあまりに声を上げる

すると、絹旗は顔を真っ赤にして頭を撫でてくる静雄へと振り向く

「ち、ちょっと幽！／／／
い、いきなり頭を撫でないで下さいよ！びっくりしたじゃないですかぁ！／／／」

静雄は「あ、悪い」と絹旗に申し訳無いように返事をし座席にもたれ掛かり絹旗の頭から素早く手を離す

「お前の頭って撫でやすいからついしたくなんだよ、いきなり撫でて悪かったな、嫌ならもう止めとく」

絹旗に対して申し訳なさそうに映画が始まっていないスクリーンを見詰め呟く静雄、

絹旗は慌てて、勢いよく左右に手を振り激しく否定しだす

「べ、別に嫌じゃないです！！全然超大丈夫です！！」

顔を林檎の様に真っ赤にして隣で座っている静雄に言う絹旗

静雄はそんな慌てている絹旗を見て不思議そうに首を傾げる

――とそんな風なやり取りをしている内に始まり出すC級の映画

（お、始まったか）

内容は……まぁ言わなくても理解できるとは思うが、

正直、つまらない上に絹旗位の年代が見るには流石に刺激的過ぎる内容だ

『……私は貴方の事が…』

『僕もだよ……』

ふと、スクリーンを眺めている隣の絹旗の顔を覗く静雄、

顔を真っ赤にして顔を指で隠しているがその間からスクリーンへ目を覗かせている

（……たく）

静雄はそんな絹旗の頭にゆっくりと手をポンと置き口を開く

「……テメェにはこりぁちとはえーな、こうゆうのは」

「／／／／／／／」

手を置く静雄の方へ目をやる絹旗は更に顔を赤くし、耳まで真っ赤になっていた

それからしばらくして、映画が終わり中から出てくる絹旗と静雄の二人

「んー面白かったか？」

「／／／／／」

まるで小動物みたく、身体を小さくして黙ったまま顔を真っ赤にしている絹旗

「？大丈夫かお前？」

「え！！ハイ超大丈夫です／／／」

絹旗は心配するように声を掛けてくる静雄に慌てて答える

「？、ならいいけどよ気分が悪かったら言えよ？」

「あ、ありがとうございます／／／」

相変わらず顔を真っ赤にして訊ねる静雄へ返事をする絹旗、そんなになるなら見なければ良かったのにと静雄は思うが、とりあえず口には出さない事にした

―――――――

それからしばらくして、映画館から移動した二人
そして、回復した絹旗は静雄と共に喫茶店でのんびりとコーヒーを飲んでいた

「私達もいつかはあんな風に成りたいですね幽」

「餓鬼がなに言ってんだ、顔を真っ赤にしてたくせによ」

コーヒーを口に含みつつ、絹旗の言葉に笑う静雄

「う、うるさいですよ幽！／／／あれは単にその……そう！女のコは皆ああゆう風に顔を手で隠しながら映画を見るもんなんですよ！！」

意味が分からないと思わず突っ込みたい所だが、
静雄は面倒なので適当に相槌を打つことにした

「へぇーそうなのか、知らなかったわァ」

「……、信じてませんね幽」

不機嫌に顔を膨らませる絹旗に「まぁな」と適当に返事をする静雄
すると、絹旗は何やら勝ち誇った表情を浮かべてそんな静雄に話し出す

「いいですよー、なら今日も幽のベッドに超潜り込んでやりますから」

（あー、めんどくせぇコイツ）

勝ち誇った表情を浮かべている絹旗の言葉に思わずため息を吐く静雄、
すると嫌そうな顔をした静雄を見て笑い声をあげる絹旗

「笑うんじゃねぇよ」

笑い声を聞いていた静雄はムッとした不機嫌な表情で絹旗に言う
すると、絹旗は嬉しそうにゆっくりと口を開き静雄に話し出す

「……でも、今日は映画に連れてってくれてありがとうございました幽
とても楽しかったです」

思わぬ絹旗の言葉に照れくさそうに視点を反らして静雄は顔を赤くする

「あ、あぁ、まあな
また機会がありゃ連れてってやるよ」

照れくさそうに自身の頭を掻きながら絹旗に約束する静雄

「それじゃ約束ですよ」

「おう、そのうちな」

約束をとり交わす絹旗と静雄、

そうして、その後二人は喫茶店を後にしてアジトへと帰って行った

余談だが、帰った二人に対し事情を聞き出した滝壺は静雄に対して更に積極的になったという

恐るべし池袋最強、

欠陥電気（前書き）

――訂正入れますでは――

欠陥電気

――とある夏の日の平日

静雄は補習を終えて下校していた訳だが喉が渇いていた為に公園に立ち寄って自動販売機の前に立っていた

「だァクソ、喉乾いた」

静雄は自動販売機の前で財布からお札を引っ張り出す

（……補習補習ってめんどくさくて、たまんねぇな）

そんなくだらないことを心の中で呟きつつ、引っ張り出したお札を自動販売機に入れる静雄、

「……」

だが、何故か自動販売機のジュースのボタンがどれも点灯しない

これに対して静雄は頭の中の何かが吹き飛んだような感覚になった

「ははははぁ、よぉく分かったぜェ、なぁ自動販売機ってのはジュースを販売するもんだよなァ」

一人でに自動販売機の前で笑い出す静雄はこめかみに青筋を立てて拳を握り締める

「じぁよ……、ぶっ壊されてもォ！文句はねぇよなぁアァ！！」

「……ってちょっと待ったァァァ！！」

自動販売機を持ち上げようと両手を掛けた静雄すかさずにストップを掛ける人物

「アンタ何やってんのよ！全く！」

「あぁ！！いまからコイツをスクラップにすんだよ……って中坊じゃねぇか？」

静雄は目の前に現れた人物に目を丸くしてゆっくりと自動販売機を元の場所に戻す

「だぁかぁら!!毎回、毎回、御坂美琴だっつでんでしょ!!それより今からジュース買う予定の自動販売機を破壊しようとしないでくれるかしら!!」

美琴は怒鳴る様に毎回と変わらずに静雄に向かい不機嫌な表情を浮かべている

「買うって?壊れてんじゃねぇかコレ」

静雄は降ろした自動販売機を指差し、不満げに話してくる美琴に言う

すると、美琴は得意げに何やら自動販売機に手を置いて静雄に語り始める

「この自販機はねこうやって使う・の・よ!!」

リズムカルに上下に軽くステップを踏み身体を軸にして静雄の目の前で一回転する美琴

――そして……、

「チェイサァァァ！！」

ガツーンと凄まじい蹴りを、先程静雄が投げ飛ばそうとした自動販売機に直撃させる美琴

（……短パン？）

すると、自販機からはジュースが落ち、美琴はそれをすかさず取り取って静雄に向かい話し出す

「……ね？出たでしょこれ自販機のネジが緩くなってるからこうしないとジュースが出ないのよ」

「……、成る程なァ」

ジュースを手にとり美琴の説明に静雄は納得したように頷く

すると次に自身の首の骨を鳴らして身構え始める静雄

「確か蹴り飛ばせばいいんだよな」

静雄は身体を凄まじい勢いで回し鞭の様にしならせた足を思いっきり振るう

――そして次の瞬間

「チェイサァァ！！！！」

メキメキと先程の美琴の蹴りによる音より凄まじい破壊音が公園中に鳴り響く自動販売機

静雄から思いっきり蹴られた箇所からは火花が飛び散り機械の中身が露になっている

そして、そんな静雄から蹴られた自動販売機はジュースを撒き散らした後に遥か上空に飛んでゆき、
目には見えない様な星に成ってしまった

「……」

ジュースを持ったまま唖然としてその光景に立ち尽くす御坂美琴、

しかしながら、吹き飛ばした当の本人は何事も無かったように首を傾げている

「……アレ？力の加減間違えちまったか？」

「……アホかァァァ！！」

おぉ！といきなり怒鳴り声を上げて突っ込みを入れる美琴に思わず驚く静雄

「とりあえず逃げるわよ！！」

そして、静雄は美琴から手を引かれてその場から急いで立ち去った

――――――――――

それからしばらくして、

あの場から急いで駆けて立ち去った二人は公園のベンチで疲れたように座り込んでいた

「……あんた本当にとんでもないわね」

「あぁ？でもねぇだろ」

静雄は先程、自動販売機が撒き散らした缶コーヒーの一つを手にとり美琴に答える

常識はずれのこの男と毎回会う度に何とも言えない脱力感にみまわれる美琴

「……ねぇアンタ、ツリーダイアグラムって分かる？」

コーヒー缶をを口につけている静雄に訪ねる御坂美琴

だが、学園都市についてあまり知識が無い静雄にはそれが何かは全く見当もつかず考え込んだ挙げ句……

「ツリーダイヤモンド？なんだよそりゃ…、新しいクリスマスツリーか？」

と、とりあえず考え込んで思いついた事を口走ってみる

首を傾げて答える静雄に思わずため息を吐く御琴美琴

仕方無く静雄にそれについての説明をし始める

「あのね…宇宙にあるスーパーコンピューターシステムの事よ……、
私達レベル5の順位なんかを予測したり、
どうすればその能力者をより強力な者にできるかを演算して予測する事ができるの」

静雄に話す御琴美琴は何やら思い詰めた表情を浮かべている

「嫌いな訳かソレが」

コーヒーを飲み干す静雄の問いに黙って頷く美琴

静雄はそんな黙って頷く御坂美琴に微笑み空のコーヒーを置いて目を瞑り話し出す

「そっか……」

確かに、この学園都市に住む学生が懸命に努力や積み重ねた結果がたかだか宇宙にあるコンピュータごときに見透されているなんて実に不愉快の上にあまりにも報われる気がしないだろう……

すると、そんな表情をしている美琴の頭にポン手を置き立ち上がり話し出す静雄

「だがなァ関係ねぇなァんな事、
俺は俺の生きたいように生きるし誰にも指図されるつもりはねぇ、
何に予測されようが関係ねぇ、そんなもんはすぐに根こそぎ全て覆してやるよ」

美琴を背に一人語る静雄、

何故かは知らないがこの男の話す事は妙な説得力があった
静雄の言葉に思わず吹き出して笑い出す美琴

「――アハハハハ…アンタなら本当にやりかねないわね！！」

「笑うとこかよ……」

突然、元気になった美琴の笑い声を上げる姿を見て思わずムスッと
視線を反らす静雄

すると、いつも通りになった美琴はベンチから立ち上がる

「それじゃこれから――」

「……お姉さま？」

しかしながら、そんな楽しい雰囲気が漂っていた時だった

静雄と御琴美琴の前にゴーグルを頭に着けているもう一人の御坂美
琴が現れる

「……あ？」

訳のわからない状況に思わず首を傾げる静雄
御坂美琴は険しい表情を浮かべて現れたもう一人の同じ容姿をした少女を睨む

「アンタなんでここにいんのよ」

「……ミサカはただ単に次の実験について貴女に報告に来ただけですが、と簡潔に説明します」

現れた少女は無表情のままで訊ねる御坂美琴に話す

（ミサカ？つぅ事は…）

少女の名前を聞いて頭に何かが過る静雄

静雄は確信した様にゆっくりと口を開き美琴に話し出す

――そうこの少女達を使ったとんでもない実験

「……あのクソみたいな実験、

もしかして誰かやってやがんのか！？」

その言葉を聞いて背筋がピタリと凍りつく御坂美琴

静雄は以前に研究所を訪れた時に一度だけ資料を見せられた事があった

――その名も、『絶対能力進化実験』

「…馬ッ鹿野郎が！！」

自身の拳を力一杯握りしめてその場で怒りを露にする静雄

平和島静雄の新たなる闘いがここから始まる

欠陥電気2（前書き）

では訂正入れます

――あれからしばらくして、

あの後、御坂美琴からは何も聞かされないまま公園を後にした静雄は学園都市を路上を歩き、アイテムのアジトへと仕方無く帰ろうとしていた

路上を歩き帰る静雄のその表情は険しく、色々と考え込んでいるようだ

（あの動揺していたのを見る限りには間違いねぇ……あのトチ狂った実験に一体誰が手を出してやがんだ！）

静雄は思い詰めていた御坂美琴の顔を思い出して眉間にシワを寄せる

二万人の命を奪い力を得る、こんな馬鹿げた実験なんて認められる訳がない

――とその時、

「……ぶぉ！！」

考え事をしていた静雄は道の途中で転がっていた空き缶を踏みドターンと音を立てて盛大に転ぶ

まさか、親友の上条当麻の如く不幸が自分自身に降りかかるとは静雄は思いもよらなかった

（あー…、厄日だチキショー…）

「何をやってるのですか？」

すると、後方からいきなり声が聞こえ見上げる静雄

そこにはゴーグルをした御坂美琴が立っていた

（…あん？美琴？）

すると、次の瞬間、彼女の履いていたプリーツスカートの中が転倒した静雄の視界に飛び込み

彼女が先程まで履いている下着が違うことに気付く

「……って妹か！？」

勢い良く頭を上げて顔を真っ赤にしてすかさず視線を逸らす静雄

「…馬ッ鹿かテメェは！ちっとは気にしろ嫁の貰い手が無くなっちまうぞ！！」

顔を真っ赤にする静雄は何事もなく振る舞う御坂妹に怒鳴りつける

だが、依然として無表情のまま慌てる静雄に首を傾げている御坂妹

「何をそんなに怒ってるんですか？とミサカは訳のわからない言動する貴方に対して首を傾げます」

「……あ？」

御坂妹の言葉に思わず唖然とする静雄、

だが、女性としての常識がどうやら彼女には備わっていないのだろうと理解するのにはそこまで時間はかからなかった

「いやいい……もう忘れろ……」

静雄は何かを諦めたようにため息を吐き御坂妹に話し出す

「……テメェらは確かクローンだったか？」

「はい、とミサカは簡潔に貴方の問いに答えます」

――学園都市の路上を歩きながら話す二人

しかしながら、この少女はあまり表情が堅いせいかどこか捉えにくい

「……それで？誰がその実験ってのをやってんだ？」

「今、貴方にそれを話すと実験に支障する事になるので残念ながらお話することはできません、とミサカは訊ねる貴方に対して答えます」

話を聞き出すにしても御坂妹からはこのような返答しか返っては来ない

仮にも一応、もう一人の第一位である平和島静雄が実験に妨害に入れば間違いなく中止に成るのは必然的、当然の対応だろう

しばらく歩いている内に静雄の前に一匹の黒い子猫が近寄ってくる

「…あ？」

首を掴みそれを軽々しく上げる静雄

すると、御坂妹は不思議そうにその猫を見て首を傾げる

「…何処から来たのでしょうか？」

「あー…さぁな、俺ん家じゃ飼えねぇしどうすっかなコレ」

掴み上げた猫とジィーとにらめっこしながら御坂妹に答える静雄

すると、静雄は黒猫を掴み上げたまま目線を御坂妹の方へとやり微笑み話し出す

「テメェに任せた」

静雄はそう言うと御坂妹の肩にポンと手を置いて頭の上に黒い子猫を乗っける

「…ミサカは猫が嫌う電磁波を出してますので――」

「…んなこと関係ねぇー、動物ってのは愛情を注いでやればなつくって相場が決まってんだ、だからテメェに任せた」

頭の上に黒い子猫を乗っけた静雄は手を離して御坂妹に預ける

「しかし、ミサカは――」

「あーグチグチ言ってんじゃねぇよ…いいからテメェに任せた言ってんだろ」

半ば強引な静雄に仕方なく縦に首を振る御坂妹、

黒猫は御坂妹の頭の上が気持ちが良いのか目を細めてのんびりと寝ている

「…さぁてじゃ、コイツの名前をどうすっかな」

ひとまず御坂妹に預ける事にした猫の名前を考える事にした御坂妹と静雄は互いにうーん…、と頭を捻り思い悩む

すると、何かが思いついた様に唐突に話し出す御坂妹

「…イヌっというのはどうでしょう?猫なのにイヌ…、ププ」

訳のわからない名前を述べて一人でに突然笑い出す御坂妹、

しかしながら、隣で名前を聞いていた静雄は何故か妙に納得している

「なかなかいい線だ、…だがインパクトに欠けるな」

「そうですか?では徳川家康と言うのは――」

おぉ!!とまさかの御坂妹の発言に嬉しそうに驚きの声を上げる静雄

「――最高じゃねぇかならコイツは家康に決定だ」

こうして静雄と御坂妹命名、

徳川家康となった黒猫はミサカの頭の上で相変わらずスヤスヤと寝ている

そして…しばらく歩いた後にとある本屋の前で足を止める静雄

「おっと、なら本屋寄らねぇとな、家康を買うなら知識が必要だひ

とまずテメェはそいつ頭に乗せて待ってろ」

静雄はそう言うと本屋の中へと足を踏み入れ御坂妹の前から姿を消す

「……家康ですか、あの人もなかなか良いセンスをしてます」

静雄が本屋の中へと足を踏み入れたのを確認した御坂妹は家康を撫で地面に降ろす

「…さて」

黒猫を降ろし終えてため息を吐き後ろへと振り返る御坂妹

「……時間ですか」

――そして…、彼女の後ろには悪魔の様な満面の笑みを溢している白い悪魔が立っていた

――――――――――

それからしばらくして、

静雄は本屋の中から猫の為の本を携えて出てくるとしきりに辺りを見渡す

（あん？アイツ何処に行きやがった？）

静雄の目の前には鳴き声を上げている徳川家康

――そう、先程まで居た筈の御坂妹の姿が本屋の前から消えているのだ

静雄はひとまず家康を抱え上げて御坂妹を探す事にした

自身の足をフルに使い学園都市の路上を疾風の如く走る静雄、

一通り様々な所を回ったが御坂妹の姿は相変わらず見当たらない

（何処に行きやがった？）

それからしばらくして、

路地裏に入った静雄は信じられない光景を目の当たりする

「……」

彼の視線の先には血塗れのまま無言で横たわる先程まで一緒にいた
御坂妹の死体

「……オイ…、嘘だろ…」

信じられない光景を目の当たりして唖然とする静雄

すかさず、その死体に駆けて近付きゆっくりと抱き上げる

路地裏の辺りに一面に大量に流れ出ている彼女の血

死体を抱き抱えた静雄の手には御坂妹の大量の血が付着するが全く
構わない

そして、今の彼のその眼には信じられない程の怒りが籠っている

――オイ誰だ

ボソリと死体を抱き抱えている静雄の口からでる一言
発せられたその声は虚しく路地裏に響き消えてゆく

「誰だァァァ！！！！！こんな事しやがった奴はァァァ！！！」

そして、平和島静雄の悲痛の咆哮が学園都市に全体に響き渡った―
――

御坂美琴（前書き）

――では更新します――

御坂美琴

学園都市にある何処かの路地裏、

薄暗く見通しが悪いその路地裏で何かから逃げるように必死に駆ける一人の少女、

「……ハァハァ」

彼女の身体は傷だらけで横腹から滲み出てくる血を必死に押さえている

「……くっ！！」

踏ん張り足に力を込めるが思ったように力が入らず少女は壁にもたれ掛かる

――そして……、その背後から迫る白髪の少年

「……オイオイもう終わりですかァ？なっさけねェ」

不気味な笑い声を上げて傷だらけの少女を見下す様に口を開く白髪の少年

その少年は愉快に笑みを溢し突然、壁にもたれ掛かる傷ついた少女に質問を投げ掛ける

「……さぁてェ問題です学園都市第一位でェ最強のレベル５とはァ一体誰の事でしょうかァ？」

「……ッ！！」

寄り掛かっていた壁から身を離し咄嗟に手から電撃を繰り出す少女だが、白髪の少年は何事も無かった様にそれを軽々しく掻い潜り電撃を飛ばす少女へと接近する

「正解はァこの俺ェ、一方通行でしたァ」

笑みを溢している白髪の少年から振るわれる圧倒的な力

悪魔の様な表情を浮かべているその少年は少女の身体へと手をかざす

次の瞬間、路地裏の辺り一帯に飛び散る鮮血、

傷ついた少女は無惨にも血だるまになり力無く地面にへと伏せた

「…はん、手応えのねェな」

一方通行という少年はそう言うと一路地裏の闇の中へと消えていった

――――――――――

御坂妹が殺害されてしばらくしたその後、

平和島静雄は御坂美琴から情報を聞き出すべく常盤台の寮を訪れていた

（……『国士無双』の浜面達に情報収集は一応頼んだが、多分一番知ってやがるのは間違いなくこいつだ）

確信に近い物を感じて立ち寄った常盤台中学の寮

静雄はとりあえず御坂美琴の部屋へと向かう為のオートロックを鳴らす

（多分この部屋だったが…）

間もなくして、一人の少女の声がオートロックの向こう側にいる静雄の耳へ聞こえてくる

「はい、どなたかしら」

「あー…、済まねぇ御坂美琴って奴の部屋じゃねぇのか」

寮の番号の押し間違えに思わず出た少女に謝る静雄

「いえ合ってますわ、お姉さまならまだ寮には帰っていませんですわよ」

「…何？」

少女から発せられた言葉に静雄は思わず反応する

帰っていないのなら、まだ学園都市の何処かに居るのは間違いない

「分かったぜ、ありがとよ」

一言その少女にお礼を述べてオートロックを切り常盤台の寮から飛び出した静雄

そして、御坂美琴を探すべく静雄は全力で学園都市を駆け出す

とりあえず御坂美琴が行きそうな様々な場所を一通り見回る静雄

だが、彼女はいっこうに見つかる気配は無い

（クソが何処に行きやがった！）

悪態を吐いてもなお諦めずに学園都市を走り回る静雄

辺りはすっかり暗くなっていて夜の街灯があちらこちらで点灯している

（……いねぇ……）

静雄は膝に手を置いて、ひとまず中腰になり息を整える

そして…、再び顔を上げて駆け出そうとした矢先だった

「……お！」

静雄の目線の先に鉄橋の上に立って悔しそうに歯を食い縛っている御坂美琴の姿……

すかさず、息を切らしながら御坂美琴に近寄る静雄はゆっくりと口を開く

「……オイ、探したぜ」

静雄から声をかけられた美琴はピクリと反応して静雄の方へと振り返る

「アンタ……」

唖然とする美琴に静雄は息を整えてゆっくりと口を開く

「……何やってんだよ馬鹿」

すると、美琴はそんな姿の静雄を見て笑みを溢し鉄橋にもたれ掛かる

「見ての通りよ……」

平然と何事もなく話す御坂美琴

だが、静雄ははぐらかす様な素振りを見せる御坂に青筋を立てて口を開く

「一人で突っ走ってんじゃねぇよなんで俺達を頼らねぇ…」

静雄は苛立ちを隠せないでいる

こんな風に自分を頼らない気丈な御坂美琴、

だが、本当は誰かに助けてもらいたいという悲痛の思いでいっぱいのはずだ

すると、静雄は自分の学生服の懐に手を突っ込み何かを取り出す

「あの妹達を助けるために破壊してまわってんだろ？」

懐から取り出した一枚の紙を御坂美琴に見せ訊ねる静雄

御坂美琴はその紙を見て一瞬驚いた表情を見せたが、再び静雄から視線を逸らして口を開き話し出す

「アンタ知ってたの、私が力を使って研究所を襲撃してたの」

「……俺の後輩からこの間コイツを渡されたんだよ…、ビックリしたぜ、まさかテメェが一人で研究所を潰して回ってるってのにはな」

静雄はそう言うと悲しげな表情を浮かべて鉄橋から眺めている御坂美琴を見詰める

「もう、やめろ……
お前がこんなに苦しむ必要なんざねぇ」

しかし、御坂美琴はそんな静雄の言葉に思わず笑みを溢し、

一人、遠い景色を眺めて御坂美琴はそんな静雄に語り始める

「そうね、アンタにはわからないわよ…、妹達はね私がＤＮＡマップを提供したばっかりにこんな風に殺されてるの、自分自身の事を実験道具って言ってるのよ？ホンット……くだらないわよね」

俯いて静雄に悲しげに話す御坂美琴、

今の彼女は何も出来ない悔しさと原因である自分自身に物凄く負い目を感じているようだった

しかしながら、静雄はそんな御坂美琴に近づき彼女の胸ぐらを掴みゆっくりと口を開く

「……、わかる訳ねぇだろうが！！

それでテメェが自分自身を責めた所で何も変わりはしねぇ！！

なんでそんなに辛いなら助けを乞わねぇ！！どんなに気丈になって振る舞っててもなぁ！！

そいつは強いとは言わねぇんだよ！！」

静雄はそう言うとゆっくりと御坂美琴の胸ぐらを掴んでいた手を離す

「だから……テメェの代わりに俺がそいつをぶち壊す！！」

自分に対して怒鳴り叱る静雄に思わず驚いた表情を浮かべる美琴

「ぶち壊すって…、無理よ学園都市で一番強い一方通行は攻撃が全て反射されるのよ！そんな奴にあんたが……」

しかし、静雄は御坂美琴の言葉には全く動じず平然と話し出す

「……何だろうが関係ねぇ」

引き留める御坂美琴に静雄は自身のサングラスを外して淡々と答える

すると、遠方から聞こえてくる複数のバイクのエンジン音

それは静雄の背後に全て停まり、その内一人の男から一枚のライダージャケットが静雄へと投げ渡される

渡されたジャケットを羽織り御坂美琴に背を向ける静雄

――その背中には真紅の龍……

「……静雄さん次の実験場所がわかりました」

その男の言葉に頷く平和島静雄

そんな静雄の姿を見ていた唖然とする御坂美琴

「……アンタ一体――」

目の前の信じられない光景に思わず口を開き訊ねる

すると、御坂美琴の方へと振り返った静雄は当然の如くこう答えた

「――テメェのダチ公だ」

静かな学園都市の夜に、今再び何かが起ころうとしていた

一方通行（前書き）

訂正入れますでは

一方通行

学園都市が月明かりに照らされ静まり返っていた頃
学園都市最強の白髪の少年
一方通行は狂喜の笑みを浮かべて大きなコンテナ上から一人の少女を見下していた

「…なァ、実験は後どれくらいで始まるんだよ」

「間もなく開始時刻ですが、とミサカは貴方に簡潔に答えます」

白髪の少年――…一方通行は一息入れてそのコンテナから飛び降り首の骨を鳴らす

「テメェらも暇だなァ俺に殺さる為にわざわざ殺り合うなんてェ馬鹿すぎて笑えんぜェ」

「……それがミサカ達の存在意義ですから」

一方通行の言葉に無表情のまま返答する短髪の少女

短髪の少女から返ってきたつまらない返答を聞いた一方通行は深いため息を吐き彼女に話し出す

「……はん、話した俺が馬鹿だったぜェ、所詮は人形かよ、もういいぜェそれじゃそろそろ殺り合おうや」

「実験開始時刻、では開始します」

すると、言葉を発すると同時に一方通行の目の前にいた少女はいきなり彼に向かい手から電撃を飛ばす

「……はァ、何ですかァ？ちったァマシに成ったと思ったら大して変わんねぇなァオイ」

しかし、電撃を浴びせられた一方通行の身体には傷一つ無い

少女は走ってその場から駆けて一方通行に背を向けつつ再び電撃を放つ

「ホラホラ愉快なケツを振りながら無様に逃げ回れェ」

だが、どの攻撃も白髪の少年には届かず全くの無傷

彼女から出された電撃は白髪の一方通行に触れる瞬間に全て弾かれ四散する

すると、先程まで余裕の表情を浮かべていた一方通行は顔を歪め口元を抑える

（……あァ？、なんだ？）

すかさず自身の辺りを見回して確認する一方通行

（成る程なァ、さっきの連続した電撃は電気分解してオゾンを作ってた訳か……）

ポケットへ手を入れて嬉しそうに微笑む一方通行

そう、一見一方通行から逃げ回っている様に見えた彼女はちゃんとした戦闘を行なっていたのだ

「いいねェいいねェちゃんと敵やってくれてんじゃねェかァこれで俺もちょっとはァやりがいがあるってもんだぜェ」

一方通行はそう呟くと地面に足を踏み入れ超加速し、

一瞬で逃げていた少女との間合いを詰めて殴り吹き飛ばした

「ぐぅ！！」

殴り飛ばされた少女は顔を歪め地面に二回三回転がって伏せる

ポケットへ手を突っ込んだまま悪魔の様な笑みを溢して彼女へと近づいてゆく一方通行

「だけど、残念だったなァ……、俺のベクトル操作の前じゃあんな小賢しい真似は無意味だァ」

そして一方通行は伏した少女に近付きながら微笑む

しかし、一方通行の背中に悪寒が過りピタリと少女へ近づくのを止める

そして、彼がその悪寒を感じる背後へと振り返ろうとしたその時だった

バキィ！！という鈍い音と共に何者かの拳が顔面を捉えて凄まじい勢いで一方通行は吹き飛ばされる

軽々と吹き飛ばされる一方通行の身体

殴られると同時に感じる身体中を駆け巡る衝撃

「…カハ！！？」

凄まじい音を立てて遠方にあるコンテナに叩きつけられる一方通行、

殴られた本人は何が起こったのか全くわからない

そしてそんな一方通行の目の先には黒いジャケットに身を包んでいるサングラスを掛けた金髪の男の姿……、

「……よォ学園都市最強」

その男はゆっくりとサングラスを外して真っ直ぐに一方通行を見据え口を開く

「…あ、貴方は……」

突如、彼女の目の前に現れた真紅の龍、
短髪の少女は目の前の信じられない光景に唖然とする
ゆっくりと殴り飛ばされた身を起こしてと現れた男を見据える一方通行
「…ははははァ、おもしれェ、誰だよテメェ……」
一方通行は殴られた顎を押さえて立ち上がり目の前の男に訊ねる
すると男は微笑み近くで倒れている御坂妹を指差してゆっくりと口を開く
「――コイツのダチ公だ覚えとけド三流」
そう言うと首の骨をゴキリと二回鳴らして一方通行と対峙する
池袋最強――平和島静雄
彼は今までに無いような威圧感を醸し出してコンテナへと吹き飛ばした一方通行へと一歩づつ近づいてゆく

「来いよォ…強いってのは何かを教えてやる」

足に力を込めて再び立ち上がる一方通行を挑発する静雄

殴り飛ばされて好き勝手に話す静雄に青筋を立てて瞳孔を見開く一方通行は不気味な笑みを溢す

「面白れェひとまずテメェからァぶち殺す……」

静雄へと殺気を放つ一方通行、

だが、それに対して全く動じず、恐れず、一方通行へとさらに近づく静雄

そして、頃合いを見て互いに動かしていた足をピタリと止める

――互いに対峙する両雄は正に一触即発の状況、

…そして空気が静まり、

対峙する彼等は怒りを露にし、大声を同時に張り上げて襲いかかる

「…吠えてンじゃねぇぞ三下ァァァァァァ！！」

「調子こいてんじゃねぇぞコラァァァァ！！」

互いに大声を掛け声にし共に駆け出す二人、

ものすごい勢いで二人は互いに激突し、爆発音と共に辺りは土煙に包まれて御坂妹は再び吹き飛ばされる

「くぅ！！」

あまりにも凄まじい爆風、

しばらくして、その土煙の中から吹き飛ばされた人影は御坂妹の後ろにあったコンテナへと衝突する

「がぁ！！？」

コンテナに叩きつけられ表情を曇らせる白い髪の青年

そう、コンテナへ叩きつけられたのは殴り飛ばされた一方通行だった

（クソがァどうゆう事だァ！！なんで反射出来ねェ）

意味のわからない状況に動揺を隠せないでいる一方通行、

何故かは知らないがあの男には自分自身の能力である反射の力が全く作用しない

――そんな一方通行の動揺もつかの間、

先程、激突した土煙の中から金髪の男が鬼のような形相で拳を握りしめ、一方通行の前に姿を現す

「オイ立て…」

静雄は動揺を隠せないでいる一方通行に近付きながら自身の指の骨を鳴らす

――圧倒的な威圧感、これまであった奴等の中で感じたことのないこの男から感じる重圧――――

「テメェが殺した一万発、歯ァ食い縛れ！！」

そして、力を込めて再び振るわれる静雄の右拳、

学園都市最強と池袋最強の戦いの火蓋が切って落とされた

天下無双（前書き）

一方通行対平和島静雄

天下無双

「歯ァ食い縛れやァァァァ！！」

一方通行に向かい叫び声を上げて右拳を振り下ろす静雄

振り降ろされた静雄の拳が再び頬を捉えて一方通行大きく後方へと吹き飛ぶ

「グォ！！」

そして、殴り飛ばされた一方通行は再びコンテナに叩きつけられ、その衝突したコンテナには大きなクレーターが出来上がっていた

コンテナに叩きつけられた一方通行へと歩を進める静雄

「ほら立てよ最強」

そして、彼は拳を鳴らして、一方通行を再び挑発する

（……くそがァ!?なんで反射出来ねぇんだ!!）

自分の力が通用しない事に戸惑いを隠せないでいる一方通行は一旦静雄から距離をとる

近くにあったコンテナの上へと逃げる一方通行、

すると、冷静に静雄の回りを見て一方通行は何かに気付いた様に笑みを溢した

「ははァー…、なァ三下ァ粉塵爆発って知ってるかァ?」

「あん?」

話し出す一方通行の言葉に首を傾げる静雄

周りを見渡せばコンテナに入っていただろう大量に空中に舞う小麦粉の粉

「ざァんねェンでしたってなァ……!!」

次の瞬間、凄まじい爆発音と共に一瞬で辺りには爆煙が上がり静雄

は炎に包まれる

「ハハハハハハァ！！」

ドカァン！！と鳴り響く轟音、間違いなく静雄に直撃した爆発

爆煙と土煙が舞い上がり一方通行は静雄の死を確信していた

あの状態で爆発を直撃すれば、常人なら火だるまになり即死は免れない

（間違いなく今のは直撃だァ、即死だなァありァ）

一方通行の目の前で舞い上がる爆煙と土煙はだんだんと風で吹き飛ばされてゆく

だが、そこには信じられない光景があった

「……クソッタレがやってくれんじゃねぇか」

身体から大量に血を流してもなお立っている平和島静雄の姿

「ハハハァ……？あァ？」

笑い声を上げていた一方通行はピタリと止めて驚いた表情を浮かべて立っている静雄を見る

（……んだとォ！！間違いなく直撃した筈だァ！）

血を流して二本足で立っている静雄を見て唖然とする一方通行

しかし、静雄の身体は左右に揺れて安定していない

「はァ…！！ダメージはどうやらある見てぇだなァ三下ァ！！」

「……」

「……せぇ」

無言で立っている血だらけの静雄に再び勝利を確信する一方通行

「……あん？」

血塗れの静雄から放たれる一言に首を傾げる一方通行

すると、静雄は全力で一方通行へと駆けてゆく

そして、信じられない跳脚力で飛び上がり一瞬で間合いを詰める

「うっせぇつってんだよ!!このド三流が!」

次の瞬間、コンテナに乗っていた筈の一方通行の右頬に間合いを詰めた静雄から蹴りが放たれる

「がァ!!」

一方通行の身体は大きく吹き飛び遠方にあった鉄骨の積まれてある辺りに落下する

「……テメェがどんな理由があってアイツラを殺したのかは知らねぇよ、でもなァ……そんなことしても強い奴になんてのには成れねぇんだよ……」

一方通行を蹴り飛ばした静雄はそう言うとフラフラと左右におぼつ

かない身体を奮い立たせて鉄骨のある方へ落下した一方通行に近付いてゆく

「……だから俺がテメェをぶっ飛ばして止める」

「……うるっせェ……」

鉄骨の中から立ち上がる一方通行は手を近くに落ちてある鉄骨に添える

「うるせェンだよクソッタレがァァァァ！！」

一方通行の手に添えられた鉄骨は静雄に向かい次々と飛んでゆく

「……んなふざけた考えはなァァァァ！！」

すると、一方通行が飛ばした鉄骨を膝が折れながら掴み取る静雄、

「ぐぅ…！！ざけんなコラァ」

自身の身体に再び気合いを入れて掴み取った鉄骨を豪快に振り回し、

自身に向かい飛んでくる鉄骨を次々と叩き落とす

「全てェぶち壊してやらァァァ！！」

鉄骨を振り回して全て撃ち落とした静雄は息を切らしながら持っていた鉄骨を投げ棄てる

「はぁ……はぁ……！」

じっと前方にいる一方通行を見据える静雄

そして、力無くガクリと膝が折れて地面に右手を付く

「はぁ……はぁ……どうやらァ……そろそろ決着みてェだなァ」

息を切らしながら話す一方通行は膝を折り地面に手を付く静雄を見て言う

「最後にィとっておきをみせてやるよ三下ァ」

そう言うと天に向かい両手を大きく広げる一方通行、

間もなくして一方通行の口から呪文のような言葉が聞こえてくる

「コキカカクキコカクキコカー」

両手を大きく広げた一方通行の手には青白く光る物体

「いけない！あれは……」

思わず口を開く御坂妹、

一方通行の両手の中には次々と光の玉が集合している

「……やめとけ」

ピタリと突然動きを止める両手を大きく広げた一方通行、

すると、両手を大きく広げた一方通行の後ろから一人の少女がコインを手に乗せて構えていた

「やらせない！」

コインを手に構える少女、御坂美琴は両手を大きく広げて背を向けて話す一方通行に言う

「……手ェ出すんじゃねぇよ」

その場を切り裂くような一言、

彼女の目線の先には血塗れで膝を付いてもなお立ち上がろうとする静雄の姿

「……ちょっとあんた！！…」

静雄はゆっくりと立ち上がり血塗れの身体を奮い立たせる

「……男同士のタイマンにてェだすなんてのは野暮だぜ……」

立ち上がる静雄はやはり出血の量が深刻なせいか足元がおぼつかず左右に揺れている

「なァ上条ォ……」

御坂美琴がふと後ろを振り返るとツンツン頭の青年、上条当麻の姿があった

「……なんで！！」

驚いた表情を浮かべている御坂美琴、

すると、現れた上条は血塗れの身体になった静雄の姿を見て呆れたように話し出す

「なんつぅか、お互い馬鹿だよなこんな戦いに首突っ込むなんてさ」

「お人好しはお互い様だろうが」

上条の言葉に微笑み返す静雄、

上条はそんな静雄の姿を見て真剣な面持ちで話し出す

「いいぜぇ静雄、お前のタイマンっての俺が見届けてやるよ」

上条の言葉に拳を握り締める静雄はゆっくりと一方通行へと一歩づつ足を進める

不愉快なやり取りに苛立ちが隠せない一方通行

「勝手に盛り上がってンじゃねぇぞ三下ァァァァ！！」

手に蓄えられた力（プラズマ）を怒鳴り声を上げて静雄へと投げ飛ばす一方通行

一方通行から放たれた力（プラズマ）はバチバチと音を立てて前方にいる静雄へと向かってゆく

しかし、静雄は逃げずに大きく拳を振り上げて放たれた力（プラズマ）へと駆ける

「舐めてンじゃねぇぞコラァァァァ！！！！」

そして、降りかかる力（プラズマ）に傷だらけの身体で拳を振るう静雄

凄まじい爆発音は辺りに響き渡り、静雄は真っ直ぐ向かってきた力（プラズマ）に対して自分自身の拳に力を込める

「オラァァァァァァァ」

――次の瞬間、

ゴウ！！という凄まじい轟音と共に静雄へと向かって飛んだ一方通行の力（プラズマ）は四散する

「……ンだと！！！」

自身の作り上げた高密度の力（プラズマ）が打ち破られた事に唖然とする一方通行

勢いを保った静雄はそのまま唖然とする一方通行へと駆ける

「…俺の最強はァァァァ！！」

力を込めて振るわれる拳に最早対抗する手段が見当たらない一方通行

「……ガッツリと響くぞォォォォ！！！！」

凄まじい轟音をたてて池袋最強の拳が学園都市最強の顔面を捉える

それは先程までの力とは桁外れ、

一方通行の身体は力無く上空へと舞い上がり

そして……、遠方の地面へと叩きつけられる

「やった……」

御坂美琴は学園都市最強を殴り飛ばした静雄へと目をやる

血塗れの身体で立っているその男は猛々しく勇ましい姿だった

「はぁ…はぁ…ぐ！」

大量に血を流して力無く膝を折りバタンと倒れる静雄

「……静雄！！」

すかさず血塗れの身体で倒れる静雄に近寄る上条と御坂美琴、

「ちょっとしっかりしなさい！！」

血塗れで倒れている静雄に必死に声を掛ける二人

こうして激突した最強同士の激しい戦いは決着を迎えた

冥土返し（前書き）

――戦いが終わった静雄はいかに

冥土返し

――とある窓のないビル内

培養液で逆さになっているアレイスタークロウリーと目の前に対峙している折原臨也

そんな中、学園都市統括理事長のアレイスタークロウリーは驚いた表情で対峙している折原臨也へと話し出す

「……ほうあの一方通行を倒すとはね……彼の行動は全く予想外だ……」

感心するように一人呟くアレイスタークロウリー、

そんなアレイスターに折原臨也は口を開き答える

「まぁ……それがシズちゃんだからねぇ彼の力に限界（リミッター）なんてものは存在しないから……」

アレイスターの言葉に肩をすくめて返答する臨也

そんな臨也は愉快に笑みを溢しながらアレイスターに話を続ける

「……それでさ例の計画だけどさ、これ以上やるならシズちゃんの怒りの火に油を注ぐ事になるよ」

「……わかっている私もそこまで愚かではない、唯一、あの『ドラゴン』や私と対峙してもなお、同等、いやそれ以上の力を持つ者を暴走させるなどという馬鹿げた事はな……」

アレイスターの言葉を聞いていた折原臨也は嬉しそうに微笑む

「まぁ僕は単に面白ければいいからね、殴り飛ばされたキミの姿を見てみたい気もするし」

「……冗談はよしたまえよ折原臨也、あんな力を振るわれていては身が持たん」

折原臨也の言葉に呆れたように返すアレイスタークロウリー

臨也は嬉しそうに微笑みそんなアレイスターに話を続ける

「『神を畏れぬ身にて天上に立つ者全てを砕き落とす者』ねぇアハハ！！全く持ってシズちゃんは面白い」

ビルの内部に呟かれる一言、

そして、頭を抑えて愉快に笑い声を上げる折原臨也

その愉快で高々な笑い声はひたすら窓のないビルの内部に響き渡る
――

――――――――

とある学園都市にある一つの病院

ベッドの上で寝ていた平和島静雄は目を覚ましゆっくりと起き上がる

「……ここはァ」

辺りを見渡した静雄はここが病院だという事を理解するのにそこまでの時間はかからなかった

そこには驚いた表情を浮かべて立っているカエル顔の医者の姿

「……君の回復力ってスゴイよね全くもってファンタジー？」

「あん？誰だよアンタ」

寝起きの静雄は機嫌が悪そうに起き上がりカエル顔の医者に訊ねる

「僕はここの医者さ、冥土返しって言われてるね」

ふーん、と素っ気なくカエル顔の医者の言葉に返答する静雄

そんな静雄に対して冥土返しは話を続ける

「いったい君の身体は一体どうなってるのかな？」

驚いた表情を見せる冥土返しは何事もなく受け答えする静雄に更に話をする

「粉塵爆発の外傷の際君の身体に大量に身体に付着した小麦粉やその他諸々のせいでダメージが深刻そうだったがまさか七時間寝ただけで全て治ってしまうなんてね」

「俺はいつもこうだぜ」

平然と答える静雄にため息を吐き頭を抑えて左右に振る冥土返し

「医者要らずね、今回はベッドを貸しただけでほとんど僕は治療してないよ……」

若干、残念そうな冥土返しは平然とする静雄に何かを思い出したよ

うに話し出す

「あ、それと今から君に面会が来てるみたいだからこれで失礼しようかな」

静雄に一言そう言うと冥土返しは病室から出ていってしまった

しばらくして、恐る恐る静雄の病室に足を踏み入れる短髪の少女

「……失礼するわよ」

御坂美琴は顔を若干赤くしながら静雄の前に姿を現した

「……ンだよテメェかよ中坊、てっきり上条が見舞品持ってきた思って期待しちまったぜ」

しかしながら、静雄はがっかりとした様子でベッドで寝返りうち不満げに呟く

「な、なによアンタ！！心配して来てやったのに！」

「悪ィがもう完治してんだよホラな」

そう言うと御坂美琴に手をヒラヒラさせて返す静雄

「ふん！！私だって見舞品位持ってくるっつうの！！」

そう言うと何やら静雄に手渡す御坂美琴
それを渡された本人は何やら不思議そうに首を傾げている

「……何だよコレ」

「クッキーよクッキー！！わざわざ買ってきてやったんだから感謝しなさいよね」

七時間も寝て腹を空かせていた静雄はとりあえず手渡されたクッキーの入っている入れ物の蓋をあけて口に入れる

「うん、うめぇ、間違いなくテメェの手作りじゃねぇなこりゃ」

「どういう意味だコラァ！！」

ピリピリと静雄の一言に髪を逆立たせる御坂美琴

そんな御坂美琴を見て嬉しそうに微笑む静雄は頭に手を置く

「ようやく元の調子が出てきやがったか
ショボくれたテメェの顔なんざ似合わねぇからな」

「い、意味わかんないし…頭に手を置かないでよ」

ゲシゲシと力良く頭を撫でる静雄に若干顔を赤くしている御坂美琴

すると、次は深刻そうな表情を浮かべて静雄に話し出す

「……あの後ね一応あの実験は凍結したわ、学園都市上層部の指示だって」

御坂美琴はため息を吐き更に関心が無さそうに適当に答える静雄に話を続ける

「研究所にいる全ての妹達は生活保護が学園都市から本格的にされるらしいのよ全部アンタのお陰ね」

だが、静雄はそんな御坂美琴の言葉に左右に首を振りゆっくりと口を開く

「違ぇよ、俺だけの力じゃねぇ、妹達は俺の仲間が頑張って上の交渉に励んでくれたお陰だし、テメェや上条みたいなダチ公が支えてくれた成果だ……俺はそれにちょっと加担したにすぎねぇよ」

静雄はそう言うとベッドから窓の外を眺めながら御坂美琴に答える

そんな静雄を見て何かを思い出す御坂美琴

「……それでさ、聞きたかったんだけどアンタって一体何者な訳？」

窓の外を眺めている静雄に迫るように訊ねる御坂美琴

だが、静雄は相変わらず平然とした様子で訊ねる御坂美琴にこう答えた

「只のテメェのダチ公さ」

病室の窓に広がっている真っ青な空を眺めて御坂美琴に答える静雄

こうして静雄と学園都市最強との戦いは静かに幕を閉じたのだった

和気藹々（前書き）

訂正しますではｏ（＾－＾）ｏ

とある薄暗く見通しの悪い何処かの裏路地にて
スキルアウトの集団に囲まれている一人の少女

「ねぇ良いじゃん俺達とどっかにあそびいこうぜぇ」

囲んでいる少女に対してその男達の一人は強引に見える手段で迫っている

……当然の如く顔を曇らせてあからさまに嫌そうな表情を見せる少女

「何度も言ってますが退いてください邪魔です」

はっきりとした口調で少女は自分を囲んでいる男達を睨み付け言い放つ

だが、彼女を取り囲む彼等は一向に動く気配はなく、それどころか

先程よりも彼女に執拗に迫る

「ただの中坊が粋がらないほうがいいと思うぜぇ、こう見えて俺らレベル３の超能力者だし」

少女に対して青筋を立てて脅しを掛ける一人の男はニヤケつつ少女の肩に手を置く

「！！触らないでください」

すかさず少女は馴れ馴れしく置かれた男の手を弾き飛ばす

手を弾かれた男は眉間にシワを寄せて拳を握る

「……ッ！！なにしやがんだこのアマァァ」

声を張り上げ少女に向かい握った拳を感情のままに振り下ろす不良

――とその時だった

殴り掛かろうとした男は次の瞬間、彼女の視界から消える

「……え？」

目の前で起こった突然の出来事に眼を丸くして唖然と立ち尽くす少女

少女は恐る恐る消えた男の姿を左右に首を振り探し出す

すると、どういう訳かビルの高い階の辺りに、先程まで自分の目の前に居た男がドでかいクレーターを作ったまま、白目を剥いて気絶しているという信じられない光景がそこにはあった

そして、彼女の目の前に現れた金髪にサングラス、それに紅い龍の模様が入った漆黒のライダースジャケットを身に纏っている男

その姿を見た男達は後ろへと後退し、段々と顔が真っ青になる

「…こ、『国士無双』！！」

「し、しかもコイツは…」

そう男達の目の前に立っていたのは学園都市に君臨するもう一人の第一位、

そして、今、学園都市で最も喧嘩を売ってはならない男

――恐怖する彼等は口を合わせてこう名前を叫ぶ

「「へ、平和島静雄！！」」

「あぁー…、まぁたテメェら中坊なんてナンパしてやがったのかァ」

悲鳴を上げる暇なく吹き飛ばした男を殴り終えた静雄は首の骨を左右にゴキリゴキリと鳴らし、

自身の腕をぐるぐる振り回すと後退る不良達にゆっくり近づいてゆく

「ひィィィごめんなさ…」

不良の内のひとりが謝ろうと頭を下げるが、その瞬間と同時に静雄の拳がめり込み凄まじい轟音を立て地面を転がり血だるまに成る

「ぎゃあああ助け…！！」

不良の最後の一人は静雄から頭を足で刈られてすさまじい勢いで近くのビルに巨大なクレーターを作り上げた

そして、振り切った足を元の位置へと戻す静雄

「大丈夫か嬢ちゃん？」

そして、一息ついた静雄は不良達から囲まれていた少女の方へ振り向くと微笑み訊ねる

「あ、はい！！大丈夫です」

元気良く何事も無かったように話し掛けてくる静雄に戸惑いつつも答える少女

すると、パンパンと両手を叩く静雄はそんな少女の姿を見て安心した微笑み口を開く

「そうか、なら良かった、最近は何かと物騒だからな、気をつけて帰れや嬢ちゃん」

そう言うと手をヒラヒラさせてその場から立ち去る静雄

少女はその紅い龍の身に纏った背中をただぼーと見つめるのだった

――――――――――

「…って事があったんですよ御坂さん」

「……」

とある家族連れが多いファミリーレストランの一角、

中学生の御坂美琴は後輩の白井黒子と友達の初春飾利、

そして、先程まで何やら先日の事を熱弁していた佐天涙子とともに食事をとっていた

そして、現在進行形で佐天の話を黙って聞いていた御坂美琴は思い当たる人物が頭を過り顔をひきつらせている

「ねぇ…そいつえらく馬鹿力じゃなかった?」

「はい！！殴られた人がまるで宙を舞うように軽々と飛んでいきました」

まるで、子供の様に目を輝かせて嬉しそうに答える佐天涙子

しかしながら、その話を聞いて思わず頭を抑えてため息を吐く御坂美琴

「どうしたんですか御坂さん？」

「ごめん…そいつ、多分私の知り合いだわ」

頭を抑える御坂美琴はその場にいた全員に突然口を開き答える

そう、馬鹿力で人をビルの上階の位置まで軽々と殴り飛ばす人物は御坂美琴の頭の中で一人しかいない……

奇抜な金髪でサングラスを掛けた馬鹿力を持つ男

すると、隣に座っていた白井黒子は何やら慌ただしい表情を浮かべていた

「ど、どうゆう事ですのお姉さま？……は！まさかあの時寮に訊ねていらした殿方は……」

どうやら御坂美琴の後輩である白井黒子は気付いたらしく口走る彼女

「え！！、ちょ、ちょっとそれ聞いてないわよ黒子！！」

すると、聞き覚えの無い話に後輩の白井黒子に言い寄る御坂美琴、

しかしながら、そんな御坂美琴の様子を見た白井黒子は不気味な笑みを浮かべて話し出す

「…フフフ…成る程、一度その殿方とはお姉さまについて話す必要がありますわね」

「ちょっと勘違いしないでよ！！というかアンタ、アイツに喧嘩売ったら即殺されるわよ」

しかしながら、白井黒子は全く聞く耳を持たず一人なにやら不気味に笑い声を上げていた

「…それで御坂さん……？その静雄さんって……？」

恐る恐る御坂美琴に訊ねる佐天涙子、

すると、御坂美琴はゆっくりと口を開き佐天に話し出す

御坂美琴は静雄に会った経緯やその人物がどうゆうものかを事細かに佐天と初春に説明した

「へぇー…、学園都市第一位でしかも、

脳開発を受けていない無能力者なんてとんでもないですね」

「そうなのよ、しかも常人なら即死は免れない致命傷も傷口塞いで寝れば治るなんてとんでもない奴なのよ」

その話を聞いていた隣の席にいる白井黒子は顔がだんだんと真っ青になって固まる

「じぁ、私はさっき…」

「私、てっきりアンタが自殺願望だと思ったわよ」

己の愚かさに気付き顔を真っ青にしている白井黒子に対して頷き答

える御坂美琴

すると、佐天は御坂の手を握り頼むように口を開く

「じぁ、今度会ったらお礼させてくださいって言ってもらえませんか御坂さん」

頼むように話す佐天に一時の間首を捻り考え込む御坂美琴

すると、そんな佐天にゆっくりと口を開き答える

「……んー、わかったわ、佐天さんの事ちゃんと伝えといてあげる」

手を握り締め頭を下げる佐天に微笑み答える御坂美琴

佐天の顔はパァと明るくなり嬉しそうに笑みを浮かべている

「ありがとうございます！！」

お礼を述べる佐天涙子

しかしながら、頼まれている美琴は何やらひきつった笑みを溢している

（たく、あの鈍感男は…！！）

思わず静雄の顔を思い浮かべて怒りをどうにか押し殺す御坂美琴

こうしてファミリーレストランでの友達との楽しい一時は過ぎていくのだった

暗雲低迷（前書き）

――アイテム編突入しますではではー

暗雲低迷

一方通行と平和島静雄との激しい戦闘が行われたその後、

とある何処かの廃工場内、

そこには、まるでホストの様な格好をした男とドレスに身を包んでいる少女の姿

「貴方も暇ねこんなチンケな依頼を受けるなんて」

少女は呆れたように廃工場内の辺りを見渡しため息を吐く

彼女の視線の先にある廃工場内にはいたるところに血塗れになり虐殺されている死体……

「まぁな、依頼がスキルアウトの殺害なんてのは確かに手応えがねぇ」

茶髪にホストのような格好をしたその男はそう言うと転がっている死体を蹴り分けて目の前の少女に答える

「『スクール』の仕事も最近はなんかショボくなって来やがったな、つまんねぇ」

茶髪の少年はそう言うと近くの壁にもたれ掛かり残念そうに深いため息を吐く

「そんな貴方に上からの依頼よ」

ドレスを着た少女から渡される一枚の資料

ため息を吐く茶髪の少年はそれを手に取り一通り目を通す

「へぇ……こんかいはやりがいがありそうな内容じゃねぇか」

内容を見て思わず笑みを溢す茶髪の少年

彼は一通りその資料に眼を通した後、ドレスを着た少女にその資料を手渡し返す

「貴方にとっては朝飯前でしょこんな仕事」

少女は笑みを溢し資料を返して壁にもたれ掛かる茶髪の少年に話を続ける

「学園都市第二位、垣根帝督にとってはね」

ドレスを着た少女の言葉に沈黙して微笑む茶髪の少年

――学園都市第二位垣根帝督

そして廃工場の壁に寄りかかる彼は一言ドレスを着た少女にこう答えた

「俺の未元物質に常識は通用しねぇ……覚えとけ心理定規」

廃工場内に響き渡る垣根帝督からの一言

今、正に学園都市の闇が蠢く瞬間だった

――――――――――

……一方通行との決闘、

あの波乱の様な出来事から2日が経ち
ようやく学園都市での平穏な時間を過ごしていた静雄

そして、そんな彼は現在、アイテムをまとめているリーダーである麦野沈利から説教をされていた

「アンタはいい加減にしなさいよ!!二日間もアジトに帰って来ないなんて何やってたのよこの雑用!!」

「うるせぇな、だから悪かったつってんだろ、ほらお詫びにあの弁当が美味しい店の鮭弁買ってきてやったから機嫌直せよ」

怒鳴り声を上げる麦野の機嫌を直す為に買ってきた鮭弁当

そう、静雄は丸々二日間アイテムとの連絡を断っていた為、バイトである雑用としての仕事を全くこなしていなかった

まぁ、それも御坂美琴を助けるべく、色々と走り回っていたせいでもあるのだが

静雄から渡される弁当を見て思わず口を閉じる麦野沈利

時間が経つにつれてどうやら静雄はこのアイテムの扱いには大分なれてきたようだ

「……ぐ！卑怯よそんな鮭弁なんかで」

「それじゃ要らねぇのか？」

静雄の言葉に揺れる麦野、

そしてしばらくして、渋々目の前にある弁当に手を伸ばす

呆れたように手渡された鮭弁と同時に麦野を見て深いため息を吐くアイテム一同

「はぁ～…結局、欲望に忠実な訳よ」

「素直だね麦野は」

そんな麦野の行動を見て何故か納得してしまうフレンダと滝壺の二人

「う、うっさいわよ！鮭弁の価値はアンタ達には一生分かんないわよ」

図星の麦野は顔を真っ赤にして滝壷とフレンダに怒鳴る

「あ、あと幽、今夜仕事入ったから開けときなさいよまたどっかいったらぶち殺すからねアンタ」

（あー…、うぜぇ）

麦野の説教に内心、面倒臭そうに感じた静雄は洗う皿が大量につまれている台所へと足を運び皿洗いをしだす

「それにしてももう幽がアイテムの雑用になって随分経ちますね」

「…案外早かったよね幽がアイテムに馴染むの…」

ふと会った時の事を思い出すように呟く絹旗と滝壷の二人は台所で皿洗いをしている静雄を見て口々に言う

「そうですよねぇ、でも幽って案外肉食系男子に見えて実はウブなんですよね」

「…うん、前に偶然麦野の裸を風呂場で見て、顔を真っ赤にしてたもんね……」

「……麦野ってばあの後、幽を散々からかってた訳よ」

フレンダの言葉を聞いていた二人は静雄が真っ赤にして照れている顔を想像し、何となく納得したように頷く

「アンタ達はもうちょい暗部組織のしての自覚を持ちなさいよ、これじゃ只の仲良しクラブじゃない」

「あーん…！そんなに怒んないでよーむーぎの！！」

そう言うと麦野の背後から飛び掛かり胸元を持ち上げるフレンダ

その瞬間、鈍い音が部屋中に響き渡りフレンダは後頭部を抑える

「なにしやがんだコラァ！！テメェ分解するぞ」

涙目になり皿洗いをしている静雄の後ろにすかさず隠れるフレンダ

「ば…！！、テメ今、皿洗いしてんだからこっち来んな」

「か、幽を盾に使わせてもらうって訳よー！！」

すると、次の瞬間、皿洗いをしていた静雄の閃光の様な拳骨がフレンダの後頭部を直撃する

「うわぁ超痛そう…」

「…二人に殴られた可哀想なフレンダ、…でも私はそんな可哀想なフレンダを応援してる」

台所の床にへばり付くように伏すフレンダ、

何故かは分からないが皿洗いを終えて台所から出てくる静雄と片手でハイタッチを交わす麦野

そして、台所の床にへばり付くように伏せるフレンダに拳を鳴らながら近づく、

「フーレーンーダァ？」

「ちょ、ちょっと待って麦野！！私のライフはもうない訳よ」

拳を鳴らして笑みを浮かべている麦野に顔を真っ青にして話すフレンダ

「ごめんなさい麦野ォ」

涙目で麦野に謝るフレンダ

しかしながら、そんなフレンダに麦野は満面な笑みを浮かべてゆっくりと口を開く

「ブ・チ・コ・ロ・シ・確定ね」

無情の一言、そう言って近づいてくる麦野にフレンダは一気に青ざめる

「い、いやぁあああ!!」

その後、アイテムのアジト中にフレンダの悲鳴が響き渡ったのは言うまでもない

―――――――――――

とある窓のないビル

そこにはアレイスタークロウリーの目の前で一人座り込みチェス盤を使って何かをしている折原臨也の姿があった

「それでぇ？シズちゃん達に『ピンセット』を預けたということかい」

アレイスターは奇妙な行動をしている折原臨也に微笑みゆっくりと口を開き話し出す

「…そうだね、預けたあれは『偽物』だがそれなりの価値がある物だ」

「ふーん君も暇人なんだねぇ…っと」

チェス盤に乗っている将棋の歩を動かしアレイスターに話す臨也

「まぁ僕も今回はシズちゃんの行動に若干興味があるし、彼に久々に会ってあげようかなー」

「君のさっきからやっているそれはなんだい？折原臨也」

次に動かそうとしたチェスのナイトに手を掛ける臨也に訊ねるアレイスター

ナイトを片手に掴んでいる臨也は彼が浮かんでいる培養液へ振り返ると不気味な笑みを溢して嬉しそうにゆっくりと口を開き話し出す

「アハハハ…何って決まってるじゃないクロちゃん」

ナイトを片手に笑い声を上げる臨也に首を傾げるアレイスタークロウリー

折原臨也は片手に持っていたナイトを将棋の王将の前にそっと置いてこう答えた

「…ゲームだよ…」

アレイスターに口を開き答える臨也

学園都市に蠢く闇はだんだんと静雄へとその手を着実に伸ばしていた

非常事態（前書き）

――ハイハイ更新したいと思います

そしてアイテムが仕事を請け負ったその夜、

平和島静雄とアイテムのメンバーは黒いワゴンに乗って目的地まで移動していた

車のハンドルを巧く扱い運転する静雄、

「……それにしても物品の護衛たぁ、また面倒な仕事をとりやがったなコラ」

そんな愚痴を溢しつつ静雄は隣の座席に座っている麦野に話す

「仕方ないじゃない暗部組織の仕事っていうのはそう言うものなのよ」

ため息を吐く麦野はそんなつまらなそうな表情を浮かべている静雄に説明する

「あーあ、私借りてきたC級の映画見損ねちゃいました」

「…あんなつまんなさそうな映画、見る気がしないって訳よ」

後部座席で嘆く絹旗に呆れたように言うフレンダ

「それで？『ピンセット』ってやつの取引場所がその工事現場って訳か」

静雄はハンドルをきり左折しながら隣の座席に座っている麦野に訊ねる

「……そうね、これが何故かは知らないけど重要な依頼らしいのよ、まぁ、幽は今回も車で滝壺を守っててくれればいいから大丈夫よ」

ワゴン車のハンドルを握り訊ねる静雄に微笑み話す麦野

しばらくして、目的地であろう工事現場前に到着する

「あ、着いた」

車が人気の少ない工事現場の前で停車し声を上げる滝壺

「ここでいいんだろ？」

「うんありがとうね物品の受け取るだけだからすぐに終わるわここで待っててて」

シートベルトを外してお礼を述べ車の扉を開く麦野

それに続く様に絹旗とフレンダも麦野の後に続き車の扉を開けて外へと出る

「あ、そうだ幽」

「あん？」

車の扉を開けて振り返り声を掛けてくるフレンダに首を傾げる静雄

「言いそびれてたけど今日アンタに殴られたここ！！いつか必ず倍返しにしてやるからね！！」

自身の頭を指差しハンドルを片手に握る静雄に言うフレンダ

すると、静雄はそんなフレンダに笑みを浮かべて口を開く

「ふぅん、そんときはまたそのドタマがぶっ飛ぶぜフレンダ」

「ぼ、暴力反対って訳よ！！」

そう言って慌ててワゴン車から飛び出るフレンダの姿を見てケラケラと笑う静雄

ワゴン車の扉に手を掛けていた絹旗は、そんな静雄を見て口を開き話し出す

「それじゃ幽、滝壺頼みましたよ、変なことしたらぶっ飛ばしますからね」

「んな事するかよ、早くお前も行け」

ハイ、と元気良く返事を返した絹旗はそう言うとフレンダに続いてワゴン車から出ていく

ワゴン車の中から人気の無い工事現場へと麦野達の後ろ姿を眺めている静雄

そんな静雄の様子を見た滝壺は肩に手を置いて優しく話し掛ける

「相変わらず麦野達の事が心配？」

「あぁ…、まぁな」

滝壺の言葉に頷く静雄は何処か悲しげな表情を浮かべている

「……？なんでそんな顔をするの幽…」

そんな静雄に思わず首を傾げて訊ねる滝壺

静雄は左手にハンドルを握ったまま俯いて滝壺の口を開き答え始める

「……俺は……少しの間しか過ごしてねぇけど、今のテメェらの事を家族ぐらい大切な存在だと思ってる、

いっしょに笑って飯食って、怒鳴りあってつまんねぇ事で喧嘩してよ…」

静雄は自分の話を聞いて黙って見詰めてくる滝壺に更に話を続ける

「そんな奴等がよ……仕事だかなんだか知らねぇけど人様の命を奪

って、いつ死ぬかもわかんねぇ戦いに身を投じてるって考えてたらなんだか悲しくてな……」
話ながらワゴン車のハンドルを握った左手に力を込める静雄
力強く握るその手に滝壷は自分の右手を添えて静雄に微笑む
「……うん、そうだね、私は、私達は確かに家族みたいなものかな？……、だから私はいつもそんな皆の事信じてる」
静雄は自分の手に左手を添えてくる滝壷の方へ振り向き黙って話を聞く
「……だから幽もいつまでもそんな風に悲しい顔してたら駄目……」
そう言って顔を膨らませて怒る滝壷に思わず笑みを溢す静雄
そして、滝壷の頭にポンと手を置いてゲシゲシと撫でる
「ハハハ、そうか、確かにそうだなあいつ等なら簡単にやられねぇか！！」
「……ちょっと頭が痛い幽……」
強く撫でる静雄にピシッっと軽く頭にチョップを入れる滝壷

しかしながら、この時、静雄の心の中では何処か良からぬ不安があった

（――あの……嫌な野郎の匂いがしやがりやがる）

そう池袋にいた時に感じるあの大っ嫌いな人間の匂い

だが、確信がない静雄ははっきりとはそいつが何かを理解出来ないでいる

（あいつがこの街にいる？いや、そりゃあり得ねぇだろ……）

自問自答し滝壷を撫でていた手を離して考える静雄

――とその時だった

ドカァンと鳴り響く物凄い爆発

音の方へと慌てて目をやる静雄と滝壷

凄まじい轟音が辺り一体に響き渡り麦野達が入って行った工事現場

の方から煙が上がっている

「オイ滝壺、ありゃ」

慌てた様子で滝壺に訊ねる静雄、

だが、滝壺からは返事は無く何やら驚いた表情を浮かべ、

彼女はひたすら爆発した工事現場の方を見つめている

「……何か…、いる」

爆発がする方を見詰めてボソリと一人呟く滝壺の一言

静雄はそんな滝壺の表情を見て顔を険しくする

――ＡＩＭ拡散力場の干渉が出来る彼女には静雄に見えてないなにかが見えている

静雄はそんな彼女を見て薄々感じていた嫌な予感が確信に変わった

「……、車…回すぞ…」

黒いワゴン車のアクセルを力強く踏む静雄、

――行き先は爆煙が上がっている工事現場

未元物質（前書き）

――おぉう……なんという相変わらずの急展開

――すいません更新します

未元物質

物品の受け渡し場所だった工事現場内、

そこには血まみれで倒れ息絶えた黒服の男、

そして、辺りには三人の少女が傷だらけで地面に伏している

そんな、少女達に笑みを浮かべて近づく一人の少年……

「なんだぁ、案外、大した事ねぇなぁアイテムってのは」

茶髪にホストの様な格好をしたその少年はそう言うとため息を吐き倒れている三人の少女を見渡す

「だ、誰だよ！！テメェはよォォォ！！！！」

倒れている麦野は顔を険しくして笑みを溢している茶髪の少年に怒鳴る

「……オイオイ原子崩し、あんまり喋りやがると傷に響くぜ」

「うるせェェ！！テメェは絶対ぶち殺す！！」

その言葉にピクリと反応する茶髪の少年は倒れている麦野に近付き髪をわしづかみにする

「お前らの今置かれてる状況を考えな…、次に舐めて事抜かしやがったら、その口に俺の未元物質無理矢理突っ込んで黙らせるぜ」

「……ぐぅ……」

髪をわしづかみにされて思わず声を溢す麦野

すると、茶髪の男は麦野に対して更に話を続ける

「それで例の『ピンセット』だがよ、
一体どこにやったんだ？あ？」

髪をわしづかみにする垣根は険しい表情で問い詰めるが麦野は一向に口を開く気配は無い

すると、無駄だと感じたのか垣根は髪を掴んでいた手を離して後方で倒れているフレンダに目をやる

「ま、テメェが割らねぇんならアイツから吐かせるまでだ」

そう言って仰向けで倒れているフレンダにゆっくりと近付く垣根

そして……、

「……ぐふぅ！！」

フレンダの腹部を靴で思いっきり踏みつけて足を捻る

「……あ〝ぁあぁあ！！」

「さぁて金髪、こっちも暇じゃねぇんだ　早くゲロっちまいな」

悲鳴を上げるフレンダに容赦無く踏みつけて話す垣根

痛みのあまり涙目になり苦しむフレンダ

「……フレンダァァ！！テメェ絶対話すんじゃねぇぞォォ！！」

「オイオイ……、テメェは自分の部下に随分と酷い事言うんだな

こんなに苦しんでるのによッ…！！」

声を上げる麦野そう言って更に自身の足に力を込めて捻り踏む垣根

「…うあ〝ぁぁぁぁ！！！」

工事現場内に響き渡る苦しむフレンダの悲鳴

「フレンダァァ！！！！」

その目の前で起こっている残酷な光景に声を上げる絹旗

――その時だった、

ドカァンと凄まじい音を立てて工事現場内へと乱入する一台の黒いワゴン車

乱入してきた一台の黒いワゴン車は麦野達の前に勢いよく止まり

中から金髪にサングラスを掛けた一人の男が姿を現す

「…幽…、なんで貴方が……」

思わず目の前に現れた男の姿に唖然とし呟く絹旗

ワゴン車から現れた静雄の目にはフレンダを踏みつけている男の姿が目に入ってきた

「……オイ、何やってんだよテメェ」

「悪いが今大事な取引中だ邪魔すんな」

静雄の方へ見向きもしない茶髪の男はジッとフレンダを見据えている

現れた静雄は辺りを見渡し眉間にシワを寄せて目の前にいる男を睨む

「テメェが何者かは知らねーけどよ、
今こっちに一歩でも動けばこいつを殺すぜ」

脅しを掛けるその男の言葉にピタリと動きを止める静雄

すると、ワゴン車の中から静雄に続いて滝壷が姿を現す

「フレンダ！！」

踏みつけられているフレンダの姿を見て思わず声を上げる滝壺

垣根はそんな事は一切気にせずフレンダに更に言及する

「さぁ、早く『ピンセット』の場所吐きな
吐けばこのままテメェの命は助けてやる
さっき俺が現れた時にテメェは何処に隠した？」

そう言ってゆっくりと足の力を緩める垣根

フレンダは口を開き垣根にゆっくりと答え始める

「ピ……『ピンセット』……は……」

「フレンダァァァ言うんじゃねェェ！！ぶっ殺すぞォォ！！」

声を荒げて叫ぶ麦野、

静雄は麦野のその言葉にピクリと青筋を立てる

しばらくして、静雄はそれを遮る様に大量に息を吸い込み大きな声で叫ぶ

「言えェェ！！フレンダァァ！！」

工事現場内に響き渡る静雄のその一言、

静雄から放たれた突然の一言に唖然とする麦野

すると、静雄は無言で倒れている麦野の方へ足を進める

「オイオイ……、動いたらこいつを…」

垣根は足を動かす静雄に忠告するが全く聞いてはおらず

静雄は無言で麦野に近寄り胸ぐらを掴み上げる

――次の瞬間

パァンと凄まじい音を立てて思いっきり麦野の頬へと静雄はビンタを放った

「…は？」

思いがけない信じられない光景に目を丸くする第二位

静雄はビンタを放った麦野を再び胸ぐらを掴み引き寄せる

「テメェ今なんつった?」

胸ぐらを掴み詰め寄り麦野に訊ねる静雄

今までに見たことのない静雄の威圧感に麦野は驚きが隠せない

「大事な仲間がよ……、

あんなに苦しんでるのに今テメェはなんつった?あ?」

胸ぐらを掴んでいた麦野にゆっくりと口を開く静雄

麦野は黙ったまま胸ぐらを掴み上げている静雄を見る

「テメェは仲間があんな風になってんに助けてやろうともしねぇのか…？
それともアイツや俺達はテメェの仲間じゃねぇのか？」

「うるせぇ……」

ボソリと呟く麦野からの一言、

しかしながら、胸ぐらを掴み上げている静雄は話を止めずに麦野を引き寄せる

「テメェにとっての俺達はなんだ！！
少なくとも俺やあそこにいる滝壷はなァ！！
テメェやあいつ等の事を家族だと思ってた！」

そう言ってゆっくりと胸ぐらを緩める静雄

そして、両手で傷だらけの麦野の頭を自分の胸元で抱えて話し出す

「…だからアイツ等は俺がぜってぇに死なせねぇ
勿論テメェもだ麦野」

静雄の言葉にピクリと反応する麦野、

フレンダを踏みつけていた垣根は既にその場から移動して

何やら工事現場にある鉄骨の物陰から一つのアタッシュケースを取り出していた

「フレンダ、だったか？

テメェが言った通り確かにそれらしいアタッシュケースはあったな」

アタッシュケースを片手に笑みを溢している垣根はそのまま中身を披露する

「――ただ残念な事に中身がカラだどういう事か説明してくんねぇかな？」

静雄は抱き締めていた麦野から手を離してアタッシュケースを片手に握っている垣根にゆっくりと口を開き答え始める

「そいつはァ残念だったなぁ糞野郎…」

ゴキリゴキリと骨を鳴らし、

笑みを溢して垣根に答える静雄はゆっくりとその場から立ち上がる

「ん…舐めてんなお前」

返ってきた静雄の言葉にピクリと青筋を立てる垣根

だが、垣根は振り返った静雄の顔を見てピタリと動きを止める

「…て、テメェは！」

静雄の顔を見た垣根は唖然としていた

そう、暗部組織にいて情報網が広い彼はようやく気付いたのだ…

目の前に現れたこの男の真の姿を――

「……は、ハハハハハ！！！！

まぁさか、こんな所で会うとは思って無かったぜ！！！」

狂喜の笑い声を上げる学園都市第二位垣根帝督

――そして、垣根の目の前に対峙する池袋最強であり学園都市における最強の男

「平和島…静雄ォォォォォ！！！！！！！！！」

声を張り上げると共に背中から真っ白な六枚の羽を出現させる垣根帝督

「あー、もう無理だ我慢我慢しようとしたが、俺の頭はもうテメェをぶち殺す事しか考えられねぇわ――だからよォ…」

対峙する垣根に対して自身の拳を鳴らして狂喜の笑みを溢す静雄

そして…ゆっくりと口を開き怒号を上げる

「テメェがどうなっても文句はねぇよォなァァ！あァ！！」

そう言って地面を踏みつける静雄の周りにはドでかいクレーターが出来上がる

互いに臨戦体制で対峙する学園都市第二位垣根帝督と池袋最強の男、平和島静雄

未元物質と池袋最強が今激突する！！

第二位（垣根帝督）（前書き）

――ハイ更新します！！！

――毎度、感想ありがとございます！

第二位（垣根帝督）

工事現場内で対峙する二つの人影、

その間にはピリピリとした空気が張り詰め周りにいる滝壺達は息がつまりそうだった

（へ、平和島静雄ってあの一方通行を倒したっていう、もう一人の第一位の事？まさか幽がそんな）

事実を知り驚いた表情を浮かべている学園都市第四位の麦野沈利

そんななか、対峙する第一位平和島静雄を見る垣根は笑みを溢してゆっくりと口を開き話し出す

「平和島静雄…まさかテメェ程の奴がこんな所でアイテムの雑用なんざやってやがるとはなぁ、」

「うるせぇぞエセホスト野郎、

雑用だろうが何だろうがこいつ等は俺の大事な仲間だそれ以上でもそれ以下でもねぇ」

そう言って拳を鳴らして自身が作ったクレーターから垣根に向かいゆっくりと足を進める静雄

「生憎だが勝利宣言さして貰うぜ平和島静雄、残念ながらテメェに俺は倒せねぇ」

そう言って六枚の羽を大きく開く垣根帝督の姿はまるで天使の様に神々しい姿だ

しかしながら、平和島静雄は全く怯む気配は無く前進する

「……似合わねぇなその羽、

一言で言うならクソメルヘンだ」

「言ってくれるじゃねぇか、

だけどな平和島静雄、

今使ってるこの能力は未元物質つう最高にクールな名前があるんだよ覚えとけ」

ふとそんな下らない会話をしながら静雄は茶髪の少年の名前を聞きそびれていた事に気付く

「そういやテメェの名前を聞いて無かったなクソメルヘン」

茶髪の少年に首を傾げて何気なく訊ねる平和島静雄、

「……、垣根帝督だ、よく覚えとけ最強」

対峙する静雄に素っ気なく名乗る垣根帝督

そして…、互いにゆっくりと歩み寄り間合いを詰め

ある程度の近距離まで近付くその時だった

二人は互いに工事現場内に響き渡る様な大声を張り上げる

「平和島ァァァァァァ！！！」

「垣根ェェェェェ！！！」

突如、駆け出し勢いよくぶつかり合う二人

辺りには土煙が逆立ちそれと同時に凄まじい轟音が麦野達に聞こえる

（…超スゴイです……こ、これがレベル５の頂点の戦い）

そして…、周りに逆立つ土煙を一瞬で未元物質の羽で取り払う垣根帝督

「なかなか、やるじゃねぇか！だけどなテメェの常識は俺には通用しねぇぜ平和島ァ」

笑みを溢して大きく六枚の羽を広げる垣根

すると、土煙を片手を振るい取っ払う静雄は青筋を立ててゆっくりと口を開く

「生憎なぁ俺には元々常識なんてもんはねぇんだよ馬鹿だからなぁ」

凶暴の二文字が似合うであろう表情を見せる平和島静雄

垣根はそんな静雄の言葉に頭を抑えて笑い声を高々に上げる

「ハハハハハ！！！

いいねぇテメェ最高だぜ平和島ァァァァァ！！！」

そう言うと垣根の羽から放たれる衝撃波、

静雄のいた地面をことごとく吹き飛ばすその一撃は麦野達にも襲いかかる

「くぅ！！」

「うわぁ！！！」

垣根の凄まじい衝撃波の攻撃に思わず声を上げる麦野と絹旗

しかしながら、目の前の静雄の身体には傷ひとつつかない

（……何？）

平和島静雄の違和感に気付いた宙に浮いて顔を険しくする垣根

（ありゃどういう事だ）

自身の能力が効かず全くもって訳が分からない垣根

工事現場の周りにいた麦野達はひとまず戦いに巻き込まれないところに移動しその様子を遠くから眺める

「どういうこと、なんで幽に第二位の能力が効かないわけ？」

「……私にも分からない」

ジッと垣根と戦う静雄を眺めて呟く麦野の問いに左右に首を振り答える滝壺

「オイ悪趣味な羽を広げたクソメルヘン
…早くかかって来いよ」

垣根を挑発する静雄は何やら構えを取り手招きをする

「大丈夫だ自覚はある！！」

そして、羽を広げた垣根は構えを取った静雄との間合いを一気に詰める

――その時だった、

垣根の身体にとんでもなく凄まじい衝撃と轟音が同時に鳴り響く、

「……ぐはぁ！！」

力無く後ろへと吹き飛んでゆく垣根帝督の身体

ドでかいクレーターと共に壁に身体を叩きつけられる垣根は力無く地面にドサリと墜ちる

吹き飛ばされた垣根は今何が起こったのか全く理解できない

（なんだ…一体なにが…）

自身の身体を見てみると腹部が深く陥没している

（あ、あの野郎、拳を出しやがったのか……
今、全然見えなかったぞオイ）

唖然とする垣根は腹部を抑えたままゆっくりと立ち上がる

「あぁ…もうなんつうかなァまどろこしくて面倒だ」

そんな垣根にぐるぐると右腕を振り回し近付いてゆく平和島静雄

「だぁかぁら……」

回していた右腕をピタリと止める静雄はそのまま腹部を抑えて立ち上がる垣根に向かい駆ける

静雄に対して反応が遅れた垣根は咄嗟に表情を曇らせる

（早ェ！！クソが！！）

未元物質で作り上げた羽で咄嗟に自分自身の身体を包み込む垣根

（未元物質で作ったこれなら野郎も……）

ひとまず未元物質に身を包み込み安全を確信し安堵する垣根

だがしかし、その垣根の確信は大きく裏切られる事になる

「オラァァァァァァ！！」

パリィンと砕け散る音を立てて崩壊する自身の身体を包んでいた垣根帝督の六枚の羽

むしろそれは貫通したと言ったところか

見た通り平和島静雄の振りかざされた拳はそのまま垣根帝督の未元物質を貫通し勢いよく垣根の顔面に向かう

「何だと！！！」

次の瞬間、ドコォンと鈍くとてつもない破壊的音を響かせる平和島静雄の拳

「うらァァァァァァ！！！」

身体を思いきり振るい拳に力を込めて声を張り上げる平和島静雄

そして……、静雄はそのまま身体を完全に振り切った

「ぐぅおおおお！！！！」

先程、静雄から殴られ衝突した工事現場の壁を突き抜ける垣根の身体

「がはぁ！！！」

殴り飛ばされたその垣根の身体は壁の向こう側にあるビルの壁にクレーターを作り上げる

ドサッと力無く地面に墜ちる垣根の身体

殴り飛ばされたその跡は地面が全てえぐり取られていて

伏している垣根帝督はピクリとも動く気配が無い

「やった……？」

その様子を見て笑みを溢して思わず口走る絹旗

すると、倒れた垣根の姿を確認した静雄は身を翻して麦野達に手を振る

「幽がやった……？」

嬉しそうにその姿を見て笑みを浮かべている麦野と滝壺

――しかし、後ろに蠢く闇はまだ終わらなかった

「幽！！後ろ危ない！」

思わずこちらにやってくる静雄に声を掛ける滝壺

目の先には、羽を広げリボルバー拳銃を構えている垣根の姿

「残念だったな平和島」

そうして勝利を確信した笑みを浮かべて引き金に指を引く垣根帝督

垣根の拳銃から工事現場に向かい放たれ鳴り響く銃声、

放たれた弾丸は真っ直ぐに静雄に向かい飛んでゆく

「危ない…！！」

――その時だった

弾丸の向かう先にいた静雄を撥ね飛ばす一人の金髪の長い髪をした少女

静雄に向かい放たれた弾丸はそのまま撥ね飛ばした金髪の少女へと飛んでゆく

そして無情にもその銃弾は静雄を撥ね飛ばした彼女の身体を突き抜ける

夜の工事現場に舞い散る一人の少女の鮮血

「フレンダァァ！！」

静雄を撥ね飛ばし弾丸を受けた少女はそのまま力無く地面に伏した

折原臨也

「フレンダァァ！！」

鮮血が飛び散り力無く地面に伏す金髪の少女

凶弾に倒れるフレンダにすかさず近寄り抱き上げる静雄

「はぁ…はぁ……」

息が荒いフレンダ、すかさず静雄は銃弾が直撃した部分を服を破り見る

（傷が深ぇ……クソ）

出血の量と顔色が悪くなるフレンダを見て顔を険しくする静雄

「…ぐ！！…幽…」

「お、オイ喋るんじゃねぇよ」

必死になって傷口を塞いでいる静雄は口を開き話そうとするフレンダを注意する

「待ってろ直ぐに助けてやる」

険しい表情を浮かべて傷口に布を当てる静雄はフレンダに呼び掛ける

しかし、そんな静雄に左右に首を振るフレンダ

「……今日の倍返し……結局出来なかったって訳よ」

「何言ってやがんだ諦めんな馬鹿！！」

血だらけの手を必死にフレンダの傷口に当て抑えている平和島静雄

「……家族…かぁ…」

霞んだ声で静雄の手を弱々しく握り話すフレンダ、

その手はブルブルと震えている

「そうだ俺達ァ家族だ……！だからテメェは絶対助けてやる」

「へへへ……」

必死になっている静雄に微笑み掛けるフレンダ

「ありがと……ね…」

そして…、彼女は一言そう言うと自身の目蓋をゆっくりと閉じた

「オイ……オイ…！！」

左右に身体を揺らして声を掛ける静雄、

だがフレンダからは返事が無く静雄の腕の中でぐったりと倒れている

静雄は倒れたフレンダの身体をギュッと抱き締める

「あ…、あァァァァァァ！！！！」

工事現場内一帯に響き渡るような叫び声を上げる平和島静雄

工事現場は平和島静雄の咆哮に揺れる

そして……、静雄はゆっくりと立ち上がりリボルバー拳銃を持っていた垣根の方へ身体を向けて歩き出す

「……ふざけんじゃねぇ…」

立ち上がる静雄からは何やら物凄い威圧感と殺気、

そして、真っ黒な何かが身体から溢れ出ている

「フレンダ！！」

そんな中、声を上げてフレンダに駆け寄る麦野達

倒れたフレンダの身体を抱き上げて麦野は脈を確認する

（脈はまだある）

するとそんな麦野達の後ろから現れるジャケットを身に纏った黒髪の男

「あらら～…、シズちゃんを本気で怒らせるなんて…、あの茶髪の少年死んだねー」

「え…？」

突然現れたその男の存在に声を上げる絹旗

「誰…？」

首を傾げて現れたジャケットを身に纏っている男に訊ねるフレンダの傷口を抑えている麦野

するとその男は相変わらず陽気な態度で訊ねる麦野に答え始める

「通りすがりの妖怪カマイタチさ…

それよりホラ、あのシズちゃん…良く見てみなよ」

声を掛ける男の言葉に反応して静雄へと目線をやるアイテム一同

「……幽…の周りにあるＡＩＭ拡散力場が消滅してる」

唖然とする滝壷からのまさかの一言、

しかしながら、ジャケットを着た男は相変わらず陽気にアイテムのメンバーに話し出す

「あれが本来のシズちゃんの姿さ…、

いやはや、思い切って外出ってしてみるもんだねぇー全く」

そして、静雄の凄まじい姿に高々に笑い声を上げる折原臨也

しばらくして、その笑い声はピタリと止み折原臨也はゆっくりと口を開く

「完全に彼、今覚醒したね――」

それと、同時に垣根に向かい駆け出す平和島静雄

「あああァァァアアア！！」

盛大に両手を広げ咆哮する平和島静雄

次の瞬間、平和島静雄から巨大な真っ赤に成った羽が姿を現す

それは学園都市の学園都市を全て覆い尽くす様な巨大な羽

「『神を畏れぬ身にて天上に立つ者全てを砕き落とす者』、

要するに神様すら殴り飛ばせる最強の男って事だよね…」

満面の笑みを溢して平和島静雄の姿を見て呟く折原臨也

すると折原臨也は金髪の少女の傷口を抑えている麦野を見てゆっくりと口を開く

「……この工事現場の後ろにさ救急車呼んであるからその娘連れて行くといいよ」

「……え？」

折原臨也の言葉に一瞬戸惑うアイテム一同

だが状況が状況だけに折原臨也の言葉を信じるしか無かった

「わ、分かったわ……絹旗、フレンダ担いで頂戴」

「わ、わかりました！！」

麦野から指示されて慌ててフレンダを担ぐ絹旗、

そして、急いで出血しているフレンダを救急車がある所へと運び出す

滝壺は静雄の凄まじい光景を楽しむ様に眺めている折原臨也に頭を下げる

「……ありがとう」

「良いって別に、只の気まぐれだからさ」

折原臨也にお礼を述べる滝壷

しかしながら、彼は微笑みながら平然とお礼を述べる滝壷に返す

「……それにしてもあの羽の周りにＡＩＭ拡散力場が全く無い…？」

静雄の姿を見て驚いた表情を見せる滝壷

するとそんな滝壷を見て折原臨也は嬉しそうに話をし出す

「……『幻想崩し』それが僕達歪んでいる池袋の住人に備わってる力だけど、その中でもシズちゃんは特殊なんだよお嬢さん」

折原臨也はそう言うと羽を未だに大きく伸ばしている静雄を見て独り言の様に呟く

「『幻想崩し』？」

「うん…、要するに君たちが俗に言う『自分だけの現実』を完全に否定することだね」

首を傾げている滝壺に丁寧に説明する折原臨也

「シズちゃんはその中でも特殊なだけ…

まぁ単純にとってみればどんな強い人でも、それが例え神様ですら殴りたい時に殴れる的な感じかな」

「……」

陽気に説明する折原臨也に思わず絶句する滝壺

「…まぁあれを見てればわかるよ」

そう言うと視線を再び羽を広げた平和島静雄へと戻す臨也

静雄は羽を広げたままゆっくりと垣根に近付いて行く

（な…、なんだよコレは！！）

「かぁきぃねぇくゥん…」

そう言うと胸ぐらを掴み上げて狂喜の笑みを溢している平和島静雄

垣根は慌てて胸ぐらを掴んでいる平和島静雄に能力を使おうとするが…

（の…能力が使えねェ！！！！）

そう…、何故かは分からないが自身の能力が全く発動しない

「あーそびーましょオオオオオオオオ！！！！」

次の瞬間、何が起こったのか分からないが吹き飛ばされる垣根

その身体は一撃で数百メートル離れたビルまで目に見えない早さで激突する

そして……、垣根の衝突したビルは凄まじい音を立てて倒壊する

――正に一撃必殺

すると、垣根を殴り飛ばした静雄はゆっくりと振り返って

工事現場に立っていたある男の方をジッと見詰める

「へぇー…、やっぱりテメェかぁ裏を引いてやがったのはァ」

狂喜の笑みを溢して最早誰にも止められないであろう平和島静雄

そんな彼が一番嫌いな男が目の先にいた

「折ィィィ原クゥゥゥン！？」

その男を見て高々な雄叫びを上げる池袋最強、平和島静雄

「あらら－みぃつかっちゃった…、

それじゃ僕はこれで」

慌てて平和島静雄から逃走を試みる折原臨也

そして、紅い羽を広げたまま折原臨也を何故かは知らないが走って追いかけ出す平和島静雄

「ちょっと動くんじゃねぇよォ

イィィザァァヤァァァクゥゥゥン！！」

今此処に平和島静雄と折原臨也の恐怖の追いかけっこが幕を開けた

天災地変

夜に街灯が光る学園都市の中心部

その学園都市中に響き渡るような叫び声を上げて追いかける背中から紅い羽を広げた一人の金髪の男

「イィィザァァヤァァァァ！！」

「アハハハ～…、いや冗談抜きでヤバイかも…」

辺りを破壊しつくしながら街中を駆ける二人の人影はその足を止めることは無い

あの後、傷ついたフレンダと共に救急車に乗って病院に向かった麦野と絹旗

ちなみに滝壺は工事現場にポツンと一人置いてきぼりにされていた

「……幽は後で説教だね」

独り言をボソリと呟きひとまず黒いワゴン車に戻る事にする滝壺

そして、相変わらず爆発音を上げながら折原臨也をひたすら追いかける平和島静雄

「まぁてやァァ！！イィィザァァヤァァ！！！！」

「いや、シズちゃん、
ちょっと……それ無理だから」

この追いかけっこのせいで次々に倒壊していく学園都市にある数々のビル

（……うわぁ…捕まったら死んじゃうねコレ）

そんな事を考えいた折原臨也は曲がり角で一人の少年に出くわす

「やぁごきげんよう上条くん……」

「へ？あはい」

そう…、不幸体質のツンツン頭をした上条当麻であった

唖然とする上条はいきなりの出来事に頭がついていかない

そして、突然現れた男に満面の笑みで腕を掴まれる上条当麻

「そういうわけだから一緒に逃げよう」

「え？ちょっと意味がわからないでせう！！」

無理矢理巻き込まれた上条当麻はその男の後ろへと目をやる

「イィィィィィザァァァァヤァァァァァ！！！！」

そこには真っ赤な羽を広げ鬼のような形相をした平和島静雄がいた

それも紅い羽で辺りを破壊しながらこちらへと向かって来ている

（えェェ！！！何あれどうなってんの）

そんな静雄の凄まじい光景を見て驚いた表情を浮かべる上条当麻

「良いから早く早くー
捕まっちゃうじゃない僕が♪」

「アンタが原因かい！！」

そうして折原臨也と共に駆け出す上条当麻

勿論、後ろからは平和島静雄と言う名の破壊神が迫って来ている

「ふ、不幸だァァァァァァァ！！！」

学園都市の死の追いかけっこに強制的に参加させられてしまった上条当麻

そして…、全力疾走で鉄橋に差し掛かり、

一人の女子中学生が折原臨也の目にピタリと止まる

すかさず駆け寄り声を掛ける折原臨也

「ねぇ彼女ー♪
助けてくれない僕の親友が襲われてるんだ」

「は？アンタ誰…？」

超電磁砲こと御坂美琴は声を掛けてきた折原臨也に嫌そうな表情を浮かべて言うがその後ろから迫る人物を見て固まる

「逃げろー！！御坂ー！！」

そこには全力疾走でこちらへと駆けてくる上条当麻

――そして……、

「イィィィィィザァァァヤァァァァ！！！！」

大きく開いた紅い羽で鉄橋を破壊しながらこちらへと迫って来ている平和島静雄の姿があった

「あら…予想外に思ったより来るの早かった」

（……えぇぇエエ！！！！？）

全く状況が掴めない御坂美琴、

だがこのままでは迫り来る平和島静雄の力に巻き添えを食うのは必然的

「ちょっとあり得ないっつうのォォー！！！！」

「うんうん…♪それが賢い判断だね」

悪意に満ちた満面の笑みを溢して御坂美琴に言う折原臨也

そして、夜の学園都市をひたすら駆ける折原臨也と上条当麻に御坂美琴

そんな中、ふと二人を巻き込んだ折原臨也は首を捻り呟きだす

「さてどうしようかアレ…」

「「テメェが捕まれば済むだろうが！！」」

思わずそんな折原臨也に突っ込みを入れる超電磁砲と幻想殺し

「止めてよー♪あんなのに殴られたら死んじゃうじゃない」

「もう、どうにでもなれ……」

そんな折原臨也の態度に思わず嘆く上条当麻

しかしながら、後ろからは鬼のような形相をした平和島静雄が迫り

来る

「全く…仕方無いなぁシズちゃんは」

ため息を吐き全力で駆けていた折原臨也はその足をゆっくりと止める

そして懐から取り出す一つのバタフライナイフ

「ちょっと何やってんのアンタ！！」

急に足を止めた折原臨也に声を掛ける御坂美琴

「まぁ見てなって」

次の瞬間、紅い羽を広げた平和島静雄が折原臨也の目の前まで迫り来る

平和島静雄から折原臨也へと放たれる拳

だが、折原臨也はそれをスルリとかわして手に持っていたナイフを振るう

「全く…相変わらず単純で困るなぁシズちゃんは」

そう言って取り出したナイフを仕舞う折原臨也

すると平和島静雄から出ていた大きい紅い羽はボトリと落ちて消滅し

平和島静雄の頬にはナイフによる傷跡が残っていた

「テメェ……！！」

「まぁそう慌てないでよシズちゃん……

またいつか必ず会うんだからさ」

そう言って最後の最後に平和島静雄の肩を叩いた折原臨也

すると、静雄の首元からドッと大量に血が吹き出し、

静雄は膝から崩れるように地面へと倒れる

「ありゃりゃちょっとやり過ぎたかな？

でもま、シズちゃんはこれぐらいじゃ死なないか」

そう言って何事も無かったように懐にナイフを仕舞う折原臨也

「静雄！！」

声を上げて膝から崩れるように倒れた静雄に近付く上条当麻

「お前なんでこんな……」

「安心しなよ、そんぐらいじゃシズちゃん死なないから、
それより病院連れていって上げなよ僕はもう帰るからさ」

すると、折原臨也に立ち塞がる短髪の女子中学生

「帰らせると思う？」

そう言ってコインを片手に乗せる御坂美琴は立ち去ろうとする折原臨也を睨む

「ちょっと、そこ退いてくれないかなぁ……」

陽気だった態度の折原臨也はピタリとその表情を止めて、冷たく冷酷な目で御坂美琴にゆっくりと口を開く

「じゃないと……死んじゃうよ君」

折原臨也の言葉にビクリと背筋が凍りつく御坂美琴

「なぁんてね、ま、嘘だけどね」

そう言って御坂美琴を通過してその場から立ち去ろうとする折原臨也、

「あ、そうだ君達に僕の名前を教えて無かったね」

思い出したように無邪気な笑みを溢して振り返る折原臨也は唖然とする二人に話し出す

「…折原臨也、二人とも今日は楽しかったよじゃあバイバーイ」

そう言って折原臨也は二人の前から姿を消してしまった

「ひとまず病院に運ぼう御坂、手伝ってくれ」

「わ、分かったわ」

そう言って血塗れの静雄を担ぎ上げる二人

こうして静雄と折原臨也の凄まじい追いかけっこは幕を閉じた

起死回生（前書き）

――更新します

――感想をお待ちしてます、ではではー

起死回生

とある病院のベッドの上

出血していた静雄は冥土返しから治療して貰い（傷口を抑えてただ単にベッドを貸してもらっただけだが）

現在、病院のベッドの上ですやすやと眠りについていた

「うぅん……」

ベッドの上で寝返りをうつ静雄、

それをジッと横から眺めている絹旗は静雄の頬っぺたを人差し指でつつく

「幽…って寝顔超可愛いですよね麦野」

「そうね…ホントに第一位のあの平和島静雄なんて信じられないわ……」

気持よく寝ている静雄の寝顔を見て思わず微笑み呟く麦野、

「それにしても……」

病室の端にいる滝壺の方へと目線をやる絹旗は呆れたように口を開き話し出す

「滝壺……いい加減、超いじけないで下さいってばぁ～」

ズーンと病室の端に体操座りをしていじけている滝壺に声を掛ける絹旗

「……一人だけ置いてかれた……」

しかしながら、未だに一人だけワゴン車に置いていかれたことに頬

を膨らませていじける滝壷、

「そう怒らないの滝壷、今度パフェおごってあげるから」

「……！！ホント？麦野……」

嬉しさのあまり顔をパァと明るくして麦野に聞き返す滝壷

「えぇ、フレンダと幽の退院祝いにね」

パフェと聞いて嬉しそうに喜んでいる滝壷に微笑み答える麦野

すると静雄の頬っぺたを突いていた絹旗は複雑な表情を浮かべて麦野達に話し出す

「……それにしてもなんで幽は私達に自分の事を超話さなかったんでしょう」

それに対して麦野は寝ている静雄の横顔を見詰めてゆっくりと口を開き答え始める

「……第一位になった自分の素性を隠す事で私達に負担をかけないようにしたんじゃないの……、

ホラ、幽ってここに来て間もなくしてレベル５の第一位に着いちゃったから、色々と狙われやすかったんだろうし」

麦野の推測に思わず納得し頷く滝壺と絹旗

「そうですね……、此処に来る前も池袋っていう街で超最強だったって話でしたし」

「まぁ…、学園都市第二位をあぁもあっさりと倒しちゃうあたりもう私達とは次元が違うわよね」

絹旗は突いていた静雄の頬っぺたから人差し指を離し麦野に話し出す

「私達の事を家族って超言ってましたね幽」

「……そうね、ホントに馬鹿よね幽って」

「でも……幽のそこが良いところだよ麦野」

滝壺の言葉に笑みを溢す麦野は寝ている静雄のおでこに手を優しく当てる

「ありがとう……幽」

感謝の言葉を述べる麦野は一言そう言うと静雄からゆっくりと手を離す

すると絹旗が何かを思い出した様に声を上げる

「あ！！、私達そう言えば物品の受け渡しまだやってませんでしたよ麦野！！」

「あー…、あれね、

アレどうやら情報が嘘だったみたいなのよ、

なんかしらないけど『国士無双』っていう組織に無事に届けられたみたいよ」

慌てたように訪ねてくる絹旗に何気なく答える麦野

「そうなんですか、相変わらず超使えませんね、うちの上司」

「……今に始まった事じゃないよ絹旗」

思わず愚痴を溢す絹旗に当然の如く冷静に話す滝壺

すると、しばらくして寝ていた筈の静雄は身体をゆっくりとベッドから起き上がらせる

ビクリとするアイテムの三人は恐る恐る起き上がる静雄へと目をやる

「あぁ…？何処だここ？」

「相変わらずマイペースですね幽」

起きてからの静雄のまさかの一言に絹旗は呆れたように言う

「おはよう幽…」

「違うでしょ絹旗に滝壺

平和島静雄でしょ？貴方のホントの名前は」

声を掛ける滝壺を制して話す麦野

すると静雄はそんな麦野の一言に笑みを溢してゆっくりと口を開き話し出す

「…あぁ、テメェらがさっきから呼んでるそいつは、悪いが俺の弟の名前だ…」

まさかの静雄の返答に驚いた表情で目を丸くする三人

「弟なんていたのね、あんた…」

「ん?まぁな確か今は羽島幽平って言ってたっけ?」

次の瞬間、三人は病室にも関わらず驚いたように大声を上げる

「う、嘘！！、超本当ですか！羽島幽平っていったらあの有名な！」

「…麦野って確か大ファンだよね」

勢いよく次々に質問攻めをするアイテム一同

その中でも麦野は静雄の肩を掴んで目をキラキラと輝かせている

「サイン頂戴！今すぐ！！」

「落ち着け落ち着け…
よく見ろ俺は兄貴だ」

ピタリと動きを止める麦野は掴んでいた手をゆっくりと静雄から離す

「超残念兄貴です」

「あぁ？なんか言ったか最愛」

絹旗のボソリとした一言に思わず青筋を立てる静雄

「それよりフレンダは？」

静雄は思い出したように身を乗り出して麦野に訪ねる

「無事よ…、一命は取り止めたみたい」

そんな慌てて訪ねる静雄に微笑み答える麦野

「それにしても幽…、
じゃなかった静雄！！

貴方がなんで血だらけで病院に運ばれてるんですか！！」

すると隣にいた絹旗は静雄に迫るように問いただす

「そうだあの野郎ォ…」

忌々しい男の事を思い出した静雄は怒りを露にして拳を握り締め呟く

「そうよ、アンタが血塗れで上条って男の子と第三位に運ばれてきたときは肝を冷やしたわよ」

昨夜の晩に運ばれた静雄には記憶がないが上条達の名前を聞くとなんとなく納得した

「アイツ等が運んでくれたのか？」

「流石に第三位の顔を見たときは癪に触ったけどアンタの命の恩人だったしね、

ちゃんと頭を下げてお礼を言ったわよ」

静雄から目線を反らして話す麦野、

すると絹旗は微笑みながらそんな麦野を見て静雄に話し出す

「超ビックリしましたよ、あのプライドの塊みたいだった麦野が頭を下げてお礼を言った時は…」

「…ハハハ、それは?どういう事かにゃーん?絹旗?」

笑顔で絹旗の後頭部をわしづかみにして訪ねる麦野

「いや、超冗談です麦野」

「うん♪素直で宜しい」

脅しにダラダラを大量に冷や汗を流して答える絹旗に対して満面の笑みを溢して言う麦野

「そうか…、心配してくれたんだな…、ありがとなお前ら」

静雄はそう言うと微笑み麦野や滝壺、絹旗にお礼を述べる

「だって家族、なんでしょ私達」

「そうだよ静雄…」

笑みを溢している静雄に答える麦野と滝壺

「そうですよ…静雄、私達アイテムは超家族です…」

「そうか…」

笑みを溢してアイテムの三人に微笑み掛ける静雄はゆっくりと目を閉じる

こうして平和島静雄を含めたアイテムは今日、ようやく一つになった

琴瑟調和（前書き）

――ハイ更新します！！

――皆さんたくさんの感想ありがとうございました！！

琴瑟調和

それはとある日の出来事

お嬢様学校、常盤台中学の制服を着ている御坂美琴は何気なく信号機の前でボーッとしていた

（アイツ…、大丈夫だったかなぁ）

アイツとは先日、折原臨也に首筋をナイフで斬られて出血し倒れた平和島静雄の事である

何気に彼女は恩人である彼の事が気になっていた

（まぁ死にはしないとは言ってたし私もそうは思うけど）

ふと、折原臨也の顔を思い浮かべる御坂美琴

すると、待っていた信号機の横から爽やかな青年が嬉しそうに笑みを溢しながらこちらへとやって来る

（…ゲッ、海原光貴）

思わず心の中で嫌な感情を丸出しにする御坂美琴

海原光貴という男は相変わらずの輝かしい最高のスマイルを振り撒きながらこちらへと話し掛けて来る

「やぁ御坂さん奇遇ですね」

何気なく話し掛ける海原光貴は何処か馴れ馴れしい

「アハハー、そうですねー」

あからさまに棒読みの如く海原に答える御坂美琴

すると、そんな爽やかな青年、海原光貴は棒読みのような受け答えをする御坂に提案するように話し出す

「そうです御坂さん今暇なら一緒に食事にでもどうですか？」

「アハハ、いやぁ結構ですー」

冷や汗を流して左右に腕を振り断りを入れる御坂美琴

目線を反らしている彼女は頭の中でこの男から逃げ出す算段を必死に組み上げている

（駄目だ…思い浮かばない）

「…？、どうしたんですか御坂さん」

がっくりと項垂れる御坂美琴に爽やかな笑みを溢して訪ねる海原

すると、そんな御坂美琴の目の前に二人組の男の姿が目に入ってくる

「だからにゃー、シズやんうちの舞夏に是非とも羽島幽平のサインを…」

「んな事言われても困んだよ馬鹿！！

ッていうかテメェはどこからその情報を聞き出しやがったんだ土御門！！」

金髪の男二人は何やら言い合っているようだがその片方は言わずと知れずあの男

平和島静雄というとてつもない利用価値のある男の姿が御坂美琴の目に飛び込んで来た

そして、血迷ったのか御坂美琴は爽やかな表情を浮かべ手を振りながら平和島静雄へと駆けてゆく

「ごめーん♪待ったぁー」

静雄にこれでもかと言わんばかりに手を振り駆ける御坂美琴

「頼むにゃー、シズやんは心の友だろう?」

「だぁかぁら、無理だっつってんだろ…、諦めろよ土御門…」

「……」

しかし、そのような素晴らしい努力も虚しく静雄と土御門は清々しい位に御坂美琴をスルーして通過する

御坂美琴はその途端振り返って背後から静雄にへと全力疾走で駆ける

全力疾走で駆けてくる足音にゆっくり振り返る静雄

「だぁかぁらー！！待ったつってンだろうがゴラァァァァァァ
！！！！

「…ぐふぅ！！」

壮大に御坂美琴のタックルにより吹き飛ぶ平和島静雄の身体、

吹き飛ばされた静雄の身体は腹部に何かが巻き付いたまま地面へと
叩きつけられる

「…痛ってぇ、…って何やってんだテメェは」

起き上がる静雄は腹部に手を回して顔を真っ赤にしている御坂美琴に訪ねる

「ごめんお願い私に話を合わせて」

顔を真っ赤にして静雄にお願いする御坂美琴

その様子を常盤台中学の学生達が上から眺めている

そして…、金髪の男平和島静雄の姿を見た常盤台の女子中学生達は

途端に黄色い声を張り上げる

「きゃー！！あの金髪の殿方は平和島静雄様よぉー！！」

「まさか第一位の静雄様をこんな所で拝めれるなんてぇ！！」

歓喜に溢れる常盤台の学生達、

そんな中、御坂美琴は押し倒した静雄にへと手を差しのべて、

静雄はその手を握りゆっくりと起き上がる

「もしかして美琴お姉様は……」

「きゃー！お似合いカップルですわー」

だんだんとヒートアップする寮の常盤台の女子中学生達

常盤台中学の寮官は目を光らせ、その光景を眺めている

「…ほほう…寮の前で逢い引きとは良い度胸だな……」

そんな寮の光景を見て顔をひきつらせながら笑みを溢している御坂

美琴

「アハハハー…、」

おまけに寮の中からその光景をガン見する白井黒子は寮から身を乗り出しただただ真っ白になり呆然と立ち尽くしている

そして突然、ガシッと静雄の首根っこを掴む御坂美琴

「うわぁぁぁぁぁ！！！！！」

「…オイ！！ぐぉ！」

御坂美琴に首元を掴まれて連れていかれる平和島静雄は光の速さでその場から消え去ってしまった

――――――――――

とある学園都市の路地裏、

静雄は思いっきり引っ張り回されたせいでついた首痕に眉間をピクピクさせて御坂美琴の前で仁王立ちをしていた

「どぉいう事か説明して貰おうかぁ」

すると、御坂美琴は両手を合わせて眉間にシワを寄せている静雄に頭を下げる

「お願い！！今日1日だけ私の恋人になって！」

御坂美琴のまさかの発言に仁王立ちをしたまま首を傾げる静雄

「……お前……ついに頭がおかしくなったのか……」

両手を合わせて頼み込んで来る御坂美琴を見て愕然とし話す静雄

「違う！！いや…確かに間違ってないけども！」

意味の分からない反論をし出す御坂美琴の言葉にますます混乱する静雄

「ちょっとお願いだから頭の整理をさせてぇー！！」

そうして頭を抱えて一言大声を上げる御坂美琴

その様子を見ていた静雄は恐る恐る大声を上げて何やら息を切らしている美琴に訪ねる

「お前……、重症か……」

「ぜぇ……、ぜぇ……
まぁ…ある意味そうね…」

珍しく静雄の言葉を項垂れながら肯定する御坂美琴

それから、しばらくして

ようやく落ち着きを取り戻した御坂美琴は平和島静雄に事の経緯を
全て話し、

話を聞いた静雄は納得したように美琴に対して話し出す

「要するにそいつが諦めればいい訳か？」

「まぁ大々そういう感じ、

だからお願い！今日だけ！ね、いいでしょ！！」

首を傾げて訪ねる静雄の問いに頷く御坂美琴

静雄はため息を吐き頭を下げて改めて頼み込んでくる御坂美琴に話し出す

「……ハァ、仕方ねぇテメェには前回借りがあるし、今回だけだぞ」

御坂美琴があまりにも可哀想な気がしてきて仕方無く了承の返事を返す静雄

「へ？いいの？」

「……別に1日だけそれっぽいことすれば良いんだろ？簡単じゃねぇか」

頭を抱えている御坂美琴に話す静雄は頭にポンと手を置いて微笑む

こうして静雄は1日だけ御坂美琴に付き合う事になった

花晨月夕（前書き）

――更新遅れて済みません！では！

花晨月夕

とあるどこかの飲食店にあるテーブル

御坂美琴に連れられた静雄はホットドックを二つ注文してその一つを口に運び食べていた

「それでこれからどうすんだよ」

ホットドックを食べながら御坂美琴に今後の予定を訪ねる静雄

美琴は首を捻りながらそんな静雄にゆっくりと口を開き答え始める

「うーんこの際、適当にセブンスミストでも行かない」

咄嗟に思い浮かべた場所を適当に静雄にへと話す美琴

どちらにしろ、学園都市にあまり詳しくはない静雄は行く場所が思いつかないので美琴の提案に適当に答える

「ふーん、わかった…」

ボケーと空を見上げホットドックを口に運びながら適当に答える静雄

「そう！なら私も行きたいとこあんだけどさぁー！」

微笑む御坂美琴はホットドックを掴んだまま嬉しそうに話を続ける

「でね！そこのショッピングモールがね！！」

「……、おぉーすげー飛行機雲……」

必死に御坂美琴が話しているにも関わらず青空を眺めて呟いている静雄

そんな静雄の対応の仕方にピクピクと青筋を立てる美琴

次の瞬間、青筋を立てた美琴はバン！とテーブルを叩き勢いよく立ち上がる

「無視すんなやゴラァァァァァァ！！！！」

大声を張り上げる御坂美琴に「おぉ！！」と驚いたようにビクリと肩を上げる静雄

「おぉじゃないわよ！！アンタ！私の話全く聞いてないでしょうが！」

テーブルの上にホットドックを置いて静雄に怒鳴り散らす御坂美琴

すると静雄は焦ったように頭を掻き、御坂美琴から目線を反らして答え始める

「いやまぁ…三割は聞いてたぜ多分」

「何よ三割って!!ほとんど聞いてないじゃない!」

電気をパチパチさせて誤魔化す様に目線を反らしている静雄に怒りを露にする御坂美琴

すると、静雄は自分の持っていたホットドックをひとまずテーブルの上に置いて

怒りを露にする御坂美琴を宥める様に話し出す

「まぁそんな怒んなよ鼻にマスタードついてるぜお前」

テーブルの上で頬杖をついて美琴の鼻を指差し、指摘する静雄

「え？嘘！」

御坂美琴は急いで鼻についたマスタードを拭き取る

すると、何があったのか美琴は鼻についたマスタードを拭うと同時にビクッと背筋を伸ばして何やら一人でもがいている

「だ、大丈夫か？」

鼻を抑えて涙目になっている姿に心配そうに訪ねる静雄

そして、鼻を抑えている美琴は声を掛けてくる静雄にへと振り返ると涙目になりながら返事を返す

「大丈夫に決まってるでしょ…！」

相変わらずの御坂美琴の態度に思わず呆れたように静雄はため息を吐く

再び美琴はホットドックを食べようとテーブルに視線をやるが…

「あれ？」

テーブルの上には同じぐらいに食べてあるホットドックが並んでいて、全く見分けがつかなくなっていた

しかしながら、静雄は構わず右側のホットドックを掴み口へと運ぼうとする

慌てて、バシッ！とホットドックを口へと運ぼうとする静雄の手を握り締めそれを阻止する御坂美琴

「…あ？なんだよ」

「ちょっと！見せて！」

手を掴まれた静雄は訳のわからぬまま、とりあえず首を傾げて渋々御坂美琴に持っていたホットドックを手渡す

真剣な表情で二つのホットドックとにらめっこをし出す御坂美琴、

その光景ははたからみれば実に滑稽である

「……、で？何してんだお前？」

「うがぁぁぁ！どっちを食べたか分からない！」

ホットドックを両手に持ったまま声を張り上げる美琴の行動にまたもや首を傾げる静雄

そして、御坂美琴の持っていたホットドックを横取りし、自身の口の中へと放り込む

「あ！ちょっと！」

静雄を慌てて制止する様に声を掛ける美琴だが既に遅く、ホットドックをパクパクと口に詰めている。

その光景に顔を真っ赤にして呆然と立ち尽くしている御坂美琴

「なんだよ、ゆでダコみたいに顔を真っ赤にして？」

すると、静雄はそんな御坂美琴に首を傾げて心配そうに顔を覗いて訪ねる

「…なんでも……ないわよ…」

顔をその名の通りゆでダコの様に真っ赤にして縮こまり、弱々しい口調で静雄にへと返答をする御坂美琴

しかしながら、相変わらずそんな事を気にも止めない静雄は学園都市に行き交う人々を見て、なにやら独り呟きだす

「……この街はやっぱり学生ばっかだな」

行き交う人々を眺めていた静雄の独り言に思わず首を傾げる御坂美

琴、

「？……何よ今更」

当然の事を何やら不思議そうに呟いている静雄に首を傾げて訪ねる御坂美琴

すると、静雄はそんなに風に首を傾げている御坂美琴に口を開き答え始める

「……俺が前にいた街は色んな人間が沢山いたからな、スーツ姿のサラリーマンやＯＬとか、だけどよ、この街は学生服を着た奴等ばっかだろ？」

静雄の言葉に「成る程ねぇ」と納得したように声を上げる御坂美琴

すると、静雄は眉間にシワを寄せて複雑な表情を浮かべて御坂美琴に話を続ける

「……だからよ、そんな学生の能力者を利用してこの学園都市を操ってやがる大人達が俺はなんとなくおかしな気がしてな」

難しい表情をしている静雄はそう言うと青い澄みきった空を見上げる

「……お前や、多分あの凶悪そうな面した一方通行だってそうだ

奪わなくていい命や抱え込まなくていい辛い想いなんかを気づけば勝手にこの街に背負わされてた…」

すると、話を聞いていた御坂美琴は表情を曇らせてテーブルをバン！と力強く叩き凄い剣幕で静雄を睨む

「あんな奴と一緒にしないでよ！嬉しそうに笑って妹達の命を奪ってたあんな奴と！！」

大声を張り上げて静雄を怒鳴り付ける様に話す御坂美琴

青い空を見上げていた静雄は視点を下げて睨み付けてくる御坂美琴をジッと見据える

「……じぁ聞くけどよ…、テメェはアイツの何を知ってんだ？」

「……ッ！」

真剣な表情の静雄から発せられる言葉に押し黙る御坂美琴

静雄はそんな押し黙る美琴に更に話をし出す

「殴りあって分かったんだよ……、

アイツはアイツなりに苦しんでたんだよあの実験にな」

静雄の話に黙って耳を傾ける御坂美琴、

そもそも、あの実験はあの一方通行を絶対能力者（レベル６）にするために行われた筈、

それ故に一方通行があの実験に苦しむ理由が御坂美琴には理解できなかった

しかしながら、静雄はそんな一方通行の事を庇う様に御坂美琴に話している

「……、どんな形であれ、あれだけ命を奪っておいて罪悪感が無い奴なんていねぇ

アイツはアイツなりに力を得て何かを変えたかったかも知れねぇなぁ……」

静雄は話を聞いていた御坂美琴は改めてあの実験について考え込む

だが、どうしてもあの一方通行が妹達の命を安々と奪っている姿が目に浮かび離れない

すると、静雄は難しい表情の御坂美琴の頭にポンと手を置いて優しく微笑む

「……ま、今のテメェに言っても返って混乱するだけか、悪かったな重苦しい話なんてしてよ」

黙って話を聞いていた御坂美琴に申し訳なさそうに頭を下げて謝る静雄

すると、真剣な表情で考え込んでいた御坂美琴は頭を下げている静雄に左右に首を振り、ゆっくりと口を開き答え始める

「いや……、確かにアンタの言う通りかも……、

でも、やっぱりアイツがあの娘達を殺す姿が目に焼き付いて離れないんだ」

結果的に一万人のＤＮＡマップから出来たクローンを虐殺した一方
通行……

目の前で妹達を殺した残虐なあの白い男のやった事は絶対に許せない

御坂美琴の心の中はその思いでいっぱいだった

静雄はそんな真剣に答える御坂美琴を見て笑みを溢し口を開く

「それが……アイツが背負った十字架だ……」

静雄から発せられたその場を締めくくるような一言に静寂な空気が
二人を包み込む

そして、しばらくして何かに気付いた様に口を開き話し出す御坂美琴

「……これって明らかに恋人同士がする会話じゃ無いわよね」

「……だな」

納得したようにため息を吐き話す御坂美琴に口を開き頷き答える静雄

無駄に話しすぎたせいで喉がやけに渇いた二人

すると、御坂美琴は自身の席を引いて立ち上がり、売店の方を見詰めて静雄に話し出す

「……私ちょっと飲み物買ってくるわ」

「あん？じゃ俺アイスコーヒー頼むわ……」

静雄の一言に、「仕方無いわねぇ」と注文を了承しテーブルから離れ売店へと駆け出す美琴

静雄は売店に駆けてゆく彼女の後ろ姿をしばらく見詰めた後、

再び学園都市に行き交う学生達に視点を向ける

（学園都市……ねぇ……）

街の残念な風景に思わずため息を溢す静雄

学生のみだけのこの街は静雄はどうにも馴れない

それは、一番始めにこの街に訪れた時からそうだった

（……池袋が恋しいってか？）

心の中でふとそんなくだらない思いが過りほくそ笑む静雄

すると、懐から煙草を取り出し火を点けて一服し出す

「あ、そういや禁煙だったな」

今頃、思い出した様に一人呟く静雄は慌てて火を点けたタバコの火を手で揉み消す

すると、そんなくだらない事をしていた静雄の視点の先に何やら泣いている一人の少女、

そしてそんな少女の頭を優しく撫でて爽やかに微笑み掛ける一人の青年の姿

（ん…、アイツはァ？）

しばらくして、泣き止んだ少女は何処かへと駆けてゆき、

青年は爽やかな笑みを溢して少女に手を振りその後ろ姿を見送る

そして、再び踵を返そうとした青年の目線に止まるテーブルの椅子に腰かける静雄の姿

爽やかな笑みを溢しているその青年は静雄へと一礼しその席へと向かってくる

（まぁた面倒な事になっちまったなこりゃ）

思わず苦笑いを浮かべてその爽やかな青年に静雄は頭を軽く下げる

これが爽やかな青年海原光貴と、平和島静雄との出会いだった

無我夢中（前書き）

——更新しますでは

飲食店の前で購入した二つの飲み物を両手に持っている御坂美琴は静雄の待っている席へと戻る最中だった

（アイスコーヒーで良かったわよね）

購入した飲み物を確認する美琴はそれを持って急いで静雄が座っているテーブルへと駆ける

だが、御坂美琴はテーブルに近付くにつれて、隣に何気なく座って同席して会話をしている人物を見てピタッと固まった

「ですから御坂さんは自身の感情を表現する仕方がえらく不器用なんですよね」

「へぇ～……」

静雄が座っているテーブルの隣で嬉しそうに話を続ける海原光貴

まぁ、静雄は御坂美琴が不器用でひとまずよく頻繁に怒る事はとっくに知ってはいるが、あまりにも嬉しそうに御坂美琴について話す海原光貴の姿にテーブルに頬杖をつきながら思わず笑みを溢して聞き入っていた

（あの馬鹿！！）

ひとまず手に持っていた飲み物を適当な場所に置いて頬杖をついて海原光貴の話を聞いている静雄に一直線に向かう御坂美琴

「ちょっとアンタ！！」

御坂美琴は素早く静雄の背後へと回り込み首根っこを掴んで引きずって近くの路地裏にへと向かう

訳のわからぬまま路地裏にへと連れていかれた静雄は機嫌の悪そうにしている御坂美琴に首を傾げる

「……ンだよ…」

「…ンだよ、じゃないでしょうが！なんでアンタはアイツと仲良く喋ってるわけ！意味無いじゃない！」

目線を反らしている静雄に迫るように言う御坂美琴

すると、静雄は何かを思い出した様に両手をポンと叩き、青筋を立てて何やらご立腹の御坂美琴に片手を突き出す

「…んで肝心のアイスコーヒーは？」

その静雄の一言にカチンッと頭に血が昇る御坂美琴

「んな事は後でしょうがこの馬鹿！それより海原光貴よ！海原光貴！」

静雄の一言に青筋を立ててキレ気味の御坂美琴

静雄はしばらく考え込んだ後に、今現在置かれている状況をようやく思い出した

「あぁ…、あの爽やかな、一見うざってぇ感じの優男か」

自分の言っている事をようやく理解した静雄に激しく二回頷き話し出す御坂美琴

「そう！！、アイツを諦めさせたいわけ！！だからアイツとアンタが仲良くしたら意味無いでしょ！！」

眉間にシワを寄せて静雄にへと怒鳴り声を上げて注意する御坂美琴

だが、静雄はそんな美琴に対して左右に首を振り、ゆっくりと口を開き答え始める

「…悪いがそりゃ多分無理だぜ御坂……」

一つため息を吐き、問い詰める美琴に答える静雄、

御坂美琴はそんな静雄の発せられた言葉に意味が分からず首を傾げる

「……は？何言って…」

「……人の想いってのは簡単に踏みにじっちゃいけねぇ
それが例え自分の嫌いな奴でもだ」

真剣な表情で話し出す静雄の言葉に遮られる御坂美琴

すると、静雄はそんな御坂美琴に更に話を続ける

「アイツは見た目通り爽やかでうざってぇ感じの野郎だが、ちゃんと根は優しい奴だ、テメェはそんなアイツの想いってのに面と向かって答えなきゃ駄目だろ？

……逃げちゃいけねぇよ」

真剣に話す静雄の言葉に複雑な表情を浮かべている御坂美琴

美琴はそんな真剣な表情をしている静雄に迫るように弱々しく訪ね出す

「……アンタは！その私がアイツと……」

「あん？」

顔を若干赤くして訪ねて来る美琴の言葉に首を傾げる静雄

すると、美琴はそんな静雄の反応を見てため息を吐き諦めたように目を閉じて話し出す

「いや、確かにそうね……」

美琴はそう言うと何かを決めた様に掴んでいた静雄の服を離す

「それじゃ、後１つだけ美味しいクレープ屋に行ったらこの恋人ごっこはおしまいね……」

そう言って、静雄の腕を強く引っ張り路地裏から出る美琴

しばらく歩いた後に、その目的のクレープ屋が目に留まり美琴は静雄の手を離す

やはりそれなりにあのクレープ屋は人気があるのか、遠くにいた静雄にもわかるほどに人の入り具合はなかなかのものだった

「それじゃ私が並んで買って来るからアンタはここで待ってて」

そう言って静雄を置いてクレープ屋に向かい駆けて行く御坂美琴

（たく…なんだよ）

ため息を吐きひとまずクレープ屋で購入している美琴を黙って待つ静雄

すると、静雄の後ろから爽やかな表情を浮かべている青年

「……あら？また会いましたね平和島さん」

「あぁ？」

わざとらしく振る舞う海原光貴、だが静雄はそんな海原光貴に対してピクリと青筋を立てる

「たく…、回りくどいぜテメェは」

「あら?気付いてらしたんですか」

笑みを崩さない海原光貴、静雄はそんな海原に対して片目を閉じて後ろに親指をやる

その先には、慌てたようにクレープ屋に駆け込むもう一人の海原光貴の姿があった

すると、静雄は目の前にいる海原光貴をジッと見据えて話し出す

「さぁて…、タイマン張るんならちぃとばっかり場所変えようや」

静雄の言葉にピクリと思わず反応するもう一人の海原

そして、諦めたように肩を落として鋭い眼差しの静雄に自分の懐から取り出した黒いナイフを向ける

「流石、最強の男なんて呼ばれてる事だけはありますね」

海原光貴はナイフを向けたまま、うっすらと不気味な笑みを浮かべて静雄を睨む

だが、そんな海原に対して左右に首を振り、ゆっくりと口を開き話し出す静雄

「関係ねぇよ、俺はただテメェがアイツに嫌われてる理由が分からなかっただけだ」

「はい？」

理解できない静雄の言葉に首を傾げる海原光貴、

しかし、静雄は首を傾げる海原にクレープ屋でもう一人の海原光貴に慌てて近づく美琴へ目線をやり話を続ける

「……アイツが優しい事や不器用な所もテメェは良く見てる

そんな奴がテメェをあれほど嫌う筈がねぇ…、そりゃテメェが一番わかってるんじゃねぇか？」

「それは……、どういう意味ですか？」

黒いナイフを向けたまま声を低くして路上で対峙する静雄を睨む海原

静雄は険しい表情で自分を睨む海原を見据えて話を続ける

「…要は…、テメェがアイツに対して嘘をついてるからじゃねぇのか？

なんで好きなら真っ直ぐにそう言わねぇ…、

俺が言ういちいち回りくどいってのはそういう意味だ…、」

静雄はそう言うと自身が掛けていたサングラスを外して胸ポケットに直し

黒いナイフを向けたままの海原光貴の肩を一回だけ叩いて横を通り過ぎる

「…ついてきな、」

自分の肩を叩き通り過ぎた静雄の言葉に顔を険しくして黙って後からついて行く海原

こうして静雄と海原光貴は人通りの多い路上から姿を消した

多種多様（前書き）

――うん…更新したいと思います

多種多様

人通りの多い路上から場所を移動して人影が少ない工事現場で対峙する二人

黒い黒曜石のナイフを片手に持つ海原光貴は目の前で対峙している静雄に口を開き話し出す

「……貴方とはこうして争う事はしたくは無かった」

「物騒な物を向けてそう言われたって全く説得力がねぇけどなぁ」

対峙している静雄は笑みを溢し黒曜石のナイフを向けた海原光貴をジッと見据えまま話す

そして、自身の拳をギュッと握りしめてゴキリ、ゴキリと音を鳴らして臨戦体制にへと入る静雄

「さぁて、それじゃ」

静雄の様子を見て身体を黒曜石のナイフを持ったまま低く身構える海原光貴

「行くぜコラァ！！」

海原光貴へ声を張り上げ全力で駆け出す静雄

海原光貴は黒曜石のナイフ角度を変えて反射した光をすかさず向かってくる静雄にへと合わせる

――…だが、

（……、やっぱりですか）

静雄に当てられた光は全く効力が無く、海原は自身の真上に組んであった鉄骨に黒曜石の光を当て、ひとまずそこから身を引く

落下する鉄骨のせいで辺りに土煙が舞い上がり海原光貴へ突進を仕掛けた静雄の視界を阻む

（……、チッ…どこだ）

慌てて静雄は辺りをしきりに見渡すが土煙のせいで海原光貴の姿は見えない

すると、辺りを見渡している静雄の真上からいきなり無数の鉄骨が

降りかかってくる

（……、っく！！）

巧く身体を地面に転がして降りかかってきた鉄骨を避ける静雄

すかさず、転がした身体を地べたから起こして冷や汗を拭う

「あっぶねー…」

「へぇ…あれをかわすなんて、なかなかやりますね」

土煙が晴れて、相変わらず余裕な表情で黒曜石のナイフ片手に静雄の前に現れた海原光貴

だが、静雄はそんな海原光貴に対して拳を力一杯握りしめて睨む

「テメェはそうやって正面から戦わないでチマチマと俺に攻撃すんのか？」

「当たり前じゃないですか、貴方がこんな僕に有利な場所を選んで

くれたんだから使わない訳が無いでしょ」

睨む静雄に不気味な笑みを浮かべて答える海原光貴、

だが、海原光貴はそんな静雄の言葉にゆっくりと目を閉じて何かを確信したように話し出す

「……どうやら、貴方は僕が持つこのトラウィスカルパンテクウトリの槍の力を把握した上でこの場所を選んだみたいですね……」

片手に持つ黒曜石のナイフを見詰めて話す海原光貴の言葉に「まぁな」と頷く静雄

静雄は更に表情を曇らせる海原光貴に話をし出す

「……先日、俺の仲間がこの街に魔術師が侵入した情報を手に入れてな……、どうやらソイツは他人に擬態出来る上に物騒なナイフを武器にしてるだと……」

静雄の話す言葉に黙って耳を傾ける海原光貴、

静雄は悲しげな表情を浮かべて海原光貴に更に話を続ける

「だけど、こいつはとんだ拍子抜けだったぜ……」

静雄はそう言うとため息を吐き海原光貴を見据える

その話を聞いていた海原光貴はため息を吐く静雄を睨み付けナイフを構える

「……全てお見通しでしたんですか」

「まぁ　そういう事になるな……」

表情を険しくして静雄を睨む海原光貴はナイフを構えたまま静雄へと訊ねる

「それで？なにが拍子抜けなんですか？僕が大して貴方の驚異に成らないことですか？」

海原光貴は思っていた、この男と正面から戦っても敵わないと、だからこうやって翻弄して戦う他に方法が無いと感じていたからそうやって戦っている

だけど、いずれはこの悪あがきも意味を成さなくなりやがてこの平和島静雄にやられる、彼はそう感じていた

だが、正面で対峙している静雄は左右に首を振りそんな彼に話し出す

「違う…、俺がテメェとタイマン張ったのはなァ…、テメェの気持ちを知るためだ」

静雄の言葉に意味がわからずに首を傾げる海原光貴、

静雄は対峙して首を傾げる海原光貴に話を続ける

「タイマンで俺と正面で殴り合いたくない、ソイツはテメェの今の気持ちと一緒だ要するに美琴に気持ちを偽ってやがるから伝わらねぇ…」

静雄はそう言うと拳を鳴らしながら対峙している海原光貴に段々と近付く

「……貴方に何が分かるんですか……」

拳を強く握りしめたて黒曜石のナイフをしまう海原光貴

彼は悔しそうに俯いたまま静雄に話を続ける

そして、顔を上げた彼は溜め込んでいた思いを静雄にぶちまけた

「偽者が御坂さんを好きになって何が悪いんですか！！」

そう言って静雄に向かい勢いよく駆け出す海原光貴、

彼は力の限り自分の拳を力一杯握りしめたまま静雄に全力で駆ける

その姿にピタリと進めていたその足を止める静雄

静雄に向かい拳を振るいながら溜め込んでいた自分の思いをぶつける海原光貴

「僕だってほんとならこんな事はしたくなかった！！でも上が貴方を！！上静勢力を危険だと判断したから！！」

殴る海原光貴に反撃せずに黙って殴られる静雄、

バキッ！！メキッ！という鈍い音を立てて静雄の顔面に海原光貴の拳が入り血が辺りに飛び散る

だが、静雄は一方的に殴られているにも関わらず、そのままその場を動かない

「僕だって嫌だったんだ！こんな偽りの姿で彼女に接するのだって嘘をつくなんて！」

その瞬間、殴られて顔から血を流してながらもパシッと海原光貴の殴ろうとした右手を掴む静雄

振り下ろした拳を握りしめた静雄はジッと海原光貴を見据え話し出す

「…誰がテメェを偽者なんて決めた、

少なくても俺の前にいるテメェは本物だ」

静雄はそう言うと海原光貴の振り下ろした拳を握りしめたまま自分の拳を握りしめて海原光貴を見据える

「歯ァ食い縛れェ！！」

そして、右手を掴んでいる静雄から海原光貴へと飛ぶ右手の拳

勢いよく放たれた右拳は海原光貴の頬をバキッ！！と鈍い音と共に捉えて、殴られた海原光貴は後方に吹き飛ばされる

凄まじい音を立てて勢いよく壁にへと叩きつけられる海原光貴の身体

「……がァァ！！」

鈍い痛みと衝撃が海原光貴の身体を襲い思わず声を上げる

そして、殴り飛ばした海原光貴へと話し出す静雄

「…上からの命令で仕方無かった?甘ったれた事抜かすんじゃねぇ…、自分の気持ちに嘘をつくような生き方はなァ！死んでるのと一緒だコラァ！！」

拳を握りしめる静雄は真っ直ぐに海原光貴を見据えたまま怒鳴り声を上げる

「テメェが生きたいように生きればいいんだ！組織なんて関係ねぇんだよ！」

静雄の言葉に海原光貴はボロボロになった身体を起こして拳を握りしめる

顔は皮膚が剥がれて中身が露になっているが静雄は目を決して逸らさない

そして、殴り飛ばした自分から目線の逸らさない静雄に対して、ボロボロになった海原光貴は鈍い痛みを堪えて頭を抑えたまま立ち上がり話し出す

「僕の醜いこの姿を見てもまだそんな事が貴方に言えますか」

だが、静雄は海原光貴に対して左右に首を振り真っ直ぐに見据えたまま口を開く

「…醜い訳がねぇだろうが」

静雄の言葉に目を見開いて驚く海原光貴、静雄はそんな海原に対して更に話を続ける

「そいつがテメェ自身だ海原」

真っ直ぐに自分の醜い姿を見据えて話す静雄

ボロボロな身体で両足をついたまま静雄の言葉に目を見開いて立ち尽す海原光貴、

立ち上がった海原光貴は静雄の方へゆっくり目を瞑りと足を進める

自分の力ではこの男には到底及ばないことを…、彼は悟った

力じゃない、心や思いが彼と自分では全く違う

――だが、その時だ

立ち上がった海原光貴の目には写っていた

不意に静雄の真上から降りかかってくる無数の鉄骨の影が…

（……ッくそ！！）

咄嗟に鉄骨の影が迫る静雄へと向かい全力で駆ける海原光貴

静雄は慌ててこちらへ駆けて来る海原光貴の様子に自分の真上をゆっくりと向く

そこには、落下してくる無数の鉄骨、しかも既に避ける時間は無い程にそれは迫っていた

（……！！）

「危ない！！」

瞬時に迫り来る鉄骨の影から静雄をはね飛ばした海原

そして、無数の鉄骨は音を立ててその場はね飛ばした海原を下敷きにする

「海原ァァ！！」

工事現場には落下した鉄骨により再び静雄の前に土煙が舞い上がり

静雄は自分の代わりに下敷きになった海原の名前を叫ぶ

その後、晴れた工事現場の中央には無数の鉄骨の下敷きになった海原光貴の姿。

工事現場中に舞い上がった土煙、

「海原ァァァ！！」

慌てて落下した鉄骨に近づいて懸命に海原光貴の上から退かす静雄

声を上げ、安否を確認するが落下した鉄骨の中からは返事は無い

だが、その時、何かが静雄の目にピタリと止まる

視線の先には人の手らしきものが落下した鉄骨の中から飛び出ている

（……クソが！！）

その人の手が出ていた所にすかさず駆け寄り必死で鉄骨を退かす

鉄骨をある程度退かすと海原のボロボロの顔がその間から露になった

鉄骨に手を掛けていた静雄はその海原の悲惨な姿にピタリと固まる

鉄骨に埋もれている海原は鉄骨に圧迫され苦しいにも関わらず手を

止めて固まった静雄に対して相変わらずの笑みを溢している

「……ははは、無様…ですね……こんな結末…なんて……」

海原光貴の言葉に持っていた鉄骨を落として険しい表情をする静雄

海原はそんな険しい表情の静雄を見て首を傾げる

「……別に…貴方が……そんな風に……苦しまなくても……」

表情を曇らせる静雄に微笑み掛ける海原光貴、

しかしながら静雄は申し訳なさそうに埋もれている海原光貴に頭を下げる

「……、すまねぇ」

また目の前で助けられる者を助けられなかった罪悪感

静雄はその事だけで頭の中が一杯だった

すると、鉄骨を片手に俯き頭を下げる静雄に対して海原光貴は口を開き話し出す

「……頭を……上げて下さい…貴方が…そんな顔する必要なんて……」

海原光貴の言葉に悔しさで自身の拳を力一杯握りしめる静雄

鉄骨に埋もれている海原光貴はそんな静雄に対して真剣な表情を浮かべている

ボロボロの海原光貴は静雄を見据えて話し出す

「……最後に一つだけ」

海原光貴は鉄骨に埋もれたまま静雄に対して問いかける

「…僕の代わりに御坂さんを守って貰えますか……？」

海原光貴のその言葉に押し黙り俯いたままの静雄、

丁度、その時だった鉄骨が大量に落下した工事現場の近くの物陰に咄嗟に隠れる短髪の少女

静雄は力一杯握りしめていた拳を段々と緩めて何かを悟った様に瞼を閉じて話し出す

「…たりめぇだ大切な奴の為なら命なんて惜しくねぇ」

静雄の覚悟の込もった返答に笑みを溢す海原光貴

すると、静雄はそんな海原光貴に対して口を開き話し出す

「……俺からも最後に一つだけ」

そう言ってボロボロの海原光貴を見据えて訪ねる静雄
海原光貴は静かに頷き静雄からの言葉を待つ

「……テメェのホントの名前は…」

静雄の言葉を聞いていた海原光貴は静かに瞼を閉じて答えだす

「……エッツァリです」

海原光貴を名乗る魔術師はそう言うと鉄骨に埋もれたまま静雄に微笑む

工事現場の物陰に隠れていた御坂美琴は顔を真っ赤にして買ったクレープ屋の袋を力強く握りしめていた

（…違う違う！あいつは平気でそう言う事を言う奴なのよ！！）

そう自分に言いかせつつ工事現場にある鉄骨の柱に寄り掛かる御坂美琴

そして、顔を真っ赤にした彼女は真っ青に透き通った空を見上げる

（……紛らわしいのよ馬鹿……）

遠い目で空を見上げる美琴

こうして魔術師と静雄との戦いを幕を下ろした

滝壺理后（前書き）

――うーんでは更新したいと思います

滝壺理后

御坂美琴との一件から一夜明けて

池袋最強、平和島静雄はとんでもない窮地に立たされていた

「すまねぇ……、もう一度今なんつった？」

「……だからね今から下着を買いにいきたいから付き合って静雄……」

――滝壺理后、

暗部組織アイテムのメンバーの一人で一言で言えばおっとりとしている少女、

そんな彼女から面と向かって静雄はとんでもない事を頼まれて唖然と立ち尽くしていた

「……下着って、あれだよな」

「……うん、」

静雄の問いに即答で頷く滝壷

これはどういう事なのか静雄の頭の中は半ば混乱状態だ

女性用の下着購入に男の自分が連れていかれた所で選ぶなんてとんでもなく変態染みた行動なんてできる筈もない

それに絹旗やフレンダみたいな奴等を引き連れて行った方が間違いなく妥当である

「よりによってなんで俺なんだ？」

「…この間、私を置いてきぼりにした罰」

いや、明らかに罰っていうか只のたちの悪い嫌がらせだろと静雄は内心思うが、滝壷に敢えて口には出さない

すると、滝壷は困った表情を浮かべて視点を反らしている静雄に追い討ちをかけるように迫る

「……駄目…かな」

静雄の服の袖を掴んでまるで小さな子猫の様な仕草で迫る滝壷

流石に滝壷のそんなすがりつく仕草に折れそうな静雄は視線を逸らして複雑な表情を浮かべる

「……断るって出来ないのか？」

「……無理」

迫り来る滝壷に押されまくる静雄

そんな滝壷とのやり取りが三十分位に続き、頑固な態度の滝壷に滝壷に対して静雄は渋々……

「……わかった、これっきりだからな」

とこのように仕方無く了承した

その様子を見た滝壷はすかさず小さくガッツポーズを決める

（……静雄の好みの下着、これさえあれば悩殺間違いなし…）

静雄に背を向け密かにニヤリッと笑いガッツポーズを決めている滝壷

静雄は素早く支度を済まして玄関にてそんな奇妙な行動をしている滝壷を待つ

「何やってんだ行くぞホラ」

「……うん今行く」

相変わらずのジャージ姿の滝壺はトテトテと静雄の待つ玄関へと向かう

二人は玄関の扉を開いて外へと出た

――――――――――

先程までいたアジトから車で移動して大体２０分程

静雄と滝壺はひとまず大きなデパートに辿り着き早速、お目当ての下着売り場に直行していた

「なぁ……、マジで買うのかよ」

「……？、うん」

早くもこの意味の分からない状況に折れそうな静雄、
滝壷は優しく微笑み窮地に立たされている静雄の手に自分の手を添える

「……大丈夫、私はそんな折れそうな静雄も応援してる」

（……テメェが原因だけどな…）

そんなこんなで二人が訪れるランジェリーショップ、
だが、静雄はその光景が目に入った途端に石のように固まった
視界に入るのは勿論下着を買いに来たたくさんの女性客ばかり、
まぁ、これは大体予想していたから多少は大丈夫だ
だが、そうではなく見慣れた短髪に灰色のプリーツスカートの少女

「ねぇねぇ御坂さんこんなのはどうですか？」

「えーどれどれー」

そう、先日会ったばかりの御坂美琴の姿がそこにはあった
しかも、髪の長い少女と頭の上に花を飾りつけている少女を引き連れている
雷が静雄の頭を直撃し真っ白になるのを感じた
（…こ…こいつはァ予想外だった）
御坂美琴の姿に思わずその場から後退りする静雄
だが、滝壷はそんな静雄の様子を見て首を傾げ、すかさず手を掴む
「……行こう、静雄」
「え…？ちょ待て待て！！」
滝壷に引き連れられてランジェリーショップへと足を踏み入れる静雄
その時、下着を選んでいた御坂美琴はパッとランジェリーショップの中に消える金髪が目につく
（……？ん）

何処かで見慣れた事のある金髪頭

ひとまず美琴は選んでいた下着を元の場所に戻して金髪頭が消えたランジェリーショップの奥へと足を踏み入れる

しばらく店の中を捜索すると先程目についた金髪頭がそこにはいた

「あー…何やってんだ俺」

独り言を試着室の前で呟いてがっくりと項垂れている金髪頭

見慣れた事のあるその後ろ姿を見た途端に御坂美琴の思考は停止した

（ななななな！……なんであいつがあんな所にいんのよ／／／）

そう、御坂美琴の視界に移るのはがっくりと項垂れている平和島静雄の姿

顔を真っ赤にして固まる御坂美琴

すると、しばらくして試着室の試着室の中からひょっこりと顔を出す一人の女性

「……静雄、これどうかな？」

そして、試着室の扉が開いてその中身が露になる

綺麗な肌、美しい脚線、それを引き立てる様に上下に揃えたピンクの下着

出るところは出ているバストに締まっているウエスト

それを試着室の前にいる静雄の前で披露する滝壺

そして、それを目の当たりにした静雄と御坂美琴は……

「「……ぶー！！」」

盛大に吹き出した

慌てて静雄は下着姿の滝壺を試着室へ押し込めすかさず扉をしめる

「馬鹿野郎！何やってんだコラァ！」

すかさず閉めた扉を背に顔を真っ赤にして怒鳴り声を上げる静雄

その途端に辺りにいたランジェリーショップの女性客は一気に怒鳴

り声を上げた静雄へと視線が注がれ、

静雄は顔を観られまいと顔を真っ赤にしたまますかさずは視線を落とす

しかもタイミング悪くその場に居合わせた御坂美琴により更に場は混乱する

「ち、ちょっとなにやってんのよアンタ……ムグ！！／／／」

試着室の前にいる自分に顔を真っ赤にして怒鳴り迫る美琴の口を咄嗟に右手で塞ぐ静雄

静雄はがっくりと肩を落として深いため息を吐き頭を抑える

（……最悪だ……）

……そう、最悪の事態である

ひとまず、静雄は滝壷を押し込めた試着室の扉を二回叩いて話し出す

「……悪い理后、喉渇いたからひとまずこの店から出てコーヒー買ってくるわ」

「……？わかった」

なにやら元気のない静雄の声に応える滝壺

そんな静雄の目の前には自身の右手で口を塞いでいる、興奮気味に顔を真っ赤にしている御坂美琴が居る

その御坂の耳元に顔を近づけて囁く静雄

「…頼む察してくれ」

疲れた表情を浮かべて囁く静雄の言葉に口を塞がれたまま黙って二回頷く御坂美琴

ランジェリーショップでのこの光景ははたから見れば実に滑稽である

そして、静雄は右手を御坂美琴の口元からゆっくりと離す

「それでアンタは何やってんのよ！」

「まぁ、話すと長くなる……」

試着室の前で小さな声で互いに会話をする二人

すると、静雄は美琴に頭を下げてお願いし始める

「頼む、今日のこれは見なかった事にしてくれ……」

疲れきった様子で自分に向かい頼み込んでくる静雄の態度に目を丸くする御坂美琴

静雄はとりあえず小声でこれまでの経緯やこれが罰だと言うこと、そして、滝壺が自分の仲間だと言うことを簡潔に述べた

すると、美琴は呆れたようにため息を吐き疲れきり説明をした静雄の肩をポンと叩く

「……まぁ、よくわかんないけど今日の所は見なかった事にしといてあげる」

「面目ねぇ……」

正直、美琴は静雄に対して色々と問い詰めておきたい所であったが、普段からあれだけタフなこの男のこれだけ疲れきった様子はただ事では無い

美琴はとりあえず静雄への〝貸し〟としてこの場を見逃してやることにした

そして、二人は一息ついて無事この混乱に収集をつけて互いに別れる

……それからしばらくして試着室の中からジャージを着た滝壷

「……？、あれコーヒー買ったんじゃ無かったの？」

「あ、あぁ、もう飲んで捨てた」

先程、下着姿をパッと頭が過り滝壷を直視できない静雄

顔を真っ赤にして視線を逸らし頬を掻いて滝壷に答える

「……？どうしたの？」

「な、なんでもねぇ、それよりテメェは買うもの決まったのかよ」

顔を真っ赤にし目線を逸らして滝壷に訪ねる静雄

滝壷は紙袋を取り出して静雄にへと見せる

「……さっき静雄に見せたのにした」

「……お前、もうちょい……、いやなんでもねぇ」

静雄は諦めたように頭を抑えて深いため息を吐く

恥じらいを持てなんて言った所で恐らく無駄、静雄はそう判断し何か言い掛けた口を閉じる

丁度、その頃、静雄と別れた御坂美琴は先程までいたランジェリーショップから出て二人の友人と合流していた

「御坂さん何やってたんですか？」

「いやー、ちょっとねーアハハ…」

頭を掻き誤魔化すように話す御坂美琴、
そんな、御坂美琴の様子に友人の一人、花を頭に飾りつけている初春飾利は残念な表情を浮かべている

「それにしても、結局、御坂さん何も買いませんでしたね」

「二人ともゴメンねー
実は今回は黒子があまりに下着について五月蝿いから目を通しに来ただけなんだ」

頭を掻き申し訳なさそうに二人に謝る御坂美琴

そんな謝る御坂美琴に二人は互いに笑い合い話し出す

「まぁ、私達も暇だったから全然いいんですけどね、ね初春」

「はい、楽しかったですしね」

「なら良かった、ありがとう二人とも」

美琴はそう言うと先程までいたランジェリーショップへとチラリと視線をやる

（あの馬鹿大丈夫かしら）

若干、先程会った静雄が心配な美琴、

とりあえず美琴は二人の友人を連れてその場から去って行った

――――――――

それからしばらくして、ランジェリーショップから出た静雄と滝壺

は車でアジトまで戻っていた

「…疲れた？」

車の後部座席に寄り掛かり静雄へ訊ねる滝壺

静雄は「まぁな」と適当に返しハンドルを握りしめている

「……でも、私は静雄と買い物できて楽しかった」

「そりゃ良かった、でも下着はもう勘弁な」

ポリポリと後頭部を掻いて滝壺に言う静雄、

滝壺は笑みを浮かべ紙袋を持ったまま頷く

滝壺との波乱に満ちた買い物は無事に終わりを告げた

紆余曲折（前書き）

――ハイハイでは更新したいと思います

紆余曲折

――とある日の昼間過ぎの夕暮れ時、

学園都市の外部に出歩いている金髪にサングラスを掛けた男……

平和島静雄は珍しく眉間にシワを寄せてやたらと機嫌が悪かった

（あー何でもいいからブチ殺してェ殴り飛ばしてェ）

自身の首の骨をゴキリと鳴らし物騒な事を頭の中で思いながら外を闊歩する静雄、

何故静雄が凄まじくこのように機嫌が悪くなっているのか

――というのもそれは今朝の出来事である

いつも通りの時間に起床しアイテム全員の朝食を作り上げたそれをテーブルに並べていた静雄…

そして、普段ならアイテムのメンバーもそれぞれ目を覚まして朝食

をいつも通りに食べて済ませる筈だったのだが……

『静雄、アンタ今日の朝食また鮭が無いじゃない』

『あぁ？仕方ねぇだろうが塩鮭は全部切らしたんだからよ』

と食卓に並んだ朝食の中に塩鮭が無いことを不満でリビングのテーブルを叩く麦野に対して食事の用意をした静雄は青筋を立て…

その静雄の態度に対して頭にきた麦野は作り上げた朝食を自分の能力で燃やし

……そして、最終的には、

『ハハァ、わかったわかったァ、とりあえずテメェはドタマかち割るしかねぇみてェだなァ、あァ！！』

『上等じゃねぇかァ、アンタが第一位か何だか知らないけどよォ、〇〇〇で×××みたいな死体にしてあげようかァ静雄ォォォ！！』

（（（こ、恐い、この二人））））

とこんな感じの物騒なやり取りがあり、なんだかんだで麦野と喧嘩

しアイテムのアジトは半壊、

未だに頭にきた静雄はひとまずその半壊したアジトから飛び出し、

わざわざ自身の苛々を押さえ込む為に気分転換も兼ねて、学園都市から出てきたという訳だ

今朝の出来事を思い出しますます機嫌が悪くなる静雄

「あ〝ー苛々する！！」

静雄は自身の苛々を紛らわす為に近くにあるコンクリートの壁に向かい思いっきり拳を振るう

風を切るようなビュンという音と共に衝突する静雄の拳

コンクリートの壁はガラガラと音を立てて、まるでジグソーパズルが一気に剥がれるように崩れ落ちる

眉間にシワを寄せたまま拳を引き戻して手首をプラプラとさせる静雄

（…チッ、あのクソアマ…、何考えてんだ）

そして再び歩き出す静雄は苛々のあまりに今にも爆発しそうな勢いだ

すると、そんな苛々している静雄の後ろから迫るツンツン頭の青年

「おーい静雄ー」

「あア゛」

名前を叫びながら近付く青年へ眉間にシワを寄せて振り返りすかさず睨む静雄

「……ひっ!!」

睨まれた青年はそんな機嫌が悪い静雄に思わずビクリと肩を上げる

ようやく冷静になった静雄は目の前に現れた人物を認識する

「あー上条か」

そう学園都市の不幸な青年、静雄の親友の上条当麻であった

そして、その上条当麻は只今、とてつもなく物騒な威圧感を醸し出していた静雄に睨まれて顔をひきつらせていた

「お、オウ、どうした静雄、めちゃめちゃ恐かったぜ今」

普段通りの表情に戻る静雄に冷や汗を掻いて驚いている上条

静雄は「ふぅ」と息を吐き頭に血が昇っている自身をひとまず落ち着かせてそんな上条に微笑み話し出す

「いやなんでもねぇ、」

「いやいや、なんか顔がひきつっていらっしゃいますよ静雄サン」

無理矢理微笑む静雄に苦笑いを浮かべる上条、

とりあえず静雄はため息を吐き、突然背後から現れた上条に話し出す

「……んで、なんでテメェが学園都市の外を出歩いてんだ?」

静雄の投げ掛ける質問に対してギクッと固まる上条、

渋々、話し出す彼の話を聞くと前に助けた銀髪のシスターがあの赤い髪の神父に誘拐されたとか、

「んで、その廃劇場に居ると」

「まぁそうなりますね」

深いため息を吐く上条はがっくりと項垂れている

すると、上条は黙って話を聞いていた静雄へと訊ね出す

「……んで、静雄はなんで学園都市の外なんかに居るんだ？」

「俺は今最高に苛々してるのと、あの街が基本嫌いだから外に気分転換で出歩いてるだけだ」

聞いていた上条は先程の機嫌が悪そうな静雄の反応を見ていたため、彼の状況が大体把握できたのかひたすら苦笑いを浮かべる

だが、仮にも第一位の彼が易々と学園都市を黙って出て外部を出歩くのはどうなのだろうか

上条がその事について静雄へ訊ねると、

「あー、うざってぇから無理矢理出てきた」

というとんでもない返答が返って来た

確かに機嫌が悪い、さっきまでの彼なら無理矢理でもやりかねない

そんな他愛ない会話をしていた上条は静雄の後方に目をやり
自身の視界に入ってきた光景に首を傾げる

「静雄、あれなんだろ」

自分の視線の先を指差して首を傾げて静雄に訊ねる上条、
静雄は訊ねてくる上条が指差す方向へと振り返り視線を向ける

そこには…、何やらバス停の前でボーと立ち尽くしている黒い修道服を身に纏った女性

「シスター？」

「みたいだな」

二人は互いに頷いてゆっくりとそのシスターに近付く

そして、黒い修道服の少女に話し掛ける上条

「あの～何をやってらっしゃるのですか？」

上条に声を掛けられゆっくりとこちらへと振り返る修道服を着たシスター

どうやら外国の人らしく目は青く透き通っている

何やら首を傾げているシスターは辺りをキョロキョロとしきりに見渡して訊ねた上条に話し出す

「あの～…、道をお訊ねしたいのでございますが」

「あー、こちらの質問は完全にスルーですか」

苦笑いを浮かべて話し出すシスターに顔をひきつらせる上条

だが、修道服を身に纏っているシスターはそんな上条に構わずマイペースに話を進める

「学園都市はこのバスに乗ればよろしいのでございましょうか……」

「すいません上条サンの話を聞いてください」

上条の話を全く無視して話す黒服シスター

すると、静雄はそんなお惚けシスターに近づき丁寧に学園都市までの道を教え出す

「確か、学園都市って外からの交通機関は切断されてんだろ?あそこを真っ直ぐに行けば学園都市に入るためのゲートに着くぜシスターさん」

静雄が指差す方向へと視線をやるシスター、そして彼女は頭を下げて微笑む

「これはこれはご親切にありがとうございます」

「あぁ、どういたしまして」

お礼を述べるシスターに微笑む静雄、しかしながら彼女はバス停から動こうとしない

しばらくしてバス停にバスがやってきて扉が開き、それに何事も無

かったかの様に乗り込もうとするシスター

「ちょっと待て！！話聞いてた！？」

バスに乗り込もうとシスターを上条は咄嗟に制止する

シスターは急に自分を呼び止める上条に首を傾げている

「バスに乗ったら駄目って言ってんでしょ！」

上条の言葉に納得したのか乗り掛けたバスから降りるシスター

静雄はそのシスターの行動に思わずガクッと肩を落としている

再び学園都市の道のりを静雄の代わりに説明し出す上条

「だから、あっちに歩いてゲートから入るの、わかったか？」

「すいません、ご迷惑をかけてしまって」

再び笑顔を浮かべて頭を下げてお礼を述べる黒服シスター

そして、頭を下げてお礼を述べた彼女は……

――平然とした様子で再び停まっていたバスへと足を掛けて乗り込もうとする

「「テメェ！こっちの説明笑顔で全部聞き流してんだろォ！」」

同時にシスターへと激しく突っ込む静雄と上条の二人、

そして、二人はバスが何処かへ行くのを確認して頭を抑えて同時に大きくため息を吐く

二人はなんだかこのシスターとの意味のわからないやり取りにとても疲れたようだ

「二人とも何か苛々しているご様子ですね」

そんな、二人に近づいて白いハンカチを取り出す黒服シスター

シスターは上条と静雄の二人に近づいて吹き出ていた汗をハンカチで拭う

「失礼ですが、貴方様がたはかなりの汗をかいているのでございますよ」

思わずビクッと汗を拭って貰った慌ててシスターから距離をとる上条、

一方、ハンカチで汗を拭い取られた静雄は何故かシスターの行動に対して首を傾げている

そして、上条は照れくさそうに頬掻いて慌てた様にシスターに話し出す

「さ、サンキュー、ところでお前なんで学園都市に行きたいんだ？」

投げ掛ける上条の問いに黒服シスターはゆっくりと口を開き話し出す

「――あの、実はわたくし」

話し出すシスターの言葉に耳を傾ける上条と静雄の二人

そして、次に彼女から発せられた信じられない言葉

「――追われているのでございます」

「「追われてる？」」

思わずシスターの言葉に顔を見合わせる静雄と上条の二人

こうして彼等はとある書物を巡る出来事へと巻き込まれてゆく……

天草式（前書き）

――では更新したいと思います

天草式

学園都市の外部にある廃劇場前、

静雄と上条はバス停から黒服シスターを連れてこの廃劇場前に訪れていた

「……んで上条当麻、君はなんて奴を引き連れて来てくれたんだい全く」

上条の隣にいる常人離れした金髪にサングラスを掛けた男の姿を見て思わず頭を抑える、銀髪のシスターを誘拐した張本人、赤い髪の魔術師ステイル・マグヌス

上条から引き連れられてやってきた静雄はそんなステイルに対して青筋を立て拳を鳴らす

「あア　？だぁれが邪魔者だぁコラァ……」

「どうどうどう…、静雄とりあえず抑えて、それと後ステイルはそんな事言ってないから」

かなり機嫌が悪く拳を鳴らしてステイルに近づく静雄を羽交い締めにして慌てて制止する上条

ステイルはくわえていた煙草を投げ捨てそんな静雄達を見る

「それにしても君たちがまさかオルソラと接触していたとはね」

「ほんとびっくりするほど偶然ですね……」

ステイルの隣にいる杖を持った赤い髪のシスターは三人を見て驚いた表情を浮かべ言う

「それじゃ君達は帰っていいよ、そこにいるオルソラをこちらに引き渡してもらおうか？」

「「は？」」

訳がわからない二人は互いに意味のわからない事を口走るステイルに思わず声を上げる

そんな二人に対してため息を吐き、黒服シスターを指差して話を続けるステイル

「……だから彼女をこちらに渡せば終わりなんだよ、バイバイって訳だ」

ステイルのこの言葉に思わずピクピクと青筋を立てている静雄

それに加えて先程までそんな静雄を制止していた上条までその手を緩めて拳を握りしめて青筋を立てている

「なぁオイテメェ……こんなァくだらねぇ事で人様を呼んで置いてェ、

こんな扱いってのは死ぬ覚悟があるってぇ事なんだよなァ……」

「そうだなぁとりあえず静雄、こいつは一回ボコボコにしとく必要がありそうだなァ……」

互いに確認する様に頷いて拳を握りしめたまま眼光を光らせる静雄と上条

そんな二人の凄まじい威圧感にステイルは冷や汗を垂らす

「いや…、そのだからだな」

目の前に立つ怒れる鬼のような二人に後退る魔術師ステイル

その隣にいる赤い髪のシスターはそんな怒りを露にしている二人の対応に慌てているステイルに呆れたようにため息を吐き、

黒服シスターのオルソラは静雄達の後ろに隠れている

そんな中、怒り狂う二人とステイルの仲裁に現れた銀髪の少女、

「とうま、しずお、あんまり怒ると身体に悪いんだよ」

二人を制止する様に割って入る彼等の目の前に現れた銀髪シスター、禁書目録

注意するように二人に言い聞かせる彼女の言葉にステイルに今にも殴り掛からんとしていた二人はピタリと固まる

禁書目録から注意を受けて渋々握りしめていた自身の拳を緩める二人

「…まぁ確かに何事もないならそれに越したことはねぇな…」

「禁書目録の言う通り俺も大人気なかった、」

仲裁に入った禁書目録に謝る二人、

次に禁書目録はステイルに振り返ると上条達と同じく注意し始める

「ステイルもなんだよ
協力してもらったんだからちゃんと二人に感謝をしなきゃだめかも」

禁書目録から注意されてウッと言葉に詰まるステイル

しばらくして禁書目録から注意された彼は静雄達に対して深々と頭を下げてお礼を述べ始める

「今回は…協力に感謝する上条当麻と平和島静雄」

意外に律義な感謝の仕方に思わず目を丸くする上条と静雄の二人

二人は互いに照れ臭そうに頬を掻いて律義に頭を下げてお礼を述べるステイルから視線を逸らし話し出す

「ま、まぁ確かに俺達も頭に血が登ってたからな」

「あ、あぁ確かにな」

照れ臭そうに話す静雄の言葉を頬を掻きながら肯定する上条

静雄と上条は互いに頷き、とりあえずオルソラの方へと引き渡すために振り返る

「――それじゃ」

それは静雄と上条が振り返る一瞬の出来事だった、

突如、上から聞こえてくる見知らぬ男の声

「――ところがそうはいかないのよな、」

その見知らぬ声に反応しその場にいた全員は咄嗟に上を見上げる

上を見上げた彼等の視線の先には一つだけ浮かんでいる紙風船の様な物体

「――天草式！」

その光景を見て声を張り上げる赤い髪のシスター

浮かんでいた紙風船からは続けて声が聞こえてくる

「悪いがオルソラ・アクィナスはローマ正教よりも我ら天草式と共にいた方が有意義に生きられるのよな」

オルソラの足元に鋭利な剣が地面から飛び出し彼女の足場を切断する。

「――な」

剣で切断された足場が落下し、上条達の目の前から姿を消すオルソラ

「しまった!!」

「クソ!!」

姿を消したオルソラの場所へと急いで駆け寄る上条、

すると、そんな上条の後ろから切り裂くような鋭い声が耳に入る

「どけ上条！！」

声が聞こえた途端に慌てて身体をその場から退かす上条

――声が聞こえた後ろへと振り返るとそこには……

「オラァァァァァァ！！」

軽く飛び上がり思いっきり踵を地面へと降り下ろしている静雄の姿、

その降り下ろされた踵は地面へと接触すると共にドカァァン！！と

凄まじい音を立てて砕け地面が割れる

舞い上がる土煙に砕けたコンクリートの破片

その光景に唖然と立ち尽くす赤い髪のシスター

「なんてめちゃくちゃな……人の粋を越えちまってやがります」

「だから言ったんだよ……」

割れて砕け散りドでかいクレーターが出来たコンクリートの地面を
目の当たりにしてため息を吐き頭を抑えるステイル

そして、馬鹿力でクレーターを作り上げた本人は舞い上がる土煙の
中から姿を表し上条達の目の前に現れる

「ッチ…逃がしたか」

オルソラを連れ去った連中を取り逃がし舌打ちをする静雄

すると、上条はそんな巨大なクレーターを作り上げた静雄に近づき
バシンと勢いよく頭を叩く

「危ねぇだろうが！！一瞬死ぬかとおもったぞ」

上条から勢いよく叩かれた箇所を擦る静雄、

静雄は地面を見詰めて面倒くさそうに話し出す

「死んでねぇから安心しろ、それより……」

静雄は地面を見詰めてため息を吐きクレーターの外にいるステイル

の隣にいる赤い髪のシスターを見る

「――こりゃ一筋縄じゃいきそうにねぇな」

廃劇場前で一人呟く静雄、

彼等の前から天草式により拐われたオルソラ

彼等の戦いはこうして幕を上げた

懸軍長駆（前書き）

――未だに戦闘に入らず、無念

懸軍長駆

辺りはすっかり暗くなり、

天草式から拐われたオルソラを救うべく事を起こす為に、

彼等の場所を特定した静雄達は移動している最中であった

オルソラが追われている理由……、

移動中の静雄と上条はステイルと赤い髪の少女、アニューゼから彼女について大まかな説明をしてもらい、

ステイルとアニューゼから話を聞いた彼等はひとまず今の状況を頭で整理していた

「んでステイル、拐われたあのシスター……、
オルソラは法の書ってェヤツを解読出来る訳か」

「まぁ、そうだね」

静雄の言葉に頷く赤髪神父、ステイル
隣でステイルと静雄の話を聞いていた上条は顎に手を添えて表情を曇らせる

「それじゃ俺達は神裂のいた天草式ってのと戦う事になるのか」

上条の言葉にタバコの煙を吐いて黙って頷くステイル、
そして彼は続けて二人に話をし始める

「……数日前から神裂との連絡が取れない」

「オイ、そりゃもしかすると……」

オルソラを拐った天草式の側に神裂がついている可能性があるということになる
話を聞いていた静雄は面倒そうに後頭部を掻きため息を吐く

「厄介ごと増えすぎだなクソッタレが……」

「……あぁ、全くだ」

ため息を吐き呟く静雄の言葉に肯定し頷き答えるステイル

すると、三人に対して上条は拳を握りしめて何かを決意した眼差しを向ける

「…なら拐われたオルソラの救出を最優先でいいか三人とも」

「…んなことたりめーだろうが、元からそのつもりだっての」

訊ねる上条に即答で返す静雄、

禁書目録はそんな二人に対して忠告する様に話し出す

「でも、気をつけてね…、天草式は近接戦闘のスペシャリストばっかりだからあまり無理したら危ないかも…」

「いやそれなら逆に心配いらないね」

禁書目録の言葉に煙草を投げ捨て答えるステイル、

彼は隣にいる静雄へと視線をやり口を開き話し出す

「…彼に近づこうものなら一瞬で宙を舞うことになるだろうし第一、一応戦力でもローマ正教がいるこちらが有利だ」

ステイルの言葉に顔をひきつらせて静雄へと視線をやる上条

確かに近接戦闘でこの隣にいるサングラスを掛けた馬鹿力を持つ金髪の男に挑むものなら、当然の如く蹴散らされるだろう

そう考えると、何故か上条は今から戦闘を行う天草式がとても可哀想に思えてきた

「まぁ要するにぶっ飛ばして助けて終わりって訳か」

「そう上手くいくかわからないけどね…」

拳を握りしめて淡々と話す静雄へ吐き捨てる様に言うステイル

そんな二人を他所に上条はあることに気付いた

「あれ？アニューゼ達は？」

そう、数時間前までいっしょにいた筈のアニューゼとローマ正教のシスター達の姿が見当たらない、

――数時間前…、

幸か不幸かわからないが、ラッキースケベな上条は足がもつれて転けたアニューゼの股の間に顔を突っ込んだり、

禁書目録とアニューゼのシャワー中に飛び込んだりとハチャメチャなイベントに遭遇した為に深刻な精神的ダメージを負うということがあった、

静雄はそんな上条をひたすら慰めていた訳だが、

上条から言われて移動中の静雄と禁書目録が辺りを確認する様に見渡すと確かにそのアニューゼとローマ正教の姿が見当たらない

「心配いらないよ」

辺りを見渡している静雄と禁書目録の二人に声を掛けるステイル

声を掛けられた二人はステイルの言葉に疑問を抱き首を傾げる

「彼女達は僕達とは別にちゃんと動いてくれている　とりあえず僕達は僕達で動く」

ステイルの言葉に頷く三人

「たしか奴等の居場所はパラレルスイーツパークだったか？」

先程、アニューゼ達から聞いた話をステイルに確かめる静雄

ステイルに訊ねる静雄の言葉に上条の隣にいた禁書目録が代わりに答え始める

「……うん、〝特殊移動方〟を使われる前にオルソラを救出しないと」

静雄に話す禁書目録の言葉に黙って頷く三人

――〝特殊移動方〟

日本国内限定の術式、簡単に言えば日本中に特殊な渦が四十七ヶ所あってその間を自由に行き来出来る地図の魔術、

だが、その術式には星の動きが関係しているらしく、決まった時間にしか使えないらしい

特殊移動方の使用制限解除は日付変更直後、

そして、その術式を破壊できるのは日付変更直後の午前０時が過ぎるまでのようだ……

なお、静雄達に与えられた時間は五分程度、

その間を使ってオルソラを捜索し見つけ術式を破壊しないといけない

「オルソラの捜索に渦の破壊、わりと窮屈なスケジュールだな」

ため息を吐き愚痴を溢すステイル、静雄はそんなステイルの横目に

頭の中を整理していた

（……オルソラと天草式、ねぇ…なぁんか引っ掻かんだよなァ）

静雄はアニューゼを見たときのオルソラの反応を思い出す……

……あれは間違いなく天草式では無く、あの少女の姿に対して怯えた様子だった

十字教がどんな物だか静雄は理解できないが、オルソラはアニューゼ達に助けを求めているようには到底見えなかった

（……ひとまず、成り行きに任せるか）

サングラスを掛け直して静雄は一つため息を吐く

しばらくして、パラレルスイーツパークの裏手に着いた四人は確認する様に頷く

「いいか、まずはオルソラの救出が先だぞ赤髪神父」

「わかっているよ金髪悪魔」

忠告する様に話す静雄の言葉に青筋を立てて言い返すステイル

様々な思惑が渦巻く中、

彼等はオルソラと天草式がいるパラレルスイーツパークに突入する

建宮斎字（前書き）

――ハイ更新したいと思います

天草式が潜むパラレルスイーツパーク内を駆ける四人

先頭を走り、オルソラを見つける為に辺りを必死で見渡す上条

「クソ！何処だ！」

だが、そんな上条の後ろについていた静雄は何かに気づいたのかピタリと走るのをやめて先頭を走っている上条に怒鳴る

「伏せろ！」

静雄の言葉に足を止めて慌てて上を見上げる上条、

見上げた上条の目線の先には剣を振り下ろす一人の少女の姿

上条は急いで後ろにいた禁書目録を手ではね除けて自分自身も降り下ろされた剣から身を逸らす

地面に剣が叩きつけられると同時にキィン！！と鳴り響く金属音

次にはステイルに向かって突如横から現れた男性が剣を振るいステイルは身軽にはね除けられた禁書目録を抱えてそれを避ける

そして、更に周りに増える天草式のメンバー

すると、その様子を見ていたステイルは上条へと何かを投げる

「上条当麻、君にやる」

ステイル投げられた何かを受け取り握りしめる上条

そして、手に握ったそれをゆっくりと確認する

「十字架？」

「死にたく無ければ肌身離さずもってろ！」

それと同時に再び襲いかかる少女の剣を慌ててかわす上条

「うわぁ！」

横をスレスレで通り過ぎる剣に思わず上条は声を上げる

身体を翻して剣を握りしめて上条へと向かい振るう少女

すると、上条に斬りかかった少女の首根っこを静雄が掴み上げてそれを止める

「……テメェらなぁに人の友人に物騒なもんを振り回してくれてんだコラ」

上条に襲いかかった少女はまるで首元を掴まれた猫の様に吊り上げられ、とても驚いた表情を浮かべていた

そして、少女を掴んだまま静雄はサングラスを外してギロリと現れた天草式を睨み付ける

そのサングラスを外した顔を見た瞬間に冷や汗を流して固まる天草式のメンバー、

「ば、馬鹿な!!なんでこんな…!」

天草式のメンバー達は見たことのあるその風貌に後退る、

金髪の頭にサングラスを掛けた恐ろしい威圧感を醸し出している人物…

かつて、いや今もなお、池袋で最強と名高い男

「…平和島静雄がなんでこんな所に！！」

静雄は取り外したサングラスを胸ポケットへと直し、

少女を掴んでいた手を離して懐から煙草を取り出して火をつける

そして、煙草を地面にへと投げ捨て足で火を消す静雄は目の前の天草式を見据え、その内に秘めた凶暴性を感じさせる不気味な笑みを溢しゆっくりと彼等に話し出す

「…やるてぇなら、ぶっ飛ばしても文句はねぇよなぁ？」

上条当麻を庇うように立ち塞がる静雄の一言に怯む天草式

静雄はゴキリゴキリと片手の骨を鳴らし瞳孔を見開く

そして、静雄は後ろにいる上条にボソリと目の前にいる天草式に聞こえない位の音量で囁く

「…今の内に行け」

静雄の一言に黙って頷き自分を庇うように立つ静雄を背に駆出す上条

「…クソ！！」

そして、その光景を見て声を上げて慌てて駆ける上条の後を追おうとする天草式の一人の青年

だが…、目の前に立ち塞がる静雄の真横を通り過ぎた次の瞬間…

「ブフォ！！」

青年の顔面にまるで稲妻のような何かが突き刺さる

突如横から現れ、放たれたそれの速さに反応出来ない青年

そして、ドカァン！！と音を立てて上条を追おうとした天草式の一人の青年は近くにあった建物にドでかいクレーターを作り上げ力無く倒れる

放たれたそれが静雄からの回し蹴りだと確認できたのは周りでその光景を目の当たりにしていた天草式達とステイル、禁書目録だけだった

青年の有り様に顔を真っ青にする天草式達とステイル達

静雄は唖然と立ち尽くす天草式達に向かい一歩づつ近づいてゆっくりとドスの利いた声で口を開き話し出す

「……次はァどいつだ」

静雄の放つ凄まじい威圧感に無言で武器を投げ捨てる天草式達、

武器を捨てる天草式達の姿を見た静雄はその光景を見て笑みを溢し、

先程、自分が蹴り飛ばしたボロボロの青年に近づき、片腕で持ち上

げる

「な、何をするつもりだい君……」

「あん？」

冷や汗を掻いて慌てて自分へと訊ねるステイルに首を傾げる静雄

静雄は天草式達の前に先程蹴り飛ばした青年を降ろして話し出す

「一応手加減したつもりだ、多分しばらくしたら眼を覚ますから後は任せた」

あれで手加減！？　と信じられないという表情を浮かべる天草式とステイル達

先程、蹴り飛ばした青年の身体を地面へとそっと置いた静雄は上条当麻が駆けて行った方を見詰める

「俺はオルソラを探す上条が心配だから後を追う」

立ち上がり話す静雄の言葉に頷くステイルと禁書目録

そして、静雄は上条が駆けて消えた方向へと走り出し後を追った

――――――――――

それから、しばらくして、

上条の後を追い駆けていた静雄はその足をゆっくりと止める

（あんの馬鹿何処いきやがった？）

辺りをしきりに見渡し消えた上条を探す静雄、

だが、彼は一向に見当たらない、恐らく何処かに身を隠しているのだろう

静雄はとりあえず上条が隠れていそうな物陰を色々と探りながらパラレルスイーツパークを探索する

だが、そんな静雄の後ろから迫り来る一つの人影、

「――おやまぁ、池袋からはるばるご苦労様なのよなぁ」

背後から掛けられた声に咄嗟に身構えてビクッと反応する静雄

身を翻して声が聞こえた背後を見るがそこには誰もいない……、

次の瞬間、静雄の真横から現れる黒い人影

静雄は咄嗟に反応し振り下ろされた剣をかわして身構える

「こいつは驚いた、まさかあれがかわされるとは流石は池袋最強と言ったところか」

静雄へと振り下ろした剣を肩へと担ぎ話し出す男性

静雄は自分へと剣を振り下ろした男を睨み付ける

「……やってくれんじゃねぇかァ」

汗を拭い自身の拳を力強く握り男を睨み付ける静雄、

そして男は再び剣を構えて静雄へと襲いかかる

不意に剣を構えた男性から懐に入られた静雄は反応が遅れる

（しまっ…！！）

防御の体制を咄嗟に取り不意に懐に入った男性から攻撃に備える静雄

そして、静雄の懐に飛び込んだ男性は構わずその上から更に攻撃を加える

爆発音と共に爆風で遠くへと吹き飛ばされる静雄

そのまま吹き飛ばされた静雄は地面へと叩きつけられる

「ぐ……！」

地面へと衝突した拍子に思わず声を上げる静雄

すると、吹き飛ばされた静雄は目線の先に見慣れた人物がいることに気づく

「静雄！！」

吹き飛ばされた自分を見て声を上げるその人物

「おー…、上条じゃねぇか」

仰向けになり呑気に見つけた自分の名前を上げる上条に応える静雄

そして、そんなくだらない静雄達の会話を遮る様に崩れさる上条の目の前にあった建物

その崩れさった建物から現れる先程静雄を吹き飛ばした一人の男性

「オイオイ、池袋最強ってのはこんなもんなのか？」

剣を担いだその男性は静雄を挑発するようにその崩れさった建物の土煙の中から姿を現す

その現れた男性を睨む上条と静雄の二人

「見せてみろよ、池袋最強の力ってやつをよぉ、この建宮斎字にな」

足を押さえて立ち上がる静雄はクビの骨をゴキリと鳴らして目の前に立つ建宮と対峙する

そして、立ち上がった静雄の隣でオルソラを後ろへと庇うように立つ上条

上条と静雄、そして天草式の建宮斎字との戦いが今幕を上げる

義気凛然（前書き）

――更新したいと思います！では

義気凛然

静雄と上条の前に立ち塞がる　天草式達を束ねているであろうリーダー、建宮斎字

建宮は対峙する静雄と上条に剣を向けてゆっくりと口を開き話し出す

「いかんよなぁ、仮にも最強と名高い男がそんなんじゃ」

「……うっせぇなァ、いちいちそんな大層な肩書き俺には必要ねぇよ」

立ち上がった静雄はそう言うと拳を鳴らし建宮に言う

オルソラを庇うように立っていた上条は静雄の隣に駆け寄る

「どうやら……オルソラとは合流できたァみてぇだな」

「あぁ……お前のお陰でな」

駆け寄る上条の言葉に嬉しそうに笑みを溢す静雄

対峙していた建宮斎字は眉間にシワを寄せて会話をしている静雄を睨みつけて口を開く

「……よくもまぁうちの大切な仲間をやってくれたものだ」

建宮斎字の言葉に拳を鳴らす静雄はピタリと固まり答え出す

「……安心しろ手加減はした、死んでねぇよ」

答える静雄はそう言うと鳴らしていた拳を降ろして建宮斎字を見据える

だが、静雄の返答に建宮は表情を曇らせる

「……死ななきゃいいって訳じゃないのよ……なめてんのかテメェは！！」

仲間を傷つけられた怒りを込めた怒鳴り声を静雄にぶつけて睨み付ける建宮斎字

すると、静雄の横にいた上条は仲間を傷つけられ怒りを露にしている建宮斎字に向かい話し出す

「……テメェがまだそこで誰かの為に戦えるような人間なら剣を引いてくんねぇか？」

静雄の隣にいる上条は建宮斎字を見据えたまま話を続ける

「……俺は出来ればテメェみてぇな奴と戦いたくない」

仲間を大切に思う真っ直ぐな建宮斎字を説得する上条

しかし、建宮は上条の言葉に剣を引こうとはせずに片手に持ったまま動かない

「……そうしたいのはやまやまだが我等の敵はローマ正教だ、そこに繋がりを持っているならイギリス清教とてみのがせんのよなぁ」

すると、対峙していた建宮の返答を聞き呆れたようにため息を吐く静雄

静雄は面倒そうに自身の後頭部を掻きながら建宮に話し出す

「……つまんねーなテメェは、ローマ正教って奴等は確かに気に入らねぇ俺も、だけどな、そんな物騒な武器を振り回してオルソラを保護するなんてほざいてやがるお前らなんてのはもっと信用出来ねーよ普通」

静雄は自分達の後ろにいるオルソラを横目に建宮斎字に答える

大きなため息を吐き再び静雄と上条の二人を見据える建宮斎字

「お前さんたちからそんな風な目で睨まれちまったら悲しくなっちまうじゃねぇの、……けどな」

剣を担いだまま眼を瞑り上条達との話を区切る建宮

「やるってなら仕方無ぇ、今日がお前さん達の命日だ!!」

剣を振りかざし上条へ真っ先に直進し襲いかかる建宮斎字

すかさず、前方に足を踏み入れてこれをかわす上条

建宮斎字が振り回す剣は空気を切り裂く様な音を奏でる

間髪入れずに連続で剣が上条に降りかかる

……――だが、

「……誰か忘れていねぇか？テメェは」

建宮斎字の降り下ろした剣は上条当麻に届く前にその動きを止める

……

建宮の横から突如現れる何者かの右腕、
その右手はガシッと建宮斎字が上条当麻へと振り下ろそうとした剣
をしっかりと握りしめている

剣を握りしめるその右手から滴り落ちる真っ赤な血液

「……な！」

そう、突如現れた右腕は上条のとなりにいた平和島静雄の物である

そして、片手で握りしめるその剣を掴んだ静雄はそのまま建宮斎字
の襟に左手を伸ばし、

「捕まえたぞコラァ！！」

ガッシリと建宮斎字の襟を掴み上げて声を上げる

そのまま上条当麻へと視線をやり合図をとる静雄

「……上条ォォォォォォォ」

「…な！！ぐおおお！！」

そして、建宮斎字を掴み上げた左腕を豪快に振り回す静雄

……勿論、静雄から襟を掴んでいる左腕を振り回された建宮はまるで静雄を軸に円を描くようにグルグルと宙を舞う

――そして、

「行くぞ！！コラァ！」

建宮斎字を掴み上げたまま野球のピッチャーの投球ように身構える
静雄

そして、建宮斎字の剣から必死で逃れとりあえず遠方へ避難した上
条当麻

静雄はまるでキャッチャーに向かい野球ボールを投げるような感覚
で上条がいる遠方に建宮斎字を投げる

「…うォォォォォォ！！」
投げられた建宮斎字は声を上げながら上条へと直進する

しかし、建宮が向かった先の上条当麻は既に右腕を左手で添えて何
やら構えをとっていた

右腕を構えたままむかってくる建宮斎字に対して笑みを溢す上条当麻

……そして、微笑む彼は建宮斎字に向かい口を開き話し出す

「いくぜ！建宮！これが俺と静雄の――」

自身に向かい真っ直ぐ飛んでくる建宮斎字に対して足を踏み入れる
上条

今の上条の勢いは誰にも止められない

「――連携だ！！」

バキィィ！！と鈍い音を立てて上条から拳が突き刺さる建宮斎字

丁度、自身の振り下ろした拳は建宮斎字の顔面を捉えた手応えが上条にはあった

叩きつけられた建宮斎字は一回転し背中から落下する

「……ぐはぁ！！」

建宮が持っていた剣は地面を這い、彼の手元から離れる

そして、見事なまでの連携を成し遂げた静雄と上条、

建宮斎字を打倒した彼等は無言で互いに歩み寄る

そして、…パシィ！と大きな音を立て、片手でハイタッチを交わす

ハイタッチを交わした彼等は互いに振り返り、一言こう言った

「「…ナイスだ相棒」」地面に伏す建宮斎字を他所に親指を立て互いに称賛し合う二人

こうして、天草式の建宮斎字は平和島静雄と上条当麻により捕縛された……

慮外千万（前書き）

――んじゃ更新したいと思います

慮外千万

パラレルスイーツパークにおいて、天草式とそのリーダーである建宮斎字を撃破した静雄と上条。

一段落終えた彼等はとりあえず近くに座り込み一休みしていた

「あー、死ぬかと思ったー」

ふぅ、と一息ついて声を上げる上条当麻

だが、座る上条を他所に立って辺りを見渡している静雄は何かおかしな事に気がついた

（……ローマ正教のシスターどもの姿がねぇ……）

辺りを見渡していた静雄は心の中で呟く

そう、アニューゼとあと二人のシスターを残してローマ正教のシスター達の姿が辺りには見当たらない

何やら不信感が募るこの状況

（くせぇ……）

辺りを見渡して考えていた静雄はそう思った

毎回毎回、池袋の街であの忌々しい男に嵌められているせいか、経験で培った静雄の勘がそう知らせていた

アニューゼとステイルが向こう側で何やら話をしているのは分かるしかしながら、一応力を借した自分達に対して、オルソラを救出したのにも関わらずその情報を一切公開しない

そんな険しくする静雄の表情を見た上条は首を傾げる

そして、彼等の元に話を終えて近寄るタバコを口にくわえた漆黒の神父

彼はチッ　と軽く舌打ちをして表情を険しくした静雄と座り込む上条へと話し出す

「……彼等は恐らくオルソラを殺す気だ」

唐突に小さな声で近づいて来たステイルから発せられた言葉

上条は信じられないと言わんばかりの表情を浮かべ、

静雄は黙って小さな声で囁くステイルの話に耳を傾けていた

「……根拠は？」

腕を組み真剣な眼差しでステイルに訊ねる静雄

「……先程からこちらとオルソラとの面会を要求したが断られた、これは明らかにおかしい」

煙草の煙を吐いて静雄の問いに答えるステイル

ステイルから話を聞いた上条は拳を握りしめる

「……成る程な、確かに法の書を唯一解読出来るあいつを殺せば誰にも読めなく成るって訳か……」

「クソッタレが！！」

思わず上条の隣で悪態を吐き怒鳴り声を上げる静雄

そう法の書、これは唯一解読出来るのはあのシスターオルソラだけだ、

……ようするにあの少女さえ殺害すればあれはただの解読不可能な本になり、只の宝の持ち腐れとなってしまう

あの黒服シスターがアニューゼの姿を見て怯えた様子だったのもこれで合点がいく

「…悪いが、これ以上ローマ正教に関わるのは僕の範囲外だどうしようもない」

そう言って表情を険しくする静雄を他所に踵を返し煙草を投げ捨て踏み消すスティル

ふと、先程叩きのめした建宮斎字の顔が静雄の頭を過った

（……あいつ等に頼れば……ローマ正教からあのシスターを助けるかも……、だがアイツ等は協力してくれるか？）

幸いにも、先程捕らえた天草式達の処遇はこちらに委ねられている

元々、あの集団はローマ正教を敵視し、確かにやり方は荒かったがオルソラを救おうと動いていた筈だ

（……馬鹿な俺の頭が幾ら考えたとこでいっしょだ、なら今は…！）

今の自分が思った通りに動く、

静雄は咄嗟に先程捕らえたロープに身を縛られている建宮斎字へと視線を向ける

「……静雄？」

「……？どうしたんだい？」

建宮斎字へと視線を向ける静雄に首を傾げる上条とステイル

すると、静雄はスタスタと縄で縛られている建宮斎字へと近づいてゆく

「……オイ、静雄まさか君は……」

静雄の行動に眼を丸くして訊ねるステイル、

建宮斎字の縄に手を掛けた静雄はきつく結ばれた縄をほどきながらステイルに答える

「……今の状況で頭数が足りねぇ以上、コイツ等に手伝って貰うしかねぇだろう……」

「ローマ正教に殴り込みに行く気か！！正気かい！？」

静雄の言葉に表情を曇らせて怒鳴り声を上げるステイル

だが、しばらく黙々と静雄が建宮斎字の縄をほどく姿に何を言っても無駄と感じたのか大きなため息を吐き、頭痛のする頭を右手で抑えた

「……全く君は、」

建宮斎字を縛っていた縄をほどき終え、立ち上がる静雄

すると、建宮は縄をほどいた静雄に対して話し出す

「なんのつもりなのよなぁ」

「……テメェらの力を貸して欲しい」

縄をほどいた建宮斎字に頼み込む静雄

自分の縄をほどいた静雄の真っ直ぐな言葉に笑みを溢す建宮

「……お前さんに言われなくても」

「俺だけじゃねぇ、……だよな相棒」

縄をほどいた静雄は拳を握りしめている上条当麻へ視点を向ける

――オルソラを助けに行きたい自分の心情を良く理解している静雄の言葉にステイルの隣にいた上条は拳を握りしめて縄をほどいた建宮に近寄る

「……お願いだ」

静雄と同じく建宮斎字に頭を下げて同じく頼み込む上条、

建宮はこの二人の態度に笑みを溢し口を開き答え始める

「……わかった、ならば二人とも、我等天草式と共にオルソラ・アクィナスを助け出そう」

建宮斎字の言葉に嬉しそうに頷く静雄と上条の二人

すると、意気込む上条と静雄の後ろから現れる銀髪のシスター

「ちょっと！二人とも私を忘れたら困るかも！」

聞き覚えのある声に恐る恐る振り返る上条と静雄の二人

視線の先には不機嫌な表情を浮かべる禁書目録の姿

「危ないことに首を突っ込むのは良いけど、オルソラを助けるなら私も力になる！」

禁書目録の言葉に苦笑いを浮かべてハイと返事を返す二人

すると、そんな禁書目録の姿を見ていたステイルはため息を吐き話し出す

「君達といると退屈しないね全く」

「お前ら……」

頼もしく静雄達の戦列に加わったステイルと禁書目録

すると、禁書目録は上条と静雄の二人に近づき微笑み話し出す

「とうまにしずお！！絶対にオルソラを助けだそうね！」

禁書目録の言葉に頷く上条と静雄の二人

こうして上条と静雄は建宮とステイル達を引き連れてローマ正教に捕らえたオルソラを助けるべく動き出す――

怒髪上指（前書き）

――更新しますではでは

怒髪上指

学園都市から離れた場所にある、とある教会

その教会の中で金髪のシスターは弱々しく横たわり、身体中にはおびただしい程の青アザが出来ている

そして、何度も教会内に響き渡る殴るような鈍い音……、

――ローマ正教の赤い髪のシスター、アニューゼ、

彼女は周りを沢山のシスター達で囲いその金髪のシスターを見下していた

そして、そんな彼女は杖のような物を片手に歪みきった表情を浮かべて口を開き話し出す

「……無様ですねシスターオルソラ、貴女が信じた彼等に裏切られるなんてッ！！」

彼女は横たわる金髪のシスター、オルソラの腹部を蹴り上げて不気味な笑みを溢している

「貴女が信じたあの愚かな奴等は貴女を助けるどころかこうやって死に追いやるなんて笑っちまいます」

オルソラの腹部を何度も蹴りそして、その足で身体を踏みつけるアニューゼ

アニューゼは踏みつけたその足に力を入れ、腹部に置いた足を捻り押し潰す

うぅ…、と踏みつけられる痛みで声を上げるオルソラ

アニューゼはそんな彼女に足を置いたまま話を続ける

「――…偽善者、なんにも能もないツンツン頭の男や嘘っぱちでホラ吹きな馬鹿な連中信じるから貴女はこうやって無様に死ぬ」

アニューゼのその言葉に微かに反応する痛みつけられているオルソラ

彼女は真っ直ぐに自身の身体を蹴り傷つけるアニューゼを見詰めその言葉を発した

「――あの方達は決して嘘はついていないのでございますよ」

真っ直ぐに話すオルソラの言葉に固まるアニューゼ

傷だらけのオルソラはそんなアニューゼに話を続ける

「あの方達は強い絆、そして、信念を持っているのでございますよ、それに私の事を確かに天草式の方々から助け出してくれました」

アニューゼに言い返すオルソラは真っ直ぐな眼差しを向ける

そんなオルソラの姿に呆れたようにため息を吐き、急に険しい表情を浮かべるアニューゼ

「うるせぇんですよ!!この死に損ないがッ!」

そして、怒鳴り声を張り上げてオルソラの腹部を思いっきり蹴り上げる

「いちいちムカつくんですよその下衆な奴等の事を信じるアンタのその言葉がッ!!」

オルソラを散々蹴りまわすシスターアニューゼ、

――そして、教会内に響く鈍い音

腹部を何度も蹴られる痛みのあまりに思わず声を上げるオルソラ

「いい加減くたばっちまい――」

何度も蹴り上げた後アニューゼが話そうとしたその時だった

風を切り裂くような音と共にアニューゼの真横を凄まじい早さで何かが通過した

「――え？」

突然の出来事に反応出来ないアニューゼ

彼女の頬からは微量の血が流れ落ち、アニューゼは自身の頬にそっと手を添える

そして、アニューゼの真横を通過したそれは壁に衝突すると同時に凄まじい音を立てて土煙を巻き上げる

物凄い早さで自身の横を通過した物へと視線を向けるアニューゼ

……バラバラに砕け散っている沢山の木材の破片

それが教会の扉であることに気づいたアニューゼは咄嗟に視線を教会の入口にへと向ける

「なぁ……オイテメェら…俺が一番嫌ェ事を教えてやろうか？」

――見覚えのあるサングラスを掛けた金髪の男

教会の入口付近でもたれ掛かるその男の姿を見た途端、

教会にいたローマ正教のシスター達は全員背筋が凍りついた

「な、なんで！なんで！！アンタが！」

頬からは血を流しているアニューゼは固まる

攻撃の動作一撃一撃が殺人的破壊力を持つこの男の姿に――

「へ、平和島静雄！！」

現れた化け物の名前を高々に叫ぶアニューゼ

教会の入口に寄りかかっていた彼の後ろには先程捕らえた筈の天草式、そして、『幻想殺し』を所有するもうひとつの危険分子、上条当麻の姿がそこにはあった

「……そりぁなぁ…」

そんな中、ゆっくりと話を続ける平和島静雄は自身の掛けているサングラスを取り外し殺気の籠った眼差しをローマ正教のシスター達へと向ける

「――親友を傷つけられ侮辱される事だ……コラ」

話を続ける静雄の言葉に唾を飲み込み冷や汗を垂らすローマ正教のシスター達

――彼女達にとってはただの異端者である彼

しかしながら、妙な事にただの異端者である彼の一言一言に彼女達は後退り顔を真っ青にしていた

「…だからよォ…テメェらがそいつを殺すなんて抜かしやがるなら……」

――…すると、入口もたれ掛かっていた彼は話を区切ると不気味な

笑みを溢し、それをローマ正教のシスター達へと向ける

静雄の浮かべる不気味な笑みにゾクリと背筋が更に凍りつくシスター達

――そして、彼は殺気の籠った眼差しを向けたまま声高に怒鳴り声を張り上げる

「――どうなっても…文句はねぇよなぁ？アァ！！」

威圧感に満ちた静雄の脅しに武器を持ったまま動かないシスター達

……シーンと静雄の一言により、静まり返る教会内

……静雄の味方である後方で構えていた天草式や上条達でさえも、放たれたその威圧感が籠る静雄の一言に固まってしまう

「――し、死ねェ化け物ォ」

そんな中、沈黙が続く教会を打ち破るようにローマ正教の内、一人のシスターが静雄へと剣を片手に斬りかかる

だが、そんな剣を振り降ろして静雄へと襲いかかった彼女の攻撃は易々とかわされ…

次の瞬間には静雄から頭を片手で鷲掴みにされる

「――う…ぁ」

「――ひとつだけテメェらに忠告しといてやるクソッタレども」

静雄から頭を片手で鷲掴みにされたシスターの頭からはギリギリと軋む音が聞こえてくる

……極力、女性への暴力を好ましく思っていない静雄、

だが、今の彼は別だ

この場を目撃している上条当麻も恐らく同じ気持ちだろう

傷だらけにされているオルソラ、彼女はこんな風に扱われてもなお上条や自分を信じてくれた

そんな、彼女をこれ程酷く傷つけ、あろうことか自分の親友である上条の侮辱、更には自分の事を化け物呼ばわりするローマ正教のシ

スター

そして、今の静雄の怒りのボルテージは極限にまで近付いていた

こうなるともう、女性への暴力など最早静雄には関係ない

「――テメェら全員この場でぶっ飛ばすからよォ、死ぬ気で俺に掛かって来い」

今、戦いの火蓋は切って下ろされた

一騎当千（前書き）

んじゃ更新したいと思います、

――とりあえず久しぶりの静雄無双かな？

一騎当千

――とある教会から戦いが始まり、

しばしの時間が経った後に教会の広場で一人ローマ正教のシスターに立ち塞がる一人の男、

――池袋最強の男、平和島静雄……

数分前、ローマ正教のシスター達の不意を突き奇襲を掛けたステイルのお陰でひとまずオルソラを助け出す事に成功した上条達

そんな上条達を逃がした静雄は追いかけるローマ正教のシスター達から上条とオルソラを逃がし、

今こうして、ローマ正教のシスター達と対峙している

「……さぁてそれじゃ」

ゴキリゴキリと首の骨を鳴らしてシスター達との距離を縮める静雄

近づいてゆく彼はひとつだけ大きく息を吐き

――…そして、

「……行くぞゴラァァァ！！」

全力で駆け出し目の前にいたローマ正教のシスターに向かい跳び蹴りを放った

土煙が舞い上がり悲鳴を上げて吹き飛ぶローマ正教のシスター達、

「…ウラァァァァァァ！！」

ビュン！！と風を切り裂く音と共に空中から降り下ろした踵落としで地面が割れる

「死ねゴラァァァァァ！」

ゴォォォォォ！！と音を立てて豪快に振り回される道路標識に次々と悲鳴と共に吹き飛ぶシスターの達の姿、

『殴り』吹き飛び

『蹴り』吹き飛び

そして、片手の道路標識が振り回され回転する度にまるでポップコーンが弾ける様に人が宙を舞う

その戦う姿は修羅の如く、この光景を目の当たりにしていた天草式達には、宙を舞うローマ正教のシスター達の姿がまるでゴミのように見えた

「仲間の話には聞いていたが、やはり目の当たりにするとすごいのよなァ」

「……だから言っただろ彼は人の皮を被った何かだと」

他所で他のローマ正教のシスター達を相手にしながら話し、その光景を目の当たりにしていたステイルと建宮斎字

自分達の倍の数を相手にしている平和島静雄の戦う姿を見ていた建宮の頬からは冷や汗が滴り落ちる

（……流石はイギリス清教が恐る魔物、とでも言うべきか、敵にはもう絶対に回したくないものだ……）

静雄の戦いを目の当たりにした建宮斎字は改めてそう思った

あの男は既に人の常軌を逸している、

この先、命が幾らあってもあの男にだけは敵わない心の底から建宮はそう思った

（……だが、それにしても）

（予想外に敵の数が多いッ…！）

ローマ正教のシスター達を次々となぎ倒すステイル達はなかなか苦戦を強いられていた

「こんな事ならもうちょい仲間を連れて来れば良かったのよなぁ」

「今更後悔した所で遅いだろうッ！」

建宮斎字と背中合わせでローマ正教のシスター達を一蹴しながら話すステイル

彼は険しい表情を浮かべルーンが刻まれているカードを片手に辺りを見渡している

そんな、二人が苦戦をしている最中、

白い修道服を身に纏う少女は黒い修道服のシスター達から囲まれていた

（……まずい！！）

その光景を見て咄嗟に少女の元へと駆け出す建宮

だが、囲まれている少女の元へと駆け寄ろうとした建宮の右腕をステイルは掴み制止する

「止めろ！今の彼女に近づくな！君まで巻き込まれる」

自分を制止するステイルの言葉に首を傾げる建宮斎字

だが、次の瞬間、少女の元へと駆け出そうとした建宮斎字の視界には奇妙な光景が写っていた

彼の視線の先には両耳を手で塞ぎ、次々と苦しそうな表情を浮かべ倒れてゆくシスター達の姿

建宮斎字はその信じられない光景に眼を疑った

「……なんなのよなコレは…」

唖然と立ち尽くす建宮斎字

すると、彼の肩を掴み制止した黒服の神父は呟く様に口を開く

「……魔滅の声（シェオールフィア）」

当然の如く話すステイルの言葉に振り返る建宮斎字、

ステイルは『魔滅の声』を発動させている禁書目録を見詰めたまま
話を続ける

「……十万三千冊の魔導書を所有する彼女だからこそ出来る魔術さ」

「こりゃたまらんのよなぁ」

『魔滅の声』に辺りで苦しそうな表情を浮かべるシスター達を指し説明するステイルの言葉に納得する建宮

響き渡る音にひたすら悲鳴を上げて苦しむシスター達の姿からその威力は目に見えて分かる

しかし、その光景を教会の上から眺めている一人のシスターの影……

ステイル達は次々と襲いかかってくるシスター達を排除しながらそちらへと視線をやる

次の瞬間、そのシスターは宣言するかの如く高々に叫ぶ

「……――玉砕覚悟で敵を殲滅せよ！！」

その掛け声と共に信じられない光景が応戦しているステイル達の目に入り込む

「な！！無理矢理耳を！！」

そう、シスター達が次々と耳にペンを突き刺して音を遮断している

……

「そんな！！耳を潰して魔術を無理矢理無効化するなんて！！」

とんでもないシスター達の行動を見て眼を見開き驚き声を上げる禁書目録

そんな禁書目録の『魔滅の声』を完全に遮断しシスターはほくそ笑み教会の屋根の上から禁書目録を見下し話し出す

「――これであの忌々しい白い修道服の魔術は無力――」

そして、彼女が口を開き話そうとしたその瞬間だった

バキィィ！！と音を立て、物凄い勢い早さで大きな何かが話そうとした彼女の頭に直撃する

力なく宙に浮いて、教会の屋根の上で二転三転し失速する彼女の身体

……目の前で起きたハプニングに口を開き唖然と立ち尽くす建宮斎字とステイル

そして、教会の屋根の上から彼女の頭に直撃した〝ゾレ〟が目撃していたステイル達の前へと落下する

「……標…識……？」

そう、それは道路などで良く見かけるであろう道路標識

その道路標識がステイルと建宮斎字の目の前にいきなり落下してきたのだ

――途端に固まる二人

そんな公共物を投げるような怪物はステイルと建宮は一人しか知らない

恐る恐る後ろへと振り返るステイルと建宮斎字

「――テメェ、さっき人の話を聞いてたか？」

そこには辺り一帯に散乱し吹き飛ばされたであろうシスター達の屍、

先ほどまで彼へと立ち向かっていただろうシスター達の姿は何処にも見当たらない

そのシスター達を一人残らず粉砕した男、

彼だけが一人だけ振り返ったステイルと建宮斎字の二人の目に映る

彼の威圧感の籠った言葉は辺りを静寂させ、

その鋭い眼差しは彼女等を一瞬にして凍りつかせる

――そう、平和島静雄という男、

彼以外、振り返ったステイル達の目の前に立っている者はいなかった――

一撃必殺（前書き）

――長かった…

――では更新したいと思います

一撃必殺

平和島静雄がそんな風に暴れまわっていた丁度その頃

彼、上条当麻はオルソラを近くにいた天草式の一人に任せ、

現在、あらゆる所を捜索しあのローマ正教のシスター達のまとめ役であろうアニューゼを探していた

（……ローマ正教のシスター達は静雄を信じていれば大丈夫だ後は――）

上条にはその確信があった

平和島静雄という男は上条が今、最も信用に値する男、

自分とオルソラを逃がす時、彼は〝直ぐに行く全て任せろ〟と一言

自分にそう言った

だからこそ、彼の行動と言葉に親友である自分は彼を信じてアニューゼを探し出している

（クソ！！何処に居るんだアニューゼ！）

アニューゼを見つけるべく辺りを見渡し駆ける上条、

そんな走り回っていた彼はピタリとある扉の前で足を止める

（……ここか？）

扉のドアノブへと手をかけてゆっくりと開く上条、

彼はさっそく扉の中へと足を踏み入れた途端にピタッと固まる

そう、そこには教会の様な場所に一人だけ杖を片手に持っているアニューゼの姿があった

「……？おや、お仲間はどうしたんですか？」

扉を勢い良く開けて現れた上条の方へと振り返り訊ねるアニューゼ

上条は頬からは滴り落ちる汗を右手で拭い笑みを溢す

「……アイツ等は後からきっと来る、だからアニューゼ、お前を俺が止めればこれで終りだ」

自信に溢れた表情を浮かべ、アニューゼに言い放つ上条

彼は自分の拳をギュッと握りしめて鋭い眼光を向ける

だが、対峙していたアニューゼは上条に憐れむ様な視線を送りゆっくりと口を開く

「……何も能がない野蛮人共がいちいちいきがるんじゃねぇですよ」

「……――違う」

アニューゼの一言に拳を握りしめていた上条は否定の言葉で彼女の言葉を遮る

そう、自分の仲間に能無しなんて一人もいない

自分とオルソラを逃がすためにシスター達を一身に引き受けた静雄、

イギリス清教の立場でありながら自分達に協力し、オルソラを奪還してくれたステイル

自分の事を心配してくれて共にオルソラを救出するために立ち上がってくれた禁書目録

そして、先程まで敵対していたのにも関わらずオルソラを助けるべく奔走してくれた天草式と建宮斎字

上条には仲間の誰一人として能無しなんていない、

一人の少女を救おうと必死で闘ってくれている

そして、アニューゼの言葉を否定した上条は彼女に向かい鋭い眼差しを放ちつつ話し出す

「アニューゼ、

そうやってお前は……、お前達は人の事を見下し、救える目の前の命を蔑ろにして本当に大事な物をわかってない、凄い能力とか確かに俺には備わっていないしバカだけどさ、でも大切だと思える仲間や信じることが出来る親友がいるんだ」

アニューゼに話す上条はそう言って拳に更に力を加えて瞳をゆっくりと閉じる

そう上条当麻には力や能力なんて物はない

――…だからこそ

「いいぜアニューゼ、お前が俺の大切な仲間や親友、そして救える目の前の人間達をそれ以上蔑ろにするってぇなら」

そして、上条当麻は拳を構えたまま、アニューゼへと全力で駆け出す

「――その幻想をぶち殺す！！」

駆け出した上条に対して途端に身構え片手にある杖を掲げるアニューゼ

「うォォォォ！！」

「ふん！！甘ぇんですよ野蛮人！！」

声を張り上げて突撃してくる上条を他所に掲げた杖を勢い良く地面へと叩きつけるアニューゼ

その瞬間、駆け出した上条の身体はガツン！！、と何か重い物に殴られたような鈍い音を立てて地面へと叩きつけられた

「……ガハァ」

叩きつけられた衝撃で身体がワンバウンド、思わず表情を歪め苦痛の声を上げる上条

しかし、地面へと叩きつけられた上条は膝に手をつくと素早く立ち上がって再びアニューゼに向かい駆け出す

「うォォォォ！！」

「……ッチ、何度来てもいっしょなんですよ！！」

杖を勢い良く振り下ろす度に鈍い音と衝撃が上条当麻へと襲いかかる

「……ぐぅ」

だが、彼は杖を振り下ろされる度に襲いかかる衝撃や痛みに耐える

そして、一歩づつだが目の前に居るアニューゼの元へと着実に近付いていた

「……なんなんですかコイツは！！」

思わずその光景に後退り声を張り上げるアニューゼ

すると、上条は彼女へと近付いていた足を止め、ゆっくりと口を開き話し出す

「……テメェらにはわからねぇよ、信じ、信じられることがどんだけ自分に力になるなんてな」

傷だらけになった体でアニューゼに自信に満ちた表情で話す上条

――そして次の瞬間、

アニューゼと対峙していた上条当麻の後ろにあった教会の扉と壁がドカァァァン！！　と凄まじい爆発音を立てて破壊される

背後の破壊される音を聞いていた上条は頬を緩めフッと笑みを溢す

……ガラガラと音を立てて崩れ去る教会の壁

「――そうだよな静雄」

「――たりめーだ」

上条の問いに応える崩壊した壁の向こう側から現れた人影

――壊れた壁の向こう側には、

紅蓮に燃え盛る炎の巨人に真っ赤な頭をした漆黒の神父

少女を守るために武器を持って集った天草式の者達

純白の修道服を身に纏った銀髪シスター

――そして、金髪の頭に凄まじい威圧感を兼ね備え現れた最強の男

平和島静雄の姿がアニューゼの視界にへと入ってきた

そして、彼女の前に突如として現れた静雄は笑みを溢しこう言い放つ

「――待たせたなヒーロー」

静雄のその言葉に眼を瞑り静かに頷く上条

破壊された教会の向こう側には山積みになっているシスター達の姿

アニューゼは静雄達が現れた途端に崖っぷちに一気に追い込まれてしまった

「もう終りだアニューゼ」

後退りもう打つ手がないアニューゼに宣告する上条

だが、彼女は諦めた様子ではなく杖を構えたまま動こうとしない

「……まだやる気見てぇだな」

アニューゼの堅固な態度にため息を吐き呆れたように言い放つ静雄

すると、上条はゆっくりと目蓋を閉じて拳を握りしめる

「……静雄、アレやるぞ」

「……わかった」

上条の言葉に頷き答える静雄

静雄と上条は共にアニューゼに向かい身構えるとフゥ　と一息入れて自分達の呼吸を合わせる

「……いくぜこれがァァァァ」

そして、右足を軸にその場で回転し始める静雄

上条はそんな回転する静雄から服の襟を掴まれている

「おぉおりぁぁぁ！！」

次の瞬間、ブォン！！　と風を切り裂く音と共に回転した静雄からアニューゼに向かい上条が放たれる

投げられた上条は凄まじい勢いを保ったまま正面にいるアニューゼに向かい見事直進する

「うォォォォ！」

「ひぃ……！！」

拳を握りしめて叫び声を上げる上条

アニューゼはいきなり物凄い早さで自分に急接近してきた上条に驚き身体が硬直したように動けない

「――アニューゼ！！これが俺達の！！」

そして、平和島静雄から投げられた上条当麻の拳がバキィ！！と音を立ててアニューゼ・サンクティスの顔面を見事なまでに捕らえる

「――力だ！！」

流星の如き早さでアニューゼに接近し拳を振るう上条当麻

勢い余った彼はアニューゼを殴った後、二転三転と教会で盛大に転びそして、止まる

「……ガハ、」

一方、そんな上条から殴り飛ばされたアニューゼは教会の柱に叩きつけられ、気絶したまま力なくその場に倒れていた

「……どうやら無事に終わったみたいなのよなぁ」

「……相変わらずめちゃくちゃだ」

決着に嬉しそうに笑みを溢している建宮と呆れたようにその光景にため息を吐き頭を片手で抑えるステイル

こうして、彼等は無事に一人の少女を救う事に成功したのだった

円満解決（前書き）

――では更新したいと思います（＾ｗ＾）

円満解決

とある大きな病院内

アニューゼとの一件が終わった後に上条は病院へとそのまま運ばれていた

「……静雄、もうちょい手加減しろよ」

「悪い悪い…つい力んじまった」

申し訳なさそうに頭を下げて上条へと謝る静雄、

アニューゼに向かい投げられた上条は戦闘があったせいか、

いや多分静雄から投げた影響のせいであろうが、身体中が傷だらけになりそのまま病院にへと運ばれていた

「……ま、でも無事に落ち着いたから別に良いけどな、

それにしても静雄、お前なんだよその恰好」

静雄の格好を見て指摘する上条

今の彼は着物姿に煙管を片手に持って病室の椅子に腰かけているといった感じに江戸時代に居たであろう極道をそのまま絵にした様な格好である

「ん？あぁこれか？　お礼に神裂から頂いたもんだ　どうだ似合うだろ？」

「……いや、うん、確かに似合うけどなんか怖いなソレ」

嬉しそうに貰った着物を自慢する静雄に顔をひきつらせて苦笑いを浮かべる上条

あの後、オルソラは無事にイギリス清教から保護され、天草式もそのイギリス清教の傘下に収まる事で無事にこの一件を終える事が出来た

ローマ正教との戦いを終えた二人は現在はこうしてゆっくりとした空間の中で身体を休めている

しばらくして、病室の椅子に座っていた静雄は何かを思い出した様にポンと手を叩く

「あ、そう言えば、アイツこの後、この着物の他になんか俺達にお礼するって言ってたな」

「……へぇ、別にお礼なんていいんだけどな」

静雄の言葉に首を傾げる上条は申し訳なさそうに言う

そして、次の瞬間、上条の病室のドアがバシン！　と音を立てて勢い良く開く

「上条当麻！平和島静雄！」

扉が開くと同時に聞き覚えのある声が静雄と上条の耳に聞こえる

同時に開いた扉の方へと視線をやる二人

――そこにいたのは、

「ご、ご主人様方、なんなりと……」

露出度が目に見えるほど多い格好のメイド服であろう物を身につけている聖人、神裂　火織の姿がそこにはあった……

（（……ピシッ））

眼を見開いたまままるで石のように固まる上条と静雄の二人

すると、それからしばらくして上条と静雄はポケットの中からおもむろに携帯を取り出して何処かへと電話をし始める

「……おい浜面か、アンチスキルと『国士無双』今すぐ総動員しろ、……何？何故かって？馬鹿野郎！大切な親友が！！頭可笑しくなっちまったんだよ！！」

「あ、小萌先生ですか？今すぐ優秀な精神専門家の先生を紹介してくれませんか？」

「……いやあのちょっと」

二人の的確で息の合った連携、対応にオドオドと戸惑う神裂、

その光景に彼女の後から病室にへと足を踏み入れた土御門は腹を抑

えて爆笑していた

「にゃハハハハハ！！　いやぁ良い仕事するぜよねーちんは、まさかあの男から聞いた裏ルートから仕入れた堕天使エロメイド服を着るなんて！」

腹を抑えて病室でのたうち回り笑い声を高々にあげる土御門

だが、彼女は自分がようやくこの男に嵌められたのがわかったのか羞恥心で顔がみるみる内に真っ赤になってゆく

そして、こんな胡散臭い事を仕組んだ土御門に対して怒りのあまり刀を構え始める神裂

「――土御門ォォォォ！！」

「にゃーー恐い恐い」

狭い病室の中でひょいひょいと見事に神裂の攻撃をかわす土御門

しかし、それも長くは続かなかった

「――ほう、てぇ事は土御門、こいつがこんな変態みたいな格好してやがんのは全部テメェのせいって訳か？」

「へ、変態じゃありません！！」

思わず否定する露出度が多いメイド服を着用している神裂

そう、静かだった病室を五月蠅くした原因である土御門、

安息のひと時を邪魔された静雄と上条は共に青筋を立てる

そして、彼等はハレンチな格好の神裂と共に土御門討伐の為に動き出す

「「「つぅぅぅちぃぃぃみぃぃぃぃかァァァどォォォ！！？」」」

「にゃー！！わかったちょっと待て！シズやん病院のベッドは流石にしんでしまっ……カミヤンもなんで右腕にある包帯を拳に巻いてるんだにゃー！！！」

殺さんばかりの勢いで戦闘体制に入る三人に顔を真っ青にする土御門

「あ、あれはなんだにゃー」

わざとらしく窓の外を指差し三人の意識を一瞬反らす土御門

三人はそんな土御門の手に易々と引っ掛かり窓へと視線をやる

（いまだにゃー）

そして、彼は病室から飛び出し脱走を試みる

「待てコラァ！！」

だが、土御門の三人の意識を反らして逃亡を図るという考えは甘かった

そう……、何しろ彼を後ろから追いかけてくるのは、あの平和島静雄

彼はあの忌々しい男を追いかける為に池袋の街で培った独自の走り（フリーランニング）パルクールを習得しているため、常人ならば彼から逃げられる訳がない

「にゃああ！！速すぎぜよ！！」

直ぐに背後から迫る静雄の姿に悲鳴のような声を上げる土御門

そして、彼の背中に駆けてきた静雄の跳び蹴りが入り地面を派手に転がり止まる

「……へぶ！！」

「……良くやりました静雄、ありがとうございます」

拳を鳴らして静雄の後ろから現れる一人の鬼、

神裂　火織は殺気の籠った眼差しで地べたに転がっている土御門をみながら静雄にお礼を述べる

「……さて土御門元春、弁解があるならこの場で述べなさい　話によってはその粗末な下半身を使い物にならなくしてあげるだけで済みます」

（女って恐い……）

殺気の籠った口調で地面に転がっている土御門に訊ねる神裂に顔をひきつらせる上条、

たが、彼は一言弱々しく拳を天上にへと向けるとこう言い放った

「我が生涯に一片の悔いなし……」

土御門が何を言っているのか訳がわからない二人、

すると、それを聞いた堕天使エロメイド着用中の神裂は清々しい程の天使のような笑顔で土御門の頭を片手で掴み上げこう言った

「……わかりました♪潔く血祭りに上げてあげますよ」

ズルズルと人気の少なさそうな病室へと引きずられて行く土御門

それからしばらくして彼の悲鳴が病院中に響き渡ったのは言うまでもない

「全く、病院で患者を増やさないで欲しいね」

そして、とある医師は患者のカルテを片手に愚痴を溢すのだった

周章狼狽（前書き）

――ではでは更新したいと思います（＾ｗ＾）

辺りはすっかりと暗くなり、上条と冥土返しのいる病院を後にした静雄

しかしながら、今の彼には帰るべき家も無い状態で困っている

アイテムのアジトを破壊した上に姿を二日以上消していれば、流石にどんな顔して麦野達に会えば良いのか正直分からないのだ

（……ここは謝っとく…いや、俺は何も悪い事なんてしちゃいねぇし）

色々と頭の中をグルグルと回転させて思考を凝らす静雄

そんな事を考えていると今朝、破壊したアイテムのアジトが視界にへと入ってくる

しかしながら、静雄は入り込んできた次の光景に眼を丸くした

アジトのマンションの前で腕を組み壁に寄りかかっている人影

それは静雄が近づくにつれて段々とはっきりとしていく

「……遅い！！」

「……お前なんで」

静雄は近づきはっきりとした人物に眼を見開いて驚く

そう、破壊されたアジトの前で壁に寄りかかっていたのはアイテムの中でも一番プライドが高く、リーダーである人物

「……麦野」

「……」

気まずそうに名前を呼ぶ静雄、

そう、彼をアジトの前で待っていたのはあの麦野だった

そして、怒りを露にする麦野は静雄に近づいて胸ぐらを掴み寄せる

「……どれだけ心配したと思ってるの」

そう、静雄は麦野と喧嘩してアジトを飛び出した挙げ句、一切連絡をしていなかった

聞く話によると麦野はあまりにも帰って来ない静雄を心配し、このように決まった時間で毎夜にアジトの外で待っていたという

麦野の話を聞いた静雄は頬を掻いて照れ臭そうに話しをし出す

「まさか……お前が待っててくれるなんて意外だな…」

「あんた遠回しに私に対して喧嘩売ってんの？」

静雄の言葉に眉間に皺を寄せて機嫌が悪そうに訊ねる麦野

すると、静雄はフッと頬を緩め麦野の前に何かを差し出す

「……お前が大好物の鮭弁当だ、その心配させたお詫びにな」

静雄はそう言って鮭弁当が入った袋を手渡すと麦野の頭に手を置き、力強く撫でる

直ぐさま力強く自分を撫でる静雄の手を叩き落とす麦野は顔を赤く紅潮させる

「ちょ、ちょっと!!私は絹旗じゃ無いんだから／／／」

「何言ってんだ、こうやって素直じゃないとこなんかは絹旗と同じでテメェも餓鬼みたいなもんだろうが」

顔を赤く紅潮させ、怒鳴り声を上げる麦野に笑いながら話す静雄

麦野は不機嫌そうに頬を膨らませたまま腕を組み静雄から視線を逸らす

「…良いじゃない別にあれだけ連絡無ければ心配なんて誰だってするわよ」

麦野の態度に頬を掻いて困った表情を浮かべる静雄

しばらくして、二人は互いに笑い声を上げて向かい合う

そして、彼等は互いに笑みを溢し、こう言った

「……おかえりなさい」

「……オウただいま」

いつも通りに仲が元通りになった静雄と麦野の二人、

そんな彼等を物陰から覗く三つの影

「……どうやら上手くいったみたいですね」

「……うん良かった」

「……全く　手がかかるって訳よ」

三人は仲が元通りになって嬉しそうに笑い合う二人を見て胸を撫で下ろす

こうして静雄は無事に麦野と仲直りした事で何事もなく1日が終了した……

―――――――――――

薄暗く見渡しが悪い学園都市にあるどこかの路地裏、

そんな、何もない所で壁に寄りかかる一人の男性……

黒いジャケットに何か掴み所の無い雰囲気を醸し出しているその男

彼は片手に携帯電話を持ちながら、微笑を浮かべていた

「……？うんそんでーその事なんだけどさ、宛先は土御門元春で頼むよ」

『……え？　ですが折原さんあれは――」

暗い路地裏の壁に寄りかかって電話をしている男の言葉に口ごもる相手

すると、壁に寄りかかっていた男は軽くため息を吐き、電話をしていた相手に話し出す

「……君さ、僕もそんなに気が進まないけどこうやって頼んでんだからここは黙って頷いてくれないかな？」

電話をしていた相手に言い放つ黒いジャケットに身に纏った折原臨也

しばらくして沈黙が続き、それから電話先の相手から折原へと言葉が返って来る

『わかりました　では』

その返事と共にピッと携帯電話の通信を切る臨也

彼は薄暗い路地裏で退屈そうな表情を浮かべる

「……いやー　実に面白くない…、まさかあんなしょうもない事を企んでいたなんてね」

そう言いながらも微妙に楽しそうに笑みを溢している折原臨也

路地裏を通る彼の足元には白目を剥いて横になっている不良達の姿

だが、彼は平然とその不良の頭を何事も無く踏みつける

「あー　、最近は治安が良くなってきたって言うけどやっぱしシズちゃんのお陰なのかなー？　なんか腹立つよねー」

そう言って裏路地を進む彼は踏みつけた不良を後ろ眼で見ながら呟く

しかしながら、そんな彼の後ろから現れる一つの人影

「……あら悪かったわね、そのスキルアウト達を気絶させたのは残念ながら私なのよお兄さん」

不良を踏みつけていた折原は背後から聞こえた声に反応し、

相変わらずのふざけたような立ち振舞い方で声のした方へと振り返る

「あれれー？　こんな所に美人さんが独りで何やってんのかな？」

現れる一人の少女に笑みを溢しながら訊ねる折原臨也

折原臨也の前に立っている彼女の格好は晒を胸に巻いて上から制服を羽織るといった感じにかなり露出度が高い服装だ

彼女はしばらくして冷たい態度で訊ねる臨也に答え始める

「別に良いじゃない　貴方には関係ないわ」

「ふーん…　まぁ、君が何しようと確かに僕には関係無いね」

臨也はそう言うと自分の懐から何かを取り出し始める

その臨也の奇妙な行動に首を傾げる少女

「だけどさ、君がやろうとしてる事なんて　所詮こっちからしてみれば手に取る様に分かるんだよね♪」

折原臨也は懐から取り出したそれを首を傾げる彼女へと投げ渡す

「それの情報あつめでしょ？結標　淡希、いや、あわきん、君がもし〝残骸〟とかいうガラクタに手を出すなら別に止めないけどさー♪一応それ相応の覚悟をしといた方が良いと思うよ　多分、……うん……君が恐怖する顔も僕的には面白そうだし見てみたい気もするな」

手渡したそれをじっと見詰めて固まる彼女に淡々と話す折原臨也

今の彼女の顔からは血の気が引いており、まさしく真っ青になったという表現が当てはまる表情を浮かべていた

「……そんなこんなのって……」

「それが、紛れもない現実さ、君がそれを実行しようがしまいが僕は喜んで傍観させて貰うけどねー」

彼女が臨也から手渡されたそれは小型の液晶テレビのような形をした物体、

彼女の視線は今、それに映る映像に釘付けとなっている

――そう写し出された映像には……

「……学園都市が誇る最高峰の頭脳を持っている第一位と第二位がそんな……」

そこに写し出されていたのは先日の戦闘の光景を臨也が録画したもの

そこには彼女が眼を疑うような光景があった

第一位が放った超圧縮した高密度のプラズマを素手で粉砕する得体の知れない人物

第二位が身体を守るべく固めた神々しい羽根の防御壁を木っ端微塵

に打ち砕き、たった一撃の攻撃でビルを倒壊させるその怪物

……こんな馬鹿げた事なんてとても信じられない

そして、唖然と立ち尽くす彼女に満面の笑みを溢し振り返る折原臨也

「そうだねー　君がもしも〝残骸〟に手を出すならその怪物に加えてそこに写っている白い頭をした彼も加わる事になるのかな♪」

彼女は思わず折原臨也の気まぐれな発言に眼を見開く、

そう、白い頭の彼とは間違いなく学園都市最高峰の頭脳、最強を兼ね備えた男〝一方通行〟の事を言っている

絶望という二文字が彼女の頭の中を覆い尽くしその場で力無く地面にへと膝をつく

「……〝残骸〟の回収がまさかこんな酷い条件なんて」

地面にへと膝をつき両手で顔を覆い頭で思考を回転させて考え込む

淡希

その光景を見ていた折原臨也は話を聞いた結標淡希の反応に嬉しそうに満面の笑みを溢していた

（いやー、実に面白いね♪人間ってこんなにも立ち塞がるものがでかければその自信までもが簡単にへし折れてしまう♪

あぁ、やっぱり人間って楽しい！！これだから僕は人間を愛している！！）

人がもがく様、または気まぐれで愉快に絡みゆく様を眺めて楽しむ男、折原臨也

しばらくして、絶望に立たされて表情を曇らせていた彼女は折原臨也へと顔を上げるとゆっくりと口を開き話し出す

「――もしかして……貴方が既に〝残骸〟を回収済みなんじゃないの？」

顔を上げた結標　淡希の唐突な質問に固まって眼を丸くする折原臨也、

だが、彼はしばらくして結標　淡希の質問に対してにんまりと狂喜な笑みを溢す

「……へぇ、どうしてそう思ったのかなぁ♪あわきん」

「……貴方の態度や言動、私の反応を見て楽しんでるみたいだったし、なんとなくそんな気がしただけ……」

折原臨也の質問に答える淡希、

すると、折原臨也は答えた彼女に対して高々に声を上げて笑い出し始めた

「――ハハハハハハァ…うん、いや面白いね、勘かぁ♪それも悪くない」

高々に笑い声を上げた臨也はそう言って座り込んでいる淡希に背を向ける

「……まぁ、もしかするとかもね♪」

そう言って座り込んでいる結標淡希を置いて再び暗い路地裏の奥へと姿を沈め消してゆく折原臨也

気まぐれな彼が奇妙な言葉を残した路地裏にはただただ沈黙が流れるだけであった

風斬氷華（前書き）

――六巻の内容を飛ばすって言ってしまいましたが既に書いてしまったので……、

調子のってすいませんでした！！ｍ（＿＿）ｍ

とりあえず更新したいと思います……

風斬氷華

蒸し暑い日差しが差し込む夏の平日、

池袋最強、平和島静雄はそんな蒸し暑い平日に研究所から呼び出され、その帰りの最中だった

（あっちー…、地球温暖化し過ぎだろうがコラ）

心の中で愚痴を溢しながらあまりの暑さに苛々を隠せない静雄

彼は手持ちの団扇を煽りながら学園都市を路上をダラダラと歩いている

（しっかし…あれだな
こう毎日炎天下だと日増しに苛々が募ってきやがる）

上空にギラギラと輝く太陽を見上げて汗を拭う静雄

しばらくして、彼はちょうど良い日陰に隠れて陽射しから身を守り

団扇を煽ぐ

（あー、暑い暑…ってアイツ等は）

そんな中、静雄の視界に飛び込む数人の人物、

一人は同じクラスにいる親友の見慣れたツンツン頭の青年で、もう一人は白い修道服を身に纏った銀髪の少女

――あともう一人は…

「……ありぁ誰だ？」

一房だけ束ねられた長いストレートな髪に若干ずり落ちた眼鏡を掛けている見知らぬ少女だった

ひとまず静雄は何処かへ移動中の彼等に近づき話掛ける事にした

「オイ、テメェらこんな蒸し暑い中何やってんだ？」

突然声を掛けられ足を止めて振り返るツンツン頭の青年と銀髪の少女

声を掛けられた二人は静雄の姿を見て嬉しそうに声を上げる

「オウ！！静雄じゃねぇかどうしたんだこんな所で！」

「こんにちはなんだよ、しずお！」

元気よく挨拶を交わす二人、静雄は右手を上げてそれに応える

静雄はあの自動書記の一件以来、上条の家に何度か訪れていた為に一応銀髪の少女、禁書目録とは何回か面識がある

その為か、今では彼女とは上条と同じく親しい友達という間柄になっていると言うわけだ。

「それでその娘は？」

二人の後に隠れているメガネを掛けた少女の事を上条達に訊ねる静雄

すると、銀髪の少女禁書目録はそんな静雄に眼鏡を掛けた少女の事を紹介し始める

「私の友達のひょうかなんだよ」

「は、はじめまして風斬氷華です」

礼儀正しく静雄へと頭を下げて自己紹介する風斬氷華、

静雄は笑みを溢し、礼儀正しく頭を下げて自己紹介する風斬に話し出す

「俺は平和島静雄だ、よろしくな風斬」

「はい！！」

ひとまず、互いに自己紹介が終わり一段落ついた所で上条は風斬と話していた静雄に提案し始める

「なぁ静雄、今から俺達色々と回るんだけどいっしょにこないか？」

「……？いいのか」

思ってもみない上条の意外な提案に訊ねる静雄、

すると、上条は静雄の肩に手を置き耳打ちしだす

「……頼む、あの大食いシスターのせいで出費が若干きつそうなんですよ」

「……テメェ、金かよ」

上条の言葉に呆れたようにため息を吐く静雄

どうやら詳しく話を聞くと昨晩の晩飯時に上条はあの銀髪シスターのおかげで出費が激しかったらしい、

静雄はそんな悲惨な事を訴える彼の財布の中身を見させてもらったが案の定小銭ばかりであった

親友のこの悲惨な財布の現状に呆れて言葉も出ない静雄は黙ったまま片手で頭を抑える

すると、そんな静雄の反応を見て勢いよく地面に両手をつき始める上条

「お願いします神様静雄様!!」

学園都市の路上での見事なまでに綺麗な土下座

これほどまでに必死に頼み込んでくる上条の土下座に唖然と立ち尽くす静雄

「馬鹿野郎恥ずかしいから止めろ！わかったから！」

辺りの学生からの突き刺さるような視線が二人へ向けられ顔を真っ赤にして静雄は必死で頭を下げている上条を立たせる

その言葉を聞きまるで晴天のように明るい表情で咄嗟に静雄の手を握りしめる上条

「……うん持つべきはやっぱり友達だよな」

「……なんか俺、お前可哀想になってきたわ」

静雄の言葉に涙目の上条、

静雄はひとまず土下座をしていた上条を立たせて風斬と禁書目録に微笑み話し出す

「……って言うわけだ今日は俺がおごってやっからよ、遠慮なく遊んでいいぜ」

涙目の上条を立たせている静雄の言葉にハシャギ出す二人

こうして、上条からの必死の頼みもあり、静雄はこのように上条達と過ごすことになってしまった

正体不明（前書き）

ではでは更新したいと思います

正体不明

たくさんの店頭が並ぶ地下街にあるゲームセンター

静雄達は風斬と禁書目録を連れてこのゲームセンターまで足を運んでいた、

先にゲームセンターに突撃しはしゃぐ二人の後からゆっくりと中へと足を踏み入れる静雄と上条……

「結構人がいんなァ」

「ですねー」

上条は静雄の言葉に頷き足を踏み入れたゲームセンターを見渡す

夏休みのせいか、やたらとあちらこちらに目につく学生達、

そんな中、先程、上条と静雄を放置して突撃した二人はとある機械の前で足を止めてジッとそれを見詰めていた

「とうまー！ひょうかといっしょにこれ撮りたいかも」

禁書目録が指差す機械はコスプレプリクラ、

いろんな衣装に着替えて写真を撮ることが出来るらしいプリクラだ

静雄と上条は仕方無くプリクラの機械に近づいてそれを確認する

「へぇ……、学園都市ってのは変わった物もあんだなァ」

「んー正直、俺が今までゲームセンターに通ってあまり使っていない機械だ」

まじまじと禁書目録が指差す機械を見詰めて感想を述べる静雄と上条、

ひとまず、風斬と禁書目録へ衣装を受付に貰いに行く様に促す上条

しばらくして風斬と禁書目録は受付の所から衣装を取ってこちらへと戻って来る

「…すいませんね静雄さん」

「なに気にすんな、困った時はお互い様だろ？」

機械へお金を入れる静雄に頭を下げてお礼を述べる上条、

衣装を持った二人がプリクラの機械へ消えたのを確認した上条と静雄はゲームセンターの外にあるベンチへ腰掛ける

「それにしても、あのシスターといっしょにいる風斬ってのは変わった雰囲気の奴だな」

「まぁな、でも良かった禁書目録に友達が出来て上条さんは嬉しいですよ」

二人のいるプリクラの機械を眺めて呟く静雄に答える上条

仲良くプリクラを撮る機械を眺めていた静雄は嬉しそうに話す上条に笑みを溢す

「…やっぱ変わってんなお前」

「静雄に言われたくねぇよ」

プリクラの機械を眺めて呟く静雄の言葉に答える上条、

ああやって、風斬と禁書目録のはしゃいでいる姿を見るとこの街に来る以前の事を静雄はふと思い出す

――池袋の街、

いろんな人々が行き交い人混みがあちらこちらにあったあの街に居た頃は静雄には親友と呼べる人は限られていた

だが、今は違う

学園都市に来た静雄には上条やアイテムの連中、土御門に青髪、浜面や『国士無双』それに御坂美琴

今、静雄には取り巻くたくさんの仲間や親友が出来た

今ある自分自身とプリクラにいるあの二人

色々と考えていた静雄はなんとなくあの二人に対して自分を重ねたのかも知れない

「…友人ってのは大切なもんだ、自分の力や支えになる」

二人のいるプリクラの機械をベンチから眺めて独り言を呟く静雄

そんな静雄の言葉に上条は共感する事が出来た

彼にも支えになる親友や大切な家族、それに仲間がいる

今の自分自身があるのも今が楽しいのもその大切な存在のおかげだ

「…あぁそうだな」

上条は目蓋を閉じて静雄に笑みを溢し頷く

プリクラの機械へと二人が消えてから数十分がたち

しばらくして、上条はプリクラが遅い二人を心配してか、ゲームセンターの中へ

それと同時に静雄の学生服のズボンの中から着信音が鳴り出し

慌てて携帯電話を取り出して電話に出る静雄

「はいもしもし」

『はぁい、元気ーシズちゃん』

その聞き覚えのある声を聞いた途端静雄の眉間にシワが寄り険しい表情になる

…そう、なぜなら、静雄の中でもっとも嫌いで険悪な存在からの電話…

自然と握る手には力が入りギリギリと携帯電話が悲鳴を上げる

「イィィザァヤァ…」

青筋を立てて力強く携帯電話を握りしめ低い声で名前を出す静雄

握りしめている静雄な携帯電話からは愉快な笑い声

『アハハ、そう怒んないでよ、こっちがせっかく君に忠告してあげようとしてるのにさ』

そう、ナイフを持ち歩く全ての物事の元凶である情報屋、折原臨也からである

そして、静雄は思わぬ用件を話し出す臨也の言葉にピタリと表情を変える

「忠告、だぁ？」

折原臨也の言葉に疑問を抱き携帯電話を握りしめ訊ねる静雄

携帯電話越しに居る折原臨也は訊ねる静雄に更に話を続ける

『そう　僕からの忠告さ、今君の近くに眼鏡を掛けた女の子が居ないかな？』

見透かした様に携帯電話から聞こえてくる折原臨也の言葉

恐らく奴は今、禁書目録といっしょにいる風斬の事を言っているのだろう

「それがどうした？」

ひとまず、静雄は訊ねてくる臨也に対して素っ気ない返事をする

すると、返答を返した途端に携帯電話越しから折原臨也の忌まわしい愉快な笑い声が静雄の耳に突き刺さる

『アハハハハハハ！！いやぁ、ホントにいたんだね正体不明（カウンターストップ）って』

臨也の発した言葉に険しい表情を浮かべていた静雄の顔が一瞬で変わる

折原臨也の忌まわしい笑い声と共に溢れ出た奇妙なワード

〝正体不明（カウンターストップ）〟

静雄は携帯電話から聞こえてくる笑い声を遮り話し出す

「オイ！！　テメェどういうことだコラァ！！」

『…話の通りだよシズちゃん』

静雄の言葉に笑い声を上げるのをピタリと止めて話す電話越しの折原臨也、

『そうだねぇ……なら親切な僕から二つだけ、教えてあげよう』

折原臨也は楽しそうに電話から静雄へと話を続ける

『一つは彼女は人間じゃない
二つ目は今、学園都市には魔術師が侵入してきてるんだ』

予想外な折原臨也の言葉に携帯電話を持ったまま固まる静雄

静雄は慌ててゲームセンターで楽しく禁書目録と話し合っている風斬氷華へと視線を向ける

（……人間……じゃねぇ……？）

風斬の外見や表情、パッと見た限りではどこにでもいる普通の女の子だ

静雄は折原臨也の声が聞こえる携帯電話を荒っぽく一方的に遮断、それをポケットへと突っ込む

そして、先程より更に深刻な表情を浮かべる

（…風斬に…魔術師……か…面倒な事が重ね重ねでホントに嫌になるぜ……全く）

風斬の方を見る静雄は大きくため息を吐き、自身の後頭部をガシガシと掻く

そんな静雄がため息を吐きベンチに座っている中、

どうやらこの事に気付いたのは静雄だけではなかったみたいだ

慌ただしい表情を浮かべて、携帯電話を片手に持った上条当麻がベンチに座っていた静雄の元へと駆けて来た

「…オイ静雄！、風斬が…」

「……あぁ、わかってる…さっき一番ぶち殺したい糞野郎から電話があった…、」

慌てた様子の上条に淡々と話す静雄、

すると、ゲームセンターの中から出てくる風斬と禁書目録

二人は彼女等にこの事を悟られぬ様、互いに黙って頷き確認する

「……？どうしたの二人とも？」

二人の変わった様子に首を傾げる禁書目録

すると、静雄と上条は目の前にやって来た彼女等に微笑み、何事も無いように話し出す

「なんでもねぇよ、今日の晩飯の事を話してただけだ。　な？上条」

「ん？　あぁ、そうだぜ禁書目録、今日は静雄の奢りだってよ」

静雄を横目にいい加減な事を次々と彼女へと口走る上条当麻

その上条の言葉を聞いていた静雄は勿論初耳、驚きが隠せず目を丸くする

そして、そんな上条の言葉に対して、風斬と喜んでいる禁書目録

「わーい♪今日は焼肉だねひょうか♪」

「うん♪」

（こ、このやろォォォォ！謀りやがったな）

喜んでいる禁書目録を見て、今更ながら訂正することも出来ず横目で上条を睨む静雄

上条は白々しく口笛を吹いて視線を静雄から逸らしていた

――…とその時だった

いきなり地響きのような音と共に地下街が揺れる

そのいきなりの出来事に表情を険しくする静雄と上条の二人

今、禁書目録、風斬そして、上条と静雄を巻き込んだ何かが起ころうとしていた

賀実剛健（前書き）

最近忙しくて更新が出来てませんでした申し訳ない！！！”（ノ＜＞）ノ

ですがとりあえず久々に更新したいと思います

――では

質実剛健

地下街で起きた地響きのせいで、静雄達の辺りは一気にパニックに陥っていた

そんな中、この事態を収集すべく動き出した学園都市の治安を守る存在

彼等は颯爽とパニックに陥っている学園都市の学生達の前へと姿を現す

「……風紀委員です！皆さん！慌てないで下さい！　私達が誘導しますから！」

地下街一帯に響き渡る気が強そうな女性の声、

彼女の声に反応した学園都市の学生や人々はピタッと制止し、

彼女等の言う通りに誘導され次々と外へと避難し始める

そんななか、静雄と上条、そして禁書目録と風斬は地下街に未だに

滞在していた

オドオドと辺りの様子に戸惑いを見せる風斬。

「だ、大丈夫でしょうか……　私達も早く地下街から出た方が…」

「あぁ、そうだな」

風斬の言葉に頷き答える静雄。

だが、避難するにしても辺りは未だに混乱しており、脱出経路がちゃんと確保出来ていない

（……不味いな）

（……あぁ、）

小声で話し合う上条と静雄の二人、

すると、先程よりも大きな地響きが鳴り、

地下街に点いていた筈の電球が全て消え、静雄達の辺りが一瞬にして暗闇に包まれてしまった。

周りで起こる不可解な出来事に不安な彼女等は軽く悲鳴を上げて互いに寄り添い合う

「……とうま、」

「……安心しろ、俺と静雄がいれば心配ねぇよ」

振り返り笑顔で自分等の後ろに立っている彼女等に言う上条

そんな中、静雄は暗闇の中で、この停電もしくはこの出来事の元凶について考えていた

（……魔術師…か…、大概野郎の話は信用出来ねぇが、今回ばかりは信じるしかねぇか）

静雄はため息を吐き暗闇に浸る地下街を見渡す

……とそんな状況に立たされていた時だった

「……？アンタ等何やってンの」

見馴れた常盤台中学の制服、そして短髪に若干、常に不機嫌そうに見える表情を浮かべている少女

彼女の姿を見た途端に静雄は頭痛がする頭を片手で抑え、

その静雄の横に居た上条は、悔しそうに壁に手を置き絶望そのものをまるで身体で再現したようなそんなポーズを取っていた

「……アンタ等ねぇ」

自分の姿を見たときのその二人の失礼極まりない行動に青筋を立てる少女

「……止めてくれよ、なんでテメェがいんだよ、めんどくせぇ状況がもっとめんどくさくなんだろうが」

「……まったくだ、アンチスキルの綺麗なお姉さんならまだしも、こんな絶望的な状況下になのになんで更に歩く破壊兵器みたいな奴に会わなきゃいけないんだよ」

「オイコラ、それは私か？私の事か？」

青筋を立て詰め寄り二人に訊ねる少女、

だが、白々しく口笛を吹いて、静雄と上条は彼女からわざとらしく視線を逸らし誤魔化す

そして、とりあえず短髪の少女はため息を吐き諦めた様に彼等に話し出す

「とりあえず、なんでアンタ等がここにいんのよ、」

「「買い物」」

即答で彼女に答える静雄と上条の二人、

彼女はそんな彼等の後ろにいた風斬と禁書目録に視線をやる

「んであの娘はなんなのよ」

「連れだよ、禁書目録とあっちは……」

現れた短髪の少女、御坂美琴に禁書目録と風斬をとりあえず紹介する上条、

だが、彼女等が居た方へと振り返った彼は眼を丸くして慌ただしい

様子で仕切りに辺りを見渡していた

「……オイ静雄、ちょっと！！」

「……？どうした」

慌てて自分に声を掛けてくる上条に首を傾げる静雄

そして、静雄は上条の視線の先にへと眼をやり、あることに気付いた

「……？風斬は何処に行きやがった？」

「え！？今私の隣に…」

静雄の言葉に自分の隣にいた風斬の方へと視線を向ける禁書目録、

だが、そこには居た筈の彼女の姿はない

そう禁書目録の横に居たであろう風斬氷華の姿が見えなくなっていた

この事態に禁書目録はハッとしたように辺りを見渡し始め、

慌てて、自分の目の前から風斬の名前を呼び始める

「ひょうかー！！どこに居るのー！」

声高に風斬の名前を呼ぶ禁書目録、

だが、それは地下街に響き渡るだけで彼女からの返答は勿論ない

「……チッ！」

静雄は咄嗟に先程ドでかい地響きと音が聞こえる方へと舌打ちをして駆け出す

「お、オイ！！静雄ッ！」

「……ちょっとッ！！アンタ何処行く気！！」

走り出した静雄を思わず制止する美琴と静雄の二人

「馬鹿野郎ッ！　探しに行くに決まってんだろうが！」

だが、静雄は制止する二人を振り切って走り去ってしまった

「オイ！御坂！　悪いけど！禁書目録を頼んだ！」

「ちょ…！ちょっと！アンタまで！！　…もうなんなのよ！！」

いきなり静雄の後を追いかける様に走り出した上条に置いてきぼりにされて不機嫌そうに青筋を立てる御坂美琴

そして、ツンツン頭の青年と金髪の池袋最強は暗闇にへと完全に消えてしまったのだった。

――――――――――――――――

電気が完全に消え、沈黙が広がっていた地下街に響き渡る轟音……

暗闇の中にそびえ立つ化け物のような、岩や土が蓄積して出来上がった物体

その化け物の傍らには金髪のゴスロリのような格好をした外国の女性が一人……

彼女はゴミや虫けらを見るような目付きで目の前でうつ伏せになっている少女を見下していた。

「……オイ起きなよ化物」

「……っう……」

地面に伏しているひび割れた眼鏡を掛けている少女は頭を上げる

「……さてエリス、とっとと片付けちまうか」

隣にいる岩の巨人に語り掛ける金髪の少女、それに答えるかの様に
岩の巨人は声を張り上げ吠える

そして、そんな彼女の目の前には武装したアンチスキルの大人達が
続々と現れ銃を構えていた

「……さぁて大人しくしてもらうじゃんよ」

そのアンチスキルの先頭に立つ、綺麗な女性

だが、銃を向けられた彼女がそれで止まる訳でも無く、巨人を盾に
ニヤリと笑みを溢す。

そして、ピリピリと神経を尖らせて、彼等が対峙している最中、そ
こに現れる一人の影。

「――アハハハハハ！！！…あらぁ、もう随分面白いことになってるじゃない？　いやぁ外出した甲斐があったてもんだよねぇ？」

高々に笑い声を上げて、やたらとハイテンションを保ちつつファーコートに身を包み、対峙しているアンチスキルの横を通り過ぎるその男

自然に何事も無く自分達を無視し、現れたその一人の男に眼を丸くするアンチスキル達

彼は岩の巨人の前で止まり、視線を上へとやりそれを見上げる

「へぇー、役立たずのデカブツの癖に結構でかいもんだねぇ……」

「……誰だ？テメェ」

突然現れたその男の発言に青筋を立てる魔術師の少女

（……だ、誰！？？）

それと同様に先程まで地面に倒れていた風斬も現れた彼に驚きを隠せないようだ

「――そうだねぇ、それじゃとりあえず…」

彼は嬉しそうにそう言って一本のナイフを取り出して手元でクルクルと回しゆっくりと口を開き話し出す

「――妖怪カマイタチ参上、とでも言っておこうか？お嬢さん」

そして、魔術師との戦場の場は更に混沌へと変わってゆく……

感奮興起（前書き）

すいません遅くなりましたが更新したいと思います

感奮興起

暗い闇に包まれた学園都市地下街

そんな闇の中で対峙する岩の巨人とファーコートに身を包んだ一人の優男

彼は歪んだ笑みを浮かべたまま、自分の目の前に立ち塞がる巨人を見上げる

「……へぇー、話に聞いてたよりでかいねぇ…これ」

「……気安く指差すんじゃないよ、優男」

親指で指差し、アンチスキルに笑みを溢しながら訊ねる妖怪カマイタチこと、折原臨也

金髪の少女はそんな臨也の態度に対して青筋を立て、表情を曇らせる

「……いったいあんたが何者かは知らないが、邪魔するんなら殺すよ？」

「……邪魔？……ハハハハハァ冗談でしょ？　僕はこれから起こる出来事をただ傍観しにきただけだよセニョリータ？」

わざとらしくお辞儀をして少女に答える折原臨也、

――だが、次の瞬間

風を切る様に雷のような巨人の拳が彼の立っている場所へと振り降ろされた

爆発音のような物と土煙が辺りを包み込み、

折原臨也の後ろで構えていたアンチスキルは身を固める様に盾で跳んでくる石や瓦礫を弾き返す

（…ぐ!!、なんて威力じゃん!）

目の前で起こった出来事に顔を険しくするアンチスキルの女性

だが、そんな彼女の表情は土煙が晴れた途端に驚愕へと変わった

「……酷いなぁ、危ないじゃない」

「……て、テメェ!」

先程、巨人に指示を出して優男を攻撃させていた筈の少女が地面に膝をついて苦しそうな表情を浮かべている

……――良く眼を凝らして見ると彼女の足には輝きを放つ何かが突き刺さっており、

そして、優男、折原臨也の右手には何本かキラリと光る何かが握られていた

「……こりゃ失敬、君はどうやらスペイン育ちではなかったみたいだ、　ヨーロッパの人々ってみんな同じ様な顔してるから困るよ全く」

わざとらしく振る舞い淡々と話す折原臨也

地面に足をつく彼女は足に突き刺さっていた何かを片手で引き抜き折原臨也を睨み付ける

「……もう一度、言っておくけど、別に僕は君の邪魔しにきた訳じゃ無い」

「ほう……、じぁ……お前は一体何しにィこんなとこに来たのォかなァ……イィィザァァヤァァァクゥゥン……」

突如、金髪の少女と臨也の会話を切り裂くような威圧感と殺気の籠った不気味に低い声

（……うわぁ、めんどくさいのが来ちゃったよ全く……）

会話を途切らせた彼の頬には一滴の冷や汗

折原臨也が顔をひきつらせて恐る恐る後ろを振り返るとそこには案の定……

……グラサンを掛けた金髪の怪物が今にも爆発寸前の怒りを露にして立っていた

そして、彼は拳をゴキリゴキリと二回ほど鳴らして折原臨也と一メートル程の距離で眼光を光らせにらみ合いを始めだす……

「……なぁ？俺の前にはァ……、面ァ出すなって言わなかったかノミ蟲、ぶち殺されてぇのか？…ア〝ァ」

「うわぁーこわーい、」

怪物との至近距離からにっこりと笑みを溢し話す折原臨也、

そんな、折原臨也の態度に段々と腹が立ち静雄は彼の胸ぐらを掴み寄せる

すると、胸ぐらを掴み寄せられた臨也は呆れたようにため息を吐き、近くの地面にボロボロになって伏している風斬へと視線をやり話し出す

「……あのさぁ、シズちゃん、唐突な質問だけどあの化物を君はなんだと思う？」

「何を意味わかんねェ事を……」

伏せた風斬を横目に目の前に立っている折原臨也を睨み付ける静雄、

だが、彼の表情はゆっくりと地面から起き上がった風斬が視界に入った途端に一変する

「……私一体…？」

「……オイ臨也どういう事だ……」

顔を上げた風斬の様子に胸ぐらを掴み上げている折原臨也に訊ねる静雄

すると、臨也は当然の如く笑みを溢し、静雄の質問へと答える

「……何って？電話して言ったでしょ？　アレが紛れもない事実『正体不明』だよシズちゃん」

「キャアアアアアアア」

静雄に答える折原臨也の言葉を遮る様に風斬の大きな悲鳴が地下街に響き渡る

そんな風斬の後ろから迫る黒く巨大な影

「……テメェらまとめて皆殺しにしてやるよ……そこにいる化物もなぁ」

そして、足から流れ落ちる出血を抑えながら悲鳴を上げた風斬を睨み付け立ち上がる金髪の少女。

そんな中、静雄の視界に入るのは、悲鳴を上げている風斬の姿

彼女の顔はまるで、パズルの様に崩れており、中身は人のソレとは

全く違っていた

静雄は黙ったまま折原臨也の胸ぐらを掴み睨み付ける

「……こいつもテメェが招いた事かァ？……ア〝ァ！？事と次第によっちゃあテメェを全身血だるまにして、この街にある何処かの高いビルの上階にねじ込むぞゴラァ…」

ドスの効いた低い声に殺気に満ちた眼光で折原臨也を射ぬく静雄

静雄は、かつて自分に向けられていた言葉が頭を過っていた

――化物

この言葉通り、かつてこんな化物染みた力を振るっていた静雄は自然と孤立していた

周りはこんな自分の事を嫌い、周りの連中もこんな静雄を恐れて決して近づこうとはしなかった……

喧嘩を売ってくる奴等には片っ端から怒りに任せた自分の拳を振るい応えて来た……

気付けば護りたかった筈の人間を傷つけてしまうという結末……

そんな自分を唯一支えてきたのは家族である弟の存在だけだった

（……あいつが化物？ハ！　笑わせるぜ…）

静雄は折原臨也の勢いよく胸ぐらを突き放し風斬の元へと駆け寄る

「し、静雄さ……」

自分の側へと駆け寄ってきた静雄に言葉を途切らせる風斬

そして、身体を震わし悲鳴を上げていた彼女の背後から迫る黒い影と静雄は対峙した

「……どいつもこいつも……こいつを化物なんか言いやがってよォ……」

静雄は鋭い眼光でそびえ立つ巨大なそれを見上げる

そんな彼の横から身構えて現れるもう一人の人影

「大丈夫か！？風斬」

そして、風斬を庇うように巨人と向き合う男性

「へぇ……、君もきたのかい……」

折原臨也は一見意外そうな口振りでそう言うが、その人物が来ることは前から知っているような言い方だった

現れる人影は特徴的なツンツン頭、彼もまた自分の為に現れる……

呆然と座り込んでいる風斬の頬からは自然と透き通った雫が流れ落ちる

――二人の大切な友人（ダチ）が自分を護る為に立ち上がってくれた

「……テメェの好きにはやらせねぇぜ魔術師、そして、折原臨也」

何よりも誰よりも根が真っ直ぐな青年、上条当麻

静雄はそんな光景をニコニコと不気味に笑いながら眺めるあの男を睨み拳をゴキリと鳴らす

「……安心しろォ、こいつ片付けたらテメェは速攻で埋めてやるよ

「……」

「へぇ……、それは楽しみだなぁ……（まぁ嘘だけどね）」

静雄の言葉に顔をひきつらせる折原臨也

――だが、次の瞬間

凄まじい勢いで巨大な何かが振り降ろされ

上条、静雄の二人の立っているところから一瞬にして爆発音と物凄い土煙が舞い上がった。

「……私を無視してンじゃねぇよ糞どもが！！」

「……！！」

突然の出来事に身体が固まってしまう風斬、

あの爆発音と威力を目の当たりにして思わず二人の安否が彼女の頭を過る

――だが、その不安は直ぐに消えた

「「……人が話してんのに邪魔すんじゃねぇよ」」

「何…だと……」

巨大なゴーレムから振り降ろされた拳を片手で捉えて無傷のまま平然とした態度で姿を現す二つの人影

そう、全く無傷のままの上条と平和島静雄、

そして、殴りかかってきた筈の巨大なソレは凄まじい音を立てて崩壊し始める

「……おい、一つ教えておいてやるぜ」

崩れ始めた巨大なゴーレムの姿を見詰めながら、懐からタバコを取り出して火をつける静雄

サングラスを外した彼の眼光は鋭く、目の前にいる魔術師の少女を

真っ直ぐに貫く……

「……テメェが何者か、何だろうが、俺は正直どうでもいい」

そう言って静雄はタバコをくわえたまま崩れ去ってゆくゴーレムの後頭部を片手で掴んだ

「……だけどな、テメェがこれ以上、風斬の事を化物なんてほざきやがるなら…　この俺が全力でぶっ飛ばす…」

――静雄によって握り潰されて砕け弾けるゴーレムの後頭部

静雄の威圧感に辺りは静まり返り、彼等の後ろで見ていたアンチスキルの職員達の頬からは冷や汗が滴り落ちていた

「……さぁて」

言葉を区切り、隣にいる上条に視線をやる静雄

それに応えて、上条は黙ったまま静かに頷く

「「……テメェらの幻想なんてのは一瞬でぶち壊してやるよ」」

今、魔術師との戦いの火蓋が切って落とされた

一心不乱（前書き）

んじゃ、更新したいと思います

――ではでは

一心不乱

学園都市のどこかにある窓の無いビルの内部、

薄暗く気味の悪い空間が広がるその内部の中

笑みを溢しビーカーに逆さで浮いている一人の人物がいた

――名をアレイスター・クロウリー

学園都市全てを統べる統括理事長である

彼は学園都市の様子を常に監視でき、そこで起こっている出来事をいち早く知ることが出来る筈だった

「……折原臨也め…」

……筈だったのだが、それはあの男がこの町に来る前での話である

抜け目の無く狡猾な男、

この街に現れた彼の存在は間違いなくこのアレイスター・クロウリーが成そうとしている〝プラン〟と言うものの支障となっていた

……学園都市中の情報網や情報操作…

そのほとんどは折原臨也という男が掌握している

今、あるこの学園都市を潰す事も今の彼ならば簡単に出来る

（……全く、つくづく厄介な男だ）

アレイスターの前に表示されているモニター、

そこに映る地下街の光景を見詰め、子供のようにそこで起きた混沌を楽しむ男の姿を無表情のまま眺める

（ヒューズカザキリ……と平和島静雄を会わせたか…、あの計画も実行に移すのも時間の問題だな…）

堅苦しい無表情だった顔を微かに緩ませるアレイスター

――薄暗いビルの内部には静かに沈黙が流れていた

――――――――――――

金髪の少女は崩れ去ったゴーレムを呆然と見詰めたまま、

前から威圧感を醸し出しながら近づいてくる静雄達に少女は後退る

「……アンタら、本当に化物かい…」

「んー？化物？　そりゃ俺等の事かァ？」

真っ青になり後退る彼女に問いかける静雄

だが、後退る彼女は次の瞬間、手に持っていた白いチョークを上へと掲げる

「……それ以上、近づくんじゃないよ」

彼女の掲げるチョークへと静雄は視線をやる

彼女の警告染みた言葉に静雄と上条は足を止めて表情を微かに険しくする

「……これ以上近づけばこの場を破壊して全員道連れだ…」

チョークを掲げたまま切羽詰まった表情を浮かべて脅す魔術師

正直、彼女の頭には倒されたゴーレムを再び復活させようという考えが咄嗟に浮かんだ

だが先程、彼等の行動によりゴーレムが一瞬にして破壊されたのを目の当たりにした彼女

いくら、術式があれば何回でも出現させられるゴーレムとはいえ、あんな風に扱われては意味を為さない

それよりか、このようにこの場を生き埋めにすると脅して牽制した方が何かしらの突破口が見出だせると彼女は考えたのだ

静雄はそんな追い詰められた彼女の行動と、発したその言葉を聞い

て静かに笑みを溢し口を開く

「……何かと思ったら…、下らねぇ　自分のやってる事の馬鹿らしさ位いい加減気付いたらどうだ魔術師」

「何だと…？」

呆れたように話す静雄の言葉に思わず青筋を立てる魔術師の少女、

だが、静雄はそんな彼女に対して更に言葉を紡ぎ話し出す

「……テメェがどういった経緯でこうやって事を起こしたなんてのは正直どうだって良い…、　復讐だろうが何だろうがやれば良い、俺は止めるつもりはねぇ……」

言葉を区切りチョークを掲げたままの彼女を真っ直ぐに見据える静雄

彼に見据えられた彼女は思わず後ろにへと後退る

「だけどな、関係無い人間を巻き込み　……テメェは更に俺達の親友の風斬を傷つけやがった…」

（静雄…さん…）

静雄の後ろで座り込んでいた風斬は黙ったまま彼の静かに涙を流しながら言葉を聞いていた

そして、静雄の言葉を隣に居た上条が続けて話す

「風斬は確かに人間じゃねぇかもしんねぇ　だからなんだよ、関係無ぇだろ？　テメェはこいつの楽しそうに笑った顔とかどんな風に優しい奴なんて知らねぇんだろ、だったら化物なんて軽々しく口に出すんじゃねぇよ

テメェがもしそれでもこいつの事を化物扱いなんてしやがるんなら俺は俺達は、テメェを許さねぇ」

静雄と共に発せられたその一言、彼女は掲げたチョークを持ったまま表情を険しくする

その状況を愉快に観察していた折原臨也は楽しそうに笑みを溢していた

（……いいねぇ、面白くなってきた）

そして、静雄は上条と互いに頷き合い確認を取り、再び魔術師へと視点を戻す

「……いくぜ上条」

「おうよ」

合図と共に身構える二人、そして……――

「今だ上条！！」

掛け声と共に同時に駆け出す二人、
いきなり動き出した二人の行動に反応しきれない魔術師は慌てて自分の掲げていたチョークをその場に振り降ろそうとするが……

「……させるかよ！！」

不意を突かれた彼女の真下に屈む上条、

そして彼が屈み、彼女の真下にある地面へと右手を伸ばすと何か奇妙な音が地下街に鳴り響いた

「……ッチィこの！！」

「甘ぇ！！」

上条の行動に焦る表情を浮かべ、彼に向かい咄嗟に掲げたチョークを勢いよく振り降ろそうとする魔術師

しかしながら、そんな彼女の間近には既に拳を握りしめた静雄の姿がそこにあった

そう先程、上条が彼女の真下の地面へと手を伸ばし手を触れたのは術式を破壊するため、

彼等は話し合い、このように彼女の周りを見渡し、連携を兼ねて、倒す段取りをちゃんとした組んでいたのだ

完全に詰んだ彼女は最早、手の打ちようが無く迫り来る拳に対して身構えるしかない

「……チ、チクショォ！！」

彼女が声を張り上げるた瞬間に静雄の右拳が彼女の脇腹にへと突き刺さる

脇腹に拳が入った途端に表情を歪める魔術師、彼女の上体が一瞬、フワリと浮き上がっていた

「……グホォ、て、テ…メェ…」

「……ほらコイツでラストだ、しっかり歯ァ食い縛っとけよ？　魔術師」

右拳を彼女の腹に突き刺しながら表情を緩め話す静雄

そんな彼の後ろから駆け迫るもう一つの人影

それを見ていた彼女は表情を真っ青にする

「行くぞぉ！！魔術師！」

拳を振り上げてそう言って迫り来る男、上条当麻

彼は右拳を彼女の腹に突き刺している静雄を右足で踏み台にして、高々に跳び、一直線に魔術師へと向かう

「歯ァァ食い縛れ！」

バキィと何かが砕けたような鈍い音が地下街に鳴り響く

「…がァァァ！！」

勢いをつけて跳び上がった彼の右拳が顔面を捉える……

勢いよく助走をつけて放たれた拳の凄まじい威力

これには傍観していた折原臨也も思わず苦笑いを浮かべ

殴られた彼女は地面を二転三転と転がりそのまま制止した

魔術師を倒した後の静寂した空気がその場を包む

すると、静雄は懐から一本のタバコを食わえ、倒れ伏す魔術師の彼女に一言こう呟いた

「終わりだ、クソッタレ」

そう言って、懐から取り出し、食わえたタバコの煙を吐く静雄

こうして、魔術師との戦いは幕を降ろした

有頂天外（前書き）

では更新したいと思います（＾ｗ＾）

有頂天外

学園都市で起きた魔術師による襲撃、

それは、静雄と上条当麻により無事に解決した

そして、今、彼等が護りきった禁書目録と自分達の親友

風斬氷華と彼等は地下街ではなく、真っ青な青空の下で向かい合っている

あの後、学園都市を襲撃した魔術師は意識を取り戻し、上条当麻が懸命に説得（多少、説教も混ざってます）

その甲斐あってか、どうにか和解する事が出来た

しかしながら、あれだけの騒ぎがあれば、必然的に彼女が学園都市に捕まる事になる。

そこで、静雄は『国士無双』へと根回し、彼女は学園都市のアンチスキルや風紀委員に分からないように保護し輸送された

今頃は、上手く誤魔化されて、多分学園都市の外へと逃がされている事だろう

そうして、無事に何もかもが上手く纏まりハッピーエンド……

――というわけだったのだが、肝心な事がもう一つ、

あの場で傍観していた平和島静雄にとって忌々しい人物

――そう疫病神、折原臨也である

あの後、静雄と彼との追いかけっこの有り様はとてつもなく酷かった

ただでさえ、魔術師の襲撃で被害を受けている学園都市の地下街

彼等の手によってその被害は悪化するものとなってしまった

地下街に至るところにある器物が宙を舞い、

静雄が折原臨也へと放つ拳の度に地面や壁がことごとく破壊されていく

挙げ句の果てには、それを止めに入ろうとしたアンチスキルの皆々様方が華麗な放物線を次々に披露して下さった

まぁ、そんな事もあり、折原臨也は何事も無かった様に上条達の前から姿を消した

とんでもない災厄を目の当たりにしていた上条当麻は最早、涙目である

まぁ、そんなこんなで、とりあえず全ての厄介事を済ませた静雄達は地下街から出て、改めてこうして風斬と向かい合っているというわけだ。

しばらくして向かい合っていた風斬は、静雄と禁書目録に頭を下げて満面の笑みを浮かべ、彼女はゆっくりと口を開き話し出す

「有り難うございます、私なんかの為に……」

「何言ってやがんだバカヤロー、ダチ公がピンチなら助けんのが親友ってもんだぜ、風斬」

「そうだよひょうか、静雄の言う通り私達が助けに来るのは当たり前なんだよ」

彼女の前に立ち、満面の笑みを浮かべて答える禁書目録

そんな二人の態度に対して風斬は嬉しそうにクスクスと口を片手で添えて笑う

そして、笑い終えた風斬は改めて二人に対してお礼を述べる

「……うん、有り難うそれとさっきから気になってたんだけど上条くん…」

「あ、あー…、うんあいつなら多分大丈夫…、と思う」

辺りをキョロキョロと訊ねる風斬に視線を外しながら答える静雄

先程、静雄と折原臨也との一悶着、

その騒動の最中、止めに入ろうとしたアンチスキルの皆々様方をことごとく投げ飛ばした静雄

まぁ、当然の如くアンチスキルに手を挙げた静雄は連行されるのが普通なのだが

しかしながら、折原臨也を目の前にして、狂暴化した暴れん坊の彼を押さえ込むのは魔術師との戦闘で人員を割いたアンチスキル達には到底無理、

というわけで、彼の友達として身代わりに今回魔術師との戦闘で活躍したＭＶＰ、

上条当麻がアンチスキルに連行されたというわけだ

今頃、取り調べを受けて「不幸だー」と嘆いている事だろう

そんな感じにいろいろな出来事が重なり、風斬と過ごしたある意味充実した1日も、もう終わりに近づいてきた

しばらくして、風斬は何かを悟った様にゆっくりと眼を閉じてゆっくりと前に立っている静雄と禁書目録の二人に話し出す

「…、うんどうやらもう時間みたい…」

風斬の言葉に思わず固まる静雄と禁書目録

禁書目録は唖然とした様子で言葉を発した風斬に震えた声で訊ねる

「……時間…って？」

「…さっき…、風斬が言ってただろ…」

風斬に訊ねる禁書目録の方にそっと手を添えて悲し気な表情を浮かべて話す静雄

すると、風斬はそれを肯定するように静かに頷いて笑みを浮かべ、

その彼女の頬からは一滴の涙がゆっくりと流れ落ちていた

「……1日だったけど私の友達になってくれて、……本当にありがとう……」

震えた声で涙を流しながら二人にお礼を述べる風斬

別れの時が迫って来たと感じさせられる雰囲気が辺りに漂う中

何かがこちらへと駆けてくる足音と近づいてくる気配が彼等の背後から感じられてきた

「ちょっと待ったァ！！」

シリアスな雰囲気をぶち壊す声を上げて現れる見馴れたツンツン頭の人影

息を切らして現れた彼は膝に手をついて酸素を肺にへと取り入れる

そんな、目の前に現れた意外な人物の登場に眼を丸くする静雄

「…オイオイ…お前取り調べはどうした」

「……事を起こした元凶の貴方がそれを言いますか」

そう、そこにはアンチスキルの取り調べを受けている筈であろう上条当麻の姿があった

上条は静雄の辛口な一言に呆れたようにがっくりと項垂れて深いため息を吐く

息を切らして現れた上条はしばらく呼吸を整えたあと風斬に視点を向ける

「遅くなって悪い風斬、とりあえずお前にお礼言っとく、今日1日有り難うめちゃめちゃ楽しかった」

「……え……？」

目の前にいる風斬に満面の笑みを浮かべてお礼を述べる上条

現れた上条の言葉に思わずキョトンと立ち尽くす風斬

すると静雄は呆れたようにため息を吐き頭を片手で抑える

「……お前、わざわざそれ言う為に取り調べ抜け出してきたのかよ」

「当たり前だろ、友人にお礼もとい別れを言いに来るのは!!しかも!!大体、もともとお前が受けるべき取り調べなのに俺が問い詰められても答えようがねぇだろうが!!」

静雄の平然とした態度に青筋を立て、怒りを露にする上条

確かに事を起こした訳じゃ無い上条はアンチスキルに話す事など何

も持ち合わせているわけではない

ちなみに、アンチスキルが自分を解放してくれたのは知り合いの先生が居ただからとか

勿論、連れていかれて迷惑を被っている上条に、原因である静雄は反論出来ず顔をひきつらせて頬を掻くしか無かった。

それを見ていた風斬と禁書目録はあまりの二人のバカさ加減に思わず腹を抱えて笑い込む

そして、ひとしきり笑い終えた彼等は風斬の身体に気付いた

……――彼女足がまるで、蜃気楼の様に歪んでいることに……

笑い終えた風斬は涙目の目蓋を右手の人差し指で拭い改めて静雄達に話し出す

「……また、会えますよね……」

「当たり前だろうが、」

「どんなに離れてても友達だろ？」

静かな沈黙が彼等の間にしばらく流れる

そして、風斬は静雄と上条の返答に満足気に笑みを溢していた

嬉しそうに笑みを溢している風斬に最後禁書目録が言葉を送る

「――いつまでも友達だよひょうか」

「――――うん……」

短くてそして単純なその返答……

だが、その言葉には確かに禁書目録と風斬を結びつける様なそんな何かを静雄と上条は感じ取ることが出来た

――勢い良い一陣の風が彼等の頬を掠める

眼を思わず勢い良く吹いた風に目を瞑る静雄達

その時、確かに何かが地面にへと落ちる音が微かに彼等の耳に聞こえた

風が止みゆっくりと閉じた静かに閉じていた目蓋を開ける

――――そこには彼女の残した一つのひび割れた眼鏡が落ちているだけだった

大覇星祭（前書き）

ちょっとがんばってみました（＾Ｏ＾）今回は若干長め？

大覇星祭

学園都市全ての超能力を持ち合わせた学生達が一同に集い、互いに競い合う場

――――大覇星祭

――――そして、一年に一度しか行われないこの祭

今、一人の麒麟児（怪物）がこの祭りにへと参入しようとしていた

「「「……いつでもいけます平和島の親分！」」」

一同に声を張り上げ名前を叫び、気合いに満ちている一団、

彼等は真っ黒な龍の柄が入っている着物に身を包み、中腰に構えて真っ直ぐに、自分達の前に姿を現した一人の侠にへと視線をやる。

明らかに自分の二倍以上の大きさの団旗を持って現れたこの一団の頭であろう男、

流れる流水の様に美しい鮮やかな蒼色、そしてその蒼を引き立たせる様に色鮮やかな赤で書かれた鯉を背中に背負う着物

その立派な着物に身を包み、煙管を口に食わえ、サングラスを外した彼の姿

その姿は正しく、侠そのもの、これを侠客と言わずしてなんと言おうか

桜舞い散る季節であれば、もっと栄えたであろう

侠は担いでいた巨大な団旗をドン、と自身の横に差し、がっちりと身構える

自分の前で中腰になった者達に向かい侠は煙管を吹かした後にゆっくりと話し出す

「……オイ…テメェら今日はわかってんだろーな」

「「「ウス！！！」」」

侠の言葉に身を引き締め、気合いが込もった言葉で返答する一同

赤い鯉を背負うその侠、

平和島静雄は猛々しくそして、雄々とその場に君臨していた。

同じ学校である上条達は思わずその侠の登場に唾を飲み込む

しばらくして、現れた静雄に代わり、晒を巻いた一人の少女が固まっている同じ学校の生徒達に高々に声を張り上げて宣言し始める

「よっしゃあああ、今年はぁ、うちが優勝いただきじゃぁぁ気合い

入れろテメェらァァァァ」

静雄の代わりに吠えた彼女の勇ましく凄まじく迫力のある一声

辺りは彼女からでた言葉に思わず固まり一旦沈黙する

――――そして、

「「「オオオォォォォォ！！！！！！」」」

一同に揃った巨大な声が辺りに響き渡り、後ろにあった校舎を揺らす

辺りに響き渡るその声に思わず行き交う人々はびくりと思わず飛び上がる。

そして、その登場を遠目で観ていた体操服に身を包んだ少女と一人の少年

この大覇星祭を盛り上げるべく一役買った吹寄制理とこの出来事の原因であるその友、上条当麻は思わず頭痛のする頭を抑えていた

――――――――――

そう、それは大覇星祭が行われる数週間前

学級委員である吹寄はある件について平和島静雄に話を持ち掛けていた

「平和島静雄、お前応援団長になれ」

「……はぁ？」

唐突な吹寄の言葉に思わず意味の分からないと言わんばかりの返答を返す静雄

だが、吹寄はそんな静雄の態度に対して話を続ける

「……お前、この間警備員を殴り飛ばしたらしいな」

「……（ギクッ）」

吹寄の言葉に思わず冷や汗を垂らして図星になる静雄

その態度に吹寄は呆れたようにため息を吐く

「……全く、貴様は小萌先生の授業は真面目に受ける癖に素行が悪い！　上条達と同等の、いやそれ以上の問題児だ」

「……あれはだな目の前にノミ蟲が居たから駆除しようとだけ……」

静雄は面倒そうに後頭部を掻いて説教垂れる彼女から視線を外す

（……クソッタレめんどくせぇ）

まさか、あの地下街の出来事の事を彼女が知っているとは思いもよらなかった静雄

多分、彼女がこのことを知っているのかは大体、見当はつく

（……上条か、土御門辺りが吹寄にチクリやがったか…あの野郎共…）

ピキピキと青筋を立て、拳を強く握りしめる静雄

すると、吹寄は腕を組んだままそんな静雄に対して先程持ち掛けていた話を続ける

「そう言う訳だ、うちのクラスの士気を上げるために貴様には一役買ってもらうぞ」

「……オイ、どういう訳だ、まだ了承してねぇだろーが……、まぁ別に構わねぇけどよ……」

ため息を吐き、諦めた様に彼女に返答をする静雄

静雄の中では、たかだか応援団長になるだけで別にこれ以上お咎め無しなら別に断る理由もない

それに応援団長というのもなんだかやってみれば面白そうだと静雄は思ったのだ

まぁ、一年に一度しか無いせっかくの祭だたまには羽目を外すのも悪くない

彼からの了承の言葉を聞いた吹寄はホッととりあえず胸を撫で下ろす

「そうかそれは良かった」

「……だけど、団長引き受けるからには率いる応援団は俺の自由にやらせてもらうぜ吹寄」

唐突に発せられたその言葉に思わず眼を丸くする吹寄

まさか、静雄からこのように積極性を感じさせられる言葉を聞くとは思いもよらなかったからだ

「…え？、う、うん、まぁ構わないけど」

「……んじゃ、とりあえず団旗とか……、あー…、めんどくせぇな、服部と浜面に適当に用意させるか」

静雄は後頭部を掻きながら早速、応援団の構成について思案し始めていた

その光景に相変わらず吹寄は固まったままだ

すると静雄はそんな吹寄に付け加える様に話す

「……あぁ、後、団旗とか団服とかはこっちで用意させるから…」

「……あ……うん」

そんなこんなで静雄に応援団を全て任せた吹寄

そして、この話を踏まえて話は大覇星祭に当日にへと戻る

――――――――――――

こうして平和島静雄プロデュースもとい構成された応援団により

とりあえず、クラスの雰囲気は盛り上がりを見せている

だが、こればかりは流石に親友である上条とその光景を横で観ていた土御門は顔をひつらせていた

「な、なぁ土御門、あれってさ……、」

「ニャー…、カミやん言わなくてもいいぜぃ、見れば分かる」

そう、これは応援団というより明らかに……

「……極道さんやねー怖いわーカミやーん」

「…えぇい！！　うっとおしい離れろ青ピ！！」

暑苦しく自分に寄ってくる青ピを振り払う上条

しかしながら、青ピが言うようにその筋のヤバい人たちにしか見えないのは確かである

しばらくして、静雄が率いた応援団の披露は終り、次の競技まで自由時間へとなった

そして、上条達の元へと着物を身に纏った静雄が近づいて来る

「おー、御疲れ」

「……あーだりィ」

静雄に労いの言葉を送る上条、

土御門は着物に身を包んだ静雄の姿をまじまじと見てあることに気

付いた

「…あ、シズやん、それってこの間ねーちんから貰ったやつかにゃー？」

「…おう、よく気付いたな」

そう、静雄が身に纏っているこの着物、

これは、先日天草式の一件でお礼として貰った物であった

「まぁ、こいつは何気に気に入ってんだ」

「そいつはねーちんも多分喜ぶぜい、なんせめちゃくちゃ悩んで決めたらしいからな、……随分派手な着物だが」

静雄の言葉に笑みを溢し話す土御門

すると、次の競技まで時間がある上条は静雄に提案し始める

「そうだ、せっかくだから今の内にいろいろと出店廻ってみようぜ
静雄」

「……あー、別に構わねぇよ」

頷き了承の返答を上条にする静雄、

それに続けて青ピも口を開きその提案に乗ろうとしたが……

「んじゃ僕たちも……」

「何を言っているんだ貴様等は、」

「んにゃ！！！吹寄」

土御門と青ピの背後には仁王立ちをした吹寄がいた

「貴様等は大覇星祭の準備をサボっただろ、だから、今から次の競
技までの準備を手伝ってもらう」

「……そんな、殺生な……」

「問答無用」

そう言って、襟を掴み引き寄せた二人に勢い良く頭突きを放つ吹寄

ゴン！！　と鈍い音と共にバタバタと倒れる二人、そして吹寄はそんな二人を引きずって何処かへと行ってしまった

取り残されて、突然の出来事にキョトンとする静雄と上条

「……まぁ、ご愁傷様だな」

「……あー、あれは仕方ないとしか言いようがないですね」

というわけで、連れていかれた二人は放置する事にした静雄と上条

ひとまず、辺りにある出店を廻ることにした

見慣れない光景に静雄は辺りをしきりに見渡しながら歩を進める

「へー、なんか色々売ってんな」

「まぁ、一年に一度しか無い学園都市総出の大覇星祭だからなー、出店の方も気合いが入ってるんだろ」

路上に数多く開いてある出店をキョロキョロと見渡し呟く静雄に説明する上条

すると、何処からか駆けてくる足音が彼等の後ろから聞こえてくる

「ちょっとアンタらー！！！」

自分達を横切って前にえと腰に手を当てて現れた人物

その、人物のいきなりの登場に静雄と上条はただただ眼を丸くしていた

「「……おう、……（ビリビリ）中坊じゃねぇか」」

「だぁれがビリビリ中坊じゃゴラァァァ！！」

二人の態度に思わず青筋を立て、微量の電撃を辺りに撒き散らす人物

そう、学園都市レベル５第三位こと超電磁砲こと御坂美琴である

そして、突如彼等の前に現れた彼女はあることに気が付いた

「……って、あんた何よその恰好」

「……あ？」

静雄の服を指差して訊ねる御坂美琴、

すると、静雄は事の経緯と自分が応援団の団長であることを彼女に伝えた

「んじゃ、あんた応援団長な訳？　その恰好で？」

「良いだろ？　気に入ってんだ」

嬉しそうに御坂美琴に自分の着物を見せる静雄

御坂は微妙な表情を浮かべながら、隣にいた上条にへと近づいて小声で話し出す

『……ねぇ、あんたあれって、応援団って言うよりも……』

『……とりあえず、あの恰好を見てお前が言いたいことは分かる、だが、此処はあえて言わないでいて欲しい、頼む』

……どうやら応援団ではなく明らかにその筋の人にしか見えないのは上条達だけでは無かったようだ

そして、静雄はそんな風に小声で会話をしている二人に首を傾げて、

彼等の近くにへと寄る

「何をコソコソ話してんだ？　テメェら」

「「……いや！！　どの出店を回るか話し合ってただけだ（よ）」」

「お、おう、そうか」

訪ねてきた自分に対して見事シンクロして返す二人に思わず顔をひきつらせる静雄

まぁ、このようにして出店を廻るメンバーに超電磁砲が加わり若干、賑やかになった

そして、再び御坂美琴を混ぜ、再び出店を廻り始める三人

「……あー、とは言っても特に楽しそうな出店はやっぱしやってねぇな」

「当たり前でしょ？　大覇星祭ってのは只の祭じゃなくて、私達の能力を使って競技を行ない、競い合う姿を見せる祭なのよ？お祭り感覚の出店をやってるとこなんて無いわよ」

御坂美琴の説明通り出店の殆ど飲食店であり、これと言ってすることもない、

今は仕方なくブラブラと歩き回って時間を潰している状態だ、

そうしている内に、静雄の隣で歩いていた大覇星祭の説明をしていた御坂は、唐突に先日にあったあることを思い出した

「……あー、そう言えば静雄、

アンタまだ私に貸しがあったわよね」

何か良からぬ事を考えている表情を浮かべて隣にいる静雄に話しかける御坂

話していた静雄の動きが停止したようにピタリと止まった

「……わるいが俺はそんなに暇じゃ……」

「なによー、貸しは貸しでしょー」

御坂美琴の言葉に言い返す言葉が見つからない静雄

そう、先日の貸しが出来た出来事と言うのはランジェリーショップの一件である

勿論、今はすっかりその事についてわすれていた静雄は不意を突かれたような状態だ

そして、御坂は顔をひきつらせる静雄にビシ！　と指差し続けて話をし出す

「そう言う訳だからアンタ私と勝負しなさい！！負けた方が言うことを一つだけ聞くってのでどう？」

「なぁ、上条、こいつはどういう経緯なんだ…オイ…

……なんで、こいつは人の話を聞かねぇんだ」

「良く分からんが、奴が話を聞かないのは前からだ」

淡々と話が進むなかでどうしょうもなくお手上げの二人

勝負の話を持ち掛けている当の本人は何故か満足そうだ

貸しのツケがまさかこのようにして自分自身に回ってくるとは思いもよらなかった静雄は思わず深いため息を吐き頭を片手で抑える

「…たく…めんどくせぇ、要はテメェらの学校に勝てば良いんだな？」

「……ま、出来ればの話だけどね」

渋々了承した静雄の言葉に挑発的な言動で返す御坂

こうして、静雄は御坂美琴との勝負を受ける事になった。

――――――――――――――――

大覇星祭が行われているる同時刻、窓の無いビルの内部

そこにはノートパソコンを楽しそうに弄くりまわしている一人の男がいた

「…あー、楽しいな楽しいなぁ　これだから人が多いのって面白いんだよねー」

ノートパソコンを弄くりながら独り言を呟く男性

そう、彼こそ平和島静雄から通称ノミ蟲と呼ばれ忌み嫌われている存在、折原臨也である

「……大覇星祭なんて面白いイベントに無粋な輩が入り込まないようにしたのは正解だったなぁ

まさか、僕とシズちゃん以外にこんだけ集まるなんてねぇ思いもよらなかったよ」

折原臨也はそう言ってパソコンをカチカチと動かしモニターを表示する

すると、彼はそこに映った見知った出店の名前にただでさえうざっ

たいテンションが更に上がっていた

「……うひょー、露西亜寿司の出店があるじゃなーい、あれってサイモンかな？なんかチラシ配ってるし」

そう、そこには折原臨也と平和島静雄の顔見知りで池袋で有名（？）な寿司屋である露西亜寿司で働いている外国人、サイモンの姿があった

彼は相変わらずの様で道行く学園都市の学生や大覇星祭の来賓者にチラシを配っていた

『寿司食いネー、今ナラ安クシトクヨー、ソコノ学生サン食ベテイキナヨー』

どうやら、学園都市の大覇星祭に乗じて出店を出しているらしい

折原臨也は自身の懐からチケットのような物を取り出し、

後ろでビーカーに浮かんでいる学園都市の統括理事長にへと問いかける

「……ねぇ、クロちゃんここに露西亜寿司の割り引き券があるんだけど、何か食べたいのあるー？」

「……全く、私には君が理解出来ないよ」

そう言ってビーカーの中で眼を閉じる統括理事長、アレイスター・クロウリー

彼は相変わらずふざけたような態度の折原臨也に対して真剣な口調で話し出す

「……あそこに君の知り合いが居ると言うことは、

もしや今、例の首無しライダーもこの学園都市に来ているのか？折原臨也？」

「さぁ、それはどうだろうねぇ……、

居るかも知れないし居ないかも知れない」

アレイスターの問いに対してはぐらかすような折原臨也の返答、

アレイスターは諦めた様に静かに眼を閉じる

「……答える気はないか」

「……悪いねぇ、クロちゃんが知っている情報をくれない限りは俺の持っている情報は渡すつもり無いから……」

そう言って、折原臨也はその場から立ち上がり、いつも通りにファーコートに身を包む

そして、アレイスターが入っているビーカーに背中を見せている臨也は振り返ると憎たらしい程の笑みを彼に振り撒きながら、嬉しそうにこう言った

「そんじゃ、ま、露西亜寿司の大トロが食いたくなったから

妖怪カマイタチ出陣って事で行ってきまーす、んじゃクロちゃんま

た後でね」

そう言って、窓の無いビルの暗闇にへと姿を消す折原臨也

取り残されたアレイスターがいる窓の無いビルの中には静かに沈黙だけが流れるのだった

満身創痍（前書き）

1ヶ月ぶりでしょうか？　お待たせして申し訳ない（T＿T）

では更新したいと思います

御坂美琴といっしょに出店を回り、良い具合に時間を潰した上条と応援団服（極道が着てそうな着物）を着用した静雄

そして、彼等は今、土御門達、同じクラスメイトと合流していた

「……おーす、お二人さんお帰りなさい」

「おう、なんかげっそりしてるな土御門」

現れた土御門の様子に引き気味ながらも訊ねる上条

どうやら、案の定、吹寄に馬車馬の如くこき使われたらしい

生気が感じられない青ピと土御門を見て思わず苦笑いを浮かべる上条と静雄

「ま、まぁ……、とりあえず気をしっかりな？」

「気力は既に尽きたぜよ」

「なんだ貴様等は、全く、男の癖にだらしないな」

土御門達の様子に呆れたようにため息を吐く吹寄

すると、静雄はキョロキョロと辺りを見渡しあることに気付いた

（……ん？　上条の奴どこ行った？）

そう、近くに居た筈の上条の姿が見当たらなくなっている

思わず首を傾げる静雄、

だが、どうやらそこまで遠くには行っては無かったようだ

静雄の視界に校舎の影で何かを観察している上条の姿が入り後ろからそっと彼に近づく

『何してんだ?』

『シッ!　ちょっとあれ見ろよ』

近づいて声を掛けてきた静雄に対して静かに沈黙するように促す上条

彼の視線の先を辿るとそこには小さく縮こまった小萌先生とスーツ姿の嫌な雰囲気を醸し出している男が立っていた

そして、静雄は口をしっかりと閉じ、彼等の会話でのやり取りに耳を傾ける

「……確かぁ小萌先生、貴女のクラスは無能力者の生徒を多く請け負っていらっしゃいましたねぇ?　大変でしょう?無能で低脳な生徒を指導するのは」

「そ、そんなことはないのですよ!!」

即座にその男の発した言葉を否定する小萌

だが、彼女に話す男は呆れたように左右にへと首を振り話を続ける

「……何を根拠にそんな事をおっしゃるのですか?、

大体、学園都市第一位と肩を並べている筈の平和島君もウチの学校ならその能力を最大限に引き出す事が出来るというのに貴女のクラスの無能達のような奴等に囲まれている、そのせいか素行が悪い上に品性がなく、非常に野蛮だ」

「そ、それは……」

男の高圧的な態度に言葉を思わず詰まらせる小萌、

その態度を校舎の裏側から見ていた静雄は今にも飛び出しそうになっており、

その光景を眺めていた同じクラスの上条と男子生徒達が総出で必死に取り押さえられている

『……落ち着け静雄!!』

『あんにゃろう…、ブッ殺す…』

これには、流石に上条と同じクラスの男子も苦笑いを浮かべるしかない

そんな、静雄の様子を他に小萌に向かいトドメとばかりにその男は

更に話を続ける

「…ま、次の競技、楽しみにしてますよ小萌先生、せいぜいがんばってください」

そう言い残して、その場から立ち去って行く男性教員

その後ろで言いたい放題言われた小萌は小さく縮こまり目頭に涙を貯めていた

「……違いますよね、平和島くんは不良なんかじゃないですよね……皆さんは無能なんかじゃないですよね……」

そうして、そんな小萌と男性教員のやり取りの一部を覗いていた静雄と上条はゆっくりと立ち上がって後ろで待機していたクラスメイト達に向かい、

爆発寸前の怒りと威圧感を醸し出しながらゆっくりと問いかけ始める

「……さぁて、ではテメェら問題だァ……

俺ァ…今すぐあの野郎の息の根を止めてやりたいんだが…、それじゃ目立っちまうよなァ？」

ゆっくりと口を開き訊ねてくる静雄の問いかけにコクリと頷く一同

「…俺ァ、さっきのさっきまであのクソッタレ教員をぶちのめそうと飛び出そうとしたところをテメェらと上条がどうにか抑えてくれたお陰で殴り掛からずに済んだ訳だが……、

そのせいか最高に機嫌が悪い」

静雄の改めて発せられた言葉に一同は殺気の籠った眼を真っ赤にして再び頷く

そこで、クラスの生徒達の中から静雄の前へと土御門が踏み出し現れ、凶悪そうな笑みをニヤリと溢して全員に静雄の代わりに話しをし出す

「そこで、提案なんだが……、もし、もしもだ、次の競技、あの担任が持っている生徒達を虫けらの様に我々が蹴散らしたらどうなると思う？

そしてその上、とある人物の荒業のせいで『たまたま』、先程小萌と話していた彼の元に凶大な不幸が降りかかることとなるとしたら

？　お前らどうしようと思う？」

同じクラスの男子生徒、女子生徒全員に問いかける土御門元春

それに続く様に上条は今までに見せた事の無いような凶悪な笑みを浮かべ話す

「……まぁ、聞くまでもねぇよなァ……テメェら」

「「「……応！！」」」

殺気の籠った眼と言葉で上条に応えるクラスの生徒達

この光景を静観していた吹寄は顔をひきつらせ、苦笑いを浮かべていた

（……、なんか嫌な予感しかしない……）

いや、この後、嫌な事しか起こらないのは明らかに明白である

「ドントマインド！！」

同時に彼女に同情するかの様にポン　と肩へと手を添える青髪ピ

彼女はそんな同情してくる彼に無性に腹がたったのか、手加減無し

のボディブローをお見舞いした

そして、青ピをノックアウトした彼女は意気揚々と殺気を沸かしながら入場してゆく彼等の後ろから渋々ついて行くのだった……

――――――――――

学園都市の大覇星祭の行われる競技広場、

今、そこには羅刹、もしくは修羅の如き軍団が姿を現していた

その先頭に立つのは軍団を束ねる筆頭、

天下無双を誇り、最強と謳われた平和島静雄の姿がそこに猛々しく君臨していた

彼の右手にはどこから調達してきたのか〝通行止め〟と書かれた道路標識

そして、着ている錦鯉が描かれた着物の中から左手を出し煙管に添え、

口に含んだ紫煙をゆっくりと吐き出し、ギロリと敵陣を睨み殺気立つ自陣の軍団達へと話し出す

「……、野郎ども準備はいいなァ…？」

振り返らず、一言そう問いを投げ掛ける静雄

すると、次の瞬間、彼の後ろで待機している学生達から爆発的な咆哮が轟く

そのあまりの迫力に大覇星祭に来ていた周りの観客や生徒達は沈黙し、

それと対峙するあの嫌らしい教師の教え子である生徒達は全身の血の気が一気に引いて真っ青になっていた

そうしている内に、しばらくして競技を開始する時間帯が迫り

静雄は右手に持っていた標識を高々に上げて競技開始の合図が同時に彼の怒号が辺りに響き渡った

「…よっしゃあ！！！

ブッ飛ばすぜゴラアアアアアア」

先陣を駆けるように飛び出して、迎え来る敵のクラスへと一気に単騎で突っ込む平和島静雄

そして、その後から続き血の気が多い修羅の軍団がその後から続く

そこから先は、とりあえず一方的で悲惨な光景が広がっていた

無能力者がほとんどの上条達のクラスが一方的に相手のクラスの生徒をボコボコにしているのだ

そして、その中心には荒ぶる台風の如く標識を振り回し、一騎当千の強さを魅せる平和島静雄

……彼が持っている標識の持ち込みは果たして良いのかは分からないが、

とりあえず今のところお咎め無しの用なので、多分、ある程度多目に見てくれているのだろうか？

……だが、これがこの後にとんでもない悲劇を起こす原因と成ることは誰も恐らく予測ができなかっただろう

さて、とりあえず競技と言う名の乱闘が始まって数分後、

ひたすら宙を舞いつつ落下してゆく相手生徒を横目に悲惨な戦闘区域を駆ける一人の不幸少年はため息を吐き、襲いかかる相手生徒を殴り倒しながら身を守って無事に生存していた

（……ひえぇぇぇ、恐い恐い……）

鬼神の如き戦いを繰り広げる静雄を見て上条は顔をひきつらせる

……とそんな時だ、静雄から視線を外した上条はピタッと身体を硬直させた

その視点の先には……

「……へぇ、頑張ってるじゃない静ちゃん」

黒いファーコートに身を包んだ憎たらしい男

彼は片手に寿司を持ち、それを口に次々と運びながらこちらへ満面の笑みを浮かべ眺めている

上条は顔を更にひきつらせ、表情が段々と真っ青になってゆく

咄嗟に暴れ捲る静雄へと上条は視点を戻す

（……ヤバい、最高にヤバい、今の静雄にアイツが見つかったら）

……間違いなく大惨事に成ることは必須

只でさえ悲惨な戦闘区域と化している今の状況を悪化するような事に成れば……

（……そんな事は考えたくねぇ）

最悪の結末を思い浮かべた上条は苦笑いを浮かべていた

そしてそんな、不幸な上条の期待を裏切らないのが平和島静雄である

あれほど、先程まで散々暴れ回っていた静雄が固まったまま視点を一定に保っている

――……悪い予感しかしない

その静雄の様子を見ていた上条は思わず頭を片手で抑え沈黙する

また大覇星祭に一波乱、嵐が巻き起こりそうな予感を醸し出していた

大破制裁（前書き）

では更新したいと思います（＾―＾）Ｖ

ピタッと身体が硬直し一点を見つめている平和島静雄の腕には徐々に力が入ってゆく

そんな彼の表情を嘲笑うかの様に外から傍観するファーコートに身を包んだ男

――――……折原臨也

静雄は握りしめた道路標識を豪快に振り回し相手生徒を数人吹き飛ばした後

殺気に満ち足りた眼を光らせて、折原臨也が傍観する方へと視点を集中させていた

「いっざぁやぁくぅぅぅん？　俺の目の前にはもう来るなって言いましたよねぇ……？」

青筋を立て、怒りを露にし吠える平和島静雄

遠くで眺めていた折原臨也にも勿論その声は届いていたらしく

彼は余裕な笑みを浮かべてながらも冷や汗を垂らしていた

「いやぁ……まぁた見つかっちゃった……どうしようかなァー」

折原臨也は早速逃げる体制に入り素早く行動に移す事にした

……まぁそれが最善だった事は言うまでもない

なぜならば彼、平和島静雄の持っていた道路標識が凄まじい音を立てて折原臨也のいる観客席へと飛んでいくのに数秒とかからなかったからだ

そして、怒りに身を任せてその道路標識を客席に向けて放ったせいか、

静雄が狙った通り折原臨也の方へと飛んではいかず何故かその矛先は教員達が座る観客席の方へ……

――……そして

「……な、わ、なんで私の方へ！！！」

偶然か必然か、先程まで散々、小萌のクラスを口で馬鹿にし彼女を泣かせた教員（糞）のとこにへと……

「……ぎゃあああああ！！！！！」

――……飛んでいってしまった

静雄は自分の手をみながら首を傾げて後頭部をガシガシと掻く

「……んだぁ？、力加減間違いちまったか？」

「「「グッジョブ」」」

静雄的には当初の目標に外れてしまって残念そうだったが、上条達のクラスからしてみれば良くやったと言わんばかりの結果オーライだったようだ

彼等は一同に満面の笑みを浮かべて、戦闘中にも関わらず静雄に向かい全員声を合わせてサムズアップしていた

「よっしゃあああ！！！！　ウチの大将が目に物見せてくれたぞテメェらァ！！！後に続けェェ！！！！！」

「「「オオオオ！！！！！」」」

そして、静雄が率いていた応援団もどうやら士気が上がったらしく更に気迫がみなぎっている

果たしてそれが良いことなのかは分からないが、ひとまず悲惨な今の現状が悪化したのは間違い無かった

この状況に対して冷静な上条と吹寄はがっくりと項垂れ、頭痛がする頭を片手で抑えて深いため息を吐く

（（……もう、どうにでもなれ……））

そして、こんな現状の中で二人が考えていた事も全くいっしょだった

……――だが、まぁこの騒動の引金である当人はと言うと……

「……まぁてやァァァ！！！！イィィザァァヤァァァァ！！！！」

……――競技をほっぽりだして、観客席に乗り込み、寿司を食べながら逃走しているファーコートの嫌な男と激しい激しい追いかけっこを繰り広げていた……

ニコニコと笑みを崩さず寿司を口に運びながら静雄から逃走する折原臨也、

彼を追いかける静雄は辺りを破壊しながら後を追う……

競技場が混乱状態に陥るのにはそう時間が掛からなかったが……

どうやらしばらくすると、時間が経つに連れてそれも大覇星祭のデモンストレーションという風に受け取る観客が増えてしまっていた

そのせいか、いつの間にか、普段なら殺人的なその追いかっけこも応援するかの様に野次馬が声を合わせて静雄と臨也へとワイワイと声を掛けている

「いいぞーファーコートの兄ちゃん頑張って逃げろ!!!」

「平和島さぁん、頑張ってくださーい!!」

野次馬の中には静雄にお世話になった常磐台のお嬢様やスキルアウト、等様々な人間達がその光景を楽しみながら眺めていた

そうして静雄と臨也が暴れ回っている内にどんどんと器物が宙を舞

い被害が酷くなってゆく

そうして平和島静雄と折原臨也が黒い影が彼の前を遮る

「……どけェェ！！！！」

大声で自分の前へと立ち塞がる影へと怒鳴り散らす静雄、

だが、その現れた影は一向にその場を退こうとはせずに逆に静雄の前へと立ち塞がる

――…そして

「オオ、シズオ喧嘩ヨクナイヨ！！！」

なんと、その男はがっしりと突撃してきた静雄の拳を受け止めたのだ

怒り任せの拳を止められた静雄は時間が経つにつれて次第に冷静に

なり、

目の前に現れた影の人物を見て眼を丸くする

「……さ、サイモン！なんでテメェが……」

「……もー、仲介に入るのが遅いよー」

驚いている静雄を他所に現れたサイモンに不満を溢す臨也

静雄はそんな余裕な態度の折原臨也の態度を見て更にボルテージが上がりこめかみに青筋を立て、歯軋りをする

「……臨也ァァ！！！テメェェェェ！！！！！」

「……おー恐い恐い」

ウザイ、一言で言えば果てしなくウザイ表情を浮かべてニヤケる折原臨也

今すぐにでも静雄は殴り掛かりたいが、間に入った仲介人がそれを良しとしない

「フタリガ喧嘩スルトヒガイガデテメイワクニナルヨ、ソレヨリウチデ屋台寿司クイネー」

そう言ってドウドウと暴れている静雄を宥めるサイモン

すると、そんなサイモンの足止めもあってかいつの間にか静雄の前から折原臨也の姿が煙の様に消えてしまっていた

「……あ・ん・の糞野郎がァァァ！！！」

消えたように目の前から逃走した折原臨也に怒り咆哮する静雄

そんな静雄を後ろから唐突に乗り掛かられた衝撃が襲いかかった

自身の背中に飛びかかってきた人物の方へとゆっくりと振り返る静雄

「し～ず～お、超何やってんですかこんなとこで」

「おま……、何でテメェがここにいやがんだ」

そして、彼は見覚えのある顔見知りの登場に思わず顔をひきつらせる

……そう、そこにいたのは幼げな面影がある一人の少女、絹旗最愛の姿があった

「静雄の勇姿を超見るために決まっているからじゃないですか～」

嬉しそうに静雄の首回りに抱きついて笑みを溢す絹旗

すると、静雄の右腕を引っ張り何かが抱きついてきた

そして、静雄はそちらにへと視線を移す

「……絹旗、抜け駆けはズルいよ」

「オメーもいんのかよ！！」

そこには静雄の腕をめい一杯抱きついている滝壺の姿があった

更にそんな静雄の後ろから聞き覚えのある声が掛かる

「……全く、何やってンのよこのバカ」

「まぁ、安定の静雄って訳よ」

振り返って声がする方へと向き反る静雄、

そこにはなんと不機嫌な表情を浮かべて現れたフレンダと麦野の姿が……

――…そんな彼女らの姿を見た静雄は思わず顔をひきつらせる

「……マジかよ」

「オオ、シズオモテモテニダネー」

――…彼の大覇星祭どうやらまだ終わらないらしい……

喜怒哀楽（前書き）

えーと、すいません（Ｔ＿Ｔ）ごめんなさい許して下さい

久しぶりの更新となる訳ですが長い間待たせてしまいました申し訳ありませんｏｒｚ

それではどうぞｏ（＾▽＾）ｏ

喜怒哀楽

大覇星祭においての一騒動の後、

結局あの憎い男、折原臨也の姿を見失ってしまった

それに伴うかの様に学園都市始まって以来の器物破損、及び負傷者続出という一言で言えばとてつもなく悲惨な出来事となった事は言うまでもない

後にこの学園都市で起こった大覇星祭の惨事は悪夢の大破制裁と呼ばれ伝説として語り告げられていく事と成る事は静雄や彼に振り回される上条が知る由も無かった…

さて、ところ変わって散々と暴れ回った現在の平和島静雄の状況であるが……

突如として現れたアイテム御一行様に連れれて近くにあったファミレスへと腰を落ち着けていた

勿論、先程、静雄と折原臨也との喧嘩を止めたサイモンがしつこく寿司屋台への勧誘があったが、

アイテム御一行のリーダーである麦野がこれを……

「……私～正直、生の鮭ってあんまし好きじゃ無いんだよねー」

と一刀両断してしまい、残念そうな表情をサイモンを置いてきたと言う訳だ。

前々から分かっていた筈なのだが実にサッパリとした性格をしているまぁ、この様なやり取りもあり現在、静雄達はファミレスに足を運んでいるのだが……

「…なぁんでてめぇがいるんですかぁ？第三位？」

「あららぁ、先日はどうもー麦野オバサン？」

…なんともまぁ、醜い争いをしている2人組、

言わずともわかる話を聞かない女性代表、麦野と御坂美琴達である

ふとしたきっかけからこうして鉢合わせてしまった訳だが、今にもキャットファイトを始めんと言わんばかりに口論が激化している

「……どうしてこうなった？」

この状況に頭を抱える静雄、

残りのアイテムの連中は静雄を盾にして、激化する御坂美琴と麦野との口論を陰から見守っていた

そうは言っても自分が仲裁に入って止めれば早い話なのだが、

その場合、下手に口を出したら火の粉が自分に降りかかる可能性が無いとも言えなくない

…ただでさえ、普段から不器用な自分が口を挟めばこんな性格がキツイ2人に責められるリスクが高い

そう考えると静雄にとっても堪ったものではないという事である

「…なんでまぁ、女ってぇのは口うるさいんだろうなぁ」

そう二人には聞こえない程度で小さく呟く静雄

まぁ、確かに口うるさい事は間違い無いが、この言葉を述べる前に恐らく静雄は暴れまわるお前もどうかと思うと上条達から突っ込ま

れる事だろう

…どちらにしろ、結論から言ってしまえば、あの2人の痴話喧嘩の方が静雄と折原臨也との追いかけっこよりも穏便で済ませる分、被害者も少なくて断然良いという話だ

静雄は疲れ果てた様子で自身を盾にする絹旗達を背に盛大な溜息を漏らす

…とそんな時だった…

静雄の動きがピタッと止まり、真っ直ぐな視線をファミレスの扉にへと向けられる

「……どうしたの？　静雄？」

思わず固まった静雄に訪ねる滝壺

そして、そんな眼を丸くしたまま硬直している彼は何か呟く様に口を開いた

「…か、幽…」

刹那、ファミレスで口論していた麦野と御坂美琴の間での時間がピタリと止まる

そして、静雄の視線の先の人物はゆっくりとこちらにへと歩みよって来た

「…競技、終わったんだ…」

「…おま、なんでここに…」

現れた男性、幽と呼ばれる人物の言葉に思わず口どもる静雄

…だが、次の瞬間、

「「「キャァァァァ？　本物の羽島幽平？」」」

…ファミレス内で鼓膜を破る様な馬鹿でかい声が木霊した

御坂美琴と麦野は羽島幽平と対峙する静雄に飛びかかる様に肩を掴む

「…ちょ？　ちょっと！なんであんた人気俳優と知り合いな訳！」

「し、静雄？　本物の羽島幽平？」

…思ってもみない人物の登場によって焦る2人組、

後ろに静雄の隠れている絹旗と滝壺もキョトンとして未だに状況が掴めないでいる…

平和島幽…、以前静雄が麦野たちに対して使っていた偽名

それは、元々自身の弟の名前を利用したに過ぎないが、なんだかその名前の当人が現れると若干、静雄には名前を勝手に利用した罪悪感があった

だが、幽はそんな静雄、に対して柔らかく微笑むとゆっくりと口を開いて話し出した

「…かっこよかったよ…」

「…あ、あぁ…見てたのかありがとな」

視線を逸らし頬を掻いて、幽にお礼を述べる静雄…

恥ずかしさか、彼は普段見せる事のないほど顔を真っ赤にして柄にも無く照れていた

そんな、ほのぼのとした空気に周りにいた一同は目をまん丸くし、唖然とする…

（…あんな、顔の静雄見るなんて始めて…）

（…てゆーか、超可愛いんですけど…あの兄弟…）

ほのぼのとした静雄と幽の光景に思わず頬を緩ませる絹旗達

こうして、静雄とアイテムのメンバー、御坂美琴は店に現れた羽島幽平こと、平和島幽の登場に暫くの間、混乱に陥る事となってしまったのだが…

時間が経つに連れて彼等はとりあえず、いったん現れた幽と共に昼食を取る事にした…

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

先程まで、麦野と美琴が言い争いをしていたファミリーレストランの一角

「…それでー？　静雄さんはなんでそんな事になっているのでせう」

「寧ろ、俺が聞きたいぜ…」

訪ねてくる上条の言葉に溜息を溢して応える静雄

彼の右にはあの有名な羽島幽平がちょこんと腰を下ろしており、

左には可愛らしい無気力そうな少女が嬉しそうに静雄の左腕に手を組んでいる

「…当麻ー、お前の友達はなんだか知らないが凄い人ばかりだな」

「美琴ちゃーん？　貴方が言ってた男の子って羽島幽平さんのお兄さんだったんだー！　お母さんもビックリだわー…」

静雄と幽との姿を見て口々に感想を述べる保護者軍団

御坂美琴と上条は思わず笑顔を引き攣らせたまま、席に鎮座する羽島幽平にチラリと視線を移す…

「…いつも、兄がお世話になってます」

「そ、そんな事無いわよ！　私達こそ、いつも貴方のお兄さんにお世話になってるわ…それより、代わりといっちゃなんだけど、この色紙になんだけどね？　むぎのんＬＯＶＥって書いて欲しいかなぁ、いやてゆーか書いてお願いします！！」

「ちょっとォ！　麦野落ち着いて！色々イメージが壊れ掛けてるって訳よ！」

あろう事か、サインの為に全力でプライドを捨て懇願するむぎのんにツッコミを入れるフレンダ…

「…静雄ー、私にも超構って下さいよー寂しんボーイなんですよ～」

「絹旗　…お前、本当に俺の膝の上乗るの好きだな」

「…絹旗、静雄が迷惑…」

「…僕も、あまりよろしくない…」

…そう、そこに広がっているのはまさに混沌（カオス）と化した空間だった

サインにばかりに目が血走り羽島幽平に縋る様にお願いする、学園都市が誇るＬｅｖｅｌ５

そんな、彼女とは裏腹にマイペースに静雄の膝の上に乗る絹旗に注意する幽…

何故だか分からないが静雄を含む空間が地に足付かずと言うか、凄まじく癒される様な、そんなほのぼのとしたモノが漂っている様に上条と美琴には見えた

原因は簡単、ただ単にあそこにはマイペース＆おっとりの二人の究極の組み合わせが成立しているからだ

…なんだか知らないがこれでいいのか？

思わずその静雄がいるその一帯の混沌とした空間を目の当たりにし

てそんな事を考える二人

しかし、自分達に収拾を果たして付けれる事が出来るのかと言われれば、あえて言おう…

無理であると！！

そう、これが二人の中での結論、諦めたら試合終了とかそんなチャチなもんじゃ断じて無い

恐るべき世界の片鱗を今彼等は目の当たりにしているのだ

ひとまず、自分達が今するべき事は、

（（…とりあえず昼ご飯食べよ…））

人間、時に諦めが肝心な時もある、

そうして、混沌とした空間を傍観していた彼等はまた一歩大人に近づくのだった…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3805p/

とある無敵の平和島静雄(池袋最強)

2011年11月17日07時18分発行